

新しい風俗文化雑誌

風俗草紙



風俗草紙

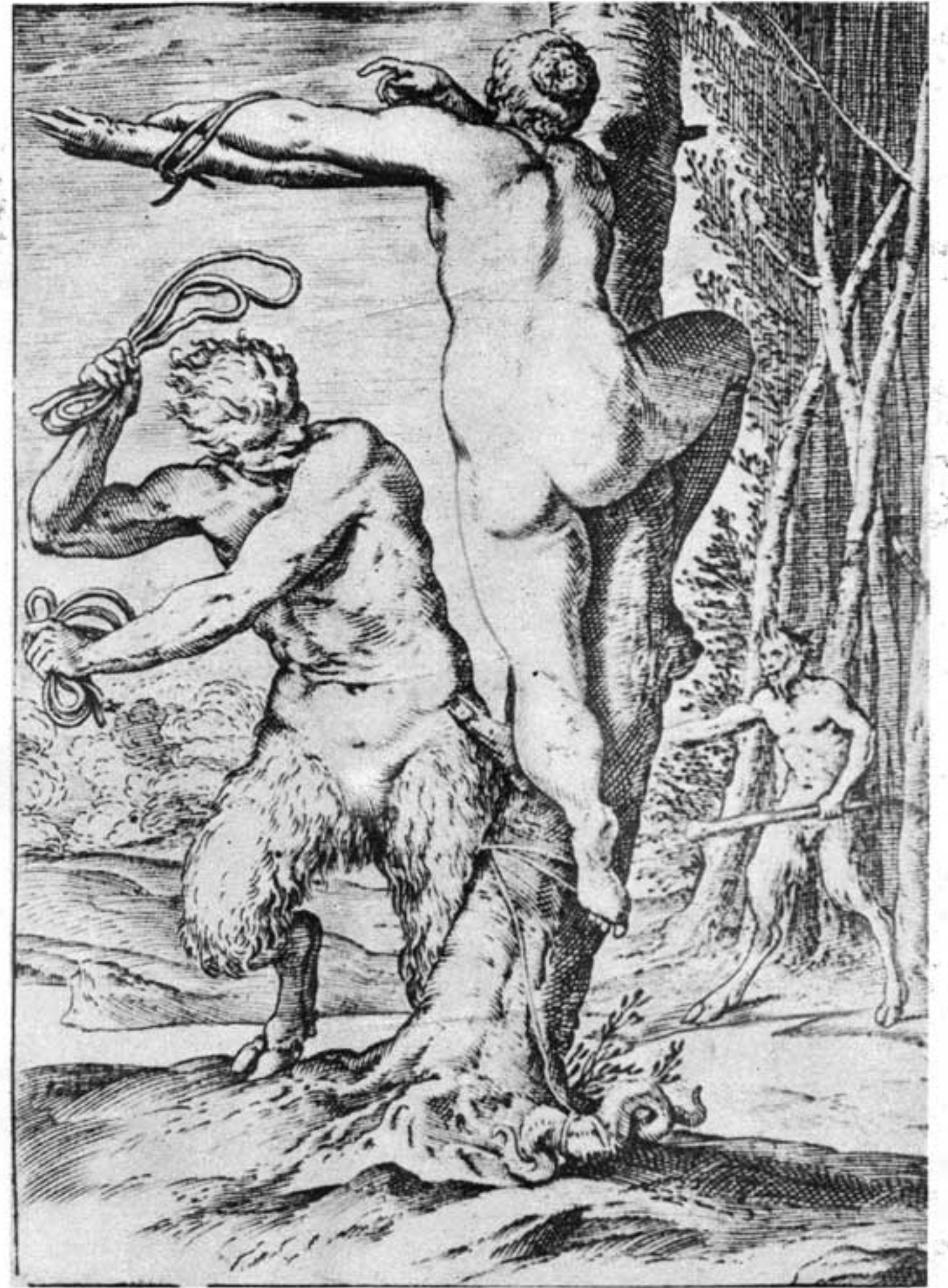
9

9

昭和十八年八月二十五日創刊 月刊 一回一頁 第一巻第六號
昭和十八年七月十一日 日本國有鉄道特別送達雜誌 第三五九號

定價 百 円





鞭の歌

苦痛に喘ぐ女の肉が求め
るのか……
男の兇暴ないのちの爆発
がそれを與えるのか……
悲鳴と荒い呼吸の伴奏を
縫って
永遠に鞭は空を切る
サヂズムの王
マソヒズムの使徒
狂ほしい人間の情念を嘲
笑いながら
鞭は今日も誰かの手にあ
つて
目くるめく官能の花を咲
かせている……

◆ 後記 ◆

ガラリと意匠を変えた第三号をお送り致し
ます。毎号絶讃の連続で、発売後二三日で売
切店が続出し、御入手洩れの苦情に瀕々と接
しますが、永い間店頭に曝されるよりは余程
嬉しい状態でありますから、編集部は益々張
切つてをります。

今後、アブ党諸兄が舌鼓を打つような御
馳走を、毎号フンダンに盛りまして、陰微な
悦楽、忘想の陶醉、情念の狂奔を満喫して戴
きたいのが本誌の念願であります。
本誌の圧倒的好評を嫉妬し、或いは僅かな
おこぼれでもという漁夫の利的心理から、類
似誌の刊行があるかもしれませんが、言うな

れば、本誌は、サヂ氏には鞭打たれる女、マ
ゾ氏には君臨する女王の如くそのハートに密
着して、美食を呈供する手腕に於て決して他
誌の追隨を許しません。願わくば、形式のみ
を模倣したそれら刊行物と混同されず、編集
に於て純血のサラブレッドの矜持を有する本
誌に、深き愛顧を賜わらんことを――。
(T・U)

責めの大特集

女はこう縛られたら
抵抗力を失う
新しいスタイルの責め
責めにおける各種の小道具
サヂズムな性の戯れ
変態・猿ぐつわ・雑考
閨房・恋愛のサヂズム
珍奇な責めいろいろ
刑事部屋の拷問
まぞ・ふえちすとの告白
油井啓二
菅芳一
岡和馬
桜井真知子
大磯妙子
岩堀泰三
日夏由紀夫

風俗草紙次号予告 (十月号)

落城・惨虐・秘史
好評連載・まにや地獄・第三回
馬を見る夫人
伊藤晴雨
喜多玲子
細谷満子
那加道郎
高月大三郎
日夏由紀夫
槐武彦
三谷祥介

◎直接購読者募集◎

御購読は直接申込が一番確実で御便利です。
又随時、出版通信を優先的に御送付します。
三分三冊 (送料共) 三百円
半年分六冊 (送料共) 六百円

風俗草紙

第一巻 第六号
毎月一回一日発行
定価百円

昭和二十八年八月二十五日 印刷
昭和二十八年九月一日 発行

編集人 氏家富良
発行人 野村佳秀
印刷所 内海印刷株式会社
東京都文京区戸崎町十三番地
発行所 日本特集出版社
東京都千代田区神田神保町二の三四
電話 九段 (33) 三四二七番



T. Kitahara

縛り繪六景

七比呂玲子







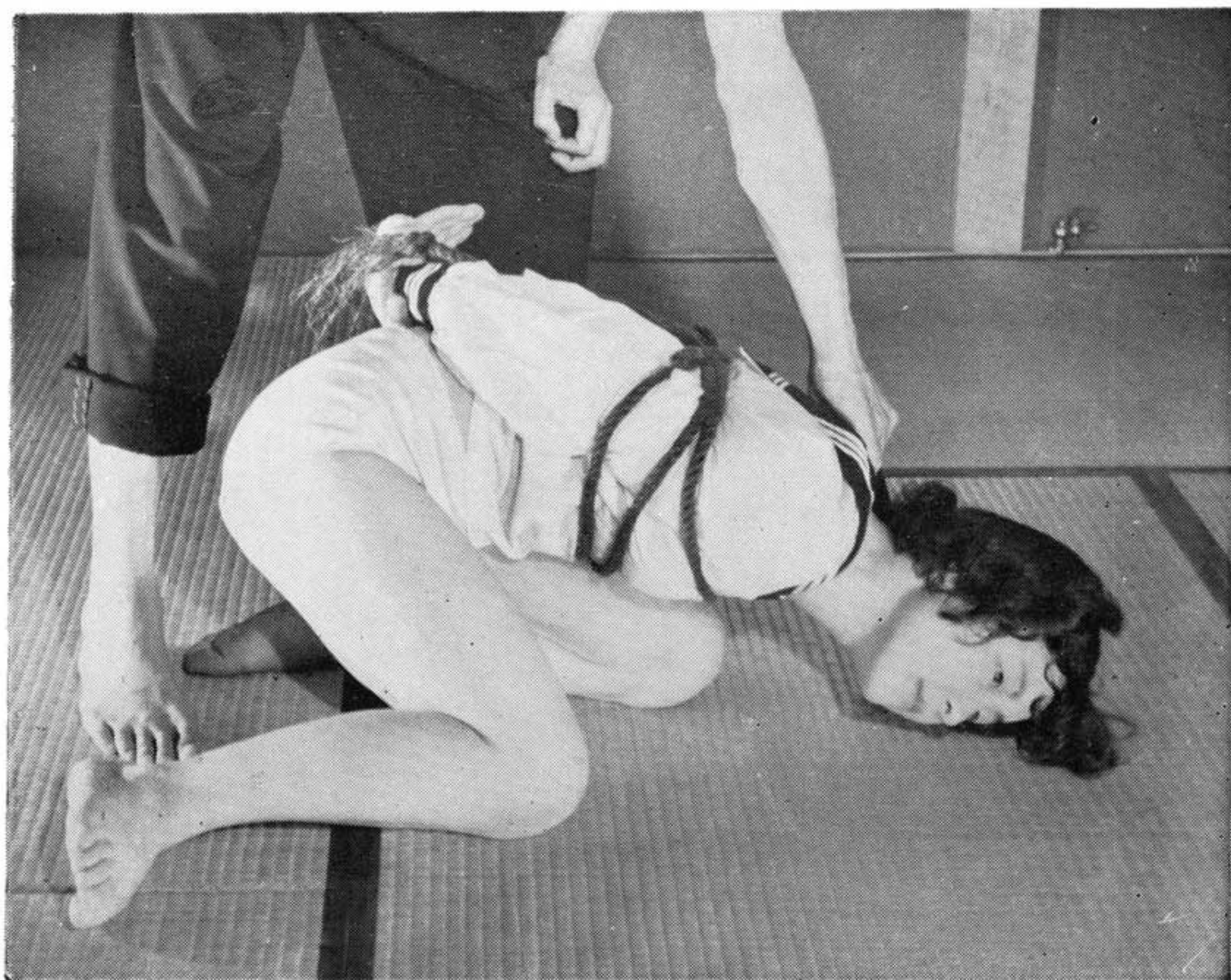
めし縛^{いま}きし美

本誌は、本誌の誕生する以前の、数年前から、秘かにアブ・フォートの研究に努めて参りましたが、幸いに最近、美貌のモデル数人（良家の子女で好意的出演による）を特約し得たので、愈々活潑に作品公開を始めることとしました。この作品はすべて、サチ、マゾ、レスボス、ソドミイなど、あらゆる分野を、高い品性を維持しながら、鋭くキヤツチしたもので、他誌の追随を許さぬ、本誌独特のものであります。何卒御期待を乞う次第です。

第一回発表は、若いピチピチした美貌の処女を、近代的感觉で緊縛しました。構図や雰囲気、重点を置いたものですから、別に説明は不要で、単に鑑賞して載けばよいのですが、念の爲に、一言づつ注釈を加えておき

老 海 後





うしろ手

ましょう。

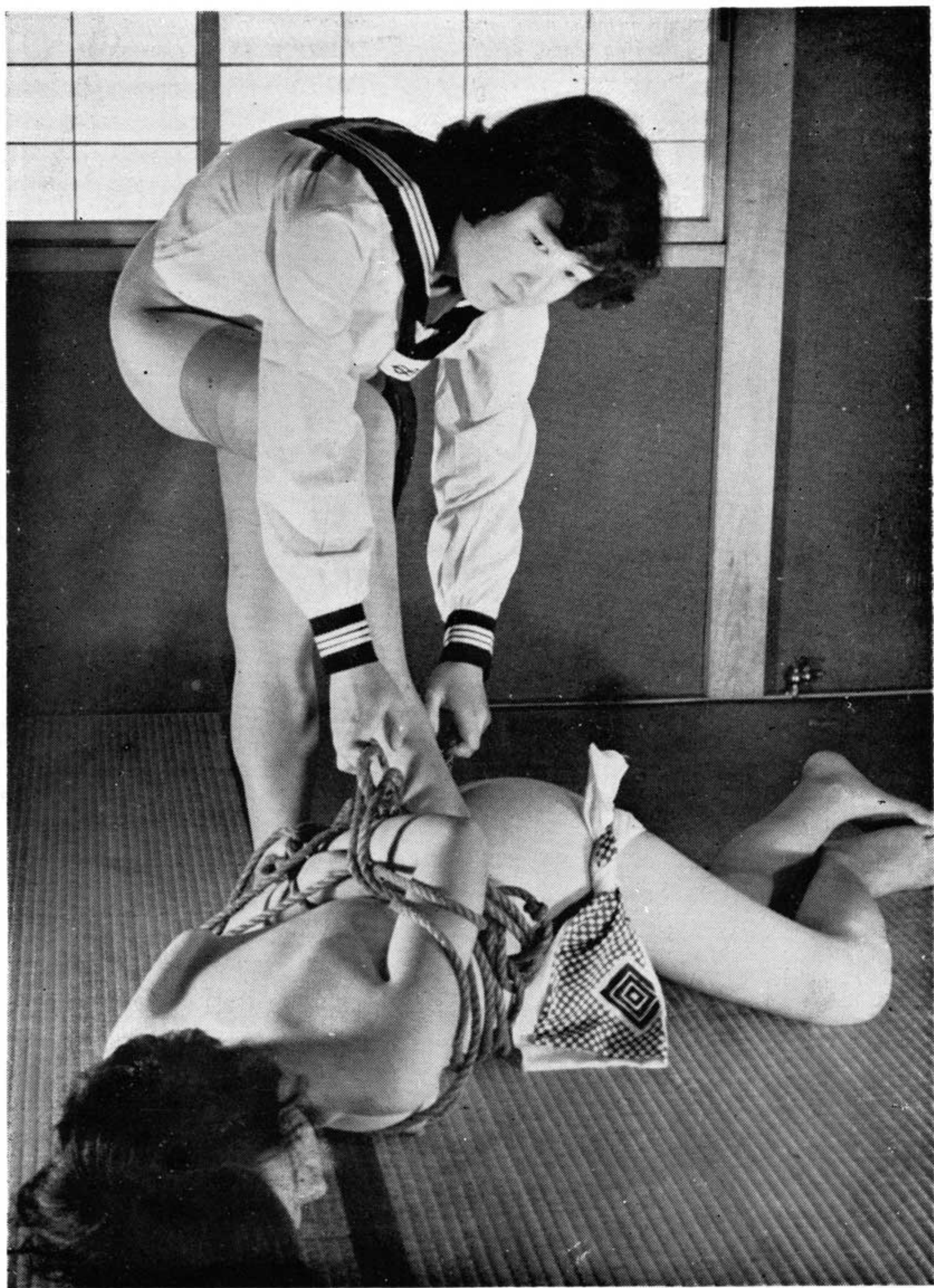
「後海老」は、弓状に背り返った線の美しさを狙いました。今迄他社で発行された緊縛写真で、浴室の作品は皆無であります。本誌は特に美しい岩風呂にカメラを据え、数々の傑作をモノしました。これはそのうちの一枚である訳です。自然を摸した岩風呂と、美しい乙女の肌は絶妙のコントラストと言うべきでしょう。

「うしろ手」は力に圧迫される女性の体の曲線を狙ったものです。良好なモデルに恵まれて、サデステックな構図と曲線の美しさは御満足を載けるものと思います。

「お仕置」は女同志の美しさです。（セーラーは借着ではありません）ナイロンの靴下の魅力！……。

「鏡台」は、鏡台自身女性的で優美なものです。それが、それに革帯で緊縛した作品です。白い手拭の効果——。この写真は全体の美しさを鑑賞して下さい。

尚別報の通り、多数の作品中から厳選した傑作写真を頒布してをります。このグラフを御覧になつても判るように、一枚一枚素晴らしい出来で、愛蔵用に好適の台紙付、キヤビネ三枚一組の特製品です。（詳しくは一一九頁御参照下さい）



お 仕 置



鏡 臺



兇行現場における 死體寫眞

この写真は、十五、六年前にあつた靖国神社境内の殺人事件の現場写真であるが、腹部、及身体の前部に死斑を認めることが出来るから、この死体は俯伏せになつて殺害されたことが推定できる。

この事件はいまもつて迷宮のままだが、勿論被害者もどこの誰だか判つていない。

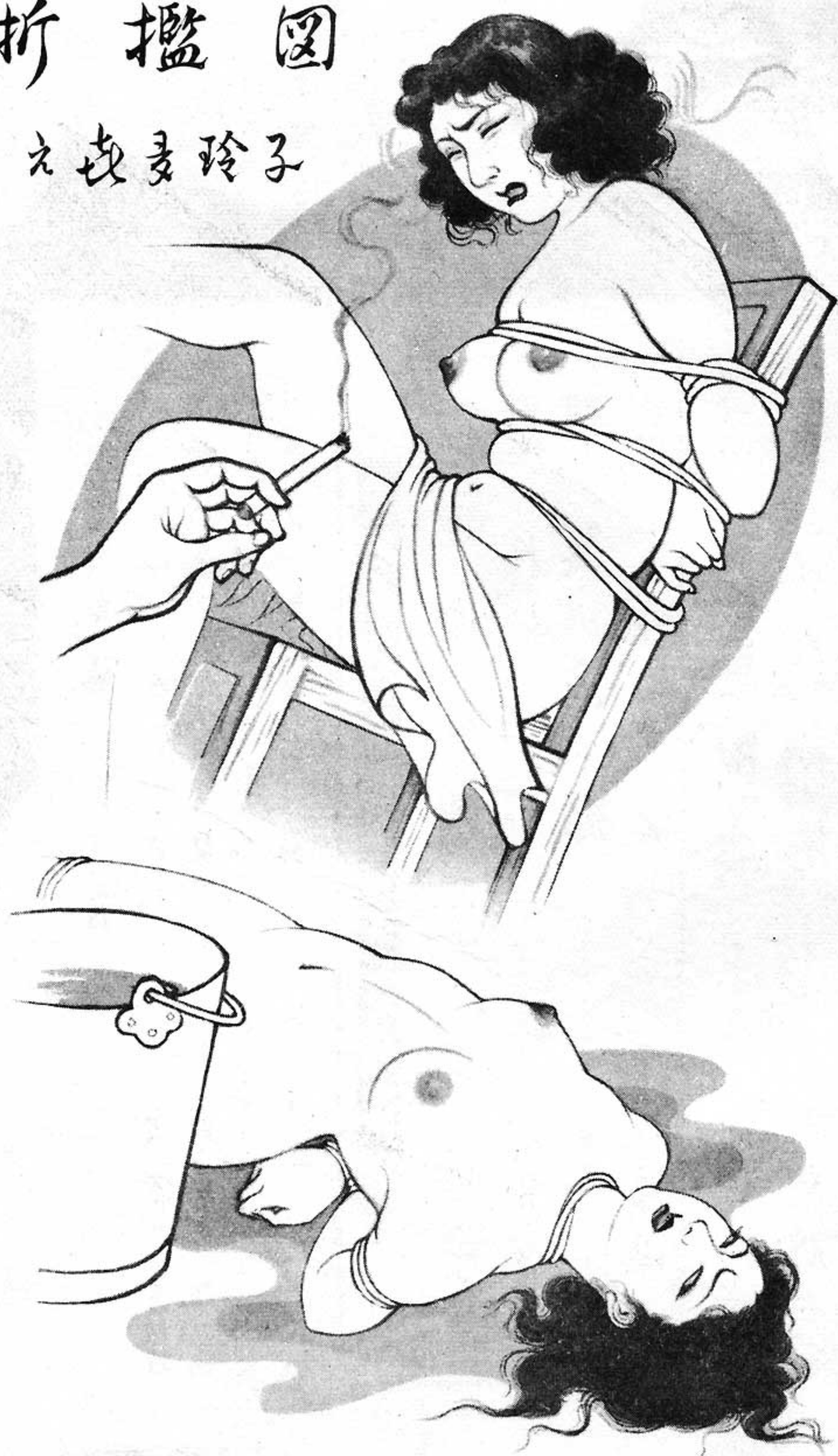
写真の死体が全裸であるのは、勿論外傷の有無の証拠写真を撮影するために裸にしてあるのだが本事件の場合は、実は被害者は、裸の上に、被害者のものらしい着物で覆われていたのを発見されたのである。

つまり犯人は、現場以外の場所で被害者を絞殺し、裸にして、紐で縛つて現場まで運び遺棄したことが推定された。

(本文一一〇頁参照)

折檻圖

子玲妻氏



風俗草紙 九月号 目次

絵	(四色) ジャック・ナイフ……………北原 環画
縛り	絵 六景……………喜多玲子画
美しき	いましめ……………本誌特写真
口	行現場写真……………(14)

特集・病癖に憑かれた若き処女の手記

汚辱の令嬢……………金沢美樹子 (22)
爛れた肌……………和田夏枝 (52)
悪臭地獄……………北原ミドリ (112)
哀しき被虐……………木暮陽子 (136)

芸人談 鶴屋南北……………正岡 容 (100)
変態間引風俗誌……………武野藤介 (93)
十二ヶ月 歪んだ閨房……………中野栄三 (156)

アとおり 隠花植物 相磯武雄 128

特選嗜虐読物集

女体の縛り方十五種……………伊藤晴雨 (29)
責め絵 悦虐の泥沼……………喜多玲子 (58)
放浪 刑事部屋の拷問……………三谷祥介 (64)
警視廳生活二十年の氏が自ら見聞した刑事部屋の記録! ……かつての日本の暗黒の秘図
責め 虫責めと女……………鹿田芳雄 (45)
責めのうちでもっともグロテスクな蟲責めの手記! ……トカゲや毛蟲に女はもたえる!
(秘盗) 俺が縛った女……………増富次平 (76)
女を縛る美しさに憑かれた強盗。縛られて取乱す女、自殺する女、よろこぶ女!
操り責め・臀部打ち……………大槻久良二 (124)
女性はいくぐりに敏感であり、臀部の性感が発達している。苦痛と快感の混淆!

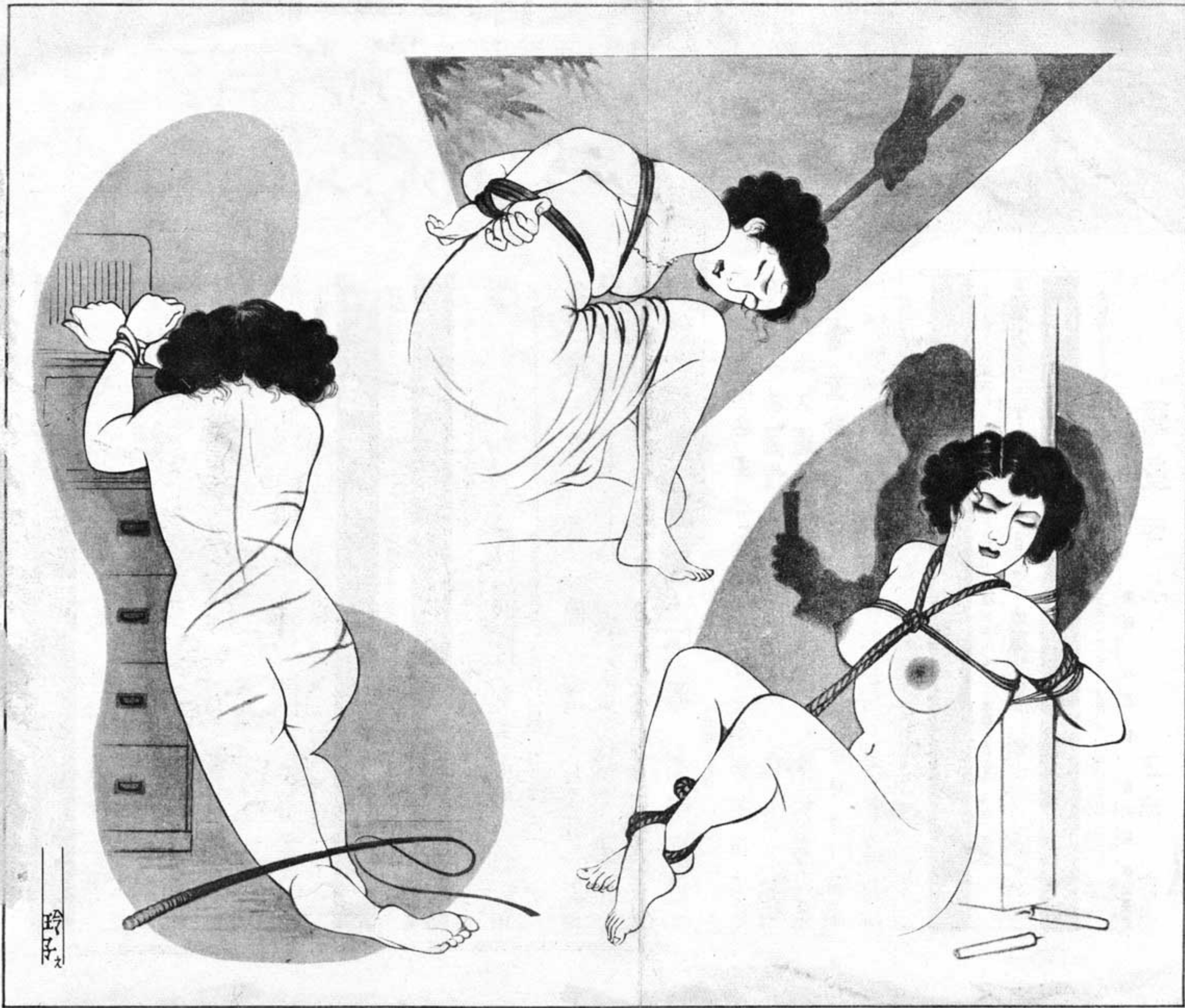
(変態) 姫君念佛講……………比企狂一郎 (150)
悲惨 関東大震災……………榎 襄介 (142)
兇行現場における死体……………萩原秀夫 (108)
(そとみ) 衆道秘伝考……………千明克己 (71)
古今の文獻、叢書から集めた精細な男色の技術大成。そとみあ必読の読物
玲子十二ヶ月画集 月……………喜多玲子 (98)
そとみあ通信……………藤井 晃 (163)
レスボス通信……………園村恵子 (120)
読者交歓室……………(新設のサザ・マゾ・ソドミアのクラブ) (160)
(そとみ) 男色アパート……………志摩雪夫 (84)
自動車事故の男を救ったばかりに艶歌師の次郎は彼の見事な女性乳房にズルズルと……

歴史小説 秘色大阪城絵巻……………岩堀 光 168

連載あぶ・すとおりの「まにや地獄」第二回

凌辱開花……………日夏由紀夫 36

美貌の処女弓子を取巻く街の狼たち……奇怪なセムシの親分の手がやがて……



風 俗 草 紙

現代人の新しい趣味雑誌



九 月 号

特集病癢に憑かれた若き處女の手記

汚辱の令嬢

「よし、お前ちよいと裸になつて見な！俺の齒の跡がその左の肩に残つてる筈だ！」

私は悲鳴のように小さく叫びながら、左の肩に手を當てた。裸になるまでもなく、私はその齒の傷跡を知っていたから——。

金澤美樹子



1

女学校時代のお友達が、今度留学生として渡歐する。それでクラス会でその歡送会を催すことになった、その日のことなのだ。

私は会の幹事役をしていたから、定刻より早目に銀座の会場に着くようにと思つて、氣ぜわしい思いをしながら電車に乗つた。この電車は澁谷行の私鉄だから、この時分は車内は閑散なものだつた。

腰を下してから、私は慌てて香水もつけずに家を出たことを思出して、ハンドバッグからウビガンの瓶を取り出した。そして、耳たぼやドレスの胸元に香水をこすりながら、なんだか電車の中でそんなことをしているのはしたなく、又うしろめたく思われて、ちよつと辺りを見廻したのだ。

すると、前の座席からジッと私をみつめている、若い男があつた。それがあの男だつたのだ。

あんまりジロジロ不躰な眼ざしだつたから、失礼な人だと思つて眼をソラせると、その男はツカツカとよつて来て、隣りにドスンと腰をかけた。

「やあ、よく似ていると思つたら、やつぱりあんただつたんだね。俺、あんたが洋服着ているのを見るのは始めてだから、人違いかと思つたよ」

そう云つてニヤニヤしながら、男は私の顔を覗きこむのだ。私はアツゲにとられて、その黒い顔を見返えしたけれど、すぐ可笑しくなつて仕舞つた。

あなたが仰言るとおり、人違いですわ、と云いたいのを我慢して、私はツンとソツポを向いた。なんだか街の与太者みたいなその男と、面識がある道理はないし、そんな種類の男とは口をきくのも躊躇された。

ところが、その男は如何にも狎れ狎れしうに肩をぶつつけて、

「おい、あんたそうやつてると、まるで大家の御令嬢みたいに見えるぜ」

そして、なにが可笑しいのか、さも意味あり氣に、ツツクツと笑うのだ。

私はテツキリ氣狂いだと思つた。馬鹿馬鹿

しいし、薄氣味が悪いから、私は席を立つて男から離れ、ドアの近くに立つた。そして、窓外を眺めていると、呆れたことには、男は再び席を立つて私の傍によつてくるではない

か――。

「よお、いくら晝間だからつて、そうツンツンするこたねエだろ？」

「失礼ですけど、御人違いじゃございません？ あたくし、貴方を存じ上げませんけれど……」

言葉は丁寧だけれど、言外に手きびしい非難をこめて云つた。

男もいい氣持のところ、水をかけられたような面持で、チョツとバツが悪そうだつたが、今度は遠慮深かそうに横から、やはり眺めているらしい。それは丁度半信半疑で、なにかたしかめようとでもするような様子だつた。

そして男は、

「あッ！」と、大きな声を立てた。

「なあんだ、やつぱりお前じやないか……、

いくらシラを切つたつて、ちゃんと耳の後にホクロがあらあ、チエツ、吃驚させやがるぜ――」

私の右の耳の後に、小指の先ほどもある、大きなホクロがあることは事実だつた。しかし、ムキになつた男の顔を見返えしてみても、心当りがある筈はない。私はなにか因縁

をつけられるのかもしれない、と思うと、少々心細くなつて来た。

しかし、運よくその時電車が澁谷にすべり込んだので、私は足早にホームに降りて、やつとホッとした。そして、国電に乗り換えようとして広い階段を降りていると、驚いたことに又、あの男がピツタリよりそつてくるのだ。そして、今度は低い声で囁いた。

「さつきは、考えなしに人前で声をかけて悪かつたな。今度お前が来た時にゆつくり話しようぜ、じゃ、待つてゐるからな」

一人合点で勝手にそれだけ喋ると、男はアツサリ人ごみの中に消えて行つた。私はまるで狐につままれたような具合で、ポカン、とそれを見送つた。その時「ワツ」と後から飛びつかれて、場合が場合だけに、私は飛び上つてしまつたけれど、振返えると、今日同じ銀座の会に出る御友達の一人だつた。

「美樹子さん、誰なの？　今、ここで話した人——まるで映画に出てくる、街の兄ちゃんみたいじゃない？」

「それが、あたくし全然知らない人なのよ。すつかり狎れ狎れしくされちやつて吃驚したわ。あたくしの、ここんところにホクロがあ

るでしょ？　ところが、あの人の恋人も、同じところにホクロがあるらしいのね？」

「なあーんだ、でも、氣狂いにしてはホクロで搜すなんて純情ね？」

そして、二人で大笑いしたのだ。勿論、それつきり、あの男のことは忘れてしまつた。

2

家庭に在るとは云つても、月水曜のピアノに土曜のお茶の御稽古の外にも、買物だのパイティだのと、結構忙しかつた。

あの不思議なホクロ問答から十日ばかり経つた月曜日、ピアノの稽古の歸えりに家の近くまで来ると、その邸町の静かな十字路の角に、あの男が立つていた。

「よう、ずい分待つたぜ。俺あすつかり調べたんだが、あんた、なんだつてな、この先の、金沢さんのお嬢さんだつて云うじゃあねえか……、俺あ、吃驚しちまつたぜ？」

「一体、なんの御用ですの？」

あんまりしつこいので、私は思わずキツとなつてしまつた。だが、男はニヤリとして、「なんの御用つて、あんたの方で御用があるから、あんなにしよつ中、夜中に通つてくる

んじやねえか——」

「へんなことを仰言らないで下さい！」

屈辱に震えて、私は殆ど絶叫した。すると、男はガラリと態度を変えて、

「オイオイ、人が穩便に話していきやあ、あくまでシラを切る気か？　フン、赤の他人のようにオツに澄しやがつて——、始めは、そうだ、先月の二十日だつたよ。ピンクのナデシコかなんかの模様の寢巻を着て俺ん家の裏庭からフラツと幽霊のように入つて来たじゃねえか、この先の××町の射的屋の裏によ」

その時、四、五人づれの人を通りかかつたのを幸に、私はパツと駆け出した。男は後からなにか叫んだようだつたけれど、さすがに人目があるので、それ以上は追つて来なかつた。

私は家に駆けこんだけれど、まだ動悸が納まらなかつた。

男が、××町の射的屋と云つたのを聞いて、フツと思出したことがあつたのだ。その射的屋と云うのは、私の家から駅へ行く近道の途中にある、ちよつとした盛り場の一角で、店もこじんまりしているし、奥の方も一間か二間ばかりの手狭な家なのだ。

どうして知っているかと云えば、今年の夏の始め頃、私は何気なくこの射的屋の横を通りかかった。ダラダラの坂を下りると、その角が射的屋なのだが、凄じ掛声がするので、私は何気なくその裏庭を覗いたのだ。

裏庭と云つても猫の額ほどのところに、パシッ一枚になつた、筋骨隆々とした男が、唸るような掛声をかけながら、大きな鉄啞鈴を振り上げていた。力コブが盛り上つた腕にも背中にも滝のような汗が流れている。

私はそんな野性的な男性の姿を見たのは、殆ど始めてだから、思わず立止つてみつめたのだつた――。

その時、男はうしろ向きになつていたから、顔は判らなかつたのだけれど、そう思つてみれば、先刻のヘンな男は、あの鉄啞鈴を振り上げていた男に違いない……。けれど、私が知っているのは、ただそれだけなのだ。あんな与太者のような男に、辱かしめられるようなことはない筈だつた。

あの男は、ピンクのナデシコ模様の寝巻きと云つた。ただゆきつりのあの男が、どうして私の寝巻の色や柄まで知っているのだらう……。何故だらう？

私はぼんやりして、なにも考えられなくなつてしまふ。不思議で、薄気味が悪くて仕方がないけれど、あの男について、それ以上は何の記憶もない……。

だが、私はある朝、ピンクの寝巻の裾の方に、ペツタリついていた赤いシミを思出す。それは寝巻きの下に着ていた、絹のスリッパにもついていただけ……。毎月の、アレとも違ふし、なんの心当りもなく、私は寝起きの床で吃驚したものだつた。

他にも、なんだか、何時もと違つた、異常な感じがあつて、病的なものかと心配したのだけれど、とにかく、汚れたそのスリッパと寝巻の処置に困つて、私は姐やにもかくれて、盥の水に漬けたつけ……。

あれはとても暑い朝だつたけれど、何時だつたかしら、と思つた。そして、突然、先月の二十日と云つた、男の言葉が耳元で霹靂のようにひびいた。

私はバネ仕掛けのように立上つて、机の上の日記を繰つた。二十日。七月の二十日。私はその日の頁に、細かな字で不定期な出血を見たことの不安をつづつていたので――。

私はガクガク震えてくる。だが、それをな

んと説明したらいいだらう、私は何も知りはないのだから……。

男は、私とその夜、彼の許を訪れたと云う。私があんな盛り場の射的屋を夜中に、しかも寝巻姿で訪れる筈はない。現に、そんな記憶はなに一つないのだから……。

しかし、男の言葉の奇妙な符合は、一体何を意味するのだらう――、そして、あの汚れた寝巻の秘密は……。

七月の二十日。その夜、私は継母との間に気まづいことがあつて、ひどくイライラしていた。神経質なタチの上に一層神経過敏になつて、ひどく不眠の夜があるかと思えば、寝汗を掻いて熟睡することもある。それも、熟睡したと思つても、翌朝は何故かグツタリと疲れていることが多かつたのだ。

私は一寸先も見えない霧の中を彷徨しているような、自信のない状態に陥入つて、その日から一步も外出しなかつた。なんだか、眼に見えぬ敵にでも脅びやかされていよう、ますます神経過敏になつてしまつた。

3

しかし、あの男はそのまま諦めてしまふ筈

がない。或日私の処に配達された封書は、女名前だけれど、実はあの男からだつたのだ。下手な字で、私が出向くべき日時と場所が指定してある。そして、

「もし、このことを家の者や警察に知らせれば、俺はすぐ世間にお前と俺との関係を暴露してやる。自分の身分が可愛かつたら、大人しく、喫茶店「ドリーム」に來い」

その「ドリーム」は、射的屋と同じ盛り場の一隅にある、チャチな喫茶店だつた。ドリームとは皮肉だけれど、男は無学だから、或は偶然だつたのかもしれない。

指定された時間に、私はそのドリームのドアを必死の表情で押した。相変らず、男と私の関係につながりは見出せなかつたけれど、其処に私の知らない、なにかが存在するらしいことを、私はもう本能的に悟っていたから……。

ケバケバしく狭い店一杯に、耳を聳するよなジャズがひびいている。あの男は、さも満足そうに私を迎えた。

「やあ、とうとう観念したらしいな。まつたく、お前と来たら、一人二役みてえだから、俺も、マゴついちまつたつてもんだ——」

私は無教養にニタつく男の顔を見上げて、吐気を催してくるのを押えながら、とにかく事実をハッキリさせる必要があると思つた。「あの、どうして、私のお寢巻の柄なぞ、御承知なのでしようか？」

語尾が呟くように震えて、不安と恥かしさで顔が上げられなかつた。あの男はそんな私を穴があくほどもみつめて、

「はい、それじややつぱり、お前は正気じやないんだな？俺も人から聞いたことがあるけど、つまり、夢遊病者つてヤツだ！」

「夢遊病者？」

鸚鵡がえしに呟いた。なんと云うことだろう、この私が夢遊病者——。

「とにかく、もう五、六ぺん来たぜ。フラフラと裏口から入りこんで来て、啞のように黙つたまま、イキナリ俺に抱きつくんだから、さすがの俺も——」

「嘘！ そんなこと……」

「よし、お前ちよいと裸になつて見な！一昨夜お前が来た時、こんなこともあるかと思つて、俺が思い切り咬んだ跡が、お前のその左の肩に残つてる筈だ」

私は悲鳴のように小さく叫びながら、左の

肩に手を当てた。裸になるまでもなく、私はその齒の傷跡を知つていたから——。

昨日の朝、着更えをする時に、私はその紫色になつた傷跡をみつけたのだ。前夜、御風呂に入つた時までにはなかつたのに、知らぬ間に印されたその齒の形が、不思議でたまらなかつたのだけれど——。

「そうれみな。だがね、まあそんなに悲観するこたないや。俺も男だ。自分の情婦を大事にすることぐらい知つてら」

ベラベラと喋る男の、派手な碁盤縞のワイシャツがボーツと霞んで、あとからあとから涙がこぼれて仕方がなかつた。

あの男の用件と云うのは、結局はお金だつたのだ。

「ちよいとね、このところシケてるんで——二、三万円チョツクラ貸して欲しいんだ。なあに、すぐ戻すからさ」

それが、態のいい脅迫だと云うことぐらいは、世間知らずの私にもすぐ判つた。持金を全部渡し、残りは明日又会つて届けることに、男はパタパタと一人で取り決めたのだ。口惜しく腹立たしくて、それに自分の躰がいとわしくつてたまらない。二十二歳まで清

淨に保つて来た躰を、あんな無知な豚のような男に与えたと考えるだけで、躰がねじれるほどに情けなかった。

それが無意識とは云いながら、私の方から躰を投げ出したと云うことに我慢出来なかつた。八ツ裂きにもしたいほど、この躰が憎くらしいのだ――。

あの男の説明によると、七月二十日の夜の一時頃だつたと云う。射的屋に一人で寝泊りしている男が、店を閉めて寝ようとしていると、白い影がスーッと庭木戸から入りこんで来た。

さすがにギョツとして、
「誰だッ!」と声をかけたのも聞えないよう



に、音も立てずに部屋に上つて来たと言ふのだ。それが娘らしい派手な寝着に、赤いしごきを前結びにした女だから、二度びつくり。暫くは気味が悪く、怒鳴つたりスカしたりしたが、ウンともスンとも答えない。無言劇のように黙つたままで、男にウツトリともたれかかつた――。

「ほら、据膳はなにやらと云うだろ? そいでも、さすがの俺も、始めのうちは、オツカナびつくりつてもんさ」

自分の記憶に全然ない己れを、その相手の男から綿密に聞かされる、複雑な倒錯と屈辱――。こんな異常な経験を持つてゐる、不幸な女性はいくつあるだろう。

4

私はその日から、みじめな錯乱に落ちて、すべてに自信を失い、記憶が混濁して、誰にも会いたくなかつた。すべてが呪わしかつた。しかも、この不幸は全然私の秘密の病癰から発生したもので、誰を怨む筋合もないのである。

あの男――(あの盛り場で鼻つまみの、遠藤と云う愚連隊くづれたつた)からは云いな

りに、さんざん金品を絞り上げられた。そうするより外に、私に何が出来たろう？

家の者に暴露されることを思っただけで、躰が震えた。殊に、仲が悪い継母に知れて嘲笑されるくらいなら、私は死んだ方がいいと思つた——。だから、私は遠藤の云いなりに苦勞してお金をこしらえる外はないのだ。遠藤は鬼だつた。指輪や絵羽織を売つた金を、大して有難くもなさそうに受取りながら、

「お前と来たら、ちつともハリ合いがねえな。昨夜はお前、質屋の油ぎつた親爺に会わしてやつたんじやねえかよ。御大家の令嬢だつてフレこんだから、助平親爺奴、相好をくずして喜んでやがつた。ハハハハ」

なんと云う男だろう——。遠藤は私からお金を絞りながら、片方では知合いのみだらな好色男たちに、私を売っているのだつた。哀願しても、泣いても、この男には何の効目もない。

「なあに、そんな虫も殺さねえような顔をしながら、お前はそれが望みで夢のように邸を出てくるんだ。お望み通りに計つてやるんだ

から、俺は礼を云つて貰いたいくらいだぜ」こんな夜が続いたら、世間に噂がひろまるのは、時間の問題だつた。私が邸から拔出しさえしなければいい！ 私はなんとかして、魂の抜けがらになる私を阻止しようとした。さまざまな精神病の本もとりよせだし、それとなく医師の許を訪れもした。夜、床に入る時には不安で云いようなない気持になる。紐で足を縛つて、勿論部屋の鍵を嚴重にかけた。

しかし、朝、眼が覚めた時には、紐も鍵もほどかれている。ハツと飛び起きて、疊の上にはほどけた紐を発見する時の、情けない気持と云つたらなかつた。

それでも、私はそれが忌憂であればと祈りながら廊下に出てみるのだつた。

私は前夜の外出を確かめるために、部屋の出口から、私の夜の出入口らしい雨戸の処まで、薄く白粉をこぼしておくことにしているから——。果して、廊下の白い粉の中に、点々と細い私の足跡を発見する——。

私はまだ家の者たちが寢靜まつた、明け方の廊下にうづくまつて、どうにもならぬ自分

を抱きしめながら、すすりあげてしまうのだ。夢遊病者！ なんと云う呪わしい宿命だろうか——。

もう、夜が来るのが恐ろしかつた。こんな症状は、神経質になるほど頻発するらしく、私はこの頃では、殆ど毎夜のように、深夜の街に出てゆくらしい。まるで娼婦のように男の許に——。そして、私が出掛けるのは、必ずあの射的屋なのだから、

「いくら夢中だつて、外の処に行かねえらしいから、お前なんかと云つたつて、よつほど俺に惚れてるんだよ」

と云う男の言葉を、私は嚙咬みしながらも、首肯しないわけにはゆかないのだ。

もう首飾りも、腕時計も、それから和服類でさえも、家の者に内密で男に絞り上げられて仕舞つた。私が少しでもそれを避ると、「まさか、お前の病気を、世間様に吹聴して貰いたいわけじゃあるまいな。——」

やくざな男の脅迫におびえ、魂の抜けがらになつてしまう自分への不安におののきながら、私は汚辱の夜が来るのを、絶望的に待っている。

晴雨秘稿・第一回

女體の縛り方十五種

生涯を賣め研究に賭けた畫伯の、これは貴重な、實
驗に裏付けられた論稿である。本誌独占發表！……

伊 藤 晴 雨

女を縛るという事は単に女の自由を奪う
という事以前に、何等かの目的をもつて居
なければならぬ。女の身体に対して或る
種の目的を有する爲にする場合は例外とし
て、之に自白を強い、或は其身体の一部
に危害を加え、又は之を損傷して其苦痛の
表情を見て快とするもの、等々或は又懲
戒の目的を以てするもの等、千差万別であ
ろうけれども、其自由を拘束するのが第一
の目的であらねばならないという事は何人
も異論はあるまい。昔しの武術家は戦場に
於て敵を生擒する爲或は降人を縛る爲に各
種の縄の掛け方を發明した。忍術の一部と
して縄の掛け方人の縛り方にも、其人々の

階級官位地位等に依つて其形式を異にし、其
縄の結び方も各々異なつて居る。初めは単に
人の自由を奪う丈けの縛り方が、後世には各
種の流派流儀さえ生ずる様になつたが、それ
は男を主としたものであつて、女は従であつ
て女の縛り方は男の何十分の一にしか定めら
れては居ないのである。

之に依つて之を見れば、女の悪人は男に比
して少なかつたに違ひなかつた。戦後の様に
殺人や強盗を働く様な女性は維新前は滅多に
無かつたに違ひない。それが女は乳という厄
介な急所があつて、男の様に胸の上から縄を
掛ける、胸部を緊縛すると絶息するという危
険があるから、普通(?)の罪跡不分明な人間

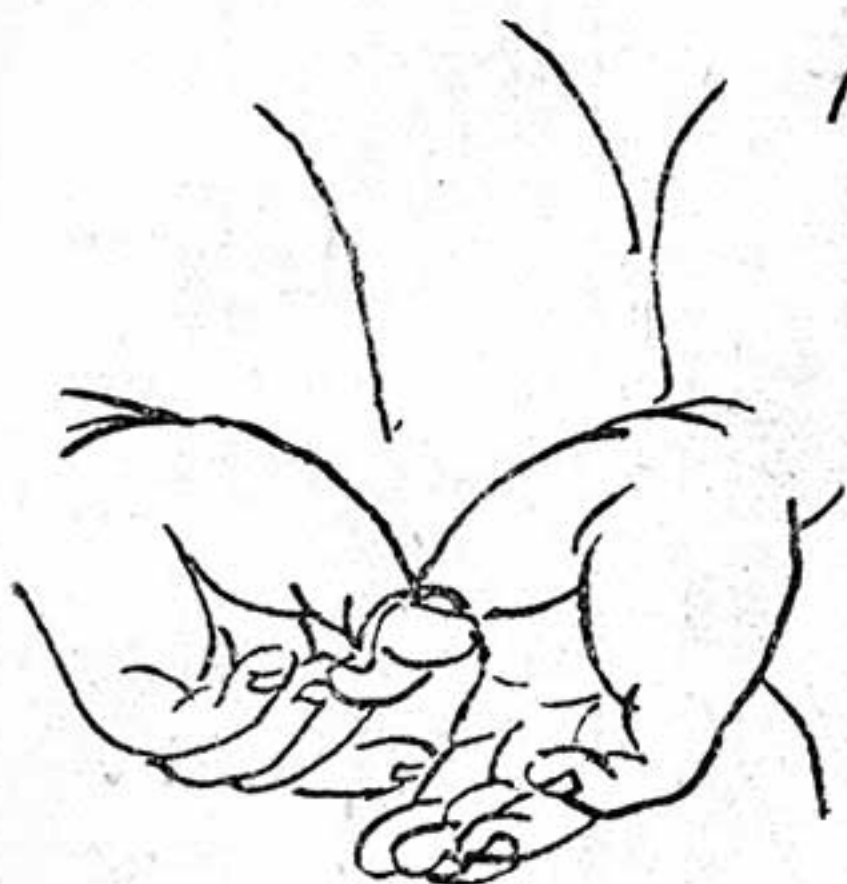
には之を施す事が出来ない。女を縛る場合
は乳の部分を除けて縛るので、女に限つて
特殊な縛り方を案出したのだから、其縛り
方も極めて妙なものである。

近來流行の被縛雑誌(?)に、少女の乳の
上に細引を掛けて梁の上へ吊し上げた挿絵
が、実験談と称する本文と共に掲載されて
あつたが、これは立派な嘘ツパチで、こん
な真似は決して出来るものではない。

私は今迄の体験の上から得た女の縛り方
を、以下順序なく、思い出す儘に記すこと
にする。方円流だの何々流だのという様な
流儀も何も無い、強いて云えば晴雨流とも
云えるものであらう。

一、早縄掛け方

両手を後ろに手早く廻し、両手の親指と親指を三味線糸の様な細い丈夫なもので、指が喰い込む程に縛る。それから糸の余りを女の咽喉に引つけて、又女の小指に喰い込む程強く縛る。或は小指に掛けずに手首にかけるのもよい。親指は感覚を失い、指の先は紫色に変色して智覚を失う。但しこの方法は余り用いない方が安全で、被縛の遊戯に用いて長時間を経る時は、手指の肉を腐らせる様な負傷をさせる事があるか



ら危険である。一時間以上は用う可からず。又緊縛の度も女が手を自由にせぬ程度に止めでおく事が必要である。この方法を長く行う時は、糸が肉に喰い込んで脱し得ないものであるから、指の負傷は免れないもので、徳川時代に岡ッ引の捕り物に応用された方法である。

二、ぐるぐる巻き

これは手早く行わなければならぬ。実際問題として逃げる女を縛る方法としては、彼我の腕力の相違が物を言うのであるから、縄を掛ける場合には女に対して絶体人情味を持つてはならない。それに続いて対者の苦痛などを考慮に入れない事で、ある女は男と違つて皮膚の感度が鈍いものであるから、少々手酷く縛り上げる。其時は泣き叫ぶが暫時にして神経が鈍るものであるから、女の泣き声などを正直に聞いて手加減をする事は無用である。総じて女を縛る場合は、心を鬼にしなければ力が脱けてしまつて、本当に縛り上げる事は出来ないという事を絶えず考えなければならぬ。但し双方が遊戯的に之を行う場合は自別であるが、私の様に女を実験台に上せて



生理的に被縛の研究(?)をする者にとつては、同情は禁物であるから、力を極めて縛ろうという以外に方法はまづ無いといつていい。唯グルグル巻に手早く縄をかけて、手早く両手を縛る以外に秘伝は無い。要は熟練にまづ以外に手段はないという事になる。

三、早縄

まづ両の手首を縛り上げる事を主眼とする。この場合手早く両腕をねじ上るこの呼吸が非常にむづかしい。

両手首に縄を掛け終つたならば、其余りを二の腕と背中の中に手早く差し込んで之を二三回繰り返して後、力を極めて締め上げる。女の胸は急に締つて縄が稍肉に喰い込むであらう。間髪を入れずに今度は腹部

3



を目掛けて縄を掛け、二三回手早く廻して手首に結ぶので、これは余程手早くせねば女に逃げられてしまう危険が伴うものである。被縛遊戯の場合は別として、真剣な場合は女の抵抗に遇う事を考えなければならぬから、女賊を捕える場合などは格別の注意を要する。ただし忘れても女の乳の上を縛る事は避けねばならぬ、女の手が後ろである事は勿論云う迄もない。

四、片足掛け

先づ女を押えつけてうつ臥しに臥さしめ、右の手を（大抵右の方が先になる様にする）後ろへねじ上げて、手首に縄をかけ、之に次で左の足首へ極めて早く縄をかける。但しこの場合は縄の蛇口（図を見よ）は必ず手首の方え少し出しておく事が必要である。足首を縛つた縄を蛇口え通して締上ると女の身体はZ形になる。縄の余りを以て足を巻くか、又

4



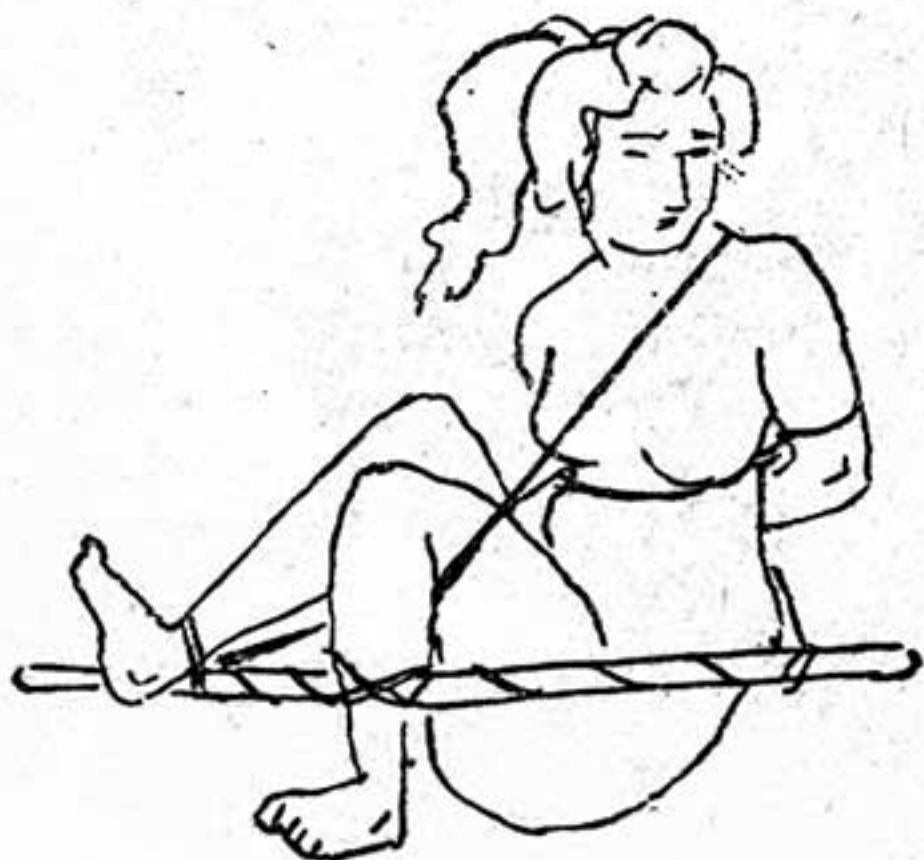
は別の縄をもつて左の足首の脛と股との間に縄を通して、力を極めて股の上え縄を巻く。

この縄は成る可く新らしい細引が効果的である。縄を通したつたならば、今度は力一杯に股と脛を捲いて縛るので、其縄の末端は順次上部え捲き上げて行つて人中の所でグツと締め上げる様にする。

股の捲き方が余り密かだと縄が足りなくなるから、成る可く荒く捲く方が後にこの縄を首にかけた時に有効である。さてこの縄を首にかけて再び左の手を縛つて止める後に右の足を持つて女の身体を引摺り廻して責めると効果満点である。

五、同じく

5



右の方法と全く反対な方法で、女体を縛り膝と股の間に棒を入れて責める方法があるが、これ以外には、女体をその儘逆吊しに吊すのもまた面白い。

但しこれは現在では行う所がない。恐らくは維新前番屋などで岡つ引等の行つた拷問の一方法で、白状しない場合は「ホダ」を打つて何日でも繋いでおくのである。ホダとは足枷の事を云う。

六、入れ首

仮に名附けた名称である。右の手首を左の足の股の間にに入れて、其手前え縄をかけ



て堅く縛り、其縄の余りを女の首に掛けて巻き、更に其縄を背中に廻して女の左の手

首を背に廻して縛り、その縄尻を女の腰に巻いて縛る。

女の首は左斜めになつた儘になり、手首は股に挟まれて縄の爲に痛みが劇しくなつて来る。一時間以上経過すれば肩が痛くなつて来る。この股の上に重量を加えれば、手首の痛みは右の二の腕に及び肩が痛くなつて来る。

左の脇の間に棒を挟んでくじると、拷問の目的は容易に達せられ、女は悲鳴を挙げて苦しむ。

猶これに苛責を加えるには、増し縄を掛けて身体を緊縛すれば、場合によつては失神する事もあるという。

七、海老責の一種

これは江戸時代の拷問庫で行われた縄の掛け方とほぼ同じである。

女に安座をかせて足部を二三ヶ所縛つて更に女の肩と股とに縄をかけて切り縄をしておく。首は出来る丈け足に近づけておく。女の背は丸くなつて海老の様に曲る。

海老責というのは身体の色が赤くなつてくるので海老責というそうであるが、赤くなつた後に白くなつて来ると一命に関するもので、

縄を解く事になつて居るといふ。筆者はまだここ迄の実験はした事が無いから何とも申し兼ねるが、何れにしても女の身体を前向きにして、或る部分を露出する責方であるから、之を実験するには余程の親しい女



性で無ければ行えないという事と、研究的に実験するとすれば、十分以上は堪え得られないであろうと思われる。筆者の実験によれば一回の試験で数日間身体の傷害を来した事があつた。

八、棒縛り

これは実験しても無害であり、或程度迄は長時間の責に堪え得るものであつて、遊

戯的に行う場合はこれを延長して、夏ならば女を蚊責にするか、又は皮膚を傷けない程度の或る種の拷問を加えても痕跡を止めないもので、婦人同志の同性愛の嫉妬の場合などには一番無害有効な縛り方である。

よつてこの責めの応用の範圍は極めて広く又深い。何となれば之を応用して、冬な



れば庭に投げ出して寒さに慄えさせるとか夏ならば前述の如く蚊責にするとか、又はいふし責にするとか、之を応用して各種の責方が生れてくるのである。其応用は無限である。

縛り方は各人の好みに依つて異なるが、今迄多く行われて居るのは両腕を一文字に拡

げて、背中に棒を背負はせ、棒の数箇所を切り縄で縛り、女の足首丈けを縛つて転がしておく、又は立木などにつないで置くかである。普通「野あらし」の私刑として用いられたという事である。

九、股のぞき

これは昔、佐渡の金山の役所に行われたと伝えられる、瓢箪責の一種に近いものである。余程の忍耐力の有る者で無ければ我慢の出



来ない縛り方だ。両手を先づ後ろに廻して、背中で縛る、縄尻を肩に当てて海老責と同じ

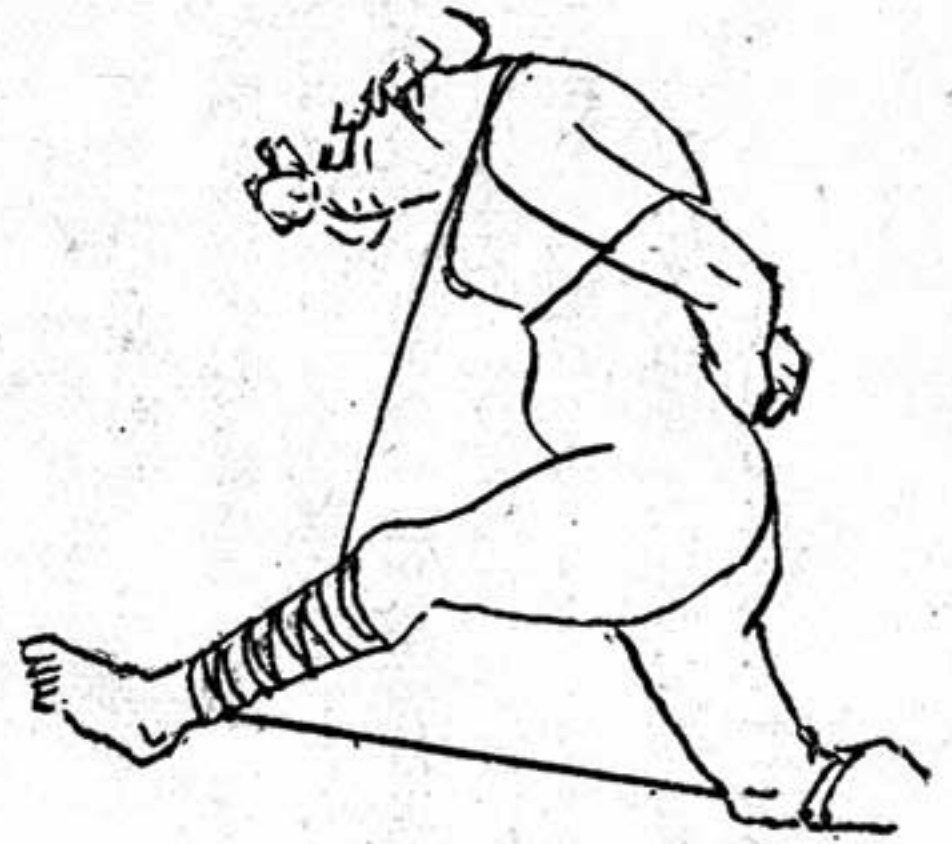
様に締め上げ、それから縄を両股の間に入れる。

女の首が尻の穴の見える迄固く締めつけて、縄を後ろえ廻して手首に縛り、其縄尻を梁に吊して引上るといふのだから、馬鹿に手が掛る事と危険が伴うので実験が六ヶ敷い。

伝説によれば、姐妃のお百がこの責に掛つた事二度で、余りに苛酷なので流石の毒婦も堪え切れなかつたと伝えて居る。

十、鷲

仮に名附けた名で、其形が鷲に似て居るからである。女の手を背に廻して縛る事は普通であるが、成る可く手首を高目に縛り上げる事が必要である。この縄尻を延長して女の右又は左の足首を前部に向つて折り曲げ、螺旋形にこの足に縄を巻き、別の縄を以つて直立せる女の足に丸太を縛り附けて其丸太を両手の間に通して縛る事図の如くにする。その丸太の下端は地に埋めて置く。女の体は前方に曲つて「丁」字形になつて居るので、あたかも鷲の形に似て居る。更に女に苦痛をあたえるには、背中の上に重い石



等に乗せて置く。長時間に及べば氣絶する
 そうであるが、筆者はまだそこ迄の實驗は
 行わなかつた。

十一、兩手揚げ

これも勿論仮の名称である。左右両方の
 手首を上へ挙げて縛り、この手首の間に棒
 を通して、手を下る事能はざらしめて置く。
 只それだけの事であるが、この女の脇の下
 を他の人々が交る交る擦るのである。女の
 苦痛が劇しくなると、身体をもたえるので
 足の自由を奪う爲に両足を丸太に結ぶ場合
 もある。



これは女の身体を傷けずに、最大の苦痛を
 与える場合に用いられるので、不眠不休に責
 められると精神が朦朧として、白状をする
 という。後にうつ責という『責方』に用いら
 れる。縛り方は至つて簡単であるが、時間を
 要する氣の永い責方である。

十二、股開き

これは両手を後ろに廻して縛り、其繩の余
 りを持つて両足を出来る丈け大股に開かせ、
 足首と足首の間には丸太を以て、開いた両足
 を縛るのである。これを横臥の場合には悪質
 の遊戯となるが、ここで詳述するのは避けよ
 う。



要は女の肉體の變化を求めるに當つて、
 奇を好むの余り、人躰の屈折に不自然なポ

ーズを求める事は、被縛芸術を冒瀆するも
 のである。女體の慘虐美には限界線がある
 事を知つてから、縛り方の研究を進めるべ
 きであらう。

十三、括り猿

これも亦仮称であるが、形状の上から名
 づけた。
 これは両手と両足を一つにして、括り猿
 の様に縛るので、首も下向けになつて居る
 ので外見よりも苦しい縛り方である。これ

を吊し責に應用すれば表題の如き形となる。但し實際問題として、これを其儘吊し責に應用する場合は、手の関節を損傷する事があるから、無経験の人にはこの方法は適用出来ないという事を記しておく。

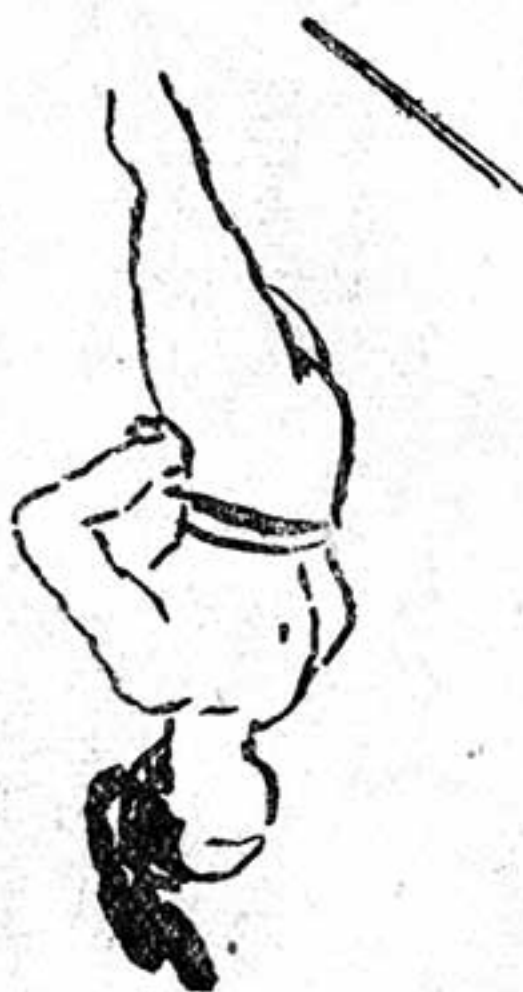
十四、逆吊し

これは実際には滅多に行えないものであるし、又行えば生命に関するから、特殊の場合で無ければ先づ出来得ない縛り方である。

併し強いて写真を撮す場合とか映画のセットなどで行う場合には、布連雀を用いるが安全である。布連雀というのは布を以つ



て胴を幾重にも巻いて、これに麻縄を通して輪を作りこの輪に本縄を通して人体を吊すのであつて、これは地方の芝居などで臨時に宙乗りなどをやる時に使用されるものである。至極便利なるものであるが、素人には一寸出来



兼ねるから、女を逆さに吊す場合は、先づ両足を縛り、女の体を高い板の上に上向きにして（手は先に後ろ手に縛っておく）板を突然除けば、女の体はブラリと垂れるのである。これも一見容易の如くにして、実は難事中の難事であり、この逆吊りのコツは実験に待つか、口伝による外は無い。

十五、吊し

両手を後に縛つて、大衆小説の挿絵の様な

形ちに吊す事は不可能である。女の裾は都合よく翻り、長い振袖は形ちよく動くと思ふと大違い。女の吊されたのはあまりいい



形では無い。殊に前述の如く女の乳の上には絶体に縄を掛けられないから、ますます形ちは悪く足はダラリとブラ下り、グルグル廻つて居るばかりである。仮に女の帯に縄を結んで女体をブラ下げたとしても、棒の様な姿勢になつて、美観は無い。縛り方は両手を高手小手にして、胴え綱を巻き、梁等に吊して置くのであるが、この縛り方には相当手加減を要するものであつて、危険が伴う事を忘れてはならない。

☆

☆

☆



ま

に

や

地

獄

第二回

凌辱開花

「あれ、何をするの……離して！」ところがりながらも處女の羞恥で
びつたり兩腿をあわしたまゝ、叫んだ。しかし、裾がひろがるたび
に、甘ずっぱい、香料と入りまじった彼女の肌の匂いが……

日夏由紀夫

1

うすぐもりの、ムシムシとあつい、土曜日の午後だった。電
車のなかは、学生や、女学生が多く、それぞれに、ふざけたり
笑いあったりしてさわいでいたが、そのなかで、一きわ、華や
かな娘の団が、白い鉄棒をかこんで、まわりの人の視線を集
めていた。思い思いの型の服からあらわにされた二の腕や、胸
の豊かさ。手に手に、油紙に包んだ花束をもっている所をみる
と、お花を習いに行つた帰りなのであろう。高校を出て、お嫁
入り前の一時期の娘たちとすれば、ひと目を引くほど華やかな
のも当然だ。

「弓子さん、どうして私達と一緒にいらつしやらないのよ。あ

なただつて、御覽になればキツト浩ちゃんが好きになつてよ」

弓子とよばれた娘は、困つたような顔をして、

「本当に用事があるの。ごめんなさい？」

彼女だけ、白ちりめんの浴衣をきて、それが、氣品のある美
貌を一そう引たたせていた。鼻が外人のように高く、眼がすん
で憂愁のかげをたたえている。パーマの延びかかつた髪は無雑
作に一つに束ねて、紺のリボンでむすんであつた。

「用事と云う名の彼氏 じやないの？ オウ・マイ・ダーリ
ン！」

一人がふざけて、弓子に抱きつき、それで一同は笑いこけ
た。しかし、弓子は、何故か眉を苦しげに寄せて、その冗談に
のらなかつた。電車が、ガチャ、ガチャと車体をゆすりながら
止る。

「あら、池袋だわ。じゃ、皆さん、悪いけど、私、ここで降りるわ。また月曜日にネ」

新宿まで、鶴田浩二の映画を見に行くと云う皆に別れて、弓子一人だけ、あわてて降りた。

「彼によろしくね」

だれかが背中をたたいて、笑いをあびせた。しかし、もう、それは弓子の耳に入らなかった。……彼女は、だれかが、待っているように、何かに引寄せられるように、人の波にまじって改札口の方へ出て行く。

汗が、ひたいの生え際と、鼻のわきに、ぷつぷつ浮いている。それに気がついて、ハンドバックからガーゼのハンカチを出してふいたが、また、すぐ汗はにじみ出た。暑いことも暑いが、そればかりでない事は、彼女の眼の異様な妖しいかがやきからでも察せられた。

「もし、もし、切符を……」

係員から注意されて頬を染めながら、切符を渡した彼女は、広場へ出る前に、注意深くあたりを見まわしながら、駅のそなえ付けの大きなゴミ箱に、そつと、油紙ごと手にもつていた教材の花束をすてた。……

2

ひしめき合う自動車の警笛。広告塔から流れる音楽。建築中のビルのリベットの打つ断続音。——池袋の駅前広場は、あらゆる音と色彩のるつぼだ……

そのなかを弓子は、ためらう様子もなく、浴衣のすそをさばきながら歩いて行つた。繁華街の方へ。——市電がのびているその通りは、銀行や、大きなビルがつきると、段々商店ばかりになり、やがて、酒場、キャバレー、一杯のみや、……そういう秘密ありげな家々が、立ちならび、せまい露路や、すずらん燈で飾つた横丁がふえて行く。

やがて、彼女は、立ちどまつた。小さな芝居小屋の前だ。古ぼけたのぼりを立て、ほとんど全裸の女が、荒なわで、軀を無残にくくられて男から折かんをうけている、猥雑な、毒々しい絵看板を飾つてある丸太づくりの芝居小屋。軽演劇と、歌舞伎芝居とストリップの三本立だ。

彼女は、その絵看板を熱っぽい眼で、じつと見つめると、ハンカチで口のあたりをかくしながら、切符売場の方へと近づいて、

「一枚……」

と消えそうな声で、云つた。入場料八十円。おつりを受とる白い指に、ダイヤの指輪が輝やいているので、チケット売の女は、びつくりして、穴から、客の顔をのぞき見た。弓子の手はかすかにふるえている。彼女は、罪をおかす者のように、そつとあたりを見廻してから、素早く、入口の、のれんをくぐつた。

弓子の用事と云うのは、これだつたのだ。親は勿論、友達にも云えない用事、——いつの頃からか、やみつきになつた彼女の、娘らしくない病癖だつた。だれにでも秘密はあるとしても、これは、また何と変つた彼女の病癖だつたらう！ はじめは、

電車のなかでできた中年男の噂から、異状に、そそられて、一回だけ、そう思つて、きてみた小屋だつた。一回切りで、あとは、やめよう！　そう思つたが、ダメだつた。電車が池袋に止るたびに、眼はクラクラし、胸は、今にもやぶけそうになる。一回みた女優の演技が、頭のなかに焼きつけられたようになり、夜、寢床に入つても、その刺戟に我慢出来なかつた。今度こそ止めよう、きつと行くまいと思つても、毎週土曜日になると、彼女は、すい寄せられるように、この汚い小屋に、ひとりできてしまふのだつた。

土曜日なので、小屋のなかは混んでいた。一杯ひっかけたらしい土方や、職工や、くたびれ切つた会社員たち、それから、この附近の長屋のお神さんたちなどが一杯に、小屋にあふれ、ひいきの役者に、声をかけたり、笑つたり、きわどい場面へくると、「よう、よう。もう少し、もう少し、たまらねえよう」などと奇声をあげたりしていた。

人いきれ、と、便所の臭気。その上に小屋全体にしみ込んだ何とも形容しがたい人間の体臭……なれないものには、耐えられないそれらの匂いが一杯に充満しているが、見物客は、そのなかで、平気で、サイダーをのんだり、せんべいをかじつたりしている。

弓子は、ハンカチで、顔をかくしながら、人に見られないように、一番うしろのすみに立つていた。時々、この場ちがいな若い娘の観客をふりかえる者もいたが、すぐ舞台の方へ氣をとられて忘れてしまふ。

舞台では、呼びものの責め場がはじまつていて、長じゆばん

をきた若い女優（この女優がどんな狂言でもせめられる役になるらしい）が庭先のような所にほうり出されて、さるぐつわをはめられ、後手にくくられたまま、
「さア、白状しねえか。白状すればよし。しなけりや、こうして……」

と、土足で、背中をぐいとつかれて

「あれエ、助けてエ」

と、可憐な声をあげながら、前のめりにころがされ、責められていた。ならずものに份した男優の、からげられた浴衣の裾から見えるたくましい毛ずね。細ひもが、喰い込んだ女優の胸の肉や、がつくりと、根のくずれた島田のびんのほつれ……それらのものが、弓子に、不思議な戦慄をあたえる。

何故なのか分らなかつた。だが、男にしばられた女の姿態や、しいたげられる様子を見ていると、芝居だと思ひながら、まるで、自分がそうされているように、軀がしびれ、足がふるえてきて、のどが、カラカラにかわいてしまふのだ。

「ああ……」

弓子は、女優が、つきころばされて顔をぎゆうぎゆうふまれる場面になると、ハンケチをギリギリ噛みながら、咽喉の奥から、しぼり出すようなうめき声を無意識にあげた。

3

弓子が、立つているのは、入口より奥の方の隅だつたが、その辺は一番くらしいので、彼女は、だれにも氣をつかわないで、

舞台に見とれていた。しかし、反対がわのすみの方にいた一人の若い男が、弓子の方を、じつと見つめているのに、ふと気がつく、それから、その男が気になつて落ちつけなかつた。

色がわりのジャンパーをきたその男は、へびを思わせる三白眼で、喰い入るように弓子の姿を見つめている。居すくめられるように感じた弓子は、急に怖ろしくなつて、出ようとする。その男は、すつと、弓子のそばへ寄つてきて、

「好きなんだネ。お前こんなの……」

となれなれしくはなしかけた。弓子は、無視してやろうと思つたが、しかし、だまつていれば、その問いを承認した事になりそうで、

「好きじゃありません！」

と切口上でこたえた。

「へへ……。好きじゃないなら、なぜ、こんな所へくるんだい」

男は、煙草で黄色く染つた歯を見せていやしく笑つた。それが、ぞつとする程いやらしかつた。

「——どいて下さい。かえるんです」

「もう少し、いいじゃねえか。オレと一緒に見ようや。ねえちゃん」

男は一層彼女の前に立ちふさがつた。

「もう、かえらなくちやいけないんです。失礼します」

あおくなつた弓子が、すりぬけようすると、男は、彼女の腕を、白ちりめんの浴衣の上から、ぐつとにぎつた。

「何もしやしないよ。お上品ぶるない。……お前、新宿のズベ

公だろ。俺見たことあるよ」

「あら、人違いだわ！」

弓子が思わず大きな声を出したので、観客が一齊に、彼女たちの方をふり返つた。舞台の上の役者も、氣をとられて一時、せりふを中止した程だ。

弓子は、急に恥かしくなつて、手をとられたまま、男と争うのを止めた。すると、男は、それを良いことにして、ぴつたりと軀を寄せると、彼女の細い帯のあたりへ手を廻して、彼女を抱えるようにしながら、

「一緒に出て、お茶でものもうよ。お前、この土地ははじめてなんだろ……。とつても面白いところあるぜ。案内してやるよ。俺は顔が利くからな」

と、弓子の耳へささやく。弓子は、返事をしないで、軀であらそいながら、

「止して、止して」

と云う風にはねつけるのだが、男は図々しかつた。そして、弓子が、キツとなると、

「お前、こんな、ヘンテコな小屋へ入つたこと、皆んなに知られてえのか。——俺は、お前のあとつけて行つて、おまいの家を見つけて、親御さんたちに云いつける事だつて、出来るんだぜ。お前の行つてる学校だつてしらべりやすぐ分るんだぜ」

そんなおどかしを掛けた。こんな、娘が入つてきてはいけない猥雑な小屋へきてしまつた弱味が、自分にあるだけ、弓子はそれを云われると、あらそう勇氣がくじけた。おこらしたら何をされるか知れないと思うと、このままお茶位つき合つて、

うまく別れた方がおいびんだと、とつさに思った。

こんな所へきてしまった事が今更に後悔され、胸が不安にドキドキする。しかし、その不安のなかに一点の、ただれた好奇心がまじっているのはどうした事だろう！

男は、片腕で、おとなしくなつた弓子をかかえながら、体をぴつたりつけ、舞台が、ぬれ場などにくると、

「たまらねえなア、あんなの」

と露骨に弓子にささやいた。男はあくまで、彼女を不良少女と思い違いをしているらしい。弓子は、それをいい事にして、この男をだまし通そうと心にきめた。知つたひとが一人も居ないという事が、彼女をその優しい容姿に似ず大膽にさせるのだつた。

4

それから一時間後、二人は、肩をならべてどぶ板をふみながら、バラツクのつづいていいるのみ屋横丁に入つて行つた。ドブの匂いに、食物のすえた匂いが入りまじつて、一種異様な雰囲気をつくりあげている。



彼は、一軒のうすぎたない食堂の前に立つと、
「入れよ！」

と、アゴでしやくつて、弓子を入れ、木の腰かけへつくと、
「中華ソバニツ。……ここのソバは池袋一だぜ」
と自慢した。

「そう？ 私、こんな所はじめてだわ」

弓子は、こわごわ、あたりを見廻す。

「お前、案外ウブなんだな」

男が好ましそうに弓子を見やつたときだつた。

表のノレンを分けて、浴衣をきた年かさの男が入つてきた。

客ではないらしく、そのまま、すつと奥へ通つたが、入りぎわに、弓子たちの方をジロツと射すような眼で見に行つた。

すると、弓子の相手をしていた男は、顔をさつとこわばらせて、

「出よう！」

と、あわてて、弓子の腕をとつた。

「あら、おソバたべないで？」

「何でもいいから、早く！」

しかし、奥からすぐ声が追つてきた。

「待てよ、待てよ。安公……そんな、あわてることはないぜ。……まア、ゆつくりソバでも喰つて行けよ」

そして、表へ出ないうちに、男は追いついて、安公と呼ばれた男の襟を引つぱつた。

「な、なにをしやがんでエ」

「お前、色事は、金をかえしてからにしろよ。……え？」



どこからくわえてきたんだ。この娘」

男は、立ちすくんでいる弓子の華やかな和服姿をあざわらいながら、ながめた。

「なに云いやがる。イカサマの金なんか……」

云いおわらないうちに、男のこぶしが、安という男のわきばらをぐんと突いた。

「ウ……」

安は、腹をかかえて、そこへ、へたへたとくずれる。

「あ……」と、息をのみながら、とつさに、逃げ出そうとした弓子は、いきなり、ハンドバックをもっている方の腕を、男にとられた。

「はなして。何をするんです！」

男はかまわず自分の方へぐんと、ひきよせると、

「安、ごくろうだったな。どこでくわえてきたのか知れねえけど、この娘賃金のカタにちよつと借りて行くぜ。すぐかえしてやらア」

「そいつは、俺のものだ。俺が今……」

起きあがろうとする安のアゴをぐんと、ゲタでけつた。にぶい肉の音がした。

弓子は、重大な危難が、身にふりかかつてきたことをさとつたが、男の手は、しびれる程強くどうにもならない。草履がぬげ、ハンドバックも、土間に落ちて、鏡や、お白粉が無残に散つたが、それをひろう余裕もあたえられなかった。

5

荒れ果てた空家の一室らしかった。

十疊ほどの広さの部屋のなかに、弓子は引きづり込まれて、
ころがされていた。

細い、か弱い手首は、荒縄できりきりと後手にしばられてい
る。

それでも必死の力をふりおこして、起きあがろうとすると、
イキナリ、がんと男に肩をつきとばされた。

「あれ、何をするの……離して！ 私をお家へかえして！」

ころがりながらも処女の羞恥で、ぴつたり両腿をあわしたま
ま、叫んだ。しかし、裾が、ひろがるたびに、甘ずっぱい、香
料と入りまじった彼女の肌の匂いが、あたりに散つて、男を刺
戟する。

「お家へかえりてえたとよ。……へへへ。可愛い事を云うな
ア、娘つて云うのは」

男は一人ではなかった。いつの間集つたのか、三人、……
弓子の周囲に立つたりしやがんだりして、この見事なシヨオを
見物していた。

「お前さん。……あの変態ばかりやる芝居小屋へきて見てたん
だつてな。……よつぽど好きらしいな。そんなことが。え？…
…こんなムキ玉子みてえなキレイな顔してさ、やつぱり変態が
好きなんだろ？ え？ こうやつて、しばられて、本当は、と
つてもうれいんじやねえか？」

そう云うと、あとの二人も、声をあげて笑つた。

男の目で、言葉で、散々になぶられて、弓子は、汚辱に打ふ
るえ、キュツと軀がしまるのを感じる。まだ手はかけなくとも
弓子の軀は、男にべたべたにけがされたも同じだ。

それなのに、

「どうだい、この膝小僧の、ぼつちやりとした白いこと……え
え？」

この辺のさ、円みなんて、むしろぶりつきてえようじやねえ
か……」

と、着物の上からではあるが、さわつたり、ハツと気がつい
てひざをすり合わせて、かくそうとする膝小僧を、

「おう、こうすんのかい？ こうやつて、もつと見せてくれる
のかい！」

わざとそう云いながら、一層くるツと着物の前をはだけさせ
て、××××××××××××××××××××××××××××××××××××
××とき色のお腰巻をひろげたりするのだ。

「いや、いやッ。カンニンして……」

そう叫ぶ口をしらないのは、彼女のこういう訴えをわざと
封じないで、楽しもうとするのだろうか。そう思えば、「いや」
と云つたり「止して」と頼んだりすることは、一層男たちを喜
ばせることになる。無視して、だまつていなくて、と唇を噛
むがそれでも叫ばない訳には行かない。

弓子は、芝居の責められる図を見ているときは楽しく、妖し
いよろこびがあつたが、いざこうして、自分が、こんな、汚辱
に会つて見ると、いかりと恥かしさで一杯、よろこびを感じる

余裕はなかつた。

しかし、もう駄目だ。

「お、親分がこねえうちに、あんまり裸にしたら、しかられるぜ。親分は、初物が好きなんだからな」

弓子は、この上、また親分という男に、なぶりものにされるのかと思ひ、

「ねえ、今の間にかえして！ お願い。……どんなお礼でもします」

と、眼に精一杯のこびをうかべて、三人を見廻した。

「へへへ……。何でもしますつてさ。俺たちの足の指でもその朱い口でなめてくれるかい？」

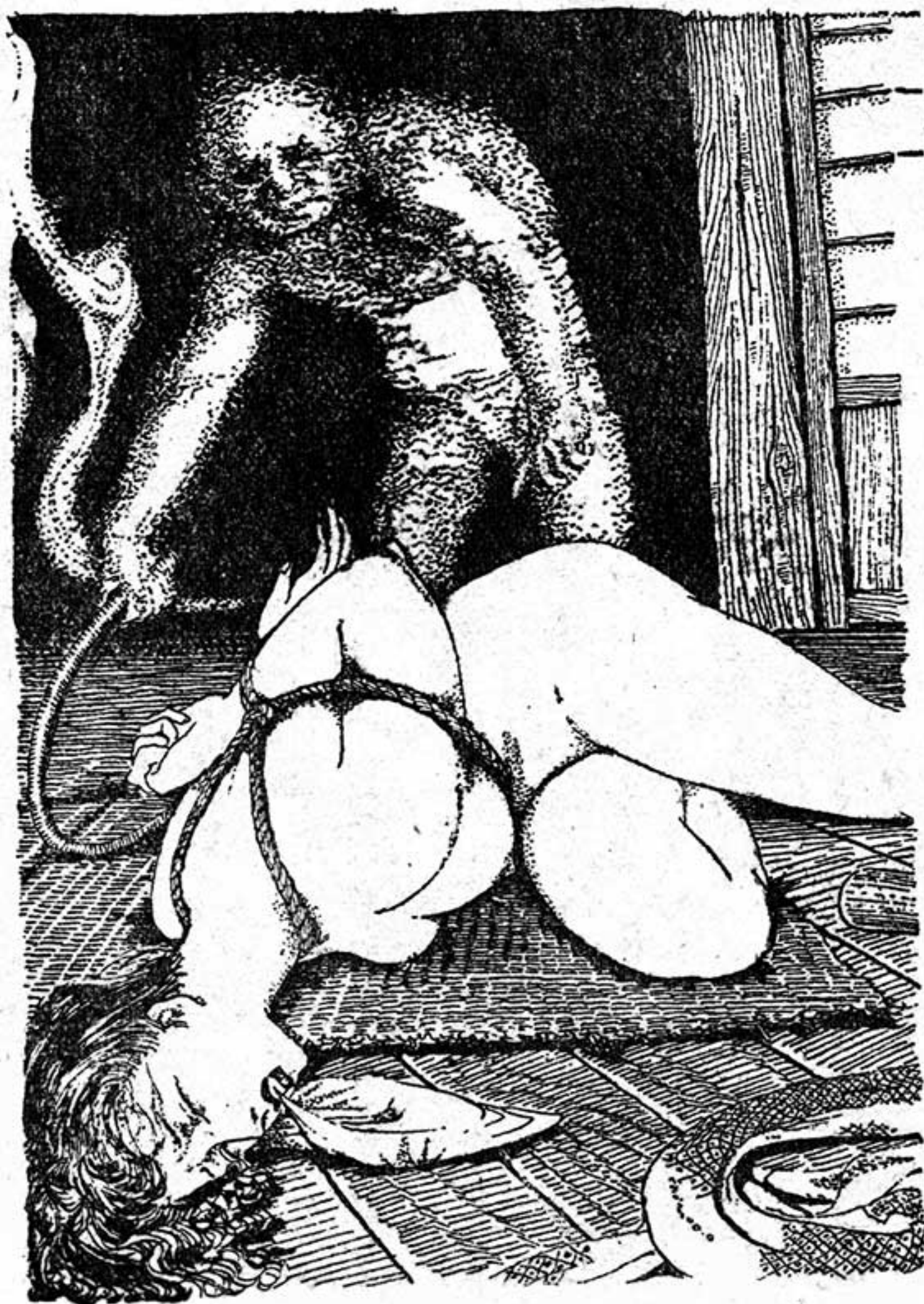
そう云つて、どつと笑つてから、

「おつ、そうそう……。のどがかわいたろう？ お嬢さん。水をのましてあげなきア……さア、水をのみな」

妙に卑しい笑いをうかべながら、男は、大きなコップに水を一杯もつてきた。実際弓子は、のどがひりひりにかわいていた。

6

その水は、塩を入れた水だったのだ。のめばのむ程、のどがかわく。弓子は、男に



くびをかかえられながら、その水を三杯ものんだ。しかし、突然、ハツとある事に思ひあたつて、飲むことをやめた。……そうだ、もし、アレに行きたくなつたら……しかし、男たちは、計画的にするらしくいやがる弓子の口を割つて、次から次へと水を流し込んだ。どんなに拒否しようと思つても、口をあおむかせ、鼻をつままれると、いやでも口をあかざるを得ない。大型のコップに十杯以上ものまされて、弓子は、恥かしさに真赤

になりながら、

「ねえ、トイレへやらせて」

と訴えた。男たちはニヤニヤしながら、

「トイレなんて、ねえよ。もう少し、口をしめて我慢してな。」

今、親分がくるから」

親分がきたらどうしよう云うのだろう。弓子は我慢するた
めに汗びつしよりになつていた。

「親分がきた」

だれかが叫んで、皆で頭をさげた。

やぶれ襦すまみをあけて入つてきたのは、身の丈五尺たらずのせむ
し男だつた。着物だけは、いい着物をきている。これが親分な
のだろうか。顔は、見世物のゴリラに似ていた。いや、顔ばか
りではない。手も足も、剛い毛におおわれ、しなびたその肌の
感じが、ゴリラそっくりだつた。

「これが、その嬢か？」

声は、ききとれない位しわがれていた。

「何故、こんな汗ながして苦しそうにしているんだ」

「へえ、それがお小水を我慢していらつしやるらしいんで」

「おう、そうか、そうか。可愛想に。……じゃ、みんなで、さ
せてあげな」

7

娘として、こんなはづかしい事があるだろうか。死ぬより辛
い事だ。……しかし、生理は我慢出来なかつた。透明なガラス

のいびんの上に、……………（以下削除）

透明な、コハク色の液体。それは、汚れを知らぬ処女だけの
もつ、ものだつた。（以下削除）

……………もう、何もかくすものはなかつた。軀をくの字
にまげて、わずかに、その辺へはい廻つてくる男達の視線をさ
ける他はなかつた。

それから、あらゆる恥づかしい目に合わされ、生きている
オモチャとしてあつかわれた。（以下削除）

または男の下着を、あかにまみれ、しみのついた下着を美し
い唇のなかへ押込まれるイタヅラもされた。

「う……。イヤッ」

「ハッハッハ。そんなにうれしいかい。お嬢さん。あんたが、
お寢床のなかで、夢に描いた男の下着だよ」

それは、本当だつた。弓子は、男のよごれた下着を喰べる空
想をひそかにした事があつたが、それが実現するとは！

そして、最後に、ゴリラのような、せむしの親分に……

弓子は、こうして花ひらいたのであつた。

「凌辱開花」本文は、都合により約六〇行削除せざるを得ませ
んでした。特に第七章においてそれが甚だしかつたので、作者
及び読者諸兄に深くお詫び致します。

今回は馬の交尾を背景とする美貌の夫人と処女のアブすとお
いいます。御期待下さい。

責め體驗記

蟲責めと女

クスグツタイところのすべてへ、つめたいトカゲをピチピチ弾ねさせて傳わらせると、和子は、あッ……あッ……と叫びながら、全身を泡立てて、しかも眞ッ青になつて悶えます……

鹿田芳雄

「風俗草紙」八月号の口絵に喜多玲子さんの「妖蟲図」がありました。あれを見て私は、思わず、ゾクツとさせられました。かつて私は同棲していた女に、これと同じようなことをさせて、たまらない満足を覚えていたものです。それで、私のいくつかの経験を描かないペンで綴つてみたいと思うのです。

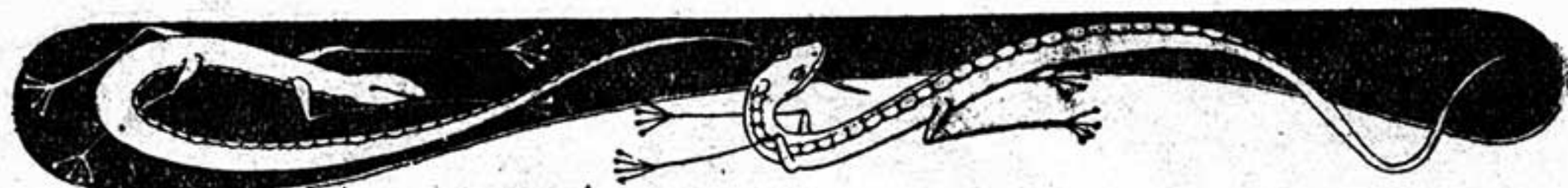
執着の虫類

その頃、もう六年も前のことですが、私は二年間の抑留生活を終えて日本えもどつて来ましたが、深川の家は焼けてしまい、父母も行衛不明になつていました。ただ一人の従妹が生残つていましたので、とりあえずこれと同居しました。しかし十五で別れた従妹の和子は、二十三という成

熟した女になつていましたので、借間の四疊半で夏の夜な下着一ツで転がつているのをみると、なんということもなく、思わずジリジリと全身の震えるようなものを私は感じました。和子もまた、そんなとき、熱い眼付で私を見返しますけれど、むろん、お互にそれ以上には進みませんでした。

和子は進駐軍のキャバレーに勤めていて、夜の一時前にもどつてくるのですが、その酔つてしどけなくストツキングをずらしたり、口紅の流れているのをみると、焼けつくような嫉妬をさえ私は覚えました。

ふと、ある夏の夜のことでした。蒸し暑くて脂汗がにじみ出るからだを、和子はグタツトと投げ出して寝ていました。その丸く盛上つた乳房のまん中に、ポツリと櫻色にくぼんだ乳首をみているうちに、私のみぞおちにググツと妖





しいものが……。それが、すぐに憎悪に似た全身のおののきに変わりました。これを両手でグシヤツと掴んで思いきり、さいなんでやつたら？……と、いう、たまらないイラダササだったのです。

ところがその時、私にはふつと幼い時にこの従妹をいじめてやつた記憶がよみがえつて来ました。十二三才のとき従妹は五六才でしたが、私は家の後の稻荷の社の小さな木立ちから捕えて来た毛虫やかたつむりを、従妹の背筋え投げこんだりオカッパ頭えのついたりして、泣き出すのに異常の快感を覚えたものでした。元来が私は、虫や小動物を怖れない、むしろ幼い頃から、オモチャをもつて遊ぶよりも、カブト虫の車や、アブの尻ツ尾に紙よりを突きさして飛ばすことや——いやそれよりもつと、青葉色の毛虫を引裂いて中の薄褐色のはらわたを引ずり出して、それを白壁に塗付けたりして遊ぶことの方に、よつぽど興味をもつたものでした。無気味なガマをみると、憎悪と一緒に、それを弄んだり殺してみることには異常の昂奮をたぎらせたものでした。——

そのとき私は、和子の汗ばんだ乳房に、丸々とこえたナメクジの感触を思い出したのは無理でしょうか？

私は、魅入られたように立上りました。梅雨あがりの台所の流しの隅に、数匹のナメクジのいることを知っていたのです。

ナメクジ

ぬめりとした、そしてコロコロと丸くなつたナメクジを四匹、私は手のひらに握りしめて、ドキドキしながら戻つて来ました。明るい電球の下に、和子は疲れて両手足をなげ出して寝息を立てています。その部厚い胸間の谷間え、私はそつと手につかんでいたものを落しました。ピクツとしたまま、また和子は寝込んでしまします。

灰色のネバネバした光沢をもつ四ツのかたまりは、ズルズルと伸びました。白い、プツプツと汗の小さな玉がふき出している谷間から、まもなく四方えむかつて這い出すのです。一匹は、モツチリとした首筋え、一匹はパンティのゴム紐から半分のぞいているヘソのくぼみえ向つて。いま一匹は、腋の下のプツプツと剥落されたくぼみえ。そして乳房の山え銀色の線をのこして這いのぼる一匹。

その薄紅色の乳首え、五センチほどの灰色にわずかな黒点が動くたびに伸びたり縮んだりするナメクジが這上つたとき、和子のからだがりビリビリとしました。もつとも感覚の鋭敏なところだったのです。同時に片手で、パツと押えました。が、その瞬間、なんとも云えない小さな叫びを、和子はあげました。手のひらをいそいで開いて振りしました。

「なんなのツ？」

と、云いながら、首をあげてみると、一緒に、もう一度キヤーツとも、ワーツとも、つかぬ声をあげて飛び起きよ





た私は、またあの猥らなキヤバレーで、外人に抱かれて踊つたり酒をのんだりしている和子のことを思うと、堪らなくなつて来ました。いや、昨夜のことがあつたせいか、その夜は更に私の焦燥感のはげしくなつて来ました。

今夜はなんでイジメてやろうか？……と、私はイライラしながら考えました。そして、外へ出て行きました。西陽の当つた石垣の間でみつけたものは一匹のトカゲでした。あッ、これだ……と、私はドキリとして手をのばしました。

その夜の事です。二時も大分すぎた頃になつて歸つて来た和子は、ドレスをぬぐ早々に、私の敷いてやつておいた布団の上えころがりました。

「こんやは、いたずらししないで寝かしてね」

フーフーと、アブサン臭い息を吐きながら、横顔をみせて和子は云います。

もうそのときには、私はひそかにハトロン封筒に入れて私の枕の横えおいたトカゲに意識を集中していました。カサツ、カサツと封筒の中で音がしています。

「いま頃まで何をしてたんだ？」

私は感震をこめて——というのはうわべのことで、実は嫉妬にジリジリしている私です。さつき、遠くにジープの音をきいているのですから、和子がそれで送られて来たのは知れているのです。

「なにつて、お酒をのみすぎちゃつて、しばらくやすんでたんだわ」

「嘘つけっ」



と、いうなり、私は和子の手を掴みました。

「いやつ、なにすんのつ」

「こうしてやるんだ！」

起上るなり、私はもう片方の手もつかみました。いきなり、ねじあげるようにして、和子の両手を背中え合わせることは、なんでもありませんでした。かたわらは落ちていた兵庫帯で、たちまち縛りつけました。

「いやいやッ、よしてッ……そんなことされるわけはない……」

和子は、小さく叫んで抵抗しましたが、すぐに私は、その両足をとらえました。パタパタと私の顔から頭から蹴りつけるのを、無理矢理にかたわらのバンドでもつて引つく





せました。両手を背に、両脚を蛙のようにひろげて、

[illegible]

カ
マ
キ
リ

不思議でした。

それほどにされた和子が、翌晩は十二時をまわるとすぐに帰つて来たのです。昨夜、おそくなつたので、私の責め苦にあつたから、それで早くもどつて来たのかと思うと、実はそうではなかつたのです。

その夜は、私はイタズラをし
ないつもりで——というのが、
あまりひどいことをして、和子
に家を出られてしまつたら、私
はたちまちにして干ばしに、生

「お帰り」

と、云つたきり、眼をつむつて煙草をふかしていますと、まもなく私の横えゴロリと転がつた和子です。

むろん、酒の匂いがするのは、私の方え頭を向けているのです。



「ねえ……ふふ」
やがて、甘えた和子の声がしました。私は妹をみる兄の感情で、和子の方へ首を向けました。

「なんだい？」



みると、不思議な眸のかがやきを、和子はしているではありませんか。口に出しては云わないけれど、何か求めるような、あえぐような息使いで、私をあおいでいるのです。

私の胸は、かすかすに波立ちましたが、こんなとき、平靜なときには私はやつぱり和子を従妹としてみるほかはなかつたのです。幼い頃の、あどけない口元と、細く眉根の寄つたやさしい——額際、きつと、父母のいた頃を思い出します。

「疲れるだろう、毎晩」

いたわりの言葉が口に出て、私は和子の肩先をソツと抱いてやりました。

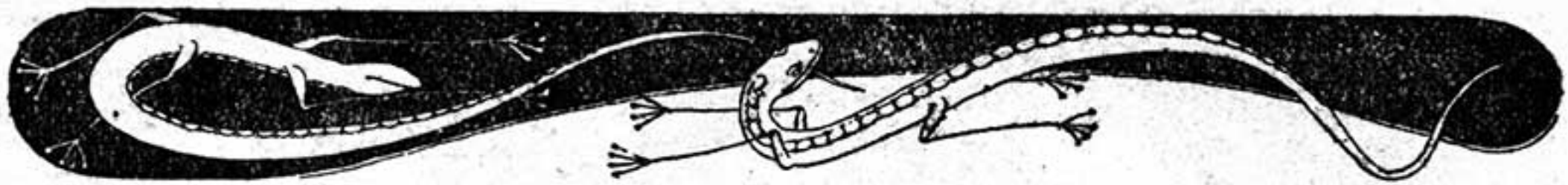
すると、どうでしょう。和子は、両腕

で私の首えすがりつきました。しかし、
である節度を守つてか、離れたままです。

不思議に私には異性としての感情が、この夜には起きて来ませんでした。

不意に、クツと顔をあげて来た和子の眸、それをみたとき、私はハツとしました。——昨夜、あのトカゲで責め苛んでいたときの和子の燃えるような、震えるような眸だつ





たのです。――

その翌る夜、私は我慢ができなくなつて、カマキリを十匹ばかり、晝間のうちに捕えて来ておきました。

和子が、酔つてフラフラになつて寢床へ転がつたとき、一匹一匹を糸でつないであつたのを、いきなり和子の胸から腹にかけてバラまいたのです。

「あつ……怖い！」

と、叫んで逃げかける。それを××××××、私は前夜のように縛りつけました。そして柱え、両手を後にまわして、坐るようにくくりつけてしまつたのです。

そして、糸で宙吊りにしたカマキリを、放ちました。

十匹のカマキリが、若葉色の翅をサツと開いて、とまるところは和子のからだしかないので。数時間を、紙袋の中へ閉じこめておいたやつですから、怒に狂つているとみえて、ノコギリの刃のように鋭い両手で、和子の顔といわず、胸といわず、下腹から両膝にかけて長い脚でとまると一緒に、引ッ掻きはじめました。

大きな乳房の上へ、五寸もあるやつが、カツと褐色の血の滲んだような口をあけて、排みかかりました。

和子が、全身を動かして抵抗しようとするのに、カマキリは挑戦するのです。ブルンブルンと、生き物のように動く胸を、敵の対抗とみてか、両手のカマで抱えるようにして、カツと噛みつきました。キヤツ……と、いう声と共に、和子はからだを斜によじりましたが、カマキリは振落されまいとして、更にきつく喰いついたのです。全身ポー

ツと火照つた、薄紅の乳首の頭を鮮やかなグリーンのカマキリが、鋭角の四肢の関節をふるわせて、抱きついた様は、美の極致と私の眼には映りました。

丸い肩先、首筋、波うつ下腹、腿に――そして顔えとまつた一匹は、唇の紅を裂いて白い歯をガタガタと震わせているあたりを這つています。小さく赤い血のツブが、点々と浮かびます。

私は声をあげて叫びたいほどの歡喜に、身をわき立たせていました……

それから後の私は、毎夜のように、ミミズ、蛙、ヤモリ毛虫と、和子のいやがりそうなものを探して来ては、責めの材料に使つてやりました。

不思議――いや、不思議でもなんでもありません。従妹という、幼い頃からの異性としてみることの出来ない人間世界の不自然な約束でしぼられている私たちは、これに抵抗しようとする焦慮とアガキが、自然にこの変態な形となつて現われていたものと思います。一度も私たちは、異性としての交渉はもちませんでした。これで充分に相互の圧えつけられた愛情のハケ口は求められていたのです。

だが、こんな不自然な状態は永くつづくものではありませんでした。一年後には、和子は無断で家を出てしまいました。私はもう探しませんでした。

ただ、私の頭の中には、あの和子との夜な夜なの生活、――白い女体にとまつた数々の無気味な蟲類の姿が、いつもうかんでくるのです。(終り)



特集・病癢に憑かれた若き處女の手記

爛れた肌

少しでも白狀に省略があると、容赦なく拷問を加えた。そして、すみ子は喘ぎながら、映画館で松木に手を握られたことを自白した。「そんなことだろうと思つた。淫賣！ お前は手を握り返したんだろ？……」

和田夏枝

尾行

五時過ぎると、其処此処で書類を片づけ始めて、女事務員たちは、潮が干くようにトイレにかくれてゆく。

男持のような大きなカバンを抱えて廊下に出ると、もうすみ子が美しく化粧を直して出てゆくところだつた。私の顔を見るとニヤリと笑つて、

「バイバイ」

と、手を振つて見せる。私は彼女をやり過して、しばらくしてから、ゆつくり尾行を始めるのだ。私は殆ど化粧をしないから

他の同性のように、長時間トイレットでネバるようなこともしない。退社時刻になれば、離れていてもすみ子に神経が集中しているから、彼女の姿を見失うようなことはなかつた。

ラッシュ時のオフィス街や駅で、人を尾行するのは容易なことではない。はぐれないように、又、相手に悟られないように——だから片時も油断が出来ないのだ。殊に交差点を渡つたり、道路を横断したりする時が大変だつた。

すみ子は日活国際会館の前に出て、どうやら有楽町の方へ行くつもりらしい。と、思つ

ているうちに、その小柄な体がヒヨイとかくれて仕舞つた。

足を早めてみると、彼女はとうやらその角の、「エリカ」と云う喫茶店に入つたらしい。一人で入る筈はないのだから、直ぐ「待合せ」だな、と悟つた。私はその手前の装身具店のウインドを覗きながら、彼女が出てくるのを根気よく待つのだ。

暫く待たされたが、私は少しも苦にならなかつた。異様な期待と、かすかなスリルもあつて、獲物を待つ獵犬のように緊張する。だから、待たされる時間が長い程、ジリジリと気持が燃焼して、神経が狂ほしいまでに研ぎすまされてゆく。

やがて、すみ子が出て来た時には二人づれだつた。アコデオンプリースのスカートに洒落た赤いブラウスのその連れを一目見て、私はすみ子がよく云う、「専科の宮辺さん」だと判つた。それは独特なカンによるのだが、すみ子に関する限り、私のカンに狂いはないのだ。

「専科」と云うのはすみ子がつ通っている洋裁学校の夜間部の専門科のことで、すみ子はその速修科に通つていた。そして、私は兼々すみ子が女ばかりの洋裁学校に通つて

いることを、ひそかに嫉妬していたから、彼女が待合せた相手が洋裁関係の友達だと判ると、火がついたような気持になつてくるのだ。

二人で喋りながら歩き始めたが、すみ子は近頃ではもう薄々私が尾行することを悟っているから、気になるらしく時々振返えるので、ヒヤリとすることがあつた。尾行に便利のように、紺のスラックス、白ブラウスと云つた、目立たない服装をしていたけれど、大柄だから自然前こごみの姿勢になる。私は夏でも大抵男もののようなスラックスを穿いている。

こうして、憂鬱な表情で毎日すみ子の後を追つて街を歩く私。一体なんの爲に、こんな愚かしい行動を繰かえしているのだらう——、それを納得がゆくようには説明出来ないが、今は私にとつて、缺くことの出来ない毎日の行事になつてゐる。

いや、その時だけ、私は生甲斐を感じている、と云つてもいい。

陽の當らぬ情事

すみ子はこの春入社して、私と同じ課で仕事するようになった。私はこの課の女事

務員の中では古株の方だが、すみ子はまだ満十八歳にならない。私達が特別の関係を結ぶようになったのは、彼女の入社後間もなくのことだつた。

私は五尺三寸もあつて、肩も胸もガツシリしているから、女学生時代から、「まるで男みたいね」と、云われたものだつた。そして、乳房なども御友達のようにムツチリとは盛り上つていない。そのせいか、小柄で肉付がよく、牀の線が柔軟なすみ子の牀に触れことに、たまらない喜びを感じていたのだ。

まるで、御氣に入りの人形を一日中もてあそぶ童女のように、すみ子の牀に触れていると、私はまるで夢中だつた。そして、父が当直の夜には、彼女を私の家に泊めた。

私は父と二人で日暮里の借家に暮している五十過ぎの父は某会社に勤めているが、安月給だから、当直料が目当て、他人の分までも引受けて当直を志願する。だから、殆ど週に二、三回は留守になるわけだつた。

そんなことを繰返しているうちに、すみ子が三日も続けて会社を休んだことがあつた。ふわふわした牀つきだが丈夫な方なのに、無届で休んだのだから心配だつた。それに、私

たちの特殊な関係から、余計な取越苦勞までしてしまうのだ。

四日目の朝、定刻間ぎわになつて、やつとすみ子が姿を見せた時にはホッとして、なんだか牀中の力が抜けたようになった。休む前日には、少し手荒なこともしたからなんだか不安な気持があつたのだ。

その日すみ子は、黄色いプリントのワンピースの上に、短いヴェストをつけて、咽喉に白い縋帯を巻いていた。それがなんだか可憐な弱々しい感じで、何時もより幼く見える。

すみ子は笑いながら、囁れた声で、「あたし、すっかり風邪ひいてしまつて、まだ少し熱があるのよ」と、云つたが、その時は人が大勢いたから、なにも話は出来なかつた。

仕事を始めてからも、気になつてすみ子の方を見ると、すみ子は案外に呑気な顔をして、男子社員たちにかかわれて、笑つたりしている。

私が思わずそれを睨みつけていると、彼女も気がついたらしく、暫くうつ向いてゐるが、又暫くすると、松木と云う、そのお喋りの社員と喋りこんだりする。イライラ

して仕事に手がつかなくなった。

だからお晝休みの時間になると、すみ子を促してビルの外に出た。手を握って御堀端を歩いたけれど、自動車や人の通りが多くて落着けないから、日比谷公園に行った。

ここでは何時も坐る場所が決っている。植込みのかげで、ちよつと人目につかないし、辺りも二人づればかりだから、あまり気にならなかった。

「すみ子つたら、松木さんが好きなのじゃない？」

「いやーだ、あんな三枚目」

と、彼女は云つたが、私は油断しなかった。男の社員たちにかかわれると、何時もケラケラ笑っているのが、腹が立つてたまらなかつたのだ。すみ子は浅草の洗濯屋の娘だから人慣れしていて、誰とでもすぐ親しくなるタチだつた。

公園で坐るとすぐ、私は彼女の身に手を廻した。

「いやだわ、今日はまだ熱があるもの……」

と、彼女は身によじらせたが、そうされると、私は上層執拗になつた。又、本当にすみ子の身は熱くて、ムレたような休臭が

こもっていたが、それが何時もと違つた刺戟になつた。

すみ子のフレイヤースカートは、びつたりよりそつてゐる私の膝の上まで、広くかぶさつてゐる。——そんな時、すみ子の身はまるで骨がないように思われた。

その日は丁度父の当直日に當つていたから公園の歸りにそう云つて誘うと、
「だつて、あたし、暫く洋服休んじやつたら、今夜は行かなくつちや——」

何時にない返事で、私はカツとなつた。それは今までの、甘つたれた様子とは變つて、ひどく冷淡な態度だつた。

それでも、思い直して一緒に私の家に来てくれるかと思つてゐると、夕方、彼女はサツサと歸り支度をして、別れて行つて仕舞つたのだ。

私はひどい侮辱を感じながら、彼女の後姿を見送つてゐるうちに、フラフラと後をついてゆくつもりになつた。その時はそれが病みつきになろうとは、夢にも思わなかつた。

始めての異常な経験に興奮しながら、すみ子を尾行して行つたのだ。そして、すみ子が或る街角で社員の松木と落合つた時、私は恐しいほどの嫉妬にかり立てられた。身中に火

がついたような氣持だつた。

談笑しながらのんびり歩く二人の後姿に眼を光らせながら、バリバリと齒を咬んでいた。人にぶつかつたり、振返つて見られたりしていることも判らなかつた。

二人が映画館に入つたから、私もすぐ後を追つて入つた。暗い中で必死に視線を走らせて、横の方の席についた二人を発見すると、三つばかり後の席に坐つた。囁き合つたり、肩をよせ合つたりする度に、私の身は震えるのだ。

その夜、すみ子が駅で松木と別れてからも、私はまだすみ子を尾行することを止めなかつた。そして、彼女が田原町の自宅に入るのを見届けてから、グツタリ疲れて歸途についたのだ。

責めの構圖

それから三日目、私は強引にすみ子を誘つて日暮里の家に歸つた。三間しかない平家だが、庭があるのがとり得だつた。私は家に入るなり、すみ子の頬を平手打ちした。

「あッ！」

「浮気者！」



二ツ三ツ、続けさまにぶつた。私の豹変ぶりに、彼女は途まどつたように立ちすくんでる。白痴のような表情だつた。
「洋裁だなんてダメして、この間は誰と映画に行つたのよ！」

サツと顔色を変えて、逃げ出そうとする襖の前に、私は仁王立ちになつてすみ子を

睨みつけた。

「さあ、白状してごらん！」

「お姉さんをダメすなんて、あたし、そんなこと……」

「まだシラを切るつもりなの？」

丸い肩にドンとぶつかつて、その軀を畳の上にねじ伏せた。色白の彼女が、真赤になつ

て蕩揺くのを見ながら、馬乗りになつて両手を縛り上げた。それでもすみ子にはね起きようとするから、長帯の柄の両端に、左右の足をひらいて結びつけたのだ。

「白状しないか、ヨシ、傷い目に逢わせるよ！」

すみ子はパーマの髪を乱して、怨めしうに私を見上げた。

「お姉さんつたら、こんなひどいこととして……ねえ、ほどいてつたら——」

「全部自由すれば許してやる。さあ、男とどんな話をしたか、みんな白状するんだ」
ブラウスの腕をまくり上げて、男のような言葉づかいになつてゐる。すみ子はハアハア喘ぎながら、光る眼で私を見上げた。
「お前は私のことを甘く見てるね、よし、云わなければ——」

私はトッサに本で読んだことを思出して新しい筆を持ち出して来た……

「止めて、止めて……、云う、お姉さんみんな云うから……」

責め道具を持つたまま、私は検事のような態度で、松木との交渉を白状させた。そもそも待合せの約束をした時のことから、二人で歩いた道順、食事の品目までもこと

細かに詮議した。

少しでも白状に省略があると、容赦なく拷問を加えた。そして、すみ子は喘ぎながら、映画館で松木に手を握られたことを白した。

「そんなことだろうと思つた。淫売！ お前は手を握り返えしたんだろ？ 多情なんだから、この女は……、それから何をしたんだ？」

部屋中を駆けずり廻つて、思いつく限りの責めを加えながら、私は嫉妬に足づりした。そして、すみ子は悲鳴をあげながら、とうとう新橋の旅館に松木と泊つた、と云つた。私はあの夜最後まで尾行していたのだから、それがまつたく偽りだと云うことを知つていたけれど、すみ子のそんな答に満足していた。



「それしろ！ 男なんかと泊つて！ なんてけがらわしい女なんだ、いたづら娘！ 色気狂い！」

すみ子も私も、そんな偽りの自白の上に、激しい亢奮を感じあつて……

「お姉さん、御免なさい、御免なさいつたら！」

白い彼女の体のそここに、うす赤く血がにじんできた。……

翌朝すみ子は、

「お姉さん、あたしが松木さんと映画に行つたこと、どうして判つたの？」

と、聞いたが、私は黙つて笑つただけだつた。

二匹の蛇

それから毎日の、私の尾行が始まつた。す

み子が私の家に来ぬ限り、彼女が自宅に帰るまで、私は根気よくすみ子の跡を追つた。そして、それが今度逢つた時の、二人の遊びの材料になるのだ。

男友達よりも、女友達に對して私がひどく嫉妬する

ことを知つてから、すみ子はよく同性の噂をするようになった。彼女は小学校の頃から、一種の性衝動を覚えていたらしくたしかに多情と云つてもよかつた。そして、この頃は同じ洋裁学校に通っている、宮辺さんと云う女性の、ノロケを平気で口にするのだ。

「このスカート、ナイスでしょう？ 宮辺さんと、お揃いに作つたのよ」

「畜生！」

私は唸りながら、彼女に飛びついてゆく「なにをするのよ！ このスカートにさわらないでよ！」

私は荒れ狂つて、自分でも前後の見境いがつかなくなる。彼女の両手をねじり上げて革バンドで縛つてから、その派手なウールのスカートを剥いでしまう。

赤いスカートの色が、ますます私を挑発するようだった。ピシッと両手でひき裂いた。口と両手を使つて、ズタズタに寸断する。すみ子のゆがんだ顔が、やがて擲擧するような、小癪な表情になると、私はそれをひき裂くだけでは、飽き足らなくなるのだ。

部屋の中に七輪を運んで来て、火をつけ



た。煙にむせながら、彼女の眼の前で切断されたスカートを燃やしてしまうのだ。煙が一杯立ちこめた部屋の中で、二人は二匹の蛇のように、光る瞳をからませ合った。すみ子の躰には、ヘアピンや錐で突いた跡が無数に残っていた。ふつくり盛り上った乳房や、ムツチリしたヒップの曲線に、私は何故か激しい愛憎を二つながら感じて

いたから――。

すみ子はこうして週に二回、私との不思議な関係をつづけながら、相変らず多情に、他の男女の友達との交渉を絶たなかった。それは或は、私の嫉妬を煽り立てるための手段の一つだったかもしれないけれど――。

だから、毎日のように退社時間が来ると、私はすみ子の跡を追って街に出る。彼女には必ず連れがある。私は彼等の食事も映画も、辛棒強く待った。待つことに奇妙なスリルが、あるのだ。

すみ子が洋裁の夜間部に通う時は、学校の横の暗い道に幾時間でも立っている。時には窓の外に忍びよって、教室の中を覗くこともあった。

授業が終つて、若い女たちがゾロゾロ出てくる時、その中で彼女が派手な笑顔をたてたりする時、私はたまらない嫉妬に震えた。それでも、私は絶対に彼女の前には姿を現わさ

ない。ただ影のように、執拗に彼女の後からついてゆくのだ。

夏でもストラックスを穿き、男持ちのような袍を抱え、前こごみの姿勢で、私は夜毎にすみ子の跡を尾行する。彼女が自宅に帰るまで、片時もその姿から瞳を放さない。

愛 読 者 通 信

私は廿一歳身長一メートル五六釐体重五十五瓩ソドミア（ウルニング）の者です。年少の頃から苦惱し続け、日々が、何の楽しみもなく、今迄に到り、心から同性を求めて居りました。

二、三日間、借本屋にて、貴誌が目止り悩みを同じくする人の居られる事を知り、大変嬉しく、心強く思いました。

自分から申すのも変ですが、私の性格は世間からは、真面目な、おとなしい人です。それ故に、私の悩みも大になり、ソドミアの経験皆無です。

私が心より求める人は、歳三十五才以上の方で、野性的の方の交際を切望して居ります。御連絡御待ち致し居ります。

熊本（大津生）

悦虐の泥沼

喜多玲子

(縛り繪放浪・第三部)

★……「安心して泣ける相手は、あなたではない——」心の中に、そう絶叫す……★
 ★……ることだけが私の唯一の反抗かも知れなかつた。これから私の體を縛る細長い紅紐が、蛇……★
 ★……のように網膜の隅にうつる……★



あの夜、多賀ちゃんとの様なことをしな
 なくても彼女は発病していたかもしれない。
 だから盲腸炎になつたのは私のせいじやな

る。
 「あのこが退院するまでに、費用を何とかし
 なければねえ……」

い、と云えば云えるだろうけれど、私の多賀ちゃんに対する愛情は「悦虐の遊戯」を通じて考えて見ても、そんなことで割り切つてしまへるほどのものではなかつたし、他の人がどう考えようとも、私はあの夜のことに對して責任を感じていた。しかし、その責任を型の上で果す爲には、今の私はあまりにも貧乏なのだ。第一此の部屋の一部屋代さえ二ヶ月たまつてい

昨夜もおばさんが、そう云つてそれとなく部屋代の請求をしたのが済まないと思へて私の氣持を、より以上痛いほど突き刺すのだつた。

多賀ちゃんの手術の経過は順調で、一週間もすれば抜糸して退院出来ると云う話だつたけれど、その退院の日が近くなるにつれて、私は追いつめられる様な、心のあせりを感じる。どうにかしなければならぬと思う氣持とは反對に、いくら走り廻つてもお金は出来そうもなかつた。

清水坂の京人形の問屋や、五條の扇子問屋では、しがたい内職かせぎのような女の面描きに、前借りなどとてもさせてはくれなかつたし、第一此の節仕事そのものがあまりなか

つた。三百円や五百円なら何とかなつたけれど、多賀ちゃんの入院費用は少なくとも八千円は必要なのだつた。そのような金額では前借りなど思いもよらない。

「お互いが、善意と云うものを失わなければ世の中はどうか過して行けるものさ」

死んだ夫は、こんなことをいつも自分自身に聞かせる様に言つて絵を描いていたけれどそんな割切り方をして世の中を暮して来た夫の位置が、今になつてうらやましく思へたりするのも、生活力のない、置き去りにされた女のひがみだつたろうか。

質屋になけなしの着物を持つて行くと云うおばさんを押しとどめ、心を決めた私は、遠藤さんに手紙を書いた。

無心をする、と云つた様な気持ではなく、正当に借りられるものならば、そうしたいとも考へたものの、私の持つている質草は、自分自身のからだだけしかないのである。決してそれは、からだを売ると云うつもりではなかつたけれど、しかしその先、どのようなことになつてゆくのか、私には考へることすら苦しかつた。

——これが、質草です——

手紙の末尾にこう書いて封をし、この間多賀ちゃんを縛つた紅色の腰紐を、その手紙と共に風呂敷に包んだ。

遠藤さんには、その質草の意味が判つて貰えるだろうと思つたし、その紅色の紐が再び私のからだに触れる時には、私自身がどのような姿でいるのか、と云うことも私にはよく判つていた。

私の手紙をおばさんから受け取つた遠藤さんが、どのような気持でそれを読んだかは、私には判らないけれど、おばさんが持つて歸つて来たものは、お金ではなくて、メモ用紙に走り書きをした手紙であつた。

——今夜、八時頃に三條の川清と云う料理屋に來られたし。その節、おのそみのものはお渡しします。——

毛筆で書かれたその文学は、何度も読み返さなければ判らないほど、急いで書かれてあつた。私はふと、蟹の様な顔をした質屋の主婦のことを思い出して、自分は何か非常に悪いことをしているのではないだろうかと思ふ。反省に似た気持が胸の中で動き出していることに気がつき始めた。

私の病的な性癖の爲に、多賀ちゃんが入院

するようになったてしまつたのだと考え、そしてその責を果す爲に、私はまた新しい渦の中に巻き込まれて行くのではないだろうか。そんなことを考えつつ心の中に何かわだかまるものを残しながらそれでも私は今夜になれば何とか此の急場がしのげるかも知れないと云う、ほつとした気持で机の前に坐り、ぼんやり窓の外をながめていた。

「あんた、多賀子のことを心配して下さるのは有難いけれど、そのことで遠藤さんにお金の無心ゆうてよろしいんかなア」

いつの間にか階下から上つて来たおばさんが、心配そうな顔をして敷居際にペツタリと腰をおとして私に話しかける。

「さあ、遠藤さんは訳の判つた人だと思ふのだけれど」

「でもねえ。今だから云うけれど、近所の噂はあんまり良くないんですよ、何でも組合の女事務員と何かあつたとか、無かつたとかで二ヶ月程前に奥さんとたいへんもめた事があるそうですよ」

「……………」

「そりやあ、常はそんなことはない立派な人なのでしようけれども、お酒が少し入ると人

が変るつて云いますからね。だから奥さんがとてもやきもちを焼くんだそうで、この部屋に訪ねて来るんだつて、こつそり内緒なんですつてよ」

おばさんにそう聞くと、なるほどと思い当るふしがないでもなかつたけれど、私の善意はそれを全面的に信じる方向には向かなかつた。第一近所の噂だけに頼れば、私など、どんなことを云われているか知れたものではない。

「近所の噂など、全部あてにならないでしよ人の口なんて云うものは、悪くは云うけれど良いことはあまり云わないものだから、男の人つて女が傍でチャホヤすれば、手ぐらい握りたい気になるものなんでしょう」

こんなことを云つて、人のいゝお婆さんの



話を否定するのも、今まで知らなかつた遠藤さんの半面を聞かされて私自身がこれ以上不安になつてしまつたら、川清で逢うことは断つてしまふにしても、追いつめられたお金の出所がなかつた。私は不安な気持で川清に行くのはいやだつたし、遠藤さんを私の理解者として、もつと善意に見ていきたくつたのかも知れない。

「いえ、それどころじゃないですよ。あたしは人の陰口など云うのはいやなんですけれど、あなたが多賀子のことで骨折つて下さつているのであたしも親身になつて云つてゐんですよ、そんなことは万が一にもあるまいと思ひますけれどね、若しあなたの身に変なことが起きたら、あたしだつていやだから……あたしも主人に早く死なれてから多賀子を抱えて永い間

いろいろの苦勞をして来ましたが、来ましからねえ、女一人で生きて行くもろさと云うも

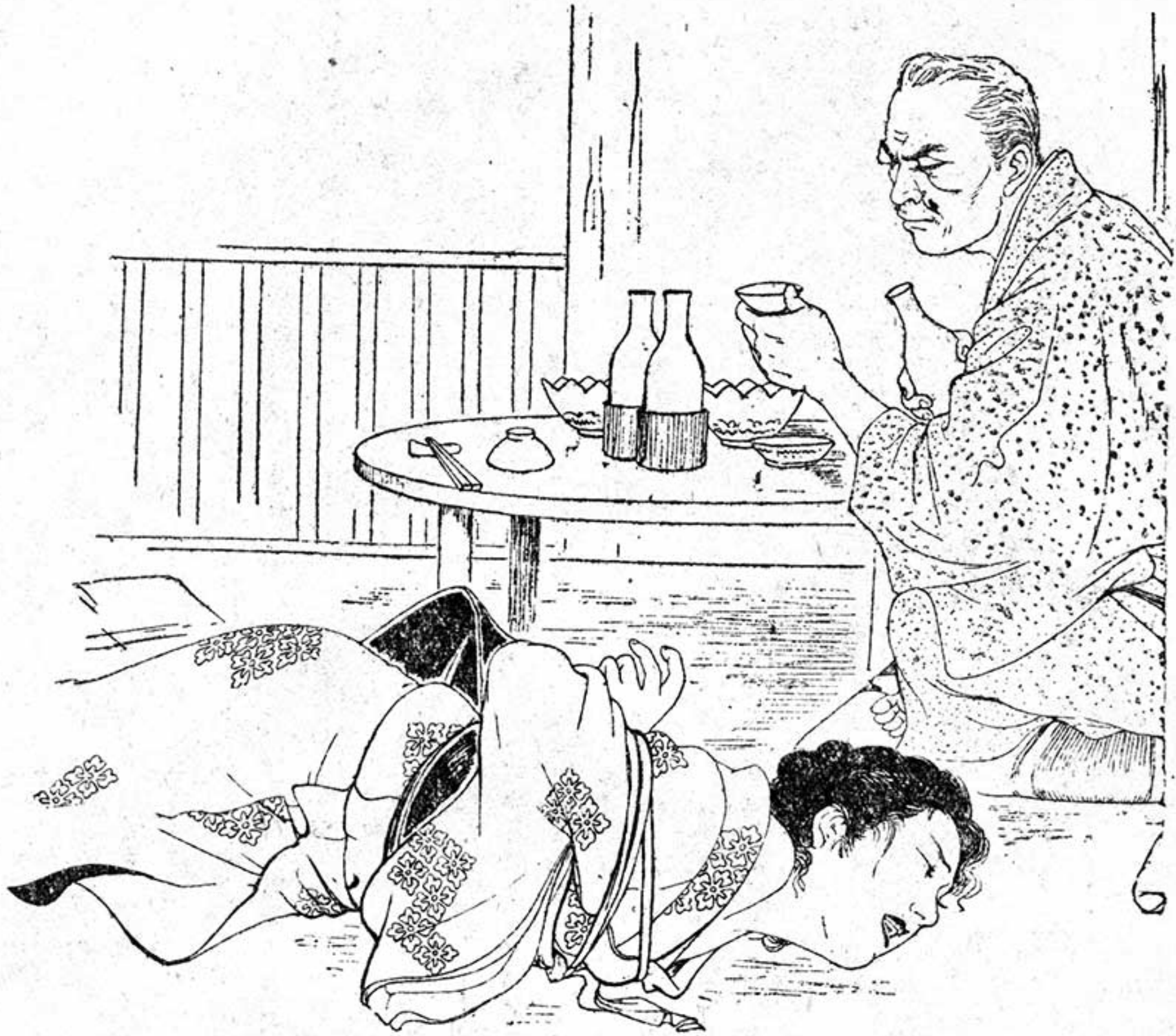
のが身にしみて別るつもりなんですよ」

そして、遠藤さんについては、こんな事実がある、これはその女の女の人から直接聞いた話だから決して間違いなんかありません、と前置きをして、遠藤質店を一年程前にひまを取つた女中の話をして呉れたのである。

「何でもあなた、寒中にね、裏の土蔵の中で素つ裸にされて縛られたと云うんですよ」

私はドキンとして声が出なかつた。あれだけのコレクションを持つてゐる遠藤さんのことだから、ありそうな話ではあつたけれど、それほどの実行派なのだろうか。

「入質品の時計を盗んだと云うのが、その理由なんだそうですけど、その女中さんはそんなことをする人じゃありません。可愛い顔をした娘さんだつたけれど可哀相に、どんなに羞しい辛い思いをしただらうねえ、若い身空で裸にされて荒縄で後手に縛られてねえ。何処にかくした、云え、白状しろなんて奥さんの居ない留守に一晚中責められたそうですよ。あの人は自分の恥になることだからそれ以上は言わなかつたけれどどんないやらしいことをされたかあたしには想像がつかますよ」



「……」
 「そんなこと、それ
 つ切り女中
 をよしてし
 まつたと云
 うのですが
 ねえ。あの
 人の話だと
 あすこの蔵
 の中の長持
 には女の腰
 のものばか
 りがぎつし
 り入ってい
 るのがある
 そうです、
 まさか、腰
 巻や何かを
 質屋に持つ
 て行く人も
 ないでしょ
 うにねえ」
 あつ、と

私は思わず声に出すところをやつと押し止めた。遠藤さんが以前よく此の部屋に訪ねて来た時に、グループの人達の居る前で冗談めかしてこんなことを云つたことがあつた。
 「玲子さんの腰巻なら、儂は千円で質にとるよ」

そしてそれが、二度、三度と冗談まじりに云う度に、二千円になり二千五百円にまでなつた。私は今おばさんから話を聞くまで、遠藤さんは質屋の主人らしい色気のある冗談をいつて皆を笑わせているのだとばかり思つていたけれど、あの人にはフェチズムもあるのだろうか。

紅色の腰紐を遠藤さんに渡したことを私は心の片隅で後悔しはじめていた。

しかし質屋の主人を敬遠してしまえば、多賀ちゃんの人院費はどうなるのだろうか、おばさんに二ヶ月分のとどこおつた部屋代だけどうにか渡して多賀ちゃんのことなど知らぬ顔をして突き離してしまうことが、私には出来るだろうか？ 勿論、私にはそれは出来なかつた。今後も私の情熱が彼女を欲しているそのまま離れてしまうにはあまりにも惜しい娘だつたし、貧乏な私にはモデルを傭うこと

も出来ないのに多賀ちゃんなら喜んで私の無理を聞いてくれるのである。

私は決して、遠藤さんの二号の様な立場にはなりたくない。ただあの人が私を縛つて見たいと云うことのみを交換条件にして、お金が借れるならば多賀ちゃんをそのお金でいつまでも私のものにしておきたかつたのである。しかし私のそんな気持とは別に、眼に見えない空間の齒車は、私の帯の端に噛みつき着物の袖をとらえ、ジリジリと泥沼の中に引きずり込もうとしていた。

その夜。川清の裏塀にそつた離れで、遠藤さんと私とは向いあつていた。

「まあええやないか。話はよう判つてますがな、堅いこと言わんと一杯飲んでからにしましょうや」

脂切つた額を四五本の銚子の酒でテラテラと光らせながら、床柱を背にしてあぐらを組む遠藤さんの姿が、その時の私の眼には救いの神が悪魔を背負つて来た様に感じられて、全身の神経が異様なほど敏感になつて来るのをどうすることも出来なかつた。

「フーン。そうすると、あそこの娘があんたのお人形やつたと云う訳ですな。そうか、そ

うか。そんならよろしいのやが、儂はなア、あんたが彫刻家の北川さんあたりと仲がええのと違ふかと思つて、ずいぶんやきもきしましたで、えへへへ」

「……………」

「儂に見れば、あの娘が結びの神や、ホラ約束のものはお渡しますぜ」

「………本當に済みません、しばらくお借りします……………」

「フツフツ。水くさい挨拶は抜きにした方がよろしいわ、けどなア、質草やと云うて紅い紐を包んで来たあんたの頭のよさには、ギョッとしましたで、あれは儂とあんただけにか判らん謎やからなあ。フツフツ」

酒が云わせる遠慮のない言葉は、眼に見えない蜘蛛の糸を空間に張りめぐらして、私のからだをからめようとする。我から作つたこの罠の中に私は身もだえているのかも知れなかつた。蜘蛛の糸を拂いのけようとする術も理由も其の場の私には失われてしまつていたのであつた、私の心の眼には運命の齒車が、ギリギリと音を立てて迫つて来るのが見えていただけである。

齒車は私の手を握つて来た。

ヌメヌメとした遠藤さんの脂手は、ゾツとするほどの生温かさを私の手首に伝え、総身が鳥膚立つて来るのが感じられ、次の瞬間には心臓が耳の傍で鳴り出した様な動悸の律動を私は聞いた。

「ふツふツふ。あんたがいつも描いている絵の通りに、これから儂がしてあげるからな。

ここは誰も来やせん、安心して泣なさい」

安心して泣けと云う此の皮肉な言葉は、私の耳を刺した。女に若し幸福があるとしたらそれは安心して泣ける時を持つことなのではないだろうか。苦痛に泣くのもなければ、生活苦に泣くでもない、ひたすらに信じ切つた人の床に身をゆだねて泣く夜の涙なのだ。

——安心して泣ける相手は、あなたではない、あなたではない——

心の中に、そう絶叫することだけが私の唯一の反抗かも知れなかつた。

細長い紅色の蛇が網膜の隅にうつる。

「これが、あんたのおのぞみじやろ」

後手に捻じ上げられた両手が、今にも音を立てて折れるのではないかと思つばかりに高々と肩のあたりにまでつり上げられてゆく

を感じながら、私は眼を閉じてじつと歯を噛みしめている。「質草」が手首に十字にからみついて、それがどのような型で縛られているのかも、閉じたまぶたの中に、はつきりと私は見ることが出来た。

突き出た乳首の先が下着に触れて、ジンジンと鳴っているのではないかと思われるほど痺れていたし、身動き一つしても一層緊くしまつて来る様な紐の感触は、私の心の反抗とは全然別に、からだだけを違つた方向に持つて行こうとしている。

「……ああ……」

口を割つて、無理矢理に注ぎ込まれる酒にむせながら、私の肉体は悦虐の泥沼の中に蒼白い燐光を放つて、メラメラと燃え上ろうとしているのだ。

——いけない。いけない。——

たつた一つの小さな理性の歯車だけが、逆流しようとする血潮をささえて戦っているのだけれど、それがいつまで続くことやら。

脂っこい手が、身体のあらゆる部分に触れる度に私は呻いた。拒否する力を持たない女の全身を撫でまはす男の手は、これほど執拗なものなのか。それは着物の上からではあ

つたけれど、そのまま何枚もの布を通して私の素肌に紫色のあざとなつて残るかもしれない。

「……あんたは、こうして縛られて転がされて眉を寄せて呻いていると、一層別嬪に見えるから不思議やな。ヘッヘッへ、どうや。同じことなら、僕の好きな長襦袢一枚になつて縛られてみんな」

「……………」

「いやか？」

「いやなら、こうするぜ」

しつぽく台の上にあつた割箸を取り上げた質屋の主人は、私の着物の八ツ口の間から腋の下にその割箸を差し込むと、グリグリと擦り廻した。

「あッ。あッ」

それは痛みではない。しかし、その突き上げるような擦つたさは堪えようがないのだ。

私は身をもんで、意地悪い責め苦から逃れようとする、だが必死の努力もただ畳の上に自分自身のからだを擦り付けるだけでしかなかった。

私の腰がしつぽく台の脚に触れたのであるうか銚子がカタリと倒れて、生温い酒が、腰

のあたりをしとどに濡らして肌にしみとおつていった。

「どうや、着物を脱がせてあげよか」

「……そ、そんな。そんな……」

「猿轡が要るかもしれんな」

立ち上つた質屋の主人は次の間の襖を開けて手拭を持つて来るのだ。

「エへへ。丸裸にするかもしれんで……」

「……いやです、いやいやッ……」

開られた襖の向うには夜の用意がととのえられているのを私はみた。

(未完)

愛 読 者 通 信

二号を手にして、真先に玲子先生の面を開き、ハツと息をのんで了ひました。「妖蟲図」です。豊かな肉体に厳しくくい込んだ縄、白い肌を這いまわる妖蟲、逃がれ様と必死にもかく女の苦悶にゆがむ顔、顔、刃をあてたなら、ぴつと音を立て、血をほとばしり出しそうな緊張した肌、玲子先生の画は私の生き甲斐です。この画に魅せられて瘋れる様な陶醉の一時こそ私のすべてです。(東京T・M)

刑事部屋の拷問

峻烈な取調べは朝の九時から深夜の二時に及んだ。二月の寒い日であつたが、川本は全身すっかり油汗に濡れて、差入れの新しい手拭が、汗を拭きとるのと掌で固く握りしめるのとでスタスタになつた……



三 谷 祥 介

畫 大 橋 彌 生

★
ひところ文壇の寵児として騒がれた龍膽寺雄が、とつぜん私を訪ねてきて、特高から呼び出しをうけたが、部屋がわかんない

——案内してくれと言うのであつた。

私は警視庁の巡査を拜命して、犯罪の手口を記録する係に勤務していたが、もともと蒼白き文学青年だつたので、龍膽寺とは前から顔見知りの間柄だつた。

そのころ特高の調室は三階の秘密な場所になつてゐた。龍膽寺は勝手がわからず、まごまごして庁内を探し歩いているうち、ふと私のことを思い出したものである。

「あなたは共産党と交渉があつたんですか」と私は訊いた。

「いや。思ひあたることは何もない」と龍膽寺は答えた。

ともかく案内してやらねばならない。私は外事課の横手から薄暗い廊下を通りぬけて特高の調室をノックした。ちょうど晝飯どきだつたので、特高の連中は思い思いに食いものを出し、十四五人が談笑しながら食事をしてゐた。

真中の机には井を空にしたばかりの係長が楊枝を使つて茶を飲んでゐた。そのすぐ前の机には鈴木という刑事が、若い女を椅子に腰かけさせ、大声に嘔鳴つて取調べているところであつた。

女は幾日も留め置かれてゐると見え、横顔にはムクミが出来ており、髪は乱れて櫛のあとがなかった。刑事に細紐を取りのぞかれた女の和服姿は、見る影がない。

龍膽寺は入口で居竦んでしまつた。

鈴木刑事は椅子を突きのけて立ちあがり、

「あなたは参考人として十時に出頭するよう呼出してあつたが、遅いじゃないか」と言つた。

「……………」

龍膽寺は部屋の光景をひと目みたときから蒼くなつて、血の氣の引いた顔は、怒りのためにひきつツていた。

「こらッ！ あの人物をよく見給え。相違ないか」

こう言つて鈴木刑事はいきなり女の耳朶を掴むと、ぐツと引いて女の顔をねじ曲た。

するとその顔がじいツと龍膽寺を見て、それから私を見た。

女の耳朶は裂けていた。血の滴がボタリボタリと肩へ落ちていた。

★

私はあらゆる犯罪の現場を踏んで、二十年のあいだ警視庁に勤務したものであるが、こんな怖ろしい女の眼を見たことがない。瞋恚をこめたマナコは、私の五体に喰い入つて今日にいたるも忘れることが出来ないほどである。

龍膽寺は夕方まで留め置かれて、鈴木刑事の取調べをうけたが、この女が共産黨員であることは夢にも知らず、文学少女が都会にあこがれて上京し、生活に困つて無心にくたものと思ひこみ、同情して金を与えた事情が明らかになつた。ようやくシンパの容疑が晴れて解放された。

私は龍膽寺を案じて待つていたが、そこへ彼は憤然として現われた。

「ひどい拷問だ。いつたいあんなことがゆるされることかい。たと

え彼女がなんであろうと、僕は思想を乗りこえて人道上の問題だと思ふ。だいたい耳朶から血を滴らして取調べをうけている女を眺め、平気で飯を食つていゝという人間の氣持がわからない。警察官があんな連中の寄り集りかと思ふと、僕はまったく情けなくなつた。あれはキミ人間じゃないよ。そういうヤツ等と一緒に、警視庁の屋根の下で、君が飯を食つていゝことを考えると、君の精神状態まで疑いたくなる」といい。

「たつたイマ警視庁をやめて身をひくか、生命に賭て拷問廃止の運動に乗り出さない限り、僕は君と交際が出来なくなつた」と言うのであつた。

私は——しかし、

「あの場所は戦場だからね。天皇陛下の警察官と共産黨員が戦つて、血を流しているんだ。普通一般の大衆には関係のないところだよ」と答えた。

★

特高の刑事が共産黨員をつかまえて、言語に絶するむごたらしい拷問をやつたように伝えられているが、徳川時代の切支丹拷問秘史に出てくるような、エビ責め、石子責め、釣責め等の拷問を、上役人が白洲でやつたのとはワケが違う。

そのころの共産黨員はいかなることがあつても決して自白しなかつた。彼等は現在のように職業化した共産黨員ではなく、どれもこれも殉教者のなプライドを持つ精神であつた。しかし特高の刑事は食わんがための職業で、どちらかと言えば『憎み』がたりない。彼等は思想犯人をよほど持て余した場合、深夜に留置場から連れ出し

て、水道の栓をひねつてホースで水をかけるとか、指の間へ筆の軸を挟んで強く握りしめるとか、ビンタへメリケンを喰わせるくらいのことで、生身を責める手段としては、まだまだ罪の軽い方だと申さねばならぬ。特高の刑事がサディズムだつたと言うには、だいぶん距離があるようだ。

共産党員を生命がけで追ツかけたり、つかまえてきて自白させたりするには、まずその仕事に適当な人物を養成しなくてはならぬ。だが二年も三年もその仕事をつづけて、地獄の青鬼赤鬼となる人間は、この世の中にまことにすくないものである。そこで特高の刑事は特別に手当をよくし、常に天皇陛下の警察官であることを言い含めて教育した。

つまり日本の国家を背負つて立つ勤皇の志士としてその役割を果たさねばならぬという——いわゆる国粹思想をつぎこんだ。けれども、彼等の中には、マルクスの資本論やエンゲルスの著書をひもどく者がいて、「オレ達も所詮は勤労階級だ。甘い汁を吸う資本家の手先きに使われている。いつたいこれでいいのかしら？」ふとこんな懷疑心をおこすようなことがあるところ言う連中にはすでに生神様の洗礼をうけた幹部が、あらかじめ警視總監に注意報告をして、毎日なんと言ふことなく宮城に向つて遙拜することを強制した。いずれにしても根拠のある理論を頭に入れている連中ではない。

——理窟ぬきで信仰で固める方が手ツ取り早かつた。

すこしばかり学があると言われ、仲間から敬遠されている優秀な刑事でも、天皇陛下と言う生神様を持ち出されるとコロリとまいつて、いつの間にか勤皇の志士に変貌するのであつた。かくして立派に特高刑事として出来あがつたのが、宮本のハウスキーパーとなつ

て活躍した中川友子に拷問を加え、龍膽寺にシンパ関係ありとして取調べをやつた鈴木刑事たちの姿であつた。

いま私の記憶によみがえるのは、斎藤という特高の刑事だが、彼は女の共産党員を取調べることが得意で、この刑事にかかると、たがい四五日くらいで、その女は陰毛が無くなる——彼は陰毛を片ツ端から抜き取りながら、じつくり自白をせまるのであつた。斎藤なんかは実に立派に天皇陛下の警察官として教育され、指導と感化のよろしきを得た特高の刑事だつたと申さねばならぬ。

★

民主警察になつた今日では、刑事も巡査も必ずピストルを携帯している。しかし特高警察のはなやかなりしころの警察官はピストルを持つことは許されなかつた。特高の刑事が防弾チョッキを着用するようになったのは、当時満洲事変や上海事件に引きつづいて、血盟団の暗殺事件や五・一五事件が勃発し、日本の内外は緊迫した情勢となつた。この非常時を機として、彼等は共産主義の革命を敢行しようとしたのだ。その具体的な準備として、大量の武器弾薬の蒐集と、莫大な資金を調達しなければならなくなり、これがためあらゆる手段に訴えたが、ついに昭和七年十月六日『大森の銀行ギャング事件』となつて現われた。

共産党員は十月六日の午後四時ごろ、大森区入新井町の川崎第百銀行大森支店の裏口に自動車を乗りつけ、手に手にピストルを持って行員を威嚇しながら、大金を奪つて逃走したのであつた。これよりさき五月二十六日の熱海事件にも、特高の刑事は多くの犠牲者を出し、傷つき仆れるものがあつたので、警視庁は内務大臣に上申

し、防弾チョッキ五十組の交付を受けた。

「これさえあれば大丈夫だ」と特高の刑事は、鬼が金棒をもらつたように悦こんだものである。

意気の太いに旺んになった特高の刑事は、大森の銀行ギャング事件につき、血のにじむような苦心の捜査をつづけた。かくしてその翌年の十一月、ようやく一味をことごとく検挙したのであるが、その中に意外にも、もと東京市長で法学博士の肩書ある井上密氏の長

女礼子(22)と、河上肇博士の二女よし子(22)の女闘士がいた。彼女たちは二挺のピストルを持つて、王子区の上十條にある松下莊をアジトとしてひそんでいた。宮迫特高主任の指揮する刑事部隊は、松下莊を包囲して、一人の犠牲者も出さず逮捕した。もとより二人の女性は十連発のピストルを必死になつて発砲したから、特高の刑事が防弾チョッキを身につけていなかったらヒドイ目に遭うところだつた。

★

特高の刑事にピストルを浴せて有名になつた小宮英子 は、長野県南佐久郡畑八村の豪農の娘で、稀れに見る美貌の持主であつた。

彼女は実兄の新一が東大に在学中『新人会』に属していたことから、党の重要なポストとして活躍中の田中清玄と知り合う仲になり、それからのちは女闘士として運動することになったが、和歌ノ浦の二里ヶ浜で拡大中央委員会の招集があつたとき、英子は田中清玄と共に二里ヶ浜へ出向いた。だいたいこの清玄という男は、横浜ドックの細胞として活躍中、看視にきていた町田刑事を唐手術であて落し、刑事はこのため殉職したので、特高の刑事は二里ヶ浜のアジトを突き止めると、同僚の復讐をするときがきたと言つて躍如としてよろこんだ。一月の十二日——特高刑事の一隊が二里ヶ浜へ駆けつけて拂曉の大捕物に立ち向うと、ピストルを乱射して特高の決死隊に抵抗したのは宮川英子で



あつた。彼女は両方の手首にピストルを紐で結びつけ、最後まで刑事を近づけなかつた女闘士である。のち田中清玄は逮捕されて豊多摩刑務所に收容され、彼女もまた囚れの身となつて宮津の刑務所に東西相別れて、下獄したが、この二人は獄中から結婚の手續を申し出た。

このように共産党員の意志は鋼鉄のごときものだつた。彼等を逮捕に向う特高の刑事も、次第に精神がしつかりしてきて、天皇陛下のために生命をささげた。だから彼ら刑事はすすんで血を流して思想のために戦い、取調べにあたつては残酷な拷問を繰りかえしたが、実はときの政府の命により、資本家の手先となつて、共産党員と闘争する結果になつた。

私がこの闘争を残念に思うのは、共産党員が非合法下におかれた立場であつたと言うことだ。

★

私は長いあいだ犯罪手口の記録をしていた関係上、殺人強盗をはじめとし、種々雑多な犯罪を見詰めてきたが、日本人の犯罪は、スリと詐欺を除くほか、すこしも進歩していないようである。

犯人が進歩しないので刑事も進歩しない——つまりところは刑事ばかり苦しい勉強をしたところで役立てるときがないから無駄であつた。またその必要がない。彼ら刑事の仕事ぶりは十年一日のごとくである。明治四年の十月に警視庁が創設され、今や八十五年になろうとしているが、当時の探偵人と異なるところは、探偵係が捜査係となり、麻製の捕縄が金属製の手錠になつたこと、十手持つ手に小型のピストルがのぞいているくらいのものだ。

戦後は米國風に人権が尊重されて、百人の犯罪人を見逃しても、一人の冤罪者をつくつてはいけないう方針である。まことに結構な趣旨だと申さねばならぬが、これに音をあげたのはわが国の刑事どもだ。日本全国十一万二千人の警察官は、伝家の宝刀だつた拷問が禁止され、刑事は容疑者に対して、いやしくも誘導するような職務尋問は一切まかりならぬと言ふことになつた。ところがこの條文が、スリや詐欺を働く人間にとつて、便利重宝この上もないと言ふ結果になつたから皮肉である。

だいたい刑事の仕事は、その大部分が証拠がためをすることだが、これを彼ら刑事は犯人の自由にもとずいてした。

「あなたのクニ刑事さん、たいへん拙い。犯人のジハク信じてはいけません。人間のコトバ完全なことナシもない」と、警察文化のはるかにすぐれたアメリカさんに注意されたが、岡ッ引き根性の刑事たちにはどうもピンとこない。

だいいち自白なき犯人の証拠がためをするなんて、そんなシチ面倒なことは、刑事稼業をするほどの人間にとつてお齒に合わないものであつた。

終戦後の大事件だと言われた下山国鉄總裁の死体轢断についても、法医学の大家が飛び出してきて、

「死体の生活現象と言ふのは、まだ生きてゐる動物体に傷をつけること、必ず現われる傷口の開くこと、皮下組織に出血すること、腫ることなどをまとめていう言葉でありまして……」などとやられると、下山の死体が自殺であろうと他殺であろうと、そんなことはどうでもよくなくなる。

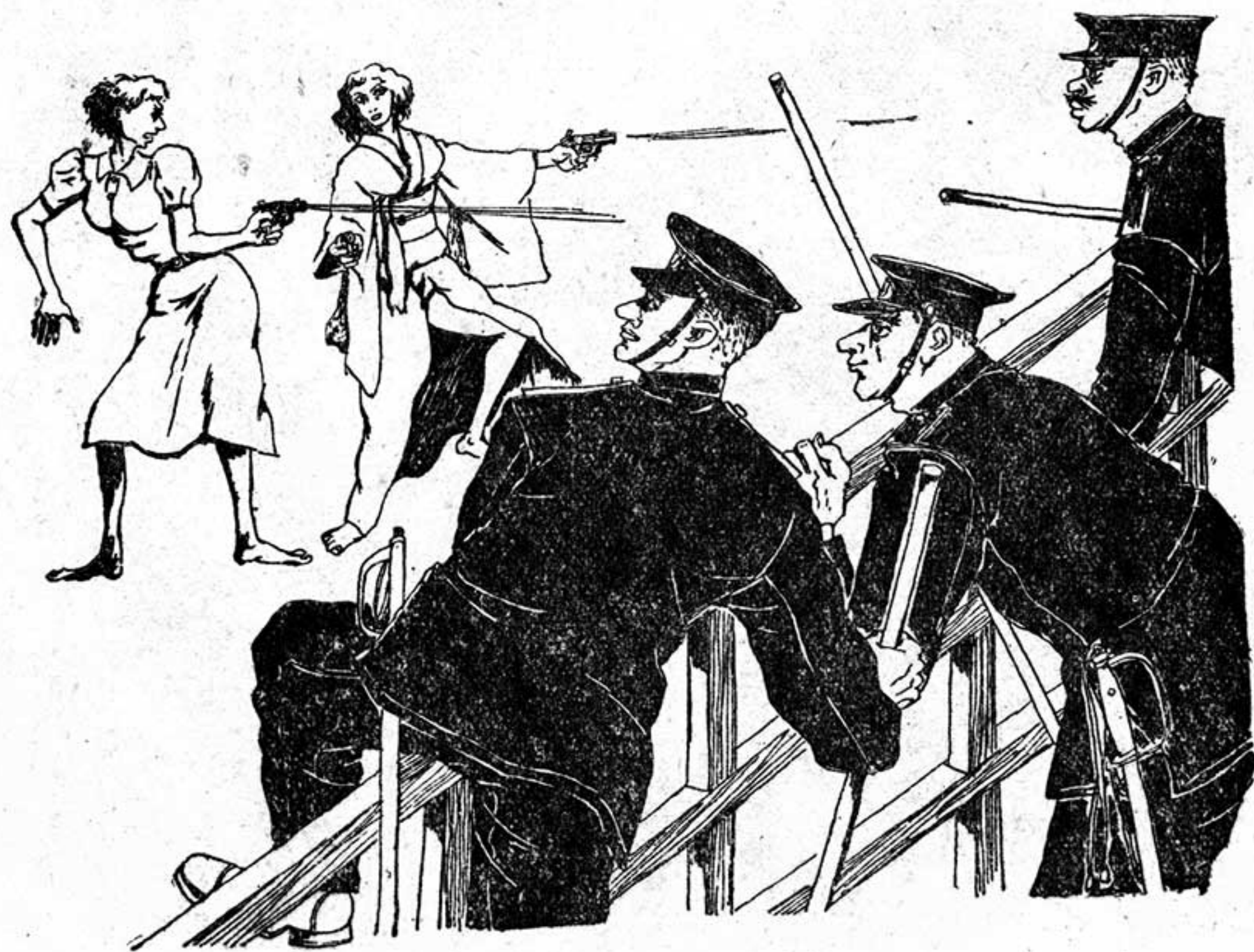
アメリカさんがなんと云つても、法医学がどうであつても、刑事

は永年の経験でカンをいかして犯人を捜査しているのだ——と言うのがいまだにぬけ切れない探偵人の気質というものであつた。だからこそなにをさておいても拷問を禁止されたのは刑事の痛手で、それはあたかもこのたびの戦争に狩り出され、両手両足をもぎ取られたり両眼を失明したり、陰囊を砲弾でうち抜かれ死にもせず戻つてきた兵隊以上の憂鬱である。彼等が天皇陛下さえシツカリしてにくれたら、こんなことにはならなかつたと歎息するのも無理からぬことだ。

★

なぜ刑事は拷問を好むだろう。同じ人間と生まれながら、いかに犯人とは言え、眼にあまる苦痛を加えて、得意になつてホシを稼ぐ——まづたく畜生にも劣る人間だと批難する人がある。

私の知っている若い女性の中には、刑事だと聞いただけで蟲酸が走り、その日は食事がすすまないというのである。その女たちは刑事から毛蟲を連想し、毛蟲から執拗な蛇の眼を脳裡に描くそうである。だが刑事も人間の血が通っている。決しても、のずきなんかで拷問にかけるワケではない。それがたとえコソ泥でも、また強盗殺人の罪を侵した凶悪な犯人でも、いったん刑事が手にかけて、ものの罪を侵した凶悪な犯人でも、いつたん刑事が手にかけて、ものみごとに逮捕したときの悦びは、馬券を買った馬が大穴へきたとき以上である。捕つた犯人が刑事にとつていかに大切であるかと言うことは、彼等が安い月給の中から養口をはたいて、犯人の欲しがるものを自分の手で取り寄せ、惜気もなくご馳走することでもわかるであらう。しかしいくら情にほだされても、立場をかえて犯人の身になつて見ると、そんな安易な行爲にかかつて、うつかり自由が出



来ない。刑事に責められて切端つまると、たいてい出鱈目の供述をならべるものである。

それを百も承知の刑事は、犯人の自白にもとずき証拠がために歩くのだった。刑事がこれを繰りかえしているうちに、はじめは出鱈目の供述であつても、犯人はだんだん抜きさしならぬ破目に追いこまれる。だが、どうしても尻尾の掴めない犯人があるのだ。ヤマがあつて荷が解けない容疑者のことである。

それはつまり、刑事の職務尋問に対して犯人の答弁が上手であるとも言える。拷問はそんなとき爆発的な行爲となつて現われるのだつた。

刑事の眼は血走つて責めにかかるが、恐らく悔しさのあまり涙を流しているに相違ない。事情を知らないものが側で見ていると、まるで狂人の沙汰だが無理もない。

★

私は、大岡山の女優殺しの容疑者として検挙された川本好太郎の取調べに立会つたことがある。

古参刑事の伊東清作が、女優の写真をつきつけて、「どうだこれに見覚えがあるだろう」と睨みつけた。

川本はたちまち顔色が蒼白となり、齒の根が合わなくなつた。しかし自白はしない。矢継早に三人の刑事がかわるがわる尋問をつづけたが、川本は黙して答えない。取調べは朝の九時から深夜の二時に及んだ。二月の寒い日であつたが、川本は全身すつかり油汗に濡れて、差入れの新らしい手拭が、汗を拭きとるのと掌で固く握りしめるのとでズタズタになつた。

刑事は容疑者に指一本ふれるワケではないが、針をもつ言葉の綾で責め立てる。それはまつたく矢も楯もたまらず、身を寸断に斬りさいなまれる思いがした。言葉もまた刃物である。

私はその側で犯罪記録を書き取つていたが、刑事の尋問をときおり読みかえして、犯人は川本に相違がないと思つた。それをさらに裏づけたのは、終始一貫して刑事の尋問に答弁しなかつた川本は、午前二時になつて、

「申訳ありません」と言い、椅子と共に床の上へ仆れた。

その翌日の午後、再び川本を留置場から引き出して取調べると、歌劇女優中山愛子事山中ぬい(23)その夫凶案部員清水徹三(25)養女ふさ子(9)の三人を「私が殺しました」と自白した。

刑事は川本の自白にもとずいて身柄を送局したのであるが、この事件はたつた一つの物的証拠とてなく、予審は意外に手間取つた。川本は検事局に送られたまま市ヶ谷刑務所に收容されたが、すつたもんだで審理は遅々として進まず、ついに足かけ三年を経過した。そうして永い獄中生活のはてに、川本は肺炎をわずらつて未決囚のまま死亡したのであつた。ところが、それから五ヶ月目に、自動車運転手くずれの五味鉄雄が真犯人として現われたのである。

私はこの事件をとおして、拷問のおそろしさというものが、どんなものであるかと言うことを経験した。

(おわり)

×

×

×

×

×

×

そどみあ・てくはいく

衆道秘伝考

『阿奈遠加志』二四節には「素股」のことが見え、これは幼童の擬陰から出た名であると云つているし、「百すり」の名も獨悦の名ではなくて、やはり擬陰のことだと云う。…



千
明
克
巳

男色がその時代の社会風潮とどんな関係にあるかは兎も角として、第二次世界大戦の前、後を通じて、男女とも同性愛が盛んになり、獨悦行爲が流行し出したことは、実に世界的の傾向であるらしい。

我國に於ける戦後の男娼の出現も独り東京に限ったことではなく、大正年間の流行以後最大の現象と云われている。然し斯る男娼は必ずしも一般男色者のよき相手というのではなくて寧ろ一般の男色者は却つて商売人でない普通の同好者を求めているとも云われる。

従つて所謂昔の蔭間の事情などは斯うした人々にとつて興味がないかも知れない。けれども彼等の秘術技法などのことは、斯る人々にとつても結局の要求として、考えさせられるところがあるだろう。

それからもう一つ、男色のことは場合によつては風紀取締の対象となるが、それ自体は別に売春行爲というわけにもならない。然し社会的問題として此の事は猶考うべき多くのものを有つようである。

さて衆道秘伝と云えば、彼の滴屋貞友が書き残したという『弘法大師一卷之書』のこと

を思い出す。これには「兒様御手取ようの事」として互の意中を伝える合図のこと、「兒様兄様の事」「突き様の事」では御法のことがあり、その他「高野山服忌令」「駿門当悟」「奥の手の心得」等が記されているのである。姿態のことも艶本邊りには屢々描かれているが纏つた斯種の図は『女大楽寶開』にあるし、『好色旅枕』には女色姿態以外に男色の姿態名とその御法のことが掲げられている。我國男色書同文献は岩田準一氏遺稿の『後岩津々志』に詳しく、斯の類の男色関係は実に多い。「諸わけ」ものと称せられるのは、男女とも斯る情事のやりとり、懸引などについて書いたもので、細々とした房事上の注意とか、技法のことは之等の中に種々述べられているのである。

明暦三年刊の『催情記』も、若衆の日常の心得、仕かけ方、念者との情事などを記し、細かい點まで記された催情書である。御寝様の次第、風呂入の事、食物の事、よろづ御たしなみの事、口中の事、鼻紙の事等の項目も含まれ、どんな内容かも推察されるだろう。以下それ等のうちから衆道秘伝の事項を拾い出して、少しく説明をしてみたいと思う。『弘法大師一卷之書』中の「兒様御手取様の

事」には

一、さわりあるときは二才の弁指をとるなり。

一、兒の人指小指二つ取は、明日の晩も可参といふ心なり。

などあり、御手の取様というのは、手を握り合つて意中をそれとなく示す暗號なのである。外国では街頭でズボンのポケットに片手を入れてゐるのは男娼を示す「合図」であつたり、相手に誘いかける合図には鼻の下に二本指を当てるとか云つた定めがあつたと云うが、それに似たことが古く我國にも行われていたのである。こゝで兒と云うのは稚子、二才というのは念者の方で、鹿兒島の方言にてそう云つていたとか聞く。手を握るときに斯様にして指を握ることと話が分つたのである。人指は第二指、弁指は紅指、俗に茶指という第四指で、ペンユビとて紅指の訛言という。「しりつき様の事」とは御法のことであつてこゝには

一、揚雲雀といふ仕様あり、是は雲雀のくわげんをいふて、空に揚る如く自然と××××××××××。

一、きやたつ返しといふ仕様あり、是は兒の二足を我肩の上××××××××××

くなり。

など、其他「逆か落し」「夏ほり」「から込」等のことも記されている。

『阿奈遠加志』二四節には「素股」のことが見え、これは幼童の擬陰から出た名であるといつてゐるし、「百すり」の名も独悦の名ではなくてやはり擬陰のことだと云う。此の御法は遊女が好かぬ客に対して行ふ擬法であるばかりでなく、男色の場合にも行われたし、この方が御法の歴史からは古いことだつたかも知れない。念者のものゝ餘りにも見事な場合とか、やはり若衆が氣に染まぬ相手の場合にこれが用いられている。『男色山路の露』には或る大名に召された若衆が、ひそかにこれを用いたが、御大名は少しも氣付かず、大変な御満悦でその最中にすまた／＼と叫ばれたので、若衆はさては事露見かと、おゆるし下されませと云つた折柄、それは御用人の須摩田主計の名を呼んだものだつたとの滑稽な話が載つてゐる。

『野郎絹ぶるい』にも素股の話があり、ろでんのはさみように秘伝ありて、まことの×××より心よくおばへさすなり。云々。

など云つて位に、これにはなかく秘伝があるらしいが、上手なものに会うと全く擬陰と知れず却つて快美だとさえ云われる。素股ではないが『昨日波今日能物語』には

若衆を無理に押付けて、たしなませ、あとを××××××、中につびがあらう。

と云つた話がある。これは餘りに満足だつたので中味にはつびがあるのだらうと云つたとの滑稽話で、こゝでは男色と女色の優劣論となる。

『野郎絹ぶるい』の書は遊所の實際経験者にその道の奥儀を語らせた形式になつていただけに記されている事柄もなか／＼突込んで書かれていたのである。

当時御城下によつては売若衆の吟味殊の外きびしい所があり、そこではつゞらに入られて座敷へ通うこともあつた。その位故に座敷では酒

事もなく、三味線も用いず高い声を出すこと

さえ遠慮せねばならず、尙ら床ばかりの勤はさてもやるせない氣持と云つたり、そうした時分には若衆は自分に附添つて世話をやく若

い者と懇ろになつて、客の間にはその者のふところに入つて寝るとも云う。恰も遊女に於ける間夫と同じであり、若衆とて客がなくて宿にばかり居れば、客の顔がなつかしくなり、



あらぬ夢見て夜を明すこともあるとか。

若衆でも後家や御殿女中に買われることがあるが、これは又男の果報とて別の楽しみがある。そして女に対しては男の勤めを出来るばかりか、斯様な女は常日頃の男としての滞

る思いを充分満足させてくれるのはうれしいという。

然し若衆に対する之等の女の恋は、直きにさめ易いのが普通で、そのわけは若衆はその顔や姿に似げなく、牀の年たけたるが却つてうとましくなるものと云つてゐる。

『男色山路の露』は享保十六年頃の板たらうと云われているが、この書中に「かための口々、アムかあいや」と云つた文句があり、これは男色承諾の印としての親嘴であつて、男と男の場合にも斯うした接吻の行われていたことは、他の書物にもいくつも例がある。そして最高潮の折の愛情の表現とか、秘戯技巧としての親嘴ばかりでなく、斯様な普通の場合の親嘴も行われていたのであつた。

遊女などの女色の場合にも呂と探春とは所謂前戯としてよく行われるところなのであるけれども、男色に於てもこれと同様なことが行われ、そして呂を爲して情を愈々高める。中国の『笑府』閨風篇中には、これに関係をもつ面白い話が載つてゐる。つまり

かげまの男が嫁を貰うことになつて、その新婚の床で龍陽はいつもの習慣から、

愈々という時にくるりと後ろを向いて、その居所を差出した。そこで花嫁がそつと手を差し延べて見て驚きの声を發した「アレあなたには東西がないのね」と、すると龍陽が振り向いて花嫁の方を探り、「そういえばお前にもない」

と云つた話である。オウトツその位置を転ずれば斯様な方式も成り立つわけなのだが、此の実際的な場合には如何にも不都合な形であると共に、また極めて滑稽なものであつた。房事上に於ける親嘴の意義とか、価値とか云つたことには猶幾多の疑問と神祕とがあるが實際の祕戯には頗る重要な関係をもつてゐる。女色の場合に於てはこれによつて情熱を高めしめ、人勢を奮起させて遊女などでは早くわけを立て終せたいとするのであるが、男色の場合では却つて此の親嘴と探陽とによつて、相手を和わらげ事を運ぶに困難でないように行われるらしい。

次に「傾城などはじつとしてゐて、物云はず位取たるが見よげなり、野郎は女郎のごとくに、をしだまつてゐれば、何んとやら初心に見へて座敷めいりて氣の毒なり」と云い遊

女がつんとして口数きかぬは、それでも上品に重々しく見えてよいが、野郎は黙つていては座敷が淋しいと、細かいところにも氣をつかわねばならなかつた。

また『野郎絹ぶるい』には、「五人組声」を出すとか云つてゐるのがあり、野郎でも嬌声を使つたようである。川柳には、死ぬ／＼と云われて拔身引つこぬき、など最後の止めの一刀を刺さずに、生ま殺しにされることは女色の場合にも不甲斐なしと思われるようだが若衆にあつても、がつぱりと引上げられては「さてもいやな事」と云つてゐる。

も一つ『野郎絹ぶるい』に「あらふこともはや此あとは申まじ」との一節があり、野郎も仕舞つたあとは洗うらしい。そういうえば遊女は一つには避妊のため、また一つには衛生や技法としても「下湯」の法を用いてゐたのであり、その方法は常に指を小桶の湯に浸しつゝそれで搦精を行つたと云う。

若衆は前髪のところは頭巾をしていた。ところ

あかりでは頭巾をはなさず、真桑瓜、ゆづ味噌をくわず、雪隠所へはきわまつて

火をともしてゆく事也。

と云い、食い物にも注意が拂われていたのである。『弘法大師一卷之書』中にも様々な薬方や食事の注意があり、

塩魚を食ふたるときはうがひせずしてつばを附る事勿れ云々。

と云い、その他通和散やフノリの名も見えてゐる。川柳にも

筆太に大師流にて通和散

天神の裏門で売る通和散

などの句があり、通和散は男色用の祕薬で「ねりぎ」とも云つた。『枕文庫』には煉木の方として、

鶏卵。但し黄味を去る、十匁。葛粉十匁。

右にふのりを加へ、すこし濃くとき紙へ延べ、幾遍も／＼干ては付るなり、用いやう右の紙を噛み味へば滑おちて口中に満る也。

と云つてゐるのであり、通和散の処方ではふのり三錢、鶏卵五枚。製しやうは寒中ふのりをよくさらし、玉子の黄味を去り白身ばかり和して日に乾かし、唐金葉研にておろし、極細末となし度々ふるひぬきて、塗板につもりたるを最上とす。右少しづゝ口に含みつばにてとき用ゆ。

と記されている。これが「ねりぎ」と「通和散」の薬方であつて、結局は唾で解いて用いる。そしてこれは江戸の湯島天神下の伊勢七という薬店で製していたのを最上としたから、此の川柳が出来たらしい。文政の頃にもまだ湯島天神の近くには蔭間屋が存在したといふので、此所に通和散の店があつたこともうなづけようし、裏門と云つたのは男色にきかせたものだつた。

『旅枕五十三次』天龍川、一色の條には——
いつしきと云へる所あり、こゝは昔かげま屋ありし所にて云々——とて一色とは居所のいしきから起つた地名だと云い、また亀山、野尻の條にも昔衆道屋があつたと見えるが、薬方のことは女悦薬が多くて、男色の薬のことは記されていない。

『堪輿軍談』にも通和散の名が出て来て、津液をつけて行くことは何時の世から誰が教えたか知らないが実に便利なことだと云い——
通和散よしと雖もちよんの間のまに合はず、油よく堅きを入ると云へども——男が塗つては更に益ないことだと書かれている。

斯様に殊に所謂新皮のものなどは津液を用いることが男色書にも屢々見えている。昭和の初め頃かの破礼都々逸に

植木鉢買うて来ました何植えましょか、
新鉢にや椿（つばき）がよいわいな。
と云つた文句が流行した。これは女色の新鉢なのだが、此の御法はまた男色にも適用されていたわけだつた。

姿態のことも前に述べた通りで衆道にも種々ある。川柳に

真ん中に一本生えた鬼もあり
とあり、此の鬼は蔭間の異名と云う。一本角の鬼とは面白い見立だが、さても邪魔になろうと滑稽である。

男のは邪魔になろうと女の氣

この川柳は、もとよりエレクトした場合の句で、女はそんな場合にも目立たないが、男だと表に現われて困ろうと云つた句らしい。ところが異色姿態にもこれを無理して前面攻撃の姿があつた。實際家の男娼は素股が巧みなように、斯うした場合にも殆んど角突合の醜態を演ずるようなことはなく、角隠しの従順さが全くその存在すら忘れさす位だと云うことである。

小咄には性惡の亭主があつて、いも酒に酔つて帰ると女房の後庭華ばかりを要求するの

があつた。たまりかねた女房が仲人の所へ出掛けてその話をし、場合によつては別れたいと云い出したので、仲人も仕方なくそれでは兎に角一度自分が真否を確かめて見ることにしよう、というわけで仲人の男が女房の寢床に代つて寝た。それとも知らぬ亭主がいつもの通り酔つて帰り、後ろからかゝつたが、今日はまたいつになくうまい風味、「これはどうぢや」と思わず前へ手を廻して見て、「何んと突き抜ける程ぢや」と云つた話がある。

特別な風味を誇張して云つた話で、男色と女色との優劣論のことにもなるが、滑稽話として此の見立ては面白い。

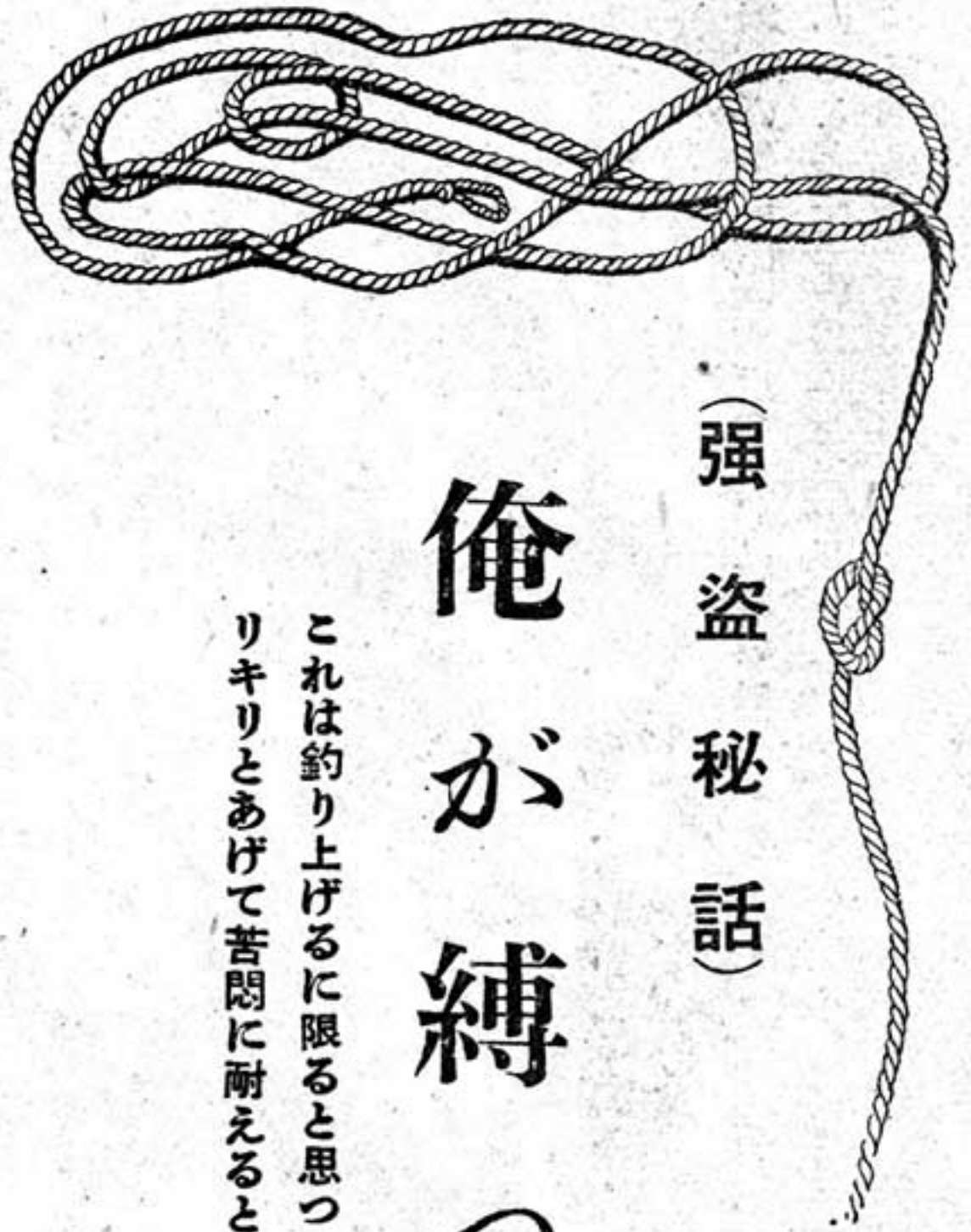
『野郎絹ぶるい』にも、似たようなのがあり——
あい床に女と寝たるきやくありて、云々——とて、女との一組とこちらは男色の客とが同室したとき、女の嬌声に野郎も勤めを忘れて氣を悪くし、いふしか我がものゝ×××××、うしろのきやくのが、拔身を突き通された様になりはすまいか、と我ながら興がさめた。と云つている。

こんな場合もあることだろうが、男色に於ける斯様な内容分析も、古い艶本にはどの様に見えているか餘り語られていないようである。

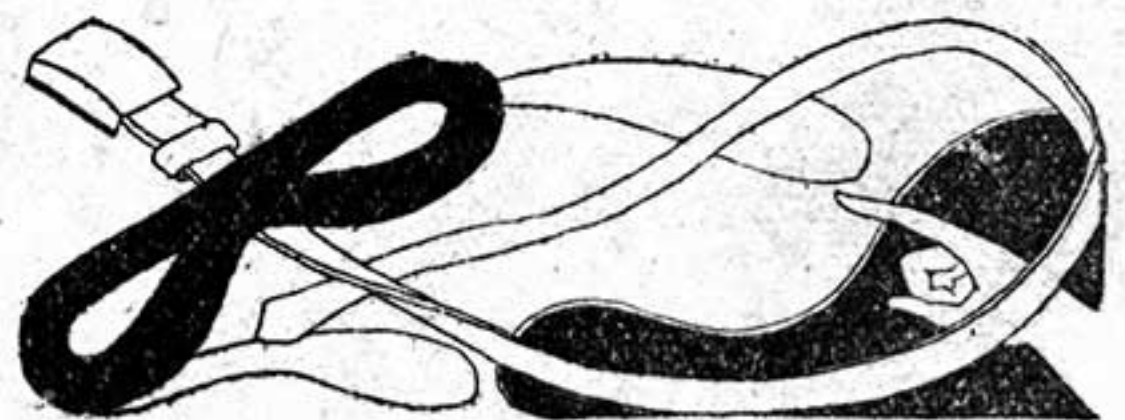
(強盗秘話)

俺が縛った女

これは釣り上げるに限ると思つて、後手にして半づりにした。勝氣な女が眉をキリキリとあげて苦悶に耐えるところは、なんとも壯絶なものだ……



増 富 次 平



前科五犯で、実刑を喰らつたのが通算して、ザツと十七年ばかりになる。だから監獄といつても、世間の人たちが思うほどには苦にならない。

だが、この延べ十七年の監獄暮らしの因はといえば、やはり女だと云うことになる。それも、世間の話のように、貢いだり入れ揚げたりしたわけではない。しかし、強盗に押込んだ件数が、お上の御調べでは十六件。実際の件数は自分でも忘れて、覚えていただけでも

三十件近いのだが、これが強盗と云うよりは、女を縛るのが楽しみで押込んだのだからやはり女の色香に迷はされた、と云うことになるだろう。

そも／＼の始めは忘れもしない、大震災の翌年でまだ血気の頃だった。親の代からの飯場育ちで、福島奥の銅山の飯場にいたが、親方と喧嘩して飛び出してしまった。

飯場を離れると、まるで木から落ちた猿同然で、腹立ちまぎれで飛び出しはしたものゝ翌日からどうして喰つていけばいいのか判らない。ところが、その頃は震災の翌年で、

東京は復興最中で凄く景気がいゝと云う話だった。

「まゝよ、東京まで行けばなんとかなるだろう」と、半分ほどは人夫などしながら、歩いて東京に來たものだ。

来てみると、なるほど／＼家が建つて復興景気だが、伝手も見許引受人もない独り者を、オイソレと傭つてくれる筈がない。五日目には木賃宿に泊る金もなくなつて、公園に行つては水を飲みながら、空っ腹をかゝえてぼんやり街を歩いた。

丁度真夏だった縁日で、人が大勢出てい

た。その露店で包丁だの小刀だの鉋、やすりなどを並べている店から、フラ／＼と出刃包丁をかすめてしまった。

フラ／＼と云つても、やはり気持の底には押込むつもりがあつたのだから、暗がりまで来て、手ぬぐひに出刃包丁をつゝんで懷にグツとつゝ込むと、もう、どうしても、強盗するより外に仕方がないと云うつもりになつた。

今はなんと云うか知らないが、新宿から中野の方に出る、たしか大久保百人町のあたりだと思ふが、馬鹿デカイ看板をあげてるので有名な時計屋があつた。その角から露路の二軒目に「女髪ゆひ」の看板がかゝつていゝのを見ると、其處に押込むことに決めた。

髪ゆひなら女世帯だろうし、若し男がいたにしても、大して腕つぶしは強くあるまい、と、踏んだわけだ。裏木戸は低くて、越すのに手間はかゝらなかつた。が、いざ木戸の内に入つて見ると、始めてだし、震えが出て来

てどうにも動きがとれなくなつた。

その時「泥棒に入る時には、その家の外で大便をすると落着く」と云う話を、飯場時代に聞いたことを思出した。そこで早速、南天が六、七本生えている傍でやつたものだ。

しこたま脱糞すると、迷信か知らんがどうやら気が落着いて、間取りの見当もついたから、出刃で雨戸をこじ明けると、雨戸は案外簡単に浮いた。

其処から上ると、丁度便所の横で、手洗の手拭がかゝつていたから、それで頬かぶりをしたわけだ。

部屋は三間ばかりで、案の定、女ばかり三人が、奥の間の蚊帳の中にグッスリ寝ていゝ。俺はまだ臆病だつたから、出刃を懷から出したり入れたりしながら、金目のものを物色した。

ところがなにしろ素人の口あけ泥棒だから、簞笥のところまでマゴ／＼してゐるうちに、上に乗つていた陶器の招き猫がドサリところが

り落ちて仕舞つたのだ。

ハツと思つて振りかえると、五十ぐらいの婆さんが眼をあけたのと、パツタリ顔が会つた。図体の馬鹿でかい男が、頬かぶりしてヌーッと立つてゐるのだから、向うも怖しかつたらうが、此方も面喰つて、パツと蚊帳の釣手を切つた。

それから夢中で婆さんを蚊帳と布団でグル／＼巻きにしたが、気がつく和一諸に寝てゐた娘が、声も立てずに膝で這つて逃げるところだつた。

なにしろ真夏で浴衣一枚に細紐の娘が、四つんばいなつて逃げる後姿だから、ほとんど臀部ばかり眼についたのだが、どうしてだが俺はそこでグツと、糞落着きに落着いて仕舞つた。

「オイ！」

と、声をかけると、娘はペチヤンと尻もちをついた。グイと襟首をつかんで、ニユツと出刃を眼の前に突きつけると、眼ばかりのよ





うな顔になつて、ガタ／＼震えている。

まだ十八、九らしく、髷のつまつた桃割れに結つて、赤い鹿の子をかけているのが、如何にも下町娘らしくてよかつた。山奥の飯場育ちで、色気のイの字もないような、腕つぶしの強い内儀さん連や、山猿に着物を着せたような百姓娘しか知らない俺には、後光がさすような別嬪に見えたのだ。

「声を立てると、突き殺すぞ！」

相手は出せと云はれても、声が出ぬほどの有様だつた。しかし金や品物を捜すのに邪魔になるから、縛つておこうと思つたが、縄の用意がない。

仕方がないから娘のしている腰紐を使ほうと手をかけると、なにを感違ひしたのか、突然「ヒイーツ」と声を出したから驚いた。此方もノボセ上つて、傍にあつた娘の前だれらしいものをつかんで口の中に押込んだが、その時俺は右手の小指のあたりをしたゝか噛まれてしまった。

カツとなつて後手に縛り上げた上に、柱にくゝりつけた。夢中の裡にやつたことだが、娘は紐をとられて後手にくゝりつけられている。白い胸には二つの乳房がフツクリ盛り上つて、それから下は今の娘とは違つて、その

頃の風俗で、夏草なんぞの模様の湯文字だった。

暴れた跡だから、それも白い膝頭まであらわで、口には赤い前だれを押こまれ、桃割れの頭を喘ぐように振っている姿が、なんとも見事で、俺は強盗に入ったことなんぞは忘れて、しばらく見惚れたもんだつた。

婆さんは蚊帳と布団にくるまれて、怖しさのあまり気を失つたらしく静かだし、もう一人の十五、六の梳子は、よほど疲れての熟睡と見えて、この騒ぎにもスヤ／＼眠っている。この梳子は、とう／＼俺が出てゆくまで眠つたまゝだつた。

娘だけが一人柱に縛られて身もだえしている。それが繪双紙のように美しくて、見ていると、血気の多い若い者だから、ゾク／＼してくる。ビク／＼していたのも忘れ、俺は出刃を投げ出して娘の傍によつていった。

その時、猿ぐつわと云うほどしつかりはめていたわけではないから、夢中で顔をふつて

いるうちに、口に押込んだ布がポロリと落ちた。トタンに娘は、再び精一杯の声で、

「ヒイーツ」と叫んだ。俺はハツとして正気づく、近所に悟られたかもしれぬと思つて急に怖毛づいて仕舞つた。

それから夢中で逃げ出したが、その時自分で畳の上の出刃包丁を蹴飛ばしたから、右足に怪我してしまひ、二、三丁逃げたところで近所の人たちにつかまつてしまつた。

あの邊は職人なんぞが多くて、人氣が荒い所だから、さんざ半殺しの目に逢つてから警察に引渡され、初の刑務所入りをしたわけだ。

二

その時は強悪犯として、懲役五年の判決だった。が、今上天皇の即位の御大典の特赦にかゝつて、實際は三年餘りで出獄した。

ところで、この監獄と云うところは、当り前のことだが女つ氣と云うものは塵ほどもな

いから、まるで飢えた狼共を囲っているような按配で、雑居房の中では閑さえあれば女の話ばかり。その時は初犯だから小さくなつていたが、その女の話が出ると、俺は必ずあの髪結ひの娘のことを思出したものだつた。

縛られて桃割れの頭を、苦しそうに振つていた姿が忘れられず、刑務所にいる間、あの夜のことがかり考えていた。

後になつて、三度目か四度目に入獄した時雑居房で女の自慢話にこの娘を縛つた話をしたことがある。すると、同囚の中に、あの近所に住んでいた者があつて、あの娘は何でも品川あたりの金満家に見染られて、大した出世をしていると云う話だつた。

とにかく、出獄するともう前科者の烙印があるからとてもまともに扱はれない。半分は自棄、あとの半分はあの時の、女を縛つた味が忘れられず、とう／＼専門の強盗になつてしまつた。

それから始めのように、簡単にアゲられ



るようなヘマはやらす、短刀一本でさんぐ荒し廻った。

と云つても、金や品物も勿論欲しいが、もう一つ、女を縛り上げることも目的だから、必ず女ばかりの世帯を狙った。晝間のうちにブラリと一廻りすれば、世帯の人数、間取や戸締りの様子などが一種のカンで手にとるように判つてくる。そこで、夜になつて忍びこむわけだ。

一度、下落合の後家さんの家に押込んだことがある。小金を持った寡婦で、小女と二人暮しと云う聞き込みだったから、そのつもりで、湯殿の硝子を切つて錠を明けて忍びこんだ。

ところがまづ、寝呆けた小女を縛り上げて奥座敷に来てみると、床は確かに一つだが、唄の文句ぢやないが枕は二つで御疲れの後ろしく二人よりそつてよく寝込んでござる。

つまり、若いツバメを喰えこんでいたわけだが、世間では身持が堅いで評判なのだから俺は太い阿魔だと思つて、大いに義憤(?)を感じたわけだ。

まづ、二人の枕をボンと蹴ると、女の方が気がついて、キヤツと男にしがみついた。しがみつかれた方の男も頼りなく齒の根が合は

ない。

書き忘れたが、俺が強盗になつたのも、一つは、こうして俺の姿に気がついた時の震え上げる様子がゾク／＼するほどこたえられないからなのだ。

この時も、幸ひ近所は遠いし、ウンと楽しんでやれ、と云うつもりだから、短刀をギリと抜いて、二人の膝の前の畳にブツリと突きさした。

男は見榮も外聞もなく、

「フェーソー！」と云うような声を出して、腰を抜かしてしまつてゐる。

「オイ、お前の命を貰うか、その代りにこの女を貰うか、どつちにするい?！」

いゝ氣持になつて芝居がけると、男はガタ／＼しながら手を合せたもんだ。

その頃、針金強盗と云うのがあつたが、これはたしかに便利だったから、俺も一尺二、三寸に截つた銅線を、幾本も懷に用意していた。これを組合せた両手に十文字にひっかけ、二、三度ねじり上げれば、どんな強力な男でも、まづ抜けられる氣づかひはない。

これで男の両手両足を縛り上げて、脅しにその衿元のところに短刀を縫ひつけてから、女の方にかゝつた。

この女は代書屋かなんかの未亡人だったらしいが、寝巻を剝いで素裸にして海老責めと云うあの形に縛り上げると、三十六七のコツテリと脂肪が乗つた姥櫻で、如何にも色づばい。

なるほど、これでは男なしでは暮されまい——と同情もしたが、縛り上げられてしまふと締らめがついたのか、今度は不貞腐れて、さん／＼男を毒づき始めた。

男は丸太ん棒のように転がつてゐるばかりで如何にも不甲斐ないが、女が血迷つてヒステリックに喚くのが憎くかつた。乱れ籠からはみ出していたバンドが眼についたから、女の前で二、三度素振りをくくると、真蒼になつて、女はピタリと黙つた。

それから布切を口に押しこんでピシリ／＼と打つたのだが、女は海老責めに縛られたまゝドタリ／＼ころげ廻つた。皮膚が破れて真赤になるしそれが猿ぐつわをされているから、黙つたまゝ逆トンボに転がる。

しかも、最後まで氣を失はず、打たれながら、可笑しなことにキラ／＼した眼で、俺をからみつくように見上げるのだから、変つた女だった。

この時は郊外の方だから、夜半にウロ／＼せずかえつて一番電車でスーツと引揚げて無事だった、もう一つ長居して、こいつはまんまと失敗した例がある。

亀戸の乾物屋に入つた時で、此処は老人夫婦と、出戻りの娘の三人暮しだった。この時は台所のさし込み錠を壊して入つたのだが、この出戻娘というのが、実は変態と云うのかまあ早く云えば色気狂のような女で、これにまんまと引つかゝつて仕舞つた。

何しろ実の両親が縛られている目の前で、かえつて向うからしなだれかゝつてくるような具合だから、結構すぎて恐れ入つた。こつちはさすがに、老人夫婦の顔色が気になつたが、つい長居してしまつた。

ところが、この隣りの家と云うのが、豆腐屋だからとにかく朝が早い。明けきらぬうちに起きて裏に出たところ、日頃用心のいゝ乾物屋の裏口の戸が五寸ばかり明いている。豆腐屋の親爺が心張棒を持つてソツと覗きこん

でみると、老人夫婦は縛られている。仰天して交番に走つたわけらしい。

これが現行犯でその場で手錠をかけられ、三度目の別荘行のきつかけになつた。公判には勿論この出戻娘も證人として喚問された。それまで、少し様子は可笑しいが、とにかく惚れられたと思つて、検挙されたこともそれほど苦にならなかつた。

しかし、法廷でこの出戻りが、両親泣かせの、評判の娘だったことが、俺にもイヤと云うほど納得されて、ボヤいたものだが、後の祭りでは仕方がない。実は縋繰もまづ下の組だから、まったくトンマな役割をやつたものだ。

三

それから、変り種ではこんな話がある。これは戦後のことで、こちらも相当爺むさくなつてからのことだ。

洗足池に近い邸町にある、一流の某弁護士

の家に押込んだ。と云つても、当時世間を騒がせた或る事件の爲に、主人は書生まで連れて東北へ旅行中だと、調べ上げての上のことだ。

この家は要心がよく、錠前も舶来もんで、ちよつと難物で手が出なかつたが、廊下つきで離れめいた部屋がある。

この部屋の、丁度俺の胸の高さの處に丸窓があつて、両方に開く硝子戸が入っているがこれは簡単なオトシが下してあるだけだからすぐ明く。そして後は細い竹の格子が何本か酒落た風に交叉しているから、すぐ切り取つて忍びこんだわけだ。

派手な部屋だから、娘の部屋だとは思つたが、足許を見ると、赤い夜具に娘が二人、抱き合つて眠っている。

無邪気なもんだと思つたが、俺の病ひだから、例の通り枕元に立つて枕をポンと蹴つた。二人ともぼんやり眼をこすつてから、幽霊でも見たように顔をゆがめてキヤツと跳ね





起きたのがなんと、二人とも文字通り一糸もつけていない。

こつちは毛糸のジャケツなんぞ下に着込んでいたから、確か一、二月の頃だったと思うのに、良家の令嬢が、しかも二人共裸で抱き合つて寝ているのだから唯事ではない。

俺も、女のそんな遊びを話に聞いたことはあつたが、この眼で見たのは始めてだし、その上二人共まだ十六、七の年恰好だから、さすがに驚いて仕舞つた。

そんな、大それた所業はしても、さすがにまだ女学生だから、二人共抱き合つてブルブル震えている。その時、顔が似ているようだったから、俺は、従姉同志かなんかかもしれないと思つた。

とにかく、女学生で髪形は子供っぽい、よく実の入つた白い肌を見せて、短刀なぞ見せるまでもなく、声も立てられぬ風情だから俺は思はずニヤリと笑つたらしい。二人共パツと顔を、お互の肩の上に伏せた。

指が肌に吸ひつくような具合だった。

この時は、どうしてか隣りのシエパードがひどく吠え始めて、どうも危いと思つたから匆々に退散した。

骨を折つて入つて、手ぶらではバカを見たようなもんだが、この時の美しい令嬢の姿態は今もつて眼に焼きついている。

それからもう一つ、これは横浜に近い生麦あたりの大きな植木屋に押込んだ時のことだった。

見たことがない人には判るまいが、若い娘が二人、抱き合つて、震えながら顔をそむけた様子と云うものは、慣れた俺でさえ思はずうつとりする程だった。

あまり美しいから俺は二人をそのまゝ一諸に縛つた。殊に片方の断髪にした娘なんぞ、肌が締つてシコ／＼と弾力があつて、縛つていても

植木屋だから庭が広く、近所がかなり遠いから仕事やりやすい。この時は金が目的で爺さん婆さんだけのつもりで入ったところが丁度彼岸だと云うので、偶然息子夫婦が東京から来て泊っていた。

この嫁の方はふつくりした軀付で、なかなか別嬪だった。

それにしつかりした気性者らしく、例の通り男の方を縛りつけてから、短刀を出して脅している、女は赤い財布を俺に投げつけて

「それを上げるから、早く帰って頂だい！」と、叫んだ。

若い女で、強盗に入られて、こうまともに口がきける者は珍しかった。俺はガタ／＼して腰を抜す女ばかり見慣れているから、抵抗されるとかえって嬉しかった。

縛ろうとするとパツと飛びのいたが、自分で裾を踏んで倒れた。色白の餅肌で、若妻特有の柔かな体の線が素晴しかったが、これが

妊娠していて、どうやら四五ヶ月だったらしい。

これは釣り上げるに限ると思つて、後手にしてから半づりにした。

勝気な女が眉をキリ／＼とあげて苦悶に耐えるところはなんとも壯絶なものだ。俺はこれを電気のコードで責めた。こんな酷いことをしたのは、後にも先にも始めてだったが、老人夫婦も夫の方も、縛られたまゝ顔を疊にこすりつけて震えていたらしい。

女は口一杯に布をつゝこまれてポロ／＼涙をこぼしながら、俺を睨みつけたが、最後まで哀願するような様子はなくて、怒りに震えた瞳だった。

それから二、三日して新聞を何気なく見ると、この植木屋の嫁が毒を飲んで自殺した記事が出て居た。ハツと思つたトタン、あの俺を睨みつけた、黒い瞳を思出した。

新婚半年目ばかりの嫁が、夫や姑の前で、強盗にあんな酷い仕打ちをされては、勝気な

だけに生きておれない気持になつたのだらう。しかも、妊娠していたのだから、腹の子と、親子二人を俺は死なせたことになる。

さすがに寢覚めが悪くて、すっかり俺も氣に病んで仕舞ひ、その後他の件でつかまつた時、この生麦の植木屋のことは、検事の前でこちらから自由したものだ。

思えばさん／＼罪なことを仕出かしたものだが、女を縛ることに憑かれて、監獄と娑婆との間を、一生行つたり、来たりした俺のこゝとだから、どうせ末は地獄行きだと思つてい

る。若夫婦と云えば、これは練馬の在で相当の旧家だった、その一人息子の婚礼の夜に忍びこんだこともある。祝言などの時は、人の出入りが大勢で戸閉りが手薄から、かえつて入り易い。この時も素晴しく面白い思ひをしたが、紙面がないからはよく。

(おわり)



そとみあ・すとお

男色アパート

狭い部屋一杯に、異常な緊迫感が流れて、次郎は切なかつた。男の肌にふれて
いる指が恥かしいほどにもわなないて、自然に熱い吐息が洩れるのだ……

志麻雪夫



ネオンの街

近頃銀座名物の大地球儀のネオンが、燦然ときらめき、流れ、廻
って、消える。

向側の時計塔の針が、なんとなく神秘的な午後十二時を指す頃――
。だから、もうこの界限には、紳士淑女方はいらつしやらない。
疲れた頽廢の銀座。それにふさわしく、晝間とはうつて変つたエ
セ紳士たちと、夜の銀座の原動力である女たち……。それも二人、
三人と組んで、そろそろこの飽和状態に達した銀座から脱出を始め
る。

そんな銀座裏の小さなバアから、ギターとアコデイオンが古めか

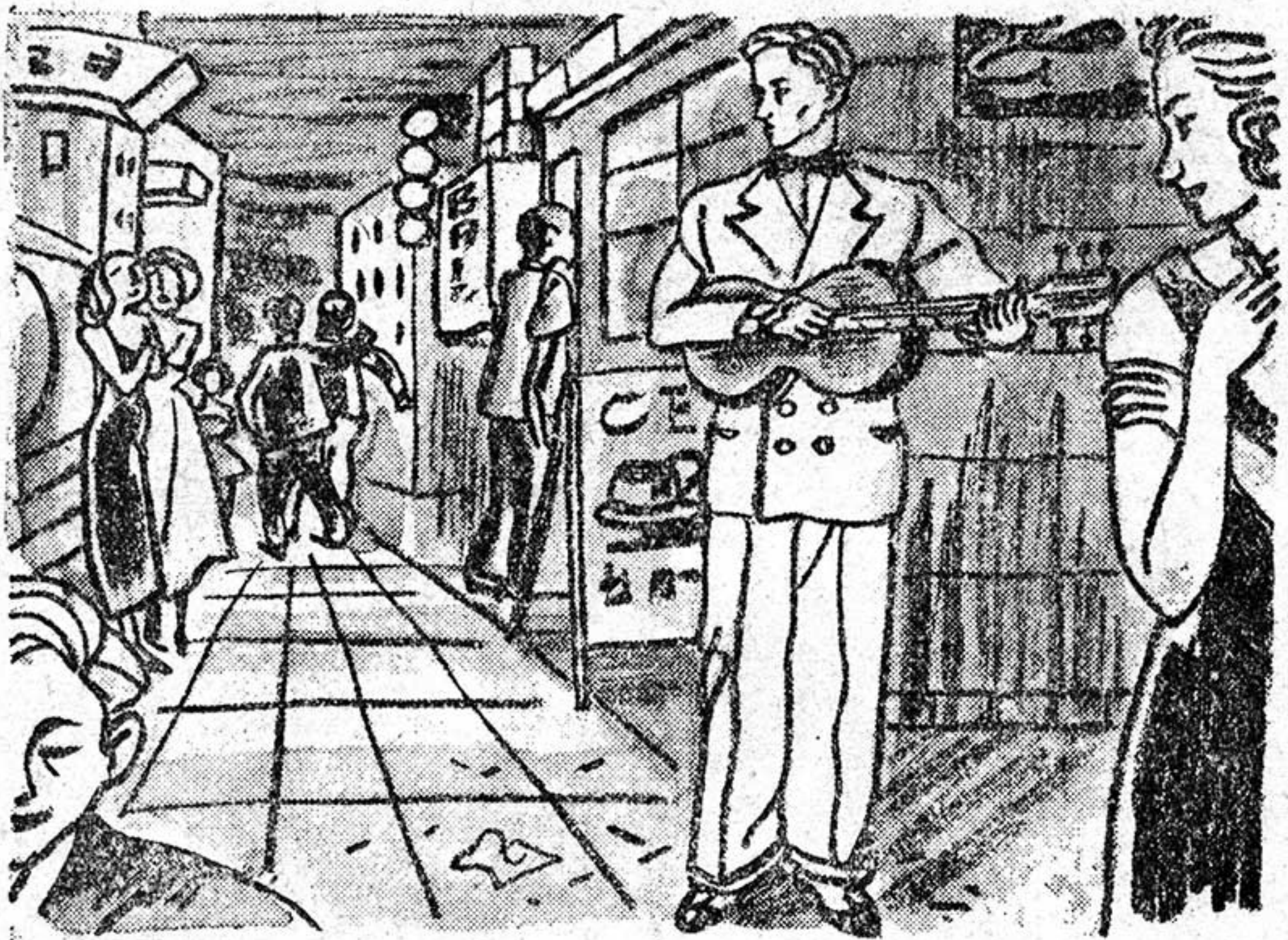
しいラヴソングを流しながら出てくるのだ。
ピカピカと、妙な光り方をする赤いドレスの女が、ドアにつかま
って叫んだ。

「ヘーイ、次郎ちゃん、又あしたの晩ね！」

ちよつと瘦型の、ギターのの方が、額のあたりで器用に手を振つて
みせる。それだけだから、彼のメロディは途絶えやしない。まだな
にか叫んでいる女を、もう振返りもしないのだ。

この銀座裏で御馴染の次郎ちゃん。艶歌師だが、「彼の声には、
まつわりつくような情感がある」と、その道の専門家が云つたとか
云わないとか……。とにかく、銀座裏の女たちに凄う人気がある。

ここでギターの次郎ちゃんを知らなきや完全なモグリだが、その
次郎ちゃん、



満たすグラスの その底に

描くまぼろし かの君の

赤き唇 赤き唇 いまいづこ

そんな文句を濫く流しながら、気取った調子で裏道から裏道をゆくのだ。

この夜の東京の中心から、急に里心がついたように、四方に散つてゆく男女にすれ違いながら、街角を彼の唄が這うように流れてゆく。

「さいなら！」

「次郎ちゃん！ 今夜あたしとつき合わない？」

そんな女たちに、彼はあの洒落れた手つきで「バイバイ」を送るだけ——。そんなソツケなさが、又人気を煽るゆえんでもあるらしい。

「ジロちゃん、そろそろ引揚げようか？」

「そうだなあ——」

コンビの栄公に、憂鬱そうな顔を向けた。髪型はG I刈りと云うヤツ。色白の面長だからちよいと中性的にみえる。鼻筋が通つて少し顎のあたりがシャクレた具合は、さるフランス帰えりの、シャンソン歌手に生写したと云つた最良客がいる。

指も胴も細い。縞のワイシャツに蝶ネクタイ。ズボンも縞だが、ダブルの上衣は仕立のパリンとした紺の無地だった。そのラベルにお定まりで赤いカーネーションが一輪。彼は凄いだんディなのだ。知らない人は商売用のお洒落だと思ふかもしれないが、どうして骨の髄までしみこんだ伊達男。靴の先まで、次郎ちゃん一流の神経がゆき届いている筈だった。

だから、そんな彼が艶の出たギターを抱えて流す姿にピツタリ出逢つたら、その人はきつと、銀座らしいシツクとデカダンを同時に感じながら光と影が交錯する街角を、古いメロディと一緒に曲つてゆく彼の後姿を、見送つたに違いない。

艶歌師の次郎ちゃんはその男だ。コンビの栄公と云うのは、次郎ちゃんより二ツ三ツ年長らしい二十六七で、こつちの方は一向に風采が上らない。

商売のアコデオオンも、時々次郎ちゃんから靴をギユツと踏まれるほどのミスをするし、唄わせれば、おそろくのと自慢でも鐘一つがやつと、と云うところだろう。だからこの方はどうしても三枚目で、次郎ちゃんのひき立て役と云うのが、まづ衆目の見るところ――。

ところがこの栄公が、何時も次郎ちゃんにくつついて歩いて、目立つて次郎ちゃんに馴れ馴れしい女がいると、きまつてイヤな顔をする――。

とにかく、こんなコンビの流しも、バアやホールのドアが閉り、カーテンがひかれてボツボツ灯が消え始めると、よほど酔狂なお客にでもぶつからぬ限り、もう商売にはならない。

「ジロちゃん、「千草」でおでんでも喰つて帰えろや」

「……」

「ねえ、今日の稼ぎはまああつてところだぜ？」

媚びるように覗きこんで、

「そんな面白くなさそうな顔をする、こつちまでクサクサするじやないか――」

「嫌ならサッサと離れてゆくさ」

「又それを云う……いいかい次郎ちゃん、俺はどんなことがあつて

も、絶対にお前とは離れないぜ？」

「凄んだつてしようがないよ。お前が逆立ちして拜んだつて、別れる時が来たらバイバイつてもんさ。まさか三下り半をやつたり取つたりする手間はいらねえだろうからね」

バタ臭い容か貌かに似合わず、伝法な口調でそう云つた時だ。二人が曲ろうとした右手から、警笛も鳴らさず、自動車が飛び出して来た。

奇 禍

「あッ！」

眼の前に、凄く大きく自動車を感した。瞬間、二人ぶつかり会いながら、横つ飛びにそれを避けていた。

「畜生！」

思わず顔を見合せて、唸りながら無法な車を見返つた時、再び二人は同時に声をあげていた。

「あッ、危い！」

黒い人影が、車にハネられる瞬間だつた。影絵のように半円を描いて、それが舗道に叩きつけられる。

バラバラと夢中で駆けよつた。男だつた。長くうつ伏せになつて動かない。次郎はその傍にしゃがみ込んだ。

「あれっ！ あん畜生、逃げる気だぜ！」

栄公が飛び上つて喚いた。

「待てッ！ ひき逃げ自動車めッ！」

一度降りかけた自動車が、思い直したようにフルスピードで走り去る後から、栄公は喚きながらパッタのように飛んでゆく。

その声で戸口から顔を出した連中も、舗道に寝た男と、かがみこんだ次郎を遠くから見て、酔っぱらいだと思つたらしい。珍しくもないと云つた様子で、さつさと引込んで仕舞うのだ。

もうめつきり秋の気配がする舗道に、奇禍に逢つた男はグツタリとノビている。見たところでは何処にも外傷はない。少し眉根をよせて、意識を失つた額に髪がたれてるのが傷々しい。

三十二、三ほどにもなろうか、容貌も服装も上流階段に属するらしい立派な紳士だつた。次郎は手早くネクタイをほどいてから、ワイシャツの胸をくつろげる。胸の下に手をやつた。薄いシャツ越しに、はつきりと心臓の鼓動が掌につたわつてくる。

ホツとした。その時始めて、次郎は男のズバ抜けた体格に気がついたので。ガツチリした長身で、恐らく十六、七貫はあろう、スポーツマンらしい、引締つた体軀だつた。

ダンディで通つた艶歌師の次郎が、地面に片膝をついて、その上に頭を乗せた。自動車にハネられたにしては軽い、脳震盪らしいと見当をつけていた。

そんな大男を抱くようにして、人工呼吸のつもりで豊かな胸元を押していると、次郎はなにか不思議な喜びを感じてくるのだ。それは軀の奥底から忍び上つてくる、戦慄のようなときめきでもあつた。

大声で話しながら来た三、四人の男たちが、立止つて覗きこんだ。

「どうしたんです」

「いや、こいつ、ちよつと呑み過ぎましてねえ、呑めねえクセに、ガブ飲みするもんだから……」

そう云いながら、彼はかくすように男の上にかぶさつた。

栄公は何処まで自動車と駆けくらべするつもりだか、暗い舗道にはまだそれらしい人影も見えない。もう殆ど人の往来は絶えて、大通りを時々自動車が疾走する。

次郎はギターをつつたバンドをしつかり締め直してから、正体のない男の軀の下にもぐりこむようにした。商売道具のギターを前につつたまま、この男を背中に負おうとするらしい。

手ごたえのない大きな軀を、幾度も失敗してからやつと背負い上げた。顔をほてらせて、よろめきながら歩き出すのだ。ドツシリと体重が肩にかかつて、ひどく前こごみになりながら足を慎重に踏みしめる。

「オーイ、ジロちゃんかい？」

栄公の声が遠くから追つかけて来て、

「ああ——、ひでえ目に逢つちまつた。凄げえスピードで逃げやがんの、マラソンなら負けねえんだが、なにしろアコデオオンが邪魔つけで走れねえ——」

まだハアハア肩で息をしながら、

「その男、死んじや居ねえのかい？ 何処まで負つてゆくんだ？ 病院かい？」

矢つぎ早やに問いかけるのに一言も答えないで、背中一杯に見知らぬ男の体温を感じながら、日頃の彼らしくもない、喘いで、額にビツシヨリの汗だつた。

「ねえ、ジロちゃん、そんな怪我人なんぞ、縁起でもねえ、早く引渡しちやつた方がいいぜ——。あ、交番ならこつちだぜ!!」

「うるせえな、アパートに連れて帰るんだ。喋つてないでギターでもとつて呉れよ」

「アパートだつて？ オイオイ脅かすなよ。なんだつてそんな物好きかな。まだ此処から五、六分はかかるんだぜ、そんなデカイ図体の男なんぞ……」

「いいよ、もうお前にや頼まないよ」

男色アパート

アパートと云つたつて、外側だけモルタル塗りの二階家だ。部屋数がまづ十四、五もあるだろうが、至つてガタピシに出来てる安普請なのだ。

その二階の八号室から、だらしない寝巻姿の栄公が、寝不足らしい顔で出て来た。共同洗面所の曇つた鏡の前に立つと、顔見知りの先客が笑いかける。

「お早よう」

「ああお早よう、なんだつてねえ栄さん、お前さんたちの処にや、えらいお客が来てるつて云うじゃあないか？」

京橋の一流の理髪店に、通いで勤めている、自らアーティストと称するこの男は、まるで好奇心でハチキれそうな表情なのだ。

栄公はその相手を、如何にも面白くなさそうな顔で見返えして、

「ああ、馬鹿デカイ図体の奴が、大きな顔して寝てやがらあ……」

「そうだつてねえ、一体、どうしたんだよ？」

「どうもこうもねえよ。次郎の奴が、厄介な気まぐれを起しやがつて……」

「えらく熱心に看病してるんだつて……」

通りがかりの奴が、二人も三人も話に首をつつこんで来て、まる

で井戸端会議と云つた按配。と云つても、男ばかりなのだが……。

大体、このアパートには女気が少い。男色アパートと云い触らし始めたのは誰だか知らないが、とにかく女らしい女は殆ど住んで居ないのだから珍しい。その上、男ばかりと云つても、殆どが独身者なのに、若い女性たちが出入りする気配もない。

古着屋の番頭と、何処やらの映画会社の大部屋俳優。証券会社の係長心得と、ストリップ一座の裏方と云つた珍妙な組合わせで、一緒の部屋に暮していたりする。勿論一人暮らしの男もいた。

皆、云い合わせたように身綺麗で、多少気まぐれで気嫌がとり憎いところがあつた。此のアパートでは、恐らく女の噂が出たことはあるまい。だから、煙草屋の娘が嫁にゆこうと、外食券食堂の女の子がつけボクロをしようと、ここの住人たちは一向に動じない。

何時の頃からそうなつたのか、とにかく奇妙な具合のアパートなのだ。時々誰かの部屋に泊りの男客があると、アパート中の神経がそちらに向いて、なんとなく落着かなくなる。だから次郎ちゃんやんが夜中に担ぎこんで来たあの男のことが、こんなに皆の話題にもなるわけだつた。

「なにしろ自分の寝巻を着せて、布団に寝せて、ジロちゃん自分は疊の上にでも寝ようつてノボセ方だ。やれ氷を買つて来いの、やれ体温計を借りて来いのつて、眼の色を変えて騒ぎ廻るんだ。こつちはコキ使われの、寝不足つづきで、糞面白くねえつたらありやしねえ——」

「まあ、栄さんにすりやあそうだろうが、あたしもチラツとみたけれど、おつとりして眼が大きくなって、まづたくい男だねえ、次郎ちゃんじゃなくなつたつて、騒ぎたくもならあね」



「それで、身元には知らせたんだろうね？」
 「そんなこと、知るもんか、何処の馬の骨だが牛の肉だか知らないけれど、デカイ面して寝てやがるんだ。気に入らねえつたら、ありやしねえ」
 「まあ、そうヤキヤキすることないだろうさ、次郎さんも一本気だし、喧嘩別れすりやあ、あつちは一人でも流せるけれど、お前さんの方は飯の喰い上げじやないか——」

「ちえッ！ 馬鹿にするなよ」
 「だって、あんたが亭主役には違いないが、いわば女房に喰わせて貰つてたようなもんだ。たまには浮気されても、そうボヤボヤ云いなさんな」
 面白半分にからかわれている処に、八号室から噂の主の次郎が出て来たのだ。ピタリと話を止めた連中に、チラリとも視線をくれず土鍋を片手に彼はその前を通り過ぎる。

今日はフラノの替ズボンに、グリーンのウールのシャツを着込んで、袷元に同色のネツカチーフを巻いていた。そして、これも共同の炊事場で、彼は土鍋に入れた、わずかばかりの米をかしぎ出す。
 慎重に水加減を計つて火にかける。そして今度はその前にうずくまつて、粥の火加減に細心の注意を拂っているらしい。それはまるで、始めて夫に寝付かれた若妻が、さまざまに看病に心を砕く様子にも似ている。

女性乳房

煮上つた粥の鍋を部屋に運んで来た時、あの男はぼんやり天井を見上

げていた。

六疊の部屋の窓ぎわに敷いた木綿布団の裾から、男の足先が出ている。そんなに大柄な男なのだ。壁の衣紋竹にあの夜着ていた男の合の背広がかけてられて、ケースに入つた楽器が並んだ外は、なんの交ぜもない男二人暮らしの部屋だつた。

次郎は小さな茶簞笥の戸棚をガタガタさせると、盆の上に器用に食事の支度をこしらえる。熱い番茶まで添えて男の枕元に運んでくるのだ。

「どうですか、少し召上つて見て下さいよ」

黙つて腹這いになつた男の傍で、箸を割つたり粥をよそつたり、そのまめまめしい心づかいといったらない。それから黙つたまま箸をとり上げた男の横顔を、ジツとみつめる。

その熱っぽい視線を受けながら、男はゆつたりと、応揚に食事を始めるのだ。ここに来てから、彼は殆ど口をきかないのだが、まるで自分の家にでもいるような、のびやかな態度だつた。

次郎は一言もこの不時の客の身元なんぞに就て質問もしないし、彼の方でも「家に知らせてくれ」と云うでもない。街の艶歌師の部屋なぞに担ぎこまれながら、のんびりとこんなまわり合わせを楽しんででもいるような様子だつた。

「気持が悪いでしょう。今日はちよつと軀を拭いてみましょう」

次郎はシャツの腕を甲斐甲斐しく捲くり上げて、洗面器一杯の湯を運んでくる。ゆつくり見上げた大きな瞳と視線が逢うと、次郎はテレたように赫くなつて眼を伏せたが、そつと、まるで貴重品でも扱うように病人の肌をぬがせてゆく。

病みやつれたと云う病人ではない。だからガツシリと筋肉が締つ

て、胸など見事に肉が盛上つている。乳のあたりなどまるで女性のようなふくらみが見られるのだ。スポーツで鍛え上げたらしい、逞しいポリウムがあつた。

その乳のあたりから、次郎はタオルを次々に絞りかえながら、濃やかに拭き上げてゆく。胸から腹へと一心に熱中して拭いている彼の瘦せた頬が紅潮して、おつとりと横になつてゐる相手と、怪しい対象を示している。

それは育ちのよさからくる応揚さばかりではない、その次郎の献身を容認する、或はそそりたてるなにかが、逞しい男の裸線から匂つてくるようだつた。

狭い部屋一杯に、異常な緊迫感が流れて、次郎は切なかつた。男の肌にふれている指が恥かしいほどにもわなないて、自然に熱い吐息が洩れるのだ。

拭き上げて寝巻の肌を入れさせ、衿を合わせようとして、彼はジツと男の胸元を見た。白く肉付の豊かな、思いつきり厚い胸が其処にある。殆ど何の意識もなしに、次郎はその胸の上に顔を伏せた。夢中で何か口走つた。自分でもなにを云つたのか気がつかなくなつたが、幼児のようにグイグイと相手の胸元にしがみついた。そして、彼は肩に太い腕の力を感じた時、再び言葉にならぬ声をあげてゐた。

ガタンとドアが明いたが、部屋の中も戸口も静かな一瞬があつて再びガシヤンとドアが閉つた。

「チエツ！ 馬鹿にするねえ！」

と、如何にも腹立たしそうな栄公の罵声と、自棄つばちな足音を聞きながら、次郎は真実、永い間描きつづけた夢の中にでもいるよ

うだつた。

翌晩から、大車輪で彼の稼ぎが始まつた。なるべく短い間に要領のいいところ、收入りの方のピッチを上げるつもりらしい。コンビの栄公のアコデイオンがすつかり不貞腐れて、一向にメロデイが合おぬのも苦にならぬらしく、銀座裏を古いラヴ・ソングと一緒に流れてゆく。

酒は人間を回顧的にするものか、流しの艶歌は、とにかく少し古いものに限る。それもいささか感傷的な——。それをやりさえすれば、思出し上戸的な酔客や、案外に人のいいバアの女たちのお気に召すのだ。

何時にも似合おぬ商売熱心で稼いで、時間だけは早目に切り上げようとする次郎に、栄公は酔つたり、嫌味を並べ立てたりしてからんだ。

「よう、次郎公。黙つていりやあいい気になりやがつて……、お前何時まであの大男の唐麦木を飼つとくつもりなんだ、ええ？」

「何時までだろうと、お前の指図は受けねえよ」

「ふん、浮気は大抵にしろつて云つてゐるんだ——第一、もう一週間にならあ、早く彼奴の家にも……」

「それが気に入らなきや、お前の方でサツサと片付いちまえばいいじゃないか？」

「次郎！ お前、俺をあの男に見返える気なのか！」

酒臭い息を吹きかけてくる相手に、次郎は冷然と云つて聞かす。「念を押すこたあないや、仕様がないつてことよ、俺はあの人に、首つたけに惚れつちまつたんだもの」

「畜生！ 覚えてやがれ！」

男二人、こんな異常な喧嘩をくりかえしながら、夜の街を流し疲れて、通称男色アパートに帰つてくる。次郎は窓の灯を見上げて駆け込むのだ。

夜 霧

「あれ、いやだなあ……」

腕組みして、節穴だらけの柱にもたれた男の顔を覗きこんで、次郎は甘えるように云うのだ。

「どうして？」

「だつて、まるで奥さんのことでも想出しているような表情だもの——」

男は黙つて苦笑する。

「図星でしょう？ もうあれから十日になるんだもの、お家じや大騒ぎで、捜査願だの、親族会議だのつて……」

「そんなことはないさ、今までだつて五日や一週間位はブラット旅行に出たこともある。第一、ワイフつてのは、僕のことなんぞ心配するような女じゃない」

「本当かなあ——」

「嘘は云わないさ。勿論僕にも罪があるけれど……、君だつて判るだろう？」

肯いて指をからめてくる。その指が娘のように熱くて柔軟だつた。完全なる倒錯の世界——。だが又、彼等にとつては赤裸々な必然でもある。

そして、あの奇禍による結びつきが、次郎にはなにか宿命的な神

秘さで迫ってくる。それだけに執着も強かった。彼は明日を忘れてただ盲目に男の厚い胸にもたれかかる――。たしかに其処に彼の喜びがあつた。

二人が連れ立つて洗湯に出かけた跡の部屋を、栄公が覗いた。敵役の顔で、その辺りに散らばつた坐布団や煙草の箱などを蹴飛ばす。まだ鬱憤の納らぬ表情で部屋中をグルルと見廻した。

それからツカツカと、衣紋竹にかかつたあの男の背広の処まで来て、さすがに廊下に耳を澄しながらそれに手をかける。内ポケットから贅沢な名刺入れが出て来た。暫く眺めてから、栄公はその中の一枚を抜き取つたのだ。

だからその夕方、男色アパートの前に車が止つて、下りたのは珍しく婦人客だつた。三十前の豪奢な服装で、白い顔が鋭高な表情で階段を登つてゆく。その革草履の裾捌きまで、何処かツンと冷めた

「あッ！」

と叫んで、反射的に立上つたのは次郎だつた。それを蔑むようにチラと見てから、夫人はピタリと夫に眼をすえた。

「あなた、御冗談ではございませんわ。皆様心配していらつしやいます」

「ふむ――」

男はドツシリと坐りこんだまま、煙草の煙をゆつくり吐き出してから云つた。

「よく此処が判つたね」

「表に車を待たせて居ります」

ハネ返すように、ニべもなく云つた。もう次郎の方は無視したよ

うに振り向きもしない。どうやら夫人は、この部屋の主が、女ではなく、男だと云うことを正確に予期して来たらしい。

「次郎ちゃん、こりやあ仕様がなないね」

まだ坐つたまま、ゆつくり微笑を向けて来たその人を、彼は泣きそうな表情で振りかえつてから、部屋を飛び出していった。

ウロウロと廊下を行き戻りして、洗面所の辺りに覗いた二ツ三ツの顔の中に、栄公の顔がヒョイト目につくと、次郎はそれに獵犬のように飛びついていった。

「畜生、お前だな、密告やがつたのは！」

「次郎ちゃん！」

ぶつかつて、凄い音をさせながら倒れた。小柄なダンディ次郎が髪もマフラーもふり乱して、栄公の上に馬乗りになつて、荒れ狂つた。

取つ組み合つてゴロゴロ上になり、下になり、そのまま家鳴りするような音と一緒に、階段を転がり落ちてゆくのだ。アパートの人たちは、階段の上から、同情と共感の入り混じつた表情でその二人を見下した。

銀座の夜は何時ものように、そろそろ疲労の色を浮べてくる。もう夜霧の濃くなつた露路裏は、秋も深い。そんな情景にふさわしい登場人物のように、次郎ちゃんのギターが流れてくる。

彼は以前のように気むづかしくメランコリイで、栄公はアコデイオンのメロディをミスしながら、次郎ちゃんの気嫌をとるのに忙しい。

(おわり)

變態 十 二 ケ 月

歪んだ閨房



「この可愛い、唇で、もうそんな
事まであいつにしてやつたのか」

武野 藤 介

1

これは僕の友人の、ある画家の家庭にあつた実話で、小説にも書いたことがあるが、その発端は、夫のうまい誘導問で妻が、これが初めての経験ながら、姦通していた事実を白状するのだ。

その第一景。夫婦の寢室。カーテンの隙間からいつのまにか曉のうすら明りが忍び寄つて、ほの白く浮いて見える妻の顔が、すっかり、涙に濡れているのを、

夫はいたいたしそうにして、

「いま、後悔しているのかい？ お前の涙を、僕はそのように解釈しても間違いないかね。これからは、二度と、このようなあやまちをしないと、はつきり、約束出来るね」

「約束するわ。許して……」

妻はまたひとしきり泣いた。この夫婦は、新聞種にもなつた程の激しい恋をした、恋愛結婚だつたのだ。既に、幾人か子供もあつた。夫は、世間の良人並に、ちよいちよい浮気もしたが、それは道草のようなもので、今でも、この妻を愛していたのである。

一体、姦通する妻は、チャタレイ夫人にしてもアンナ・カレニナにしても、一応、自身を納得せしめる、理由を持つていゝものだ。ケツセルの「畫顔」のセザリヌの姦通は、これを日本流に云うなら、「不図、魔が射した」というそれで、これだつて一つの理由だつたのである。この画家の妻にもそれだけの理由はあつた。が、その理由の詮索は、夫が俺も悪かつたと自覚するのがオチで、問題はむしろ「その後に来るもの」ということになる。

「僕は直接、あの男に会つて、今後の出入りをきつぱり断わる。お前に異存はないね」

「勿論、異存ないわ」

そこで第二景。その姦夫と夫との対面。この男が云つた。

「僕のような若さで、このダンス教師という職業柄からも、僕がその気にさえなれば、女に不自由などはしませんからね。何を好んで四人も子供を産んだ歳上の女で、而も、よその奥さんという危険を冒してまで。そんな女と寝る必要がどこにありましょう。僕のほうが、奥さんから言葉たくみに誘惑された苦情を云つてもいいぐらいのものですよ。まづたく、あれは……僕のサービスのようなもので

したからね」

この言葉は全然予期せざるものだった。一言ぐらいは謝罪もされるところだ、また、彼の口から、「僕も、真実、奥さんを愛していました」ぐらいの台詞はあるものだとばかり思っていたのだ。妻を寝とられたこの夫は歳甲斐もなく、且つは不覚にも、その戦後派的な台詞に狼狽した。その場で涙ぐんでしまった。今も、愛妻なればこそ、「可哀いような女」だと胸に泌みるように感じながら、狼狽した自分自身に腹が立つてならなかった。その立腹が、その夜の夫婦の寢床でブスブスとくすぶつたのが第三章。

「だつて……許すと仰言つて、そんなこと、根掘り葉掘り、今になつて私にお聞きになるのは……ひどいわ。ひど過ぎるわ。残酷というものよ」

確に、それは残酷というものでもあつたらうが、

「しかし僕は、お前との閨房のことを、親しい友達にも話したことはないぜ。それを、お前があいつに喋舌つていことがわかつた。それなら僕が、お前とあいつのことを聞いたつていいじゃないか。僕は真実が知りたいんだ」

その閨房のことや、愛撫のテクニクについて、この男の、問はず語りの五項目。夫はそれを妻に訊いてみないではいられなかつたのだ。その三つは同じ返事だつた。が、あとの二つは男と妻の云うことがまるきり喰いちがつていた。どちらが真実か。どうやら、これも男の云つたほうが真実のように思われてならない。たとえばその一ツを取りあげても、

「あいつは、お前の云うそれとは、まるきり反対のようなことを云つていたぜ。お前は云う。お乳は子供のものだ。前の方は、夫である先生のものだ……とね。ところが、あいつは……奥さまの優越感で、いつだつて、奥さまのほうから……」

「どちらだつて同じことじゃないの」

「それが！ どうして同じことだと云えるかい？」

「私、あなたにあやまつたんですから……」

「僕も許すと云つたじゃないか」

「だから……そんなこと、もう、お聞きにならないでよ」

「二人の話の喰い違つている第二の点は……」
「もう、たくさん！」彼女は、自分の両手で耳を蔽うた。顔も蒼白になつていた。が、こ

れはその夜のことでだけではなかつたのだ。その真実をつかむまでは、執拗に、毎夜、同じ質問が夫の口から繰返されたのだつた。愛妻なればこそ、すつかり真実を白状させて、彼女の胸の重荷を軽くしてやりたいと思つたからだつたが、彼女にはそれが復讐的にいじめられているとより外には考えられなかつたのである。愚かな夫婦だ。と、そうも思うけれど、しかしこれを根掘り葉掘りいじめたりいじめられたりして、それによつてねちねちと醸しだされる閨房のよさは、またそれとは別

2

これで僕の小説はおしまひであるが、この夫婦はいつからともなく、その性生活がアブノーマルになつていたのだ。変態的である。それがこの夫婦の、幸不幸かは、第三者には判断いたし兼ねるけれど、最初から、このいきさつを知っている僕のところへ、その画家の細君が、ときどき、身上相談風な手紙を寄こすのだが、その手紙を読むと、この夫婦のその後の変態的な性生活も想像され、今や、「病膏盲に入る」の喩どおりではないかと思われるのである……。

夫婦の寢床で、夫の、その根掘り葉掘りの質問。勿論、最初のうちは、この細君もそれを泣いて嫌がった。身を咬まれるように辛かった。が、それがいつからともなく、微にい

り細にわたつてねちねちと質問しながら、夫婦が次第に亢奮していくことがわかった。その亢奮が、そのまま、彼女自身の肉体にも生理的に影響して、自分も一緒に亢奮していくことに気がついた。

「へえ！ お前は、二度目のあいびきで、あいつに、もう、そんなことまでしてやつたのか。この可愛い唇で、か？」

と、彼女のその唇を、血の出るほど噛みつかれたこともあった。

彼女の白い餅肌。それは娘時代から彼女にも自慢の肌だった。その美しい肌に、ところきらわ

ず、アザをつけられて、子供たちと一緒に入浴するのさえ困るようなこともあったが、噛まれたり抓られたりした瞬間は、痛いツと思つても、それがまた、彼女自身の亢奮になつ

ていることを自覚した。

「あの晩の、あいつとの話を、もういちど話してみろよ」

「あの話なら、もう、何遍も話したじゃない



の？」

「もう一遍聞かせろよ」

と、夫は何度も同じ話を聞きたがつた。白状のアンコールである。この不貞は、僅

々半年ぐらいのことだったから、あのよう根掘り葉掘り質問されたのでは、最早、その「話の種」も盡きていたのだった。自然、話の蒸し返しということにもなる。が、そのアンコールではいつか夫も亢奮しなくなつてしまった。

「全然、インポよ。私、どうしたらいいンでしょう」

その相談を僕のところへ持つて来た。

「話を、ひとつ、ネツゾウしたら？」

「だつて私。小説家じゃないンですもの。つくり話なんか出来ないわ。それに、これには男という相手があることなんですから、仮名にしてみたところで、根掘り葉掘り、あのねちねやる主人が、それを仮名のままで聞きのがす筈ないわ。駄目よ」

それが駄目なら、事実、姦通するより外に方法がないのである。而も、そのことの六ヶ敷さは、これを夫に予告したり、或はおツツひらだつたりしたのでは、全然効果のないのがわかつていたことである。この姦通は飽くまでも内緒事で、それが何かの機会に、夫にわかるのを待つて、叱られる、泣いて詫びるという経路をとり、その揚句、夫婦の寢床で、いじめたりいじめられたり、例の、夫のねち



ねちが毎夜、蒸し返されて、この夫婦はその性生活が軌道に乗ってくるのである。

この画家の細君はその方法をとったのだ。

その後、彼女が僕のところへ寄こした手紙の一節に、

「私にも、自分自身でいろんなことがわかってきたわ。世間では、私たちを恋愛結婚と云っていますが、私はとても情にもろい女で、与えてくれる愛情を拒むことが出来ないたちの。今の主人と結婚したのもそれだったの

よ。そして、私は非常に意志のない女。この

男は嫌いな奴だと思つても、その人が私に愛情を持つておれば、いつのまにか好きになつてしまいますの。だから、私を誘惑するなんて何でもないことなのね。それから、私にはちよつと残酷なところがあるのよ。愛する人を苦しめる。裏切る。その愛する人というのは、勿論、主人のことよ。それが面白いわけではなくて却つて自分で苦しむのですけれどそれならそんなことをしなければいいのに、

私は余程、自分で自分を苦しめるのが好きなのね。わざとそのような原因になることをして、その罪悪感に浸ることが楽しみなの。この場合の楽しみとは苦しみと同義語よ。一般に妻が浮気をするのは、夫の愛情が不足だからと云いますが、私は主人に、これ以上の愛情はないと思われるほど愛されています。夜のことでつて主人は決してエゴイストではありませんのよ。その点では、主人ほどにこれまで私を愛してくれた男はない。そして、私もまた主人を愛していますわ。何の不足もないのに、まだ、何かを求めようとする私の不自由のない奥さまが万引をするようなものよ。これが私の性癖になつたのね。悪い趣味ですわ。自虐的というのか知ら。女蕩しの男でも、それが却つてその男の価値を高めるようなことがありますわ。でも、淫乱な女は、自分では男を瞞したつもりでいて、その実、男たちは内心、その女を軽蔑したり、興味の対象としているに過ぎませんわ。それがわかつていながら、私は今、ひそかに悪いことをして、その罪悪感を楽しんでいるのですわ。何だか、ただ、それだけのようないい気さえいたしますの」云々。

その二人目の姦夫の名前が、頭文字ながら

僕にも甚だ意外な、あの男かとわかるように書いてあつた。

何ンという不幸な女だ！　これが彼女の、「性癖」とあつては、一生、彼女は恐らく、男の真実の愛情を知らずじまいだろう。勿論夫の愛情は「男の愛情」というものではないのだ。それは妻の愛情が「女の愛情」と別のものであると同様である。

3

この二度目の姦通も、程なく、夫にわかつたらしく、これがその時の彼女の手紙。

「主人がこんなにあつてくれてるのに、私はほんとに悪い妻だと思ひます。不義が見つけられれば否応なしに貞淑になることを誓わせます。心では舌を出しながらも表面は泣いて悔悟しなければなりませんのよ。それを見て夫はやつと安堵します。そして当分は、いや、このまま出来れば（これはまだ確信のない自問自答ですけど）貞淑な妻であらうと決心したわけですよ。自分乍らあふなものですけど。ほんとに一時的なものかも知れないわ。遊蕩児が結婚した時だけ、流石に、よい良人になろうと思うものと同じかも知れないわ。こんな妻を持った主人が可哀

いそうよ。でも、妻に浮気をされないかと、始終、ビクビクしている良人。これも私たちが夫婦がいつも新鮮でいられる理由の一つではないか知ら。一体、浮気をするような人妻の夫は、そんなことを想像さえてみない薄のろと相場がきまつていっているのではないか知ら。ところで、私の主人ときたら、異常なほどにその点、神経過敏な男。そのカンの鋭さ。こわいぐらいですわ。主人に云わせると、私の顔色ひとつで何事かあつた時はすぐわかるそうよ。私の落度というよりも主人が敏感過ぎるのよ。だが、こんな主人の許で、何事か企てたのですから、余程、私は冒険好きと云えるでしょう。このつぎ、お眼にかかりました時、そんな私を叱つて下さいね」云々。

ところが、僕はこの画家と古い友人だからよく知つていられるけれど、彼もやはり御多分に漏れぬ、「薄のろ」で、彼女の内緒事の色恋を傍観していて、そのような実例なら僕はいくらでも並べてみせることが出来る。が、彼女は、その夫を、こわいように敏感だと云うのだ。即ち、そのこと自体が、彼女が一種の暗示にかかつていいる証拠のようなもので、これはまた、かかるアブノーマルな夫婦の性生活がならした必然的な帰結であらうが、彼女

には自分自身、それにも気がつかないでいるのである。

案外、戦後の一つの世相として、かかる人妻や、こんな変態的な夫婦生活が世間には多いのではないだろうか。解放された性生活の過渡期の産物かも知れない。僕はかかる夫婦を姦通病と名づけてみたい。一種の変態的な病状である。

(終)

愛讀者通信

小生は当年二十八才の独身のサラリーマンです。

常々マゾの傾向のある独身の女性と、御近付きになりたいと願つてゐます。十七才から三十三才位まで。絶対満足を与える自信はあります。是非どなたかお友達になつて下さい又ザド的な女性でも結構です。現在小生の周囲には慾求を満して呉れる相手がなく、空想のみにて日々をもんもんと生活して居ります横浜の櫻井さん。神奈川のSさん、是非御交際下さい。他に東京の佐渡氏、と御文通願えれば感謝にたえません。又マゾのサークルをお持ちになりたい同好の方、誌上御連絡下さい。

(東京 H・O 生)

玲

子

十

二

ヶ

月

月

— 其の二 —



え

お吉は了海の濁った眼が淫らな光を帯びて来るのを悟った。

熟柿くさい息を吐きながら了海はニタリニタリといやらしい笑いを口元に浮べているのである。

「そ、それぢやあ、伊之さんが怪我をしたつてえのは、あたしをこんなところえ連れ出す爲の罠だつたんだねッ」

「えへえへッ。今頃それに気が付いたのぢやな、伊之助でうて気の毒ぢやが、振られ続けたこの儂の煩惱の火はお前でのうては消えぬのぢや。お吉、今夜は歸さぬぞよ」

「ち、ちくしよう！。あたしの身体にちよつとでも触れたら、そのいやらしい眼の玉をえぐり出してやるからッ！」

裾を踏まれて転がつたお吉の手には、いつの間にか簪が逆手に握られている。

「うふふ。そのようにピンシヤンするところが儂にはたまらぬのぢや、今のうちにうんと毒付いておくがよいぞ、もう直ぐその同じ唇から極楽往生の泣き声を出させて墓場の無縁佛の回向にしてやる、うふふッ。」

了海の懷から落ちた麻縄が蛇のように破

れ疊を這つて一瞬のうちに、お吉のからだに巻き付いてきた。

「あッ！」

叩き落された簪が月の光に蒼白く光る。

「くやしいッ！」

了海が膝がしらで背を押しつけられ、お吉は必死になつて身をくねらせもがいた。ずるずると引き剥がれてゆく胸元から、夜目にも白い素肌が匂つて、了海の好きごころをかき立てる。ひしひしと肌に喰い込む紐目には、その一巻き一巻きに了海のかなわぬ恋の恨みが籠つてゐるのだ。

——あッ伊之さんッ——

自由を奪われてゆく口惜しさのなかで、お吉は伊之助の名を呼んだ。

「こうしてしまえば急ぐこともあるまい、えへへッ、ゆつくり般若湯でも飲みながら生きた月見と酒落ようかい」

了海が意地の悪い言葉をのこして酒を取りに立つたあと、裸に剥かれて柱に縛られたお吉は、蒼白い月の光りの中に人魚のように身をくねらせていた。羞恥と惱乱の脂汗をうろこのようにキラキラと光らせながら——。

画と文、喜多 玲子





ぐろてすく藝談・第二回

鶴屋南北

「四谷怪談」鑑賞

正岡容

鶴屋四代目南北——所謂大南北の怪奇さ猥雑さを談るとすれば、やはり不朽の名作「東海道四谷怪談」を、筆頭に挙げねばなるまい。

浅草藪の内の按摩宅悦住居の地獄宿即ち淫売宿の場面で、小さい衡立を真中え置き、蒲団を二つ敷き、屏風を立て、行燈を暗くして割り床の風景を実地に見せるところがまづ大膽。ここでお店者の彦兵衛と通人の文嘉とをひどく拙い顔をした淫売が、或はわかく、或は老けて別人のように扮装して、大びらに廻しを取るのもさらにまた大膽である。ところで三村竹清氏の「江戸地名字集覽」に拠ると、藪の内は「浅草山の宿」であるさうだ。

そこへ小間物屋に姿を変えた赤穂の浪人佐藤与茂七が、これまた女を買いに来ると、行燈え風呂敷をかけて暗くしたところ

え案内される。与茂七へでて来た相手はお袖とてわかく美貌でたつたいま金まで呉れて口説いた直助権兵衛をも振りどほした、晝は浅草観音境内の楊子見世の女であるが、行燈の灯が暗いから与茂七には分らない。で、

與茂七。ちよつと行燈を。

そで。アアモシ、灯をおつけなさらずとも。

與茂七。エエ、恥しいか。畜生め。

と云うようなやりとりがあるが、然るにお袖は、貧苦な浪人の父を助け度いたための隠れての勤めゆえ、一いつ寝いたします事は「許して呉れと云う。

與茂七。ハハア、云いなつけでもあると云う事か。

そで。エ……イエ、さういう訳でも。

與茂七。そんなら何もいいぢやアねえか。

そで。でも、どうぞこればかりは。

與茂七。ハテ、悪い合点だ。

そで。アレ、およしなされませ。

と飛退くはずみに行燈の風呂敷が落ち、

與茂七。ヤア、そちは女房。

そで。お前は与茂七さん、面目なうござんす。

とはじめて分り、やがては互いに怨み合う。この相愛の美しい夫婦は、主家没落後、別れ別れに行方不明になつていたのである。

しかし、諒解して仲が直ると、

そで。こちの人、ほんに夢ではないかいなあ。

與茂七。夢ならさめるな。

そで。オオ嬉し。

と縫りつき、互ひの懷中へ手を入れ、こゝで直助がよこした財布に気が付くので、

與茂七。して、この金は。

そで。その金は……マア寢て話さうわいなア。

と屏風のうちえ入る。かくて幾とせ振りで再会した二人がいかに激しく惱ましく相抱いたろうかは、やがてでて来た直助が聞き耳を立て、気を悪くして口惜しがることでも分る。

耐り兼ねて直助は金を取返し、お袖と与茂七は町名の藪の内に、かいた提灯を宅悦から受取ると、

そで。サア、モシ、こちの人

與茂七。今宵は内でしつぽりと。

と久振りで会つたこの二人が、いまし方のたつた一どの抱擁ぐらいでは到底満足できないのも亦、極めて当然至極である。

次いで浅草象潟富士神社にちかい裏田圃では、藪の内の提灯を目当てにあとから追駈けて来た直助が、

直助。恋の仇の佐藤与茂七、宵の意趣、思い知つたか。

とトドメを刺し、無惨に出刃で顔の皮をも剥ぎ取つてしまふ。然るに暗闇の悲しさ。これが与茂七ではなかつた許りか、なんと直助が赤穂で下男奉公をしていた旧主人の奥田庄三郎だつたのだ。庄三郎は非人に姿をやつしてこの辺りに住み、かねて仇の様子を探つていたゆえ、もちろん与茂七とは同志であつて、これから探り得た仇の動勢を遠国に待期中の人たちへ報せに行く云うので、お袖をひと足あとに遅れさせ、ひとり訪ねて来た与茂七は、悟られぬよう互いの服裝を交換し、そのために庄三郎、非業の最後を遂げたのである。

それにしても直助が旧主を殺害、顔の皮を剥いだとたん、はや血だらけになつた四谷左門を民谷伊右衛門が追駈けて来て殺してしまふ。左門、元來伊右衛門の女房お岩の父なのであるが、彼の性格素行を嫌つて断乎娘を取戻したため、その意欲で殺された云うわけ。この、同時に同じ場所で二つの殺人事件のダブルと云うわけ。伊右衛門も赤穂家臣であるため直助とは顔見知りで、

直助。丁度揃つた人殺し。

伊右衛門。よく似た事もあるものだ。

と快げに語り合う。

折柄、お岩と袖が共に来て、声掛けた伊右衛門と直助から父左門と与茂七のそれが屍骸だと聞かされ、声上げて姉妹は哭きだす。直助は直助で嘗ては同じ家中の娘だつたお袖を最前口説き損ね、間もなく与茂七が殺されては当然疑いはこの自分にかろうからと切腹しかける。

で、伊右衛門は押止めて、その量見があるならばお袖に助太刀して与茂七の仇を討つてやれ、自分もきつと舅の仇を討つと云うのが、もちろん此は姉妹がやつて来た咄嗟に絞つた彼らの悪智恵で、泣く泣くそれをお岩たちが承諾すると、伊右衛門と直助は顔見合はせてニツコリ舌をだした上、さらによよと死骸え取纏つて崩れ泣く姉妹をよそに、「指先でヨイヨイヨイとめる思い入れ」で「幕」になるなど、大南北の悪の華が益々色濃く乱れ咲いていよいよおもしろい。

伊右衛門宅の場では、先づ下男の小佛小平が旧主で難病の小汐田又之丞を助けむためソウキセイなる名薬を盗んだ科で、秋山長兵衛らに小鬘の毛を抜かれ、十本の指を折られる。

間もなく伊右衛門は隣家の伊藤喜兵衛の娘お梅に想われ、婿たらむとするので、出産直後のお岩に辛く当り、入質するとして無理に蚊帳を持出し、止めるお岩の指の爪が剥れて血だらけになる。その上、伊藤家が血の道の薬と偽つて届けて来た毒薬でお岩は世にも怖しい顔になるので、近頃同居している宅悦から一部仔什を聞いて逆上し、隣家へ礼に行くと例の髪梳きの章りへつづく。ここでは梳ると「髪」の毛の中より血汐、タラタラと落ちたりする。

お岩。思えば思えば、エエ、恨めしい。一念通さで置くべきか。

叫びながら立上がり、ヨロヨロとよろけるとたん、伊右衛門に脅されて最前宅悦が、拠所なくお岩を口説いたとき、あはや彼女に斬られかけ、鴨居へ突きささつたままだった刀が落ちて来て「お岩の咽喉を貫く」

このあと忽ち障子が血だらけになり、大きな鼠が逆に猫を咬えて走りいで、猫は死んで疊へ。鼠が鬼火となつて消える怪異に至つては南北ならではの悠久に新鮮で奇抜な戦慄であると云えよう。

そこえかえつて来た伊右衛門が戸棚から小平を引出し、「くたばれくたばれ」とズタズタに斬殺し、お岩と二人、戸板え打付けて水葬礼にしろと命じると、小平の両の指がみな蛇となつてうごめくのも物凄しい。

このあと、花嫁のお梅が祖父の喜兵衛に連れられて来てお床入りの場面では、

伊右衛門。さてこれからは新枕。

ト凄き合方、時の鐘になり、一と間の屏風をあけ、お梅どの、さぞ待遠で。

と囁くのだが、先づ古今東西の汎ゆる文學をつうじて、このように凄惨な初夜を描いた作品はあるまいと、いつも私の愛誦して熄まぬところである。お梅の顔がお岩に、喜兵衛の顔が小平に見えて伊右衛門に首斬られ、数多の鼠が群がるのは怪談としてはやや常套だが、小平が赤ン坊を喰殺し、口を真赤にし



て、「薬下せえ」と叫ぶ幻はたしかに凄い。

かうしたら筋を追つていては際限がないから、先を急がう。お岩小平の戸板が流れ付いて、釣糸を垂れていた伊右衛門に代る代る怨みを云う隠亡堀は、いまものこる本所柳島の十間川のながれの末であると聞くが、

小平。お主の難病、薬を下され。

とまたしても片手を差出す小平の亡霊が首え青い藻をかぶつてい、伊右衛門をして、

伊右衛門。鳶鳥の餌食となり、業が盡きたら、佛になれ。

と叫ばせるのも凡手でない。

師、吉井勇には、

君知るや隠亡堀にただひとり鰻搔く身の深き嘆きを

と、鰻かきになつてここでお岩の形見の櫛を拾つてかえる直助権兵衛を諷つた歌が、嘗てあつた。

深川三角屋敷龜住町はお袖と同棲している直助権兵衛門の家
の場で、権兵衛のような極悪人が仇の手がかりが知れぬため、
惚れ切つているお袖を、未だに暴力で犯せもしないのが、ひどく
近代的でいい。また偶々流しの按摩になつてとほりかかった
宅悦から、伊右衛門がお岩その他二、三を殺したと告げるの
で、それをいいことに直助権兵衛は与茂七殺しをも伊右衛門の
所業だと云うので、ここでお袖の気が変わり、はじめて直助に許
してしまふと、とたんに夫の与茂七が隠亡堀で拾つた鰻搔きの
道具の持ち主はこの家と聞き、一と足ちがいで戸を叩くなども
じつに巧緻そのものではないか。

「曾て明治座の役者達と共に、電車通の心行寺に鶴屋南北の墓を掃つたことや、そこから程遠からぬ十間堀の下流に、三角屋敷の址を尋ね歩いたことも、思えば十余年のむかしとなつた。

（三角屋敷は邸宅の址ではない。堀割の水に囲まれた町の一部が三角形をなしているの、其名を得たのである）」と永井荷風先生の「深川の散歩」にはある。

お袖が決意、直助と同衾するシーンは、

そで。親と夫の百ヶ日、けうが過ぎたら今宵から、約束通りお前と女夫に。

直助。そんならおぬしは、帶紐といて。

そで。アイナア。

にはじまつて、

そで。そんならわたしや、一つ飲まうわいな。

トまた手酌で飲む。

直助。イヤ、こいつは素的に、今夜は大分出来がよい。

そで。わたしやモウ、氣がもめてならぬによつて。

ト直助にしなだれるこなし。

から、

直助。コレ、今に仇は討たしてやるワ。

ト唄になり、直助、お袖の手を引き、そこに立てまはしたる屏風の中へ入り、引き廻す。

と、憎いほど婉なのである。

ところで、この日が丁度前の寺でお岩小平の葬いのあつた日なので、その寺の櫓や線香を売っているお袖のところえ小平の

戸板え釘付けにされた着物が持込まれて干されるし、なぜかお岩の着物の方は近所の古着屋の手に入つていて、これまたお袖に洗つて呉れと持込まれるので彼女は洗濯桶へ漬けておく。鰻一疋漁れなかつたとかえつて来る直助権兵衛はまた、こんなものを拾つたとお岩の櫓を拾つて来るのだから、先づこれで一応怪談の道具立ては揃つたわけである。

先づ真ッ先に洗濯桶のなかから、ニユーツと白い細い手がでて直助の足を握む。おどろいて彼、手の櫓を落すと、怪しの手は消えてしまふ。

つづいて直助が最前の櫓を質入れしようとする、またスーッとし細い手が盥からでて彼の手を握るので、今度はポチャンと盥のなかえ落してしまふ。

流石の直助がおぞ毛を振つて、今度はお袖に盥のなかを探らせるので、何気なしにお岩の着物を振つて見ると、はじめはポタポタ滴つていた水が、俄にサーツと血に變つて無氣味にほどばしりだす。アツと着物を取落すと、突如櫓を咬へた鼠が盥からは飛出して来、佛壇え櫓を供えてパツと消える。

また与茂七が直助の家の軒に佇むところでは、干してある小平の着物の裾に鬼火が燃え、ニヨロニヨロと小蛇が絡み付く。

與茂七。ヤヤ、陰火と共に蛇の、あれなる衣類に付きまとうは、ムウ、非業の最期に世を去りし、正しく死靈……のさても不思議な。ハテナア。

となかなか怪異は怪異を生むのである。

一と足ちがい夫に顔の合わされなくなつたお袖と、与茂七

直助の出会は、

與茂七。一人の女房に二人の男。

直助。ハテナ、どつちえ札が落ちるであらう。

與茂七。そりやアこつちが先なれば。

だの、

直助。昔の御亭主。

そて。モシ。

與茂七。今宵はさぞかし。

直助。ヤ。

與茂七。おやかましうござりやしやう。

ト三人気味合ひよろしく、キツパリとなる。唄になり、お袖

案内して、与茂七奥へ入る。

だのと云つた塩梅で、かくて二世三世と誓つた夫への限りない幕情と、たつたいま犯したあやまちえの瀆罪のため、彼女は死の寸前を、さぞや烈しい愛慾の炎に全身全魂を、疼き、痺れ、焼け爛らせたことだつたらう。

なぜならお袖、このあとすぐ与茂七には直助を、直助には与茂七を殺させるからと、それぞれに策を授けて、自ら手引きをし、その夜、殊更に二人の男から斬られ死んで行くのである。

もちろん、両夫に見えた申訳なさからで、苦痛ながらにお袖の差出す書置に添えた臍の緒書を、一と目見るなり直助権兵衛は仰天して、サツと女の首を打落し、返す刀で割腹する。はじ



めて、己の殺した男が旧主の息と分り、且つ今夜ただ一ど丈け情交したお袖は、幼時に別れた現在の妹で、即ち主ころしの上に畜生道にまで陥つたからだつた。寂しいお袖よ、与茂七よ。

この間に小佛小平の父孫兵衛宅に病臥している小平の旧主小汐田又之丞の許へ、小平の亡霊現れてかの名薬を与え、病氣全快せしめる章りもあるが、紙数がないから云わない。

眉目美しいお岩と伊右衛門が、風雅な亭に憩うての色模様は、蛇山（本所中之郷原庭町）の庵室に死霊の祟りで病みさらばえている伊右衛門の夢で、この大団円で南北は妖奇作者としての手腕を、送迎応接に惶ないほど發揮している。

例えば泊りに来ている伊右衛門の母お熊と秋山長兵衛に大鼠が憑き、来合はせた伊右衛門の父源四郎は知らないうちに次の間で縊死してをり、お熊はお岩に咽喉笛を喰取られて死に、文字どほりの地獄絵なのであるが、就中、凄惨なのは長兵衛の最後で、

欄間の中よりお岩の亡霊、恐ろしき様にて、

長兵衛の頭の上へ眞逆様に下りる仕掛け、長兵衛の襟にかけたる手拭にて、長兵衛を縊り殺す。長兵衛「ワツ」と声を立てるゆゑ、亡霊、長兵衛の口を押へる。長兵衛落入る。すぐに襟首をとらへしまゝ、長兵衛の身體を宙に浮かせて欄間の間へ引摺り込む。伊右衛門はフツとみつけて吃驚し、立寄りむとするとき、天井より血汐、タラタラと落ちる。

と、寔に身の毛もよだつ光景ではないか。

ここえ伊右衛門の積悪露見、与茂七はじめ捕手の面々が追ッ



取り囲む。

立廻りのうち鼠数多現はれて、伊右衛門の白刃にまとい附くゆゑ、思はず白刃を取落すを、すかさず与茂七伊右衛門に斬附け、立廻り。

與茂七。これにて成佛得脱の。

伊右衛門。おのれ、与茂七。

ト立ちかゝる。ドロ／＼、心火と共に鼠むらがり出で、伊右衛門を苦しむる。与茂七、附け入つてキツと見得。ドロ／＼、烈しく、雪しきりに降る。この見得にて、よろしく

渥美清太郎氏に拠ると、蛇山を雪景色にしたのは、赤穂浪士が背景となつてゐるため、ラストに義士討入を添えたからださうで、従つてお岩が雪の上を歩いたびに白雪が血染になる凄さ

も見られる代りには、当然南瓜え目鼻が付いたり、盆提灯から拔出すトリツクの方は一切演じ得られなかった。但、お岩が幼児を抱いてあらわれ、伊右衛門が抱取ると、それが石地藏に変わっている怪異は、今日のと全くに変わっていない。

最後に私は、もう一ぺん荷風先生の小説「来訪者」の一節を抄して見度い。

「わたくしは鶴屋南北の四谷怪談を以て嘗に江戸近世の戯曲中最大の傑作となすばかりでない。日本の風土氣候が伏蔵している郷土固有の神秘と恐怖とを捉え来つて、完全に之を芸術化した民族的大詩篇だと信じていたからである。(中略)然るに現代の若き文学者は此の如き民族的芸術が近き過去に出現していたことさえ殆ど忘却して顧みない傾がある」

私も頗る同感である。

即ち、作者が蛇山庵室に於る筆法を真似て云わうなら、白日下大輪のむらさき牡丹に目鼻が付いたような稀有の一大作者南北よ。

ちかく「四谷怪談」以外の、いくつかの南北戯曲の名作に付いても談ろう。

——終——

『ある夢』によせて

東京 I・A 記

「風俗草紙」創刊号、第二号と心うれしく拜見して居ります。特に第二号の佐川千枝さんの『ある夢』、短かいながらもツト心を打たれました。女性の筆で書かれた女腹切の告白——これこそわたしが永い間險に描いた『夢』であつたからでございます。自殺の方法でも特に激しい肉体の苦痛を伴う「切腹」その惨たらしさをか弱い女性が、我と我が手で我が肉体に加えて行く、しかもその苦痛を耐え忍ぶ精神的な被虐感の深さ、激しさ、まことに女ハラキリこそはそのような悦虐の極地と申すべきでございます。

しかも真白き肉体の露出と立会の人々に凝視される感覚、その人々のサディスティックな昂奮を意識することが逆に切腹する女性自身の快苦を煽り、女ハラキリの凄愴美はいよいよその迫力を高めて参ります。

『ある夢』は正にそのような境地を簡潔な筆で余す所なく描写して居ります。

佐川さん。

どうか今後も美しいあなたの『夢』を惜しみなくこの誌上に写し出して下さい。あなたの魂から生み出されたこの七彩の虹は、読ませて戴く私たちをも痲れるような陶醉に誘い込みます。まるであなた自身が私たちの目前で壮烈な演技を見せて下さっているかのように——。



兇行現場における死体

暴行による死體のところに顯著な現象は、肩、腰、兩方の腕、大腿内
部などに、壓迫による皮下出血や搔傷があることである……

萩原 秀夫

強姦殺人死體に現われた 外部所見

終戦直後、連合軍が進駐した当時には、全国的そうだったが、若い娘がすくなくらず兵隊に凌辱されて、警察へ泣込む風景が見られた。いくら敗戦国の警察でも、斬捨御免的にこれを黙視するわけにはいかない。

そこで（遺憾ながら、おそろおそろという表現にあてはまるのだが）MPに連絡し、犯人を捜査すると云うことになるのだが、MPはあらかじめ犯人と目さるる部隊を調べたのち軍医を伴つて被害者を訊問し、肉体的損傷の有無を調べ終ると、傲然として、日本警察に反問してくる。

「この女には、兵隊の行動に対し、これを拒否した証拠が認められない。貞操の危機を排除せんとするときは、犯人である兵隊も負傷は免れぬであろうし、被害者にも、体部、衣類その他に顯著な損傷がなければならぬ。

それが、兵隊にも、またこの女にも認められない。故に事件は強姦とは認め難く、女は兵隊の行動を是認したものと認む」

というようなわけで、大抵の場合は、「和姦」ということでケリをつけられている。

日本では、暴力、誘惑物をもつて、又は抗拒不能、失神に乗じて婦女に暴行を加える行為を強姦と定義している。

この暴行も、法医学的には、射精を伴わなくても、情交の事実があるとき、または、コ

イトスが不能であつても、加害者のスperlumaが、被害者の駄や、衣類等に汚染していれば既遂と認められて、いるのである。

暴行のなかには、催眠術、麻酔も含まれ、抗拒不能とは、失神中は勿論、多少意識あるヒステリーの発作中とか、精神明瞭でも、手足を縛り、または猿ぐつわをかませて行つ場合を云う。

統計による暴行被害者の七〇％は十四歳以下の少女と云われ、あとの三〇％が成人女性と云うことになるが、強姦罪は所謂「親告罪」で、被害者が告訴しなければ罪とならないので、成人女性の場合は、世間態とか、その他の不利な条件の伴うことを怖れて告訴しない者も多く、実際の数は、これより遙かに多いものと思われる。

都会には、少女に対する暴行が多い。子供は僅かな金品で誘惑される。犯行中を第三者に発見されれば難を免れることもあるが、人家を離れた公園内とか、空地などで、暴行さ



|| 木田少將令嬢事件の現場写真 ||

れそうになつた少女が、恐怖に脅えて泣き出すと、殺意はなくとも、その口をふさいで窒息させてしまうこともある（小平義雄の強姦殺人事件にもこの例あり）

しかし、犯人が「殺人淫楽症」の場合であると、相手が成人女性でも局部を露出したり損傷したり死体を切りさいなんだりする。また、異常性慾者の場合、扼殺、絞殺、が附随することは、既往の暴行殺人事件が如実に物語っている。

この場合、死体に現われた外部所見としてとくに顯著な現象は、先づ被害者を裸にする、肩、腰、両方の腕、大腿内部、周辺等に、圧迫による皮下出血、または、引搔れたためにキズがあることである。さらに多くの場合、着物が破れ、スベルマや血が、附着してい

る。

少女の場合には、破裂、裂傷、その他夥しい出血があつて、これが原因で死ぬ場合もある。犯人が精神異常者でないかぎり少女への暴行は、既遂は困難となる。

十七—十八歳以上で可能の場合は、処女であれば大腿内両部に、夥しい出血を認めることが多い。

写真は、昭和二年十一月二十五日午後八時頃、東京府荏原郡駒沢町上馬四四九番地先、（現在世田谷区内）の草むらで絞殺後暴行された、退役海軍少將令嬢木田知恵子の現場写真である。

当時の記録によれば、

死体は路面から、三、四間距てた草むら中に、仰向けに倒れ、頸部に令嬢のものらしき毛糸の襟巻が、うしろから絞めつけてあり、衿（筆者註、被害者は女学校の教師当時の教員の服装は、写真のように、私服に袴、靴下をはき、靴をはいていた）の裾から両足が開き加減に露出し、腰巻（筆者註、袴の下に、白く見える）にはところどころに血痕が附着し、犯人が絞殺後暴行した形跡顯著なり。現場はさして荒らされた痕跡は認められないが、被害者は多少抵抗

したらしき形跡を認める。

犯人は金を奪うつもりで、オドカした上、首を絞めたのであるが、仮死状態になつて倒れると、裾が乱れて、ふつくらとした腿部が眼にうつり、夢中で暴行したと、逮捕後に自供していたが、暴行死体の多くは、両下肢をひらいたまま硬直しているので、強姦の有無は、これだけでも、捜査官はピンとくる。

写真の被害者の左後方に、丸い白色様のものが見えるが、これはおそらく、犯人の遺棄物であろう。暴行現場の特徴としては、大低附近に、この遺棄物がある。これから、スペルマ血液型を理学的検査によつて判定し、犯人検挙の資料とすることは、すでに読者もご承知のことと思う。

早期の死體現象

殺された瞬間の現象は「死徴」と云つて、呼吸が止り、筋の緊張がなく、顔色はじめ全身の皮膚がサツと蒼くなるが、これは、所謂「仮死」であつて、「真死」の徴候が現れるまでは、ほんとうに、死んだとは云えないわけである。「真死」の徴候とは「死斑」「硬直」「草皮様化」で、これらを「早期死体現象」というのである。

死斑

心臓が停止すると、血は重力に引かれて、地球の中心の方向へ落ちていく。しかし、床に身体が触れているところ、即後頭部とか肩とか腰などは、床から圧されて血が降りてこられない。これらの間の、頂部とか背中に死斑ができる。窒息死や急死では死後二〇——三〇分で、すでに頂部から頸の両側へかけて死斑が生じる。背中也然りでこれが出れば、もう完全な「真死体」であるしかし頸動脈を切られたり、大出血があると死斑は出にくい。

死斑は四—五時間で死体の位置を変えると新に下位になつた方へ移り、もとの方は消えるが、八—九時間後、つまりすでに浸潤性死斑が起きると消えない。

口絵に掲げた写真は、十五六年前にあつた靖国神社境内の殺人事件の現場写真であるが腹部、及身体の前部に、死斑を認めることが出来るから、この死体は俯伏せになつて殺害されたことが推定できる。

この事件はいまもつて迷宮のままだが、勿論被害者もどこの誰だか判つていない。

写真の死体が全裸であるのは、勿論外傷の有無の証拠写真を撮影するために裸にしてあるのだが本事件の場合は、実は被害者は、裸

の上に、被害者のものらしい着物で覆われていたのを発見されたのである。

つまり犯人は、現場以外の場所で被害者を絞殺し、裸にして、つぎに述べる死体硬直後の死体を、紐で縛つて、現場まで運び、遺棄したことが推定されたのである。

死體硬直

死体硬直というのは、筋肉の死後変化のことである。これは、生前における、筋の収縮と同じ現象である。

筋のなかの糖源が分解して乳酸が出来、これが酸素に遭うと更に分解して、生前の体温の源となるのであるが、死体ではこの循環がなくなり、乳酸が安定するから、筋の収縮作用が益々強まる。死んだとき、姿勢そのままに各関節の筋肉がコワバるので、死んだときの姿勢がわかるのである。写真の被害者は、おそらく両腕を横にひらき放したつたので、運搬が不便のため、紐で腰と結びつけたのであらうと思われる。この紐がサジズムと云われる、加虐性変態性慾者の、病的による行爲でないこととは肯定できる。

硬直は死後二—三時間に始まり、夏なら四十八時間、冬で七十二時間で解ける。

草皮様化

と云うのは、死体の皮膚が乾いて指で触れてみても、カチカチ

になつていて、暗色を帯びた状態をいうのである。

これは、死後皮膚の角化層の傷ついたところ、その角化層が水分の浸潤で粘膜的とされたところでは、水分の蒸発が、ほかの完全な角化層のあるところより、顕著な革皮様化、つまり、カワのコワバリをしめす。

この現象によつて、そのキズの部分が、生前のものであるか、死後のものであるかは鑑別できないが、外力の加わつた痕跡を忠実に示すことと、これは生前には起らないので、法医学上大切な極め手とされている。

後期の死體現象

腐敗 腐敗というのは、死物寄生の細菌の活躍で、死体組織が崩壊することである。

人間は大腸の中には、細菌を寄生させて、繊維素の様な消化しにくいものの消化を助けさせているので、誰の体内にもこの細菌がいるわけなのである。生れたときは棲息していないが、生後十二時間もあれば、大気を吸いこの空気で腸全体に細菌が移ってくる。

だから、子宮の中で死んだ胎児は腐らない。何故ならば、細菌がいらないからである。

この寄生虫たる細菌が因となり、温度、湿度、気流の条件と結んで腐敗を起すのである。

二〇—二七度位の温度がもつとも腐り易く零度では絶対に腐らない。

昭和二十一年八月十七日午前十一時頃、東京都芝区芝公園二号地西向観音山中腹から発見された、緑川柳子(17)の強姦死体の犯人は、申すまでもなく、変態淫虐鬼と云われた小平義雄である。

被害者柳子が、小平に強姦の上殺害されたのは十日前の同月六日午前十時頃だったが、夏季のためと、死因が絞殺による窒息死のため、死体は血が活動性であるから細菌を持つた血が末梢へガスの圧力で送られ、皮下でさらに盛にガスをつくる。このため皮膚がふくれ上つて巨人のような観を呈し、当時の十七歳と云えば、現在の十五歳なのだが、腹部、大腿部ともに異常に大きくふくれ上つて見えたものである。

蛆虫

死体の腐敗がはじまると、その臭気です。肉蠅、シマ蠅が集つてきて、体温の滲んでいる入口のスキに産卵し、春秋の頃では二十四時間で蛆になり、盛夏だつたらすぐに蛆となる。蛆には歯がないから、口で

消化液を分泌して、周囲の組織を解かし、それを吸収する。鼻口から入つた蛆は脳を食い下へすすめば胸部内臓を平げる。

キズがあればそこへ産卵蛆となる。写真の頸部に蛆虫蝕のあとを明確にとらえることが出来るが、おそらく、ここは扼殺による負傷個所だつたのではなからうか。

左大腿部内側にも蛆虫蝕を認めることが出来る。精液その他血痕附着の部分に産卵し、孵化したのであらう。

蛆の長さで、死後時間を推定することもできる。その長さ4cmならば死後四—五日の間ならば約一週間と鑑定して、ほぼ適中する。

その他、晩期現象としては、木乃伊化、屍蠟化などあるが、紙数がつきたので、またの機会に述べるとする。

(終)

愛読者通信

私は二十七才の青年ですが、異性には何の興味も感じません。四十才五十才位のインテリの美男子を望みます。まだ一度も好む相手がありません。片想いで満足しています。誌上御便り下さい。

(鹿児島 FM生)

特集・病癖に憑かれた若き處女の手記

惡 臭 地 獄

そして、手にとつた時、もうあのなんとも言いようのない臭いが、ブンと鼻をつくのです。なんの變哲もない、キヤラコのパンツですけれど……

北 原 ミ ド リ

食事が済むと、私は廊下の藤椅子に腰をかけて、雑誌をひろげました。

店と奥との食事の跡かたづけに忙しい女中たちの眼には、「お嬢はんたら雑誌でも読まはつて、気楽なこつちや」と、羨しく写つたかもしれません、実は私はそれどころではないのです。

この廊下は茶の間の左側で、ここの藤椅子にいと、すぐ右から鍵の手になつて、店に通じる廊下が見通しなのです。つまり店の者たちが御勝手、又は浴室に行くとすれば、必ず私の眼にふれるわけなのです。

私はひろげた雑誌の活字など、ロクロク眼

に入りません、今か今かと、店の者たちが入浴するのを待つていました。奥の者はもう入浴が終つたのですし、そろそろ店も一段落の頃です、交替で浴室に来る筈なのです。

実は始めに説明しなければ判りませんが、私の家は大阪某町で海産物の問屋をしており、私が生れた頃には二十数人からの番頭手代が居りましたが、今では全部で十一人の店の者が居ります。

家族は両親と妹一人ですが、母の方針で私と妹は、女中たちの世話にはなつても、あまり店の者たちとは接触せぬようにして育てられました。と云つても、勿論一つ屋根の下で

すから、時には遊び相手にしたりも致しましたけれど……。しかしそれも、私がこの春、女專に入学した現在では、私の方でも店の者など眼中にないと云つた態度をとりますし、先方の方でもひどく遠慮して居ます。

その私がこうして、さり気ない様子ながら実は焦々して、店の者たちが通るのを待つてゐるのは、可笑しな話なのですけれど……。

漸く店の方から誰か来たと思うと、一番番頭の中畑でした。小腰をかがめて私に挨拶しながら通りすぎると、浴室に入つた気配でした。私はがっかりしました。もう五十過ぎたこの老番頭が相手では、さすがの私も、危険を冒す気にはなれません。

この番頭と入れ違いに浴室に入つたのは、古くから居る浩助と青木だつたのです。浩助は二十四だつたと思います。青木はたしか二



ッ三ッ歳上なのではないでせうか——。私は
いよいよと思つて緊張しました。

この二人にも、勿論他の女中たちにも気づ
かれないように、私は脱衣所に入ろうと云う
のです。藤椅子から腰を浮かしながら、時機
を待っていますと、動悸がして苦しいくらい
でした。一瞬ためらいましたけれど、なにか
大きなものの力に引きづられるように、私は
脱衣所の前に立つていました。

人目がないのを見すまして、戸に手をかけ
ます。この戸はスリ硝子の入った、かなり重
い戸ですけれど、そのワリには音をたてずに
明くので助かりました。一尺ばかり明けると
私は必死の思いですべり込みました。

物堅い商家のことで、脱衣所などはひどく
暗く、五燭ばかりの電気が、一坪の板の間を
照らしています。影がうつる気づかひはない
と思いましたが、私は小さくなつて、そ
の板の間にうづくまります。なにしろ、つい
鼻の先の戸の向うでは、浩助と青木がなにか
声高にしゃべりながら、心地よさそうに湯の
音をさせているのですから——。

それから夢中です。二つ並んだ脱衣籠の
手近の方にかぶさるようにして、衣類を掻き
廻しました。ゴツイズボンが手にふれたので

それをのけると、白いアンダーシャツが手に
ふれました。もうその時は普段の私ではあり
ません。

いきなりそのシャツを顔に押しあてます。
でも、私はその時にはかすかな失望を感じま
した。僅かに汗の匂いはしますが、そのシャ
ツはまだ着更えて間もないらしく、期待した
ほどの臭いはないのです。パンツも同じでし
た。

ガツカリしながら、もう一つの籠を捜しま
した。こちらの方も案外清潔でしたが、どう
したとか、パンツが見当りません。風呂の
中の二人にハラハラと神経をつかいながら、
夢中で捜しますと、それは小さく丸めて、ズ
ボンの中に押しこんでありました。

そして、手にとつた時、もうあのなんとも
云いようのない匂いが、プンと鼻を衝くので
す。なんの変哲もない、キヤラコのパンツで
すけれど、全体にうす汚れて、相当永い間穿
いていたような……。

それに、暗い電気の下でもそのパンツの股
に当る部分に、明かに見られる、沢山の黄色
っぽいシミの跡——。そこは布地がカバカバ
になるほど、堅く乾いているのです。
その沢山のシミの跡に顔をくつつけると、



瞬間「ああ——」と声が洩れそうになるのをやつと呑み込みました。なんと云う強力なその臭い………牀中がジーンとしびれて仕舞うのです。きつと世の常の方が、たぐい稀れな薔薇の芳香を嗅がれた時、いえ、私にとつてはそれにも勝る陶醉なのです。その時突然、「ああ——」と大きな声が風呂の中からひびくので、私はドキリと逃げ腰になりました。それは声自慢の青木が、精一杯の声で流行歌を唄い始めたのでした。しかし、こんなところで愚図々々してはいられません。私は一度パンツを籠に戻して、戸口を出ようとしたが、後髪をひかれるようで、どうしても思い切れず、トッサにそのパンツをスカートの下にかくしてから、廊下に忍び出しました。二階の自分の部屋に戻つてホツとすると、全身ビッシヨリの汗です。私は明るい電氣の下でパンツをひろげると、ゆつくりとその汚れた部分を眺めたり、嗅いだりしました。なにしろつい先刻まで、若い男性の肌についていたのですから、その体が分泌する臭気がまだとても新鮮で、私にはクラクラするほどの刺戟なのです。又、指でハジけば、パンパンの音がするほどにも堅くなっているのが不思議でもありますし、又とても興味を唆る

のです。

私は一枚のパンツによつて、アレコレと妄想を逞しくし、一日中でも飽きない娘なのです。そのためにこうして、人の肌膚を盗むような、恥かしい所業さえするようになつたのです。

こんな行爲が破廉恥だと云うことは、誰よりも私自身が一番よく知っているのです。でも、肌膚にしみこんだ体臭を嗅ぐことの誘惑の方が、幾倍も強く私を支配するのです。今日のこと、前々から夢に描き、幾度かためらつた揚句、やつと実行して思いもかけず汚れたパンツを手に入れることが出来たので、私としては、天にも昇る気持なのです。

しばらくパンツに顔を埋めていましたが、急に私は、こんなにも私を喜ばせてくれたこのパンツの持主は誰だろうと思ひました。それは青木か浩助には違ひないのですが——。それを確かめたくなくて、私は急いでパンツを簞笥の中にしまつてから、階段を下りました。

下では丁度二人が浴室から出て来たところらしく、姿は見えませんが、喋りながら店の方に戻つて行くのです。

「そやけど、どう思つても不思議やなあ……」

「お前が思い違いをしとるんや。きつとパンツ穿いとらなんだのやろ」

「そら違ふ。俺は確かに湯に入る前に脱いだんやぜ？」

ムキになつてそう答えたのは、たしかに浩助の声でした。

「阿呆らしい、脱いだもんならちやんとある筈ぢやないか、他の金目のものと違ふて、お前の汚れたパンツなんぞ持つて行く酔狂者はあらへん」

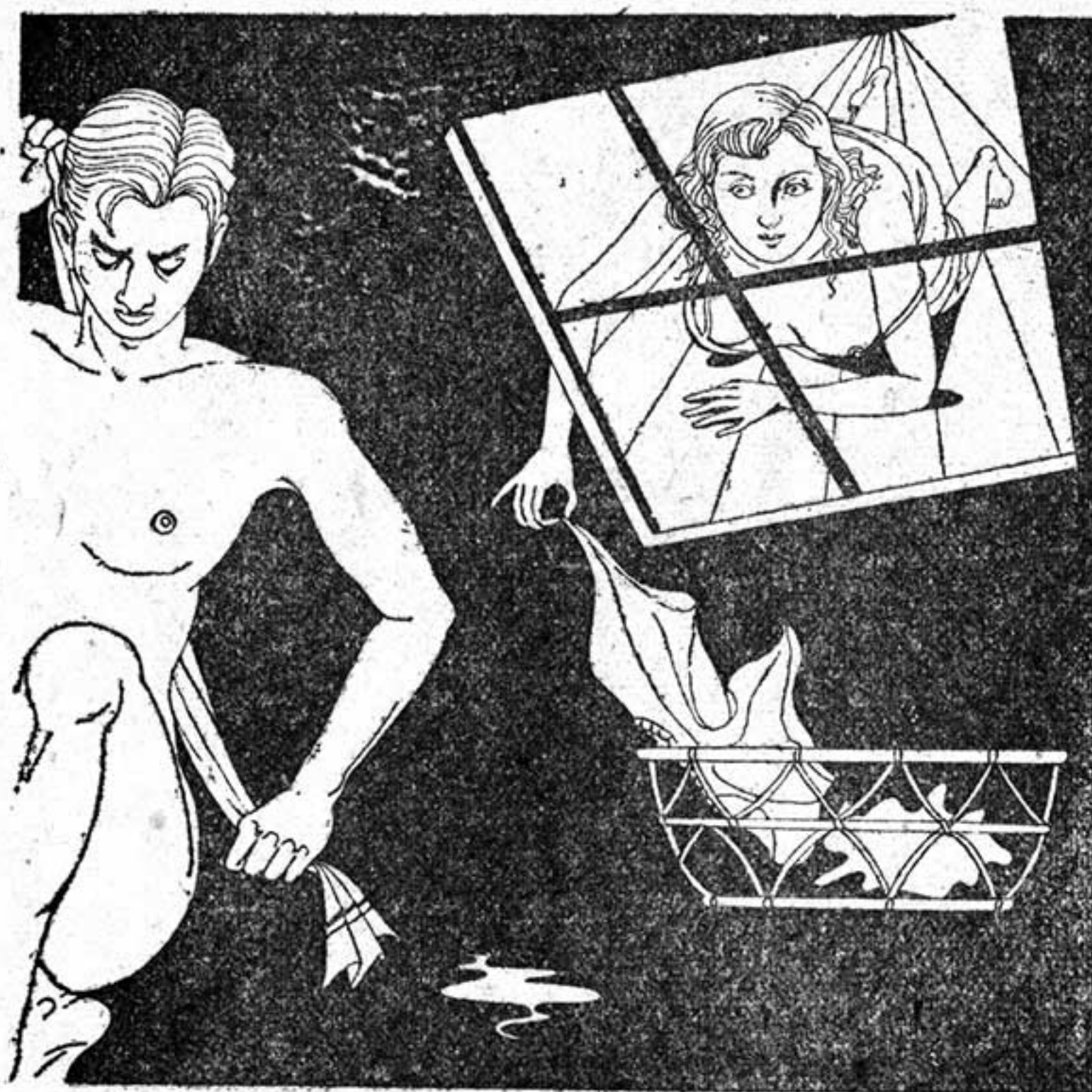
「そらそうやけど……」

「どや、お前のパンツ、せいだい汚れとつたんやろ？ そんなら奥の猫が、えらい仰山な匂ひがする思つて、くわえて行てしもうたんかもしれへんぜ？」

どうやら猫の仕業ということに落着いたようで、私はホツとしました。

その晩はとても楽しいものでした。私は早くから自分の部屋にこもると、まづ襖にこしらえた鍵をかけ、窓にはカーテンをひいてしまひます。こうすれば誰に覗かれる心配もありません。

それから六疊の部屋のまん中にお床をのべて、寝巻に着更えます。そして洋服簞笥のひらき戸を開けると、そこに抽出しが二つあり



ますが、その下の方の抽出しに、嚴重に鍵をかけて私の秘密の蒐集品が、納めてあるので

それはワイシャツの空箱ほどの大きさですけれど、友禪の縮緬などを張った美しい箱なのです。誰でもまさかこんな優雅な箱に、汚れた下着などが入れているとは思わないでせ

うが、私の蒐集品はピンクのビニールの風呂敷に包まれて、この中に陰匿されているので

コレクションといつても貧弱なもので、アンダーシャツ、縮のシャツが一枚づつ、ランニングが二枚、マクラカバーが一枚、手拭が二枚だけなのです。パンツを手に入れたのは

始めてですから、その夜の楽しさと云つたらありません。

私は床の中にゆつくり横になると、それ等の蒐集品を牀の廻りに並べ、こころゆくまで、其の一つ一つの臭気をたのしみます。中にはもう本来の男性の移り香は消え、カビ臭くなっているものもありますけれど、私は惜しくて捨てて仕舞う気にはなれません。

うら若い女専の学生が、派手な布団の中で、汚れ切つて臭気のだよう肌着類を抱きしめているのはたしかに異様な光景かもしれま

せん。私はその夜、煮しめたような色の手拭を枕カバーの上に巻きつけ、浩助のパンツを顔の上にひろげて乗せて（汚れが最もひどいところが、丁度鼻の上に当るようにして）眠りについたのです。

この枕に巻いた、煮しめたような手拭というのは、少し前に電車の中で手に入れたものです。あれは夏の始めの暑い日で、丁度ラッシュにぶつかつて、凄じ混雑でした。

私の眼の前に、まるで日雇人夫か、又は浮浪者のような、汚れ切つた風態の男が立つていて、あまりひどい恰好なので、辺りの女の人たちは、一様に眉をしかめているようでした。なにしろ、其の男の牀から、ムレたような、なんとも云えぬ臭気が漂だよつてくるのです。

私は丁度その男の背中に、ピッタリとくっついて居ました。勿論、私の特別な性癖にもよりますが、なにしろ大変な満員電車でしたから……。

一番私の興味をひいたのは、その男が首にひつかけた手拭なのです。汚れ切つて、まるで茶色に近いような色の——そして男がその手拭をとつて、グルリと額の汗を拭つて今度は、ズボンの腰にだらしなくひつかけたのを

見ると。私は思わずゴクリと唾をのみこんでしまひました。

「オイ、降りるぜ、どいとくれや——」

と、男が声をかけて、前にグツと傾いた時私の手は反射的にその腰の手拭にかかつて居ました。誰も気がつきません。浮浪者の手拭は、私の赤い革靴の中に納つたのです。こんな風に、私はもう理性では押えられないのです。と云つても、こんな偶然はとにかく、外では絶対に入手は困難ですから、私の眼はやはり、家の中の男性の身邊にこそがれることになります。

割合に入手が容易な父親のものでは、さすがに亢奮がありません。店の者たち、ことにパンツの例もありますので、浩助の下着がもつともつと私は欲しいのです。部屋中一杯になつた汚れた下着の中に埋まつてゐる私を想像すると、もう、居ても立つても居られせん。

しかし、何時も何時も浴室でばかり失敬するわけにはゆきません。とうとう私は店の者たちの部屋に侵入することを考えつきました。これはやはり二階ですが、私の部屋とは別棟になつて、店の真上に当ります。階段は店の仕切りのノレンのすぐ横手でした。

私は大膽にも、店が一番忙しい時刻を見計つて、この二階に上りました。尤もしつけの喧しい店のことで、誰もそんな時間に、自分たちの部屋に来る筈はないのです。

其処は二十疊ばかりの、天井の低い暗い部屋で、主だつた番頭の二人を除いて、他の者は皆この細長い部屋に雑居なのです。左側は二間半もある押入れで、私は其処でいろいろなものを発見しました。

ひそかに想像してゐた通り、奉公人たちは店の仕事に追われて疲れていきますし、なかなか自分たちの下着類の洗濯は出来兼ねるらしいのです。名札のついた行李の中には、汚れ物がクシヤクシヤに丸められて押込んであります。

新制中学を出てすぐ来たばかりの小僧さんの行李から、とてつもなく汚れたパンツや靴下などが出て来ました。脂足らしく、靴下はキラキラするほどの脂や汚れで固まつてゐるのです。

それから浩助のらしい白格子の寝巻の浴衣も、ひろげるともうなんとも云えぬ、あのなつかしい体臭が、私の頭をしびれさせさせて仕舞うのです。浩助はガツシリした体格ですが内気で、それほど容貌もすぐれているわけ

ではありませんけれど、どう云うものか、私は、彼の体臭がとても好きなのでした。

浩助は相当ひどい脇臭わきがだつたようですけれど、私にはそれがたまらなく素晴らしいのです。その日は慾張つて靴下と寝巻を盗んで自分の部屋に引揚げました。さぞかし後で騒ぐこととは思いましたが、我慢出来なかつたのです。

一回目が成功しましたので、私はそれから周到に人目を忍んでは、奉公人たちの部屋を訪れました。露見を恐れて我慢しましたが、あまり素晴らしいのにブツかると、どうしても諦めきれず、持つて来て仕舞うのです。

珍しい汚れた下着盗棒の噂が家の者たちの間に広まつた頃には、私のコレクションは、もう箱には入りきれなくなつて仕舞いました。そして、嚴重に陰匿していても、なんとなく部屋中が匂つてくるらしく、ある時妹が、

「姉ちゃん、御部屋、なんや知らんけど、臭うてかなわんわ」

と申しますので、私は愕然としました。毎晩のようにこのコレクションを出しては、頬ずりしたり抱いて寝たりするのですから、たしかに部屋にも、私の躰にもシミこんで仕舞

う筈なのです。

それから私はウビガンの香水などを買い込こんで部屋にも自分の駄にも、スプレイでドンドン吹きつけました。なにも知らぬ母など、ごく珍れに私の部屋に來ますと、

「あてらの若い頃とは違^{ちが}うて、今頃の娘はんは、えらいええ匂ひさせはるなあ」

と笑いましたので、やつと安心しました。

その頃、どう云うものか、浩助と廊下や内庭などで逢うと、とてもなつかしい氣持がしました。私はむしろ反動的にツンツンした高慢な態度を見せたようです。もちろん先方の彼は、内氣の上に、そんな私の態度に氣押されて、小さくなつて横を通り過ぎるといつた具合でした。

だから頻々と下着類が紛失して、まさか氣位が高くて、オシャレで何時も美しいニールックで装つてゐる、お嬢はんの仕業だと思ふ者は誰一人ありません。店の奉公人たちは私が女專に通學していることすら、尊敬の対象となつていたのですから

その頃の或日のこと、学校の歸途

一人散歩がてら廻り道をして、人通りの閑散な郊外の道を歩いていました。暫く歩くと、其処は丁度道路の補装工事中で、通行止めの札が立ち、十人ばかりの道路人夫たちが、炎天の下で働いていました。

ぼんやりそれを見ていると、丁度休憩時間になつたらしく、人夫たちはそれぞれ汗びつしよりになつたシャツを、その辺りの立木などに干して、ゾロゾロと向う側の木かげに集まつて、横になつたり、話こんだり始めました。そして、私の眼の前の通行止め札にか

けられた、黄色いシャツ。それはもう昔の白かつた名残りはなく、汗のシミがまるで世界地図のようなのです。フラフラと魅せられました。辺りに人蔭はありません。

無意識の内に、手がシャツをつかんでいました。そして、革靴の中にそれを押込むと、私はギコチなく歩き出しました。さすがに、蒼い顔をしてゐたと思います。

七、八間歩いて、小さな橋のことろまでくると、急に大きな男が前に立ちふさがつたのです。



「オイ、ねえちゃん、お前、俺のシャツをどうしようてんだ？」

「あッ……」

「そんな虫も殺さねえ顔をしてやがる癖に、太いアマだ。俺あ、此処で顔を洗つて土手を上る時に、ちゃんとこの眼で見てたんだ」

もうどうしていいか判りません。まるで世界の終りが来た時のような惑乱――

「オイ、なんとか返事したらどうだ！」

「あッ！ 御免なさい！」

赤銅色の太い手で、私はグイと手首をつかまれていました。

「フン、呆れた物好きな盗つ人ぢやねえか。だがねえちゃん、話次第ぢやあ、シャツの一枚ぐらい呉れてやつてもいいぜ？」

そして、私はズル／＼と男に引きずられたのです。土手の道の上の、灌木がムンムンと繁つた草の上につき倒されました。

「どうだ？ 警察につき出される方がいいつての？」

と、凄まじいバスで囁かれるまでもなく、私は声さえも出まませんでした。記憶にあるのは、びきつた灌木の葉ごしに見た白い雲と、半裸体の男の満身の汗と、凄まじいその体臭だけなのです。

風俗草紙最近号目次

☆ 七 月 號 ☆

☆ 八 月 號 ☆

責められる女三態

喜多 玲子

妖蟲圖

喜多 玲子

男色喫茶店

かびや・かずひこ

いけにえ二題

北原 玲子

私が拷問した女

根津 明治

ぐるてすく藝談

正岡 容子

新しい責め、古い責め

上田 青柿郎

特集 囚獄の記録

安野 洋治

のぞきの悦楽

須川 夏枝

少年監獄

松尾 亮治

倒錯の手記集

眞下 光二

責められる女の表情

伊藤 晴雨

うゝるにんぐの嘆き

進藤 江利子

やわ肌を責めて

喜多 玲子

華麗な惨虐の回想

天野 鐵治

木馬責め滑車責め

上田 青柿郎

惨虐放浪記

その他 三篇

女切支丹拷問秘史

深田 徹

あぶのーまる・まにやの手記

傑作小説特集

鳥羽 瑛子

私が責めた六人の女

林 譲介

恍惚の白鳥

岩堀 瑛子

共同便所の秘密

宗方 綾子

悦楽の部屋

喜多 玲子

まぞひすとの街

吹岡 清一郎

秘密レター・サロン

園村 恵子

レスポス通信

園村 恵子

レスポス通信

藤井 晃子

傑作小説特集

藤井 晃子

そとみあ通信

大槻 久良二

みだらな指

鳥羽 瑛子

嗜虐倶楽部

その他 華麗悦楽讀物満載

まにや地獄

日夏 由紀夫

その他 華麗悦楽讀物満載

定價 下共 各百圓

定価 下共 各百圓

日夏 由紀夫

☆ 殘部僅少です。御入手洩れの方は本社宛直接御申請下下さい。

☆ 猶、御蔭を以ちまして七月號以前は全部品切れとなりました。

☆ 申込所 東京都千代田區神田神保町二ノ三四

☆ 日本特集出版社

日本特集出版社

伊藤晴雨先生著 會員頒布 價五百圓

凄艶女體 秘畫集

手梳和紙台紙付豪華艶麗彩色特型映入
限定會員頒布版 第一集 (五枚一組)
本畫集は獨特の豪華印刷の上に不世出
の名人伊藤晴雨先生が要所に直々手指
しをほどこした艶麗豪華他に類を見ぬ
ものである。

限定版につき至急
御申込み下さい

特選寫眞第Ⅱ集

會員優待寫眞の第一回撮影会を八
月廿七日東京都内にて開催致します
但十五名先着順会費二千円申込み切
日八月二十日、御申込はハガキにて

岩風呂の被虐寫眞

岩風呂に大膽奔放に描き
出された被虐の極致美幻
想に生きる女体の緊迫美
がかもし出す得も云われ
ぬ陶酔境

キヤビネ版・印畫紙
焼付三枚一組五百圓
(千共)

山間 湧き出る湯と
女體 映える湯の

特選寫眞 むせび泣く

悦虐秘聞

弊社が確信をもつて愛好者諸兄におく
る特選寫眞集は悦虐の極致をとらえた
カメラ最高の技術が如何に諸兄の胸を
打ち幻想に狂喜せしめるかを如実に物
語るものである。速刻御申込を乞う。

第一集キヤビネ版・印畫紙
焼付三枚一組五百圓(千共)

制服の女學生

特選 寫眞 第Ⅲ集

幣社の爲に特に良家の女子大
生が悦虐寫眞のカメラの前に
純潔の姿態を投げ出した、他
に追隨を許さぬ傑作寫眞集

キヤビネ版・印畫紙焼付
三枚一組 五百圓(千共)

★讀者各位の御希望により代理部を新
設致し左記書籍御希望の方は代理部宛
現金書留又は小爲替にて御申込み下さ
いませ。尚書留御送付御希望の方は書
留料加算御送金下さいませ。

晴雨隨筆 第一冊 小型和裝美幀
賣の四十八手 價一三〇圓 千共

晴雨隨筆 第二冊 小型和裝二色刷
繪物語血血郷談 價一三〇圓 千共

晴雨隨筆 第三冊 小型和裝美幀
危機一髮畫譜 價一三〇圓 千共

晴雨隨筆 第四冊 小型和裝美幀
與力同心岡ツ引 價一三〇圓 千共

晴雨隨筆 第五冊 小型和裝美幀
性犯罪と私刑 價一三〇圓 千共

紅夢樓主人著 縮刷 凸版刷和裝
美少年論 (同性色情) 價一〇〇圓 千共

峰岸義一著 B六版 二五〇余頁
千零夜 價二五〇圓 千三二圓

伊藤晴雨著 並圖菊判 和裝美本
賣の 價五〇〇圓 千三二圓

伊藤晴雨著 A5版 和裝美本百餘頁
黑繩記 價三〇〇圓 千二四圓

伊藤晴雨著 A5版 和裝更紗表紙
賣のこれくしょん 價三〇〇圓 千三二圓

伊藤竹醉編 菊判和裝美本
小説に賣の代表名作選 價三〇〇圓 千三二圓

現れた 伊藤晴雨著 價五〇〇圓 千三二圓

十二カ月行事奇態刑罰圖譜

日本特集出版社代理部

東京都千代田区神田
神保町二ノ三十四

女性だけの秘密な愛のサロン

レ ス ボ ス 通 信

そう、ひろ子さんはそういう家庭にお育ちになつたのネ。
しかも最愛のお母様が他の男と……可哀想なひろ子さん

園 村 恵 子



私の、切ない愛のおよびかけに応えてくださる方があるのは、本当にうれしいこと！

みたされない愛に悩むのが、わたくしばかりではなく、そういうひとが、方々にいらつしやつてそして、——みな、ありあまる愛にもだえているということを知る事は、何にもましての救いですわ。

ひろ子様。ひろ子様。可愛い癖のある右下りの字で便箋三枚にぎつしり書いたお便り有難うございました。

うつとうしい梅雨もいよいよ明けて、鮮烈な夏がやつてきました。

夏は恋愛の季節——青春の季節。そして、アバンチュールの季節です。

若いひとが、海に山にあふれ、あつちでもこつちでもロマンスの花がひらきます。

そのなかにあつて、恵子一人は、憂鬱です。その、人に云えぬ性の故に——。その異状な、そして苦しい愛を心に抱く故に……。

若い美しいお嬢さん達を見つめる恵子の瞳は、憂愁のかげにくもつて、孤独感に胸はしめつけられそうになるのです。

そういう恵子にとつて、ひろ子様の可愛いお手紙が、どんなにうれしかったか、察して頂戴。

ひろ子さんは、十七歳だと書いてありましたが、それでは、まだ高校へ行つていらつしやるのね。あなたのお住いになつている町は、私行つたことありませんけど、東海道線より離れているの？

きつと静かな、美しい町なのね。そして貴女は、セーラー服をきて、胸をふくらませて、毎日学校へ通つていらつしやるのネ。

お家は、町の真ん中を流れている川にのぞんで、小料理やさなか何かやつていらつしやるのでしよう。あなたのおたよりからそんな想像がわきました。

「お姉様に何もかにも云つてしまいたくありません。母の肉体関係の事も、兄の行動

も！ひろ子は小さい時から、大人の世界の事を知つて育つてきたの。そして、人には云えない思いに、もたえてきたのです。……家の空気が、そうしたのよ。ひろ子の周囲がいけなかつたんだわ。——でも、男の人は大嫌いだ。道なんかで男のひとが話しかけてくると私、はたいて上げたくりますわ。男のひとの言葉の荒つぽさ、不潔な様子、態度の乱暴さ。……みんなたまらないのです。それは、ひろ子のお母様が、ひろ子の父以外の男と、たわむれているのを、ひろ子が見て知つていゝるせいかも知れません。それで、男がにくいのかも知れません。お母様は、好きな男がくると、ひろ子のことにも、おつぽり出して、その男に似たれかかるの。若造りのお化粧をして、甘い声を出して、その男にまわりつくの」

そう、ひろ子さんは、そういう家庭にお育ちになつたのネ。そして、男と女のことを見ながら思春期をむかえた可哀想なひろ子さんあなたはきつと、美しいけど寂しい顔立ちをしていらつしやるのよ。そして、胸に秘密をもち、お友達のように明るくなれない娘なのネ。人生の秘密を知つてしまつた女学生。しかも最愛のお母様が、他の男とたわむれる

現場を見て、それを覚えた乙女！それがあなたなのネ。

「恵子お姉様！　こうお呼びかけしただけでひろ子の胸は哀しいまでにふるえます。突然こんなお便りすること、ぶしつけで恥かしいと思ひながら、どうにもならないお姉様の魅惑に負けてしまいましたの。」

レスボス通信の恵子お姉様の文をどんな気持ちでよんだかお分りになるでしょうか。そしてひろ子が、それによつて、どんなになくさめられたか、……どんなに心をときめかしたか。……私のように何かにすがりつきたいとあせつてゐる乙女は、ただの一行の愛の言葉でもすくわれるものですわね。ひろ子は、舵を失い、流れにたゆたうボート、お姉様の力強い腕にすがりつきたい。——ひろ子は男をきらつてながら、尙、だれかに、きゅつと抱きしめてもらたくて、耐えられませんの。同性の人に、身もやけこげるばかりの熱い愛情を求め、そのやさしい人の、胸の間に深く顔をさすりつけて、愛の切なさ泣きたい。お姉様のおからだにすがりついて、赤ちゃんのように……甘えたいの！」

思春期の乙女のもたえが、行間からにじんでくるようなお便りネ。恵子も、なやましく

なつて、ひろ子さんをすぐにでも、この私のお家へよんで、その温い白い軀をキョンて抱いて上げたくまりました。そして、きれいなきれいな肌に口をつけて、キヤツキヤツてくすぐつたがらして上げたい！そんな気になつたの。

でも、ひろ子さんは、まだレスボスの愛つてなにか知らないのネ。ウブなお嬢さんなのねえ。

「ひろ子は、でも、どうしたらよいのか、自分の満足な方法も分りませんの。昨夜も苦しくつて、切なくつて、（お母様のところへ男がきてゐるので）一晩中まんじりともしませんでした、分らなかつたの。こんな事お姉様にお話するの恥かしくて、恥かしくて……でも、こんな事、他のひとには、相談出来ないんですもの。どうか笑わないでぜひ、ぜひひろ子に教えて！　心からのお願いです」

何て可愛いんでしょう！　本当は何も知らないひろ子ちゃん自分でも可愛がつた事のない、山のなかにそつと人知れず咲いてゐる可憐な花のようなつぼみを、私が会つて、ジカに教えてあげたいわ。……でも、それより前にお知りになりたいのね。それ

なら、お教えします。ただ、心配なのは、恵子のお手紙が、お母さまや何かに見られたら困るでしょ？……そういう手紙が、お母様に開封されないで、無事にひろ子さんのお手もとに届く？それが心配ですから、ちよつとおききます。それが大丈夫なら、ていねいにお教えしたお手紙を直接にあげますわ。写真なんかも送つてあげましょうネ。「まア！」なんて、びつくりして卒倒しないこと？外人のよ。でも、とても可愛いいのよ。切なくなるほど。

恵子、面白いことを考えたのよ。ひろ子さんと、恵子が、ひにちと時間とを打合わせておいて、夜中の同時刻に、お床のなかで、相手のことを考えるの……そして、それが、どんなに素敵だつたか、あとで、報告するのよ。どう？考えただけでも、軀が、とけそうだわ。だるいわ。……御返事下さいませね。すぐによ。そして写真送つて頂戴！それから、ひろ子さんのいろんなこと、教えて頂戴ね。……電車ンなかや、映画館のなかでまわりの男になにかされたことなかつた？（あつたら、その気持も書いて頂戴。）私、ひろ子さんの、色んなこと知りたいのよ。好きになるつて、そういう事よ。ぜんぶを知つて

全部を自分のものにしたいのよ。

御返事、頂戴。——ひろ子さんへのお便りはこれだけ。またこの欄でお便り交しましうね。

それから、今月は新しいレスボスの友を求めているひとを一人、皆様に紹介します。どなたか皆様のうちで、彼女の恋人になつてくださる方はありませんかしら。

そのひとは、私のフレンドなの。……そうよ。レスボスの愛を捧げた事もあるのよ。でも今は、清い関係です。そして彼女は、新しい、若い同性が欲しいのです。

そのひとは、道子さんと云うの。人妻なのよ。ええ、もう結婚して何年もたつ。三十一だつたかしら。でも、とても若く見えるわ。子供がないので……。

道子さんは、旦那さんも愛しているのよ。そして男の愛もいやじゃないらしいの。でも一方で、若い同性とお友達になりたがつて仕方がないの。電車のなかなんかで、若いキレイな女学生なんて見ると、ジツと、そのひとが降りるまで、見つめているのよ。そして、時には、そばへ行つて、手にそつとふれたりするの。

彼女は、とても情熱家よ。男には、仲々き

びしいけど、相手が同性だと、きつと安心しちやうのネ。キリがないの。——相手が若いお嬢さんなら、彼女はどんな奉仕でもするわ。小猫を可愛がるように……。

普通は、結婚すると、レスボスの方は消えるのですけど、彼女は、両方なの。欲張りなのネ。或は、男の愛が、ほんとうに道子さんをよるこばしていかないのかも知れません。でも、私には道子さんの気持は、よく分るわ。男はこわいわ。そして、男は自分本位でしょ？それに、男は、私達を、けがすわ。——レスボスは、それにくらべたら、本当に美しくつて、綺麗で、けがれたものがないから、いいのよ。それを物足りないつて云う子もいるけど、男と女の間のように、けがれないから、だから、いいのよ。だから、あとでも美しい思いだけがこのころのよ。

道子さんは、私が、この欄に通信をのせている事を知ると、私にぜひ、新しいひとを紹介して、とせがむのです。

「ずいぶん浮気ものネ」

つて、にらんであげますと、「だつて仕方がないよ。若い子つてとても魅力的なんだもの」

と、平気ですの。どなたか、道子さんのお友達になつて、お手紙を下さるひとないかしら。——なるべく若い娘がいいんですつて！……道子さんは、せいは五尺一寸位。小柄ですけど、ぴちぴちしていて、とても朗らか。会社員の奥さんですけど、閑は割とあります。文通なさる方があつたら、私がお取りつき致しますから、私宛の封筒のなかへ御同封下さいませ。

それから、御質問に対するお答えを二つ致しますわ。

世田ヶ谷のT様へ。

よく分りませんが、私の経験から申しあげますと、どちらがマンの役をする、という事はありません。きまつておりませんの。

そのとき、何だか、とても甘えたくて、じつとしていて、可愛がられたいと思うときがあります。

だから、そう云うときは女になるのネ。

その反対に、思いきり積極的にイジメて上げたい、自分の思う通りにしたい、という気にかられるときもあります。そういうときはイヤと云つても、そんなにしないでと云つても、そんな事には耳をかさず……だから、その時はマンになるのね。——そんな風ですか

ら、そのときの気分で、どうにでもなるのです。そこがまた、レスボスの面白いところじやないかしら。

それから、時にはもつと複雑よ。微妙なことは申し上げにくいのですけど、たとえば、姿も、言葉も、様子も、すっかり男のような風にしていて、実際の愛のときだけは、(受身になる)ひともあるのよ。

それは、二人以外には分らないの。でも、そういうひとつて案外多いんじゃないかしら。外からみたら、あのひと、男の風しているし、言葉つきも乱暴だから、きつと、と思うと、それが本当は、女の方だったりするのよ。どうしてか分りませんわ。——その反対に、どう見ても女らしくて、べたべたしているひとが、実は積極的な方だったりすることもあります。ですから、これだけは、分りませんのよ。その恋人になつて見ないと！

それからもう一つ。A様へ——

意気の悪いかたあんな御質問本当にいやアよ。恥かしくつて。もう、なさらないでね。それは、私も、見たことありますわ。でも使いませんの。こわくて。……なんだか気分がこわれますわ。

若いお嬢さんに、そんなひどい事を教えち

やつたら、あとで、うられますわ。……どうして、男のかたつて、そんなこと、興味をにおもちになるのかしら。——では、みなさま、また来月まで、さようなら。……お便りは、編集部気付、園村恵子宛で下さいませ。

愛 読 者 通 信

ソドミニストの一人として投稿さして戴きます。若い日の喜びを満たして貰へる本誌の出現は、この上ない嬉しさです。

僕も藤井先生のように生涯独身でソドミアに徹したい決心です。話相手はいますけど若い日の哀愁とソドミアへの限らない愛着を抱いている方と文通交際いたしたい当市の方なら尙結構です。僕は満二十五です。

男色営倉とそどもあ通信のさしえ好きです。身体中がちーんと音をたて、硬直しそうな位で同じ年頃の夢幻的な方深い深い渦巻く様なソドミアの淵に沈んで二人切りの激情の限りを交したい。

通信は九鬼でお願いいたします。
この月の本誌は大変良い。

(岡山 M・K生)

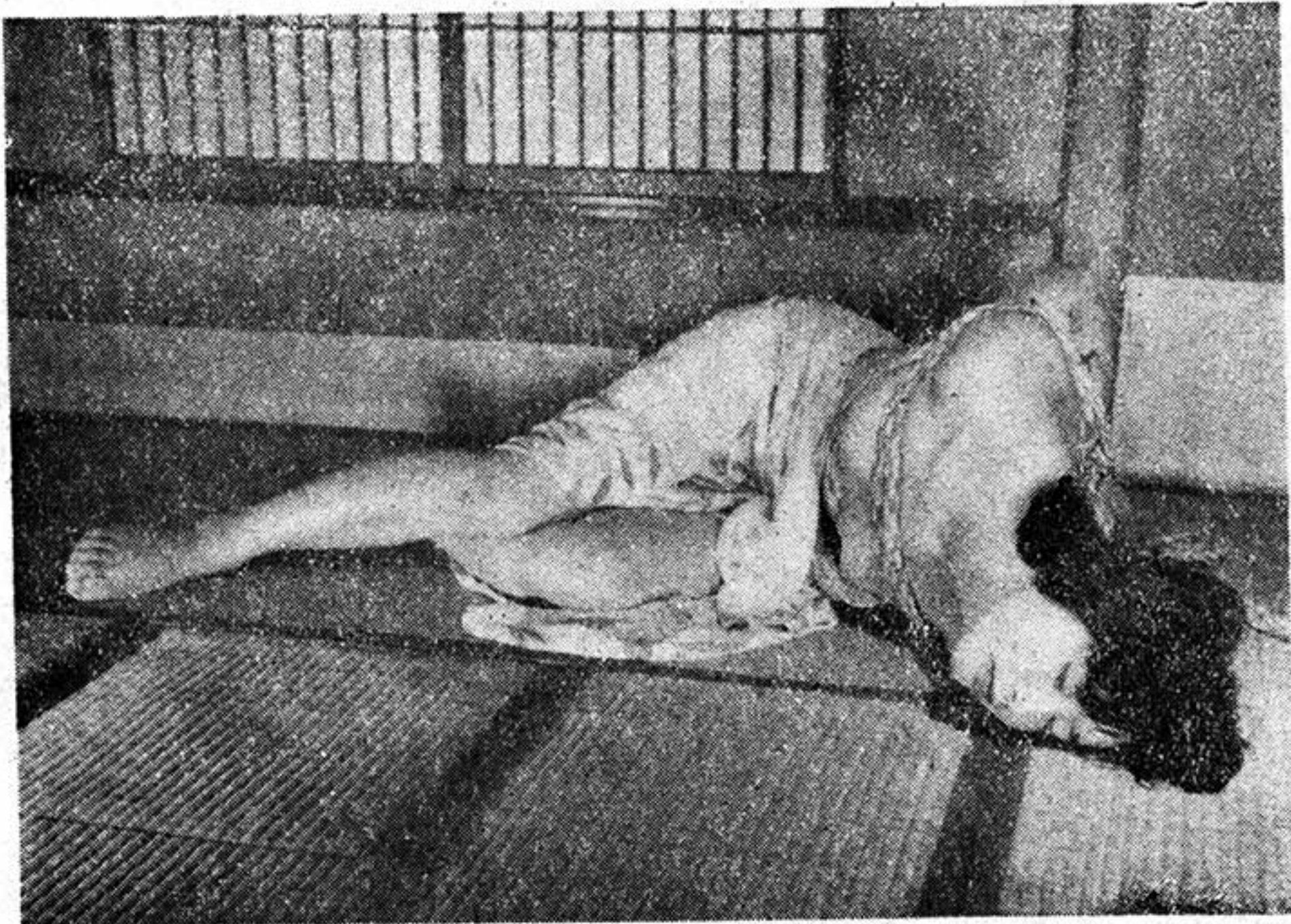
嗜虐片々録

擦り責め・臀部打ち

(その他.....)

激しい「擦り」にあうと女は氣を失うという話をよく耳にしますが、このように放尿までする生理的反應を目撃して.....

大槻 久良二



「擦り」の感興

擦り責めには暴虐らしいものが加わらないので、嚴密な意味では「責め」の部類に入らないかも知れませんが、相手の躰を傷つけないこと、責め道具らしいものが要らないことなどから、あながい広く採用されている責めの「型」でしょう。

さらに、擦り責めは被虐者が女であるということが特徴とされていますが、それは、男とくらべて女は痛覚には鈍感ですが「擦り」にはひどく敏感で、殊に情事の経験のある女性には堪えがたいとまでいわれています。心理的にも肉体的にも微妙な組織をもつ女の躰は、個々の感受性にも相違があるので擦り責めにはきわめて奥深い情趣を内包しているといえます。単純に「擦る」という動作だけではなく、そこに技術的な操作を追求してゆくと盡きることない感興を呼ぶことができます。

私はかつて木馬責めや吊り責めをこころみ
たことがあります、いずれの場合でも「擦
り」を併用しなかつたことはありません。女
は痛覚に鈍感なので、責め道具を用いた責め
には間もなく麻痺してしまつて、だんだんそ
の効果を減じてゆきますが、「擦り」を併用
すると、同じ責め道具の場合も、いろいろと
変化に富んだプレイをつづけることができる
ものです。

「擦り」の補助具として用いられるものは、
孫の手、ブラシ、羽簪、ヘチマ、海绵、スポ
ンジ、かんざしなど、どこにでもあるもの
で直ぐ間にありますので、速戦即決の責めと
して臨機に行えるわけです。このうちブラシ
や羽簪はたいいていの人が用いますが、ヘチマ
やスポンジは風呂場での場合には殊に効果的
です。石鹸の泡だらけにした舐を、部分的に
ごく軽く静かにこする訳です。この場合、う
しろ手に手首を濡れ手拭で二巻きしておけば
容易に解けるようなことはありません。

さらに、あんがい効果的なのはかんざし
です。よく前戯として用いられるといわれま
すから、擦りの部位がどこであるかを、いま
さら説明するまでもないでしょう。

つい最近のことです。或る女学校のテニス
コートの傍を通りかかったとき、図らずも私
は奇妙な情景を目撃して思わず足をとめたの
です。

小麦色に日焦けした健康そうな女学生たち
大勢が、選手控室の傍でキャツキャツと嬌声
をあげながら連れあつて居るのです。フト覗
いて見ると、一人の女学生を大勢の仲間が抑
えつけて居るのです。

「いや、いや、勘忍して……」

妙に圧し殺したような声ですが、こんな喚
き声がその抑えつけられている女学生の口か
ら漏れたので、私は好奇心をそえられるまま
忍び寄るようにそつと近づいてゆき、傍の樹
木の蔭に身をひそめて彼女等の動静を見守り
ました。一人の少女を、大勢の仲間が手足を
抑えつけて腋下や下腹のあたりを擦っている
のです。まぎれもなく私刑です。私はこの情
景を目のあたりに見て、すくなくらず昂奮を
おぼえました。誰かの、
「しつかり口を抑えてなき駄目よ」
という声が聞えましたので、私は思わず舐
を縮めて固唾を嚥みこみました。

口を抑えられた少女は、誰かの掌の下で、
「う、う、う」と呻きながら舐を海老のよう
にまるめ、あるいはのけ反らせて身悶えまし
た。彼女は真赤になつて、手足を抑える仲間
を撥ねのけようと必然にもがきつづけるので
すが、仲間の擦りはネチネチ執拗に飽くこ
とを知りませんので、この少女はとうとう氣
を失つてぐつたりとしてしまいました。それ
ばかりか、彼女は氣を失う瞬間に、自分では
意識しない生理的な不始末をしていたので
す。

激しい「擦り」にあうと女は氣を失うとい
う話をよく耳にしますが、このように放尿ま
でする生理的反応を目撃して、私はいまさら
のように「擦り」というものが、女にとつて
は何にも増した責苦であることを教えられた
のでした。

臀部打ちの快感

外国の艶笑文学には必ず「鞭打ち」の場面
が出てきますが、この対照は殆んど女の臀部
打ちが多いようです。これは、前記「擦り責
め」の場合と同じ、女の性的アツピールを狙
った責めの基本スタイルともいえましょう。

女の腎部を打つということは、サディズム、
 の端的なあらわれで、いまなお地方の農村な
 どに見られる尻打ちの行事は、いうまでもな
 くこの本能から出たものです。円満な夫婦で
 も、何気なく細君のヒップを打つことをよく
 見かけますが、これなども同じことがいえま
 しょう。

エリスの説によると鞭はペニスの象徴であ
 つて、鞭打ちの癖のある者にはインポ的神経
 症が多いといっています。戦争で機能を失
 った男が細君のヒップを打つて性的満足を得
 ている例があります。このひどい例になると
 女のヒップを打つことによつてコイツスより
 も昂奮し、アクメに達する男もあるといわれ
 ます。

禁演落語にこんな話があります。年の暮も
 迫つて貧乏で餅のつけない夫婦が、近所に体
 裁がわるいからと女房の尻を打つて餅つき
 の音をきかせようと考え、亭主が掌でペツタン
 ペツタンと女房の尻を叩いているうちに昂奮
 してくるということです。この落語のサゲがふ
 るつています。亭主にきんぞ叩かれるので女
 房はとうとう我慢ができなくなつて「お前さ
 ん、あといく回あるんだい？」と泣き声で訊

くの、亭主が「あともう一回だ」というと
 女房が「そんなら、それはおこわにしましよ
 う」というのです。

さすがの女房もとうとう音を上げて、最後
 は「おこわにしましよ」と逃げを打つてい
 るのですが、それにしても女房の豊満な肢体
 が彷彿して、この夫婦の取組みはエリスのい
 うインポ神経症とはだいぶん違っているよう
 です。

私の知る話に面白い例があります。女に手
 の早い男が、傭う女中に片つ端から手をつけ
 てしまう癖があるので、嫉妬ぶかい細君が非
 常に顔の醜い女中を傭つたのです。その男は
 この醜い女中に不満なので、どうにかして追
 い出そうと考え、或る日、細君の不在中に女
 中のちよつとした失策を口実にイヤというほ
 ど豊満なヒップを三つ四つ殴つたのです。

ところが、この女中は余り醜いので、たと
 えそれが殴られたにせよ、こうして男から肉
 体的接触をうけたことがなかつたので初めて
 女としての昂奮をおぼえ、以来、わざと失策
 にことよせて主人からヒップを叩かれること
 に異常な喜びを感じるようになったのです。
 こうなると逆効果で、この色好みの男は、女

中がヒップを叩かれて身悶える表情にアクメ
 のそれを感じて、とうとう手を出してしまつ
 たのです。

このように、女には腎部を打たれると寧ろ
 快感をおぼえるという異常な神経があるので
 す。外国の古い文献によると、尼寺などで懲
 罰のため腎部打ちがさかんに行われたよう
 ですが、かえつて逆効果を招くというのでこれ
 を禁じたといえます。また極端な例になると
 ヒップに鞭を当てられただけでアクメに達す
 る女もあるといわれます。

結婚と嗜虐

地方のゆくと、いまでも嗜虐的な性戯を織
 りこんだ行事や奇習がのこつておりますが、
 各地の農村にこんにちなお行われている「尻
 打ち」などの行事もその代表的なものの一つ
 でしょう。

このあいだ私のところへ大阪の堺市にいる
 未知の人から、その土地で昔行われたという
 結婚の風習を知らせてきました。

これは徳川中期頃の上流家庭のあいだで行
 われた結婚初夜の心得書とでもいったもので
 すが、当時の漢法医の手で書かれた肉筆本で



その目的とするところは、子女をのこすための花嫁の授胎を容易ならしむるべく、まず女性の軀の構造から解き起して、儀式から床入りまでの行動を刻明に解説したものです。

ところで、この書の興味深いことは、さて儀式も滞りなくすんでいよいよ床入りとなる

に縛られるというのです。この扱帯の長さが鯨尺で五尺（一八五釐）以上もあるといわれますから、単に手首だけでは腕から胸、腹にかけて縛られることが想像されますがそれにしても、なぜこのように縛られるのかという、これは前記の目的から初交を容易にするため次の理由をあげております。

まず花嫁は、花嫁の軀を隅々まで知る必要

があること
女は裸身に
なれば羞恥
心から必然
的に手で羞
恥部をかく
したがるも
のですから
それを防ぐ
ためと、胸
と腹をしつ
かり緊めつ
けておくと
震えがなく
なることな
どです。

そこでこうして後手に縛り、目かくしまでして花嫁の自由を奪つて、花嫁の行動を容易にするというのですが、そのため花嫁は、かえつて苦痛なく無事に破爪が行われるといつております。

この結婚の奇習は大昔の奪略結婚に起因するものらしく、いわば一種の強姦結婚と見ても差支えないようです。しかも、花嫁を縛るのに花嫁の母親もしくはその近親の女が立合うというのですからこれはあきらかに嫁虐めともいえましよう。

このように、昔から見られる結婚の風習のなかには、嗜虐的な性行動が深く根を下ろしているというところを見逃すわけにはゆきません。現代行われている見合い結婚の風習のなかにも、かたちこそ違え歴然とのこつています。

楠見守彦氏は現在某洗色工場を経営する人で四十一歳、妻の幾野さんは二十三歳で、二人のあいだには今年の春生まれたばかりの可愛い男の子がおります。この夫婦の年齢の相違からも想像されるように、幾野さんは二度目に迎えた後妻で、楠見氏は先妻を喪つて五年ばかりずつと独身生活をつづけてきたの

ですが、人のすすめで二年前に幾野さんと再婚したのです。

楠見氏は、最初るときもそうでしたが、二度目の場合もやはり見合い結婚でした。ところが、年齢的についても楠見氏は性生活には経験も深く、女に対する見識や交渉態度も円熟しているので、現在の幾野さんと結婚して以来、先妻の場合と違って単純な夫婦生活に飼きたらなくなつてくると同時に、自分では意識しない暴虐的な感情を、新妻の幾野さんに向けるようになってきたのです。もつとも、この感情はすでに幾野さんを迎えた初夜に芽生えたらしく、花嫁姿もういしい幾野さんに接した瞬間、楠見氏はかつて経験しなかつた衝動をおぼえたといっていました。

さいわい先妻とのあいだに子供があらませんでしたから、暫くは胎蕩たる新婚気分になぎれて、忘れるともなく、それなりそうした感情もおぼえず過しておりましたが、そろそろ単調な夫婦生活が鼻についてくると楠見氏は鬱勃とする加虐の衝動を、どうしてもおさえることができなくなつて、ついに或る夜、夫婦行爲のさなかに幾野さんを柱に縛りつけてしまつたのです。もちろん、夫婦行爲も常

とはちがつていくぶん暴虐的と思われるものゝあつたことは確かですが、しかしその程度のことならすこし強い刺戟を欲する夫婦のあいだになら世間にはザラにある事なのです。

ところが箱入娘として育つた内気な幾野さんには、ちよつと衝撃が大きかつたのでしようその翌朝、楠見氏がまだ眠つてゐるあいだに倉皇として実家へ逃げ帰つてしまつたのです。

楠見氏はそれを知つて、悪夢から醒めた思いで幾野さんを直ぐ実家へ迎えに行つたのですが、妻が自分の行爲を実家の母に話しては



いないかと、ひどく氣を揉んだそうです。さいわい幾野さんは、羞かしくて何も話した模様がなかつたのでホツとしましたが、自分の性癖を誤解され、そのため最愛の妻と離婚するようになつたらどうしようかと、一時はずいぶん煩悶したのも、当然なことでしょう。

その日、遅くなつて幾野さんを伴つて帰宅

した楠見氏は、さすがにおとなしく寢床に入りましたが、傍であどけなく睡っている新妻の寝顔を見ると、再び心中に湧き起る加虐の感情をおさえるのにどうにも苦しく、とうとう夜の白む頃まで一睡もしなかつたのでした。

その翌日、楠見氏は思い余つて私のところへ訪ねてきたのです。どうしたら妻を被虐の感情へ誘導できるかそれとも妻はそうした感情のない女なのだろうか、とその善処方を私に相談したのです。

楠見氏のこの加虐症状はきわめて軽微で、楠見氏の年齢から考えれば、寧ろ単調な性生活に対して一種の薬味のようなもので、この程度なら健康に消化させて行えば決して夫婦生活に破綻を招くようなことは、まずないと見るべきでしょう。

ただ問題は、幾野さんとの年齢差です。ここにギャップがあるのですから、楠山氏のリードいかんによつては、若い幾野さんといえども決して誘導できないことはない筈です。気長に、じつくりと、花のほころびるのを待つ気持で、一つ一つそういう雰囲気にもちこんでゆくことが大切です。一気呵成に自分本

位にもつてゆこうとしたらこれは失敗します。あくまで女性心理の微妙をキャッチしてゆくことが必須条件です。

私は楠見氏に大体こんなことを説明して、楠見氏が初夜の床に幾野さんを擁したときサディズムな衝動にかられたことを、私はこう解釈したのです。

見ず識らずの男女が、見合い結婚という因襲による結びつきで、その夜のちぎりを境に生涯をゆだねることになるのですが、これは考えようによつては女性にとつて堪えがたい不安であり屈辱でありましょう。

ところがその逆に、男の方では加虐的な快感さえおぼえるもので、まさしく暴力を加えずして女を責め苛むのと同じことなのです。いや、暴力といつても過言ではないかも知れません。それに対して、羞恥と恐怖、そして肉体的苦痛さえあたえられる女性は、一片の愛情さえ感じていない男の前に、結婚という約束ごとだけで自分を投げ出して身をまかせるのですが、ずいぶん割の合わない話だといわざるを得ません。

ところが、よくしたもので、ここに女にとつて一つのすくいがあるのです。それは、女

の多くが本質的にマゾヒズムであり、男の加虐に順応してゆける素質を、心理的にも肉体的にも持合せているということです。もつとも、まれには男女共にその逆の、いわゆる男性マゾ、女性サドの異例はありますが、それはそれで、またその相手を選べば問題はない筈です。

見合い結婚の因襲によつて結ばれた夫婦があんがい破綻もなく円満にいつているのは、ご当人同志の意識するとしないうちに拘らず、嗜虐の本能が合理的に組合わされているからではないでしょうか。

その点、恋愛結婚によつて結ばれた男女よりは却つて成功率が多いと言われる原因がここにあるのではないのでしょうか。

以上は、私が楠見氏に説明した内容をかいつまんでここに披露したわけですが、その後、楠見氏は幾野さんをリードしてしごく円満な夫婦生活をいとなんでおり、今年の春、二人のあいだに可愛らしい男の子までもうけて、幾野さんは新らしい愛情に包まれながらますます新妻の魅力を見せております。

(終り)

「あら、これが香取さんの新調？」

晝の休憩時間、だらしなく机の上に脱ぎすてた私の紺サージの背広を手に取つたのは同僚の山路さんでした。いつも服装に構わない私が珍らしく服を新調して、入社し始めてから四五日目のことです。私は三十歳の独身で

理由でしようが、私の深部にはもつと大きな傷痕が剥かれて居ります。そしてその傷痕は人に知られてはならないものなのです。――女装愛好症、変態的ナルシズムス――それが私の病癖です。その爲に私は女性を愛する力が弱いのです。

れたので、私は改めて彼女を観察しました。彼女は何か一種の昂奮を身内に蔵し、鋭い視線で、じつと自分の姿に見入つて居ります。その姿には、一人の女性が単なる好奇心で男性の背広を着た丈とは云えない別種の妖しさが籠もつて居ります。その妖しさが、特種の性情を有する私の胸に

隱花植物

「まあ、いやよ」つられて私も女の聲になりました。相手の急所の奥底まで見すかした安全感の上に二人はゆつくりと享樂の腰を下ろしたのです。……

相磯秀雄

浮いた噂がついぞ無いという丈の理由で、私は同僚の女性達から好感を以て接しられて居りました。ただし時たま、香取さんは気取っている、ブツてるなどという評判を耳にしないではありません。けれども私は別に気取つていたり、

「あら、男の上衣つてとつても重いのねえ」

「え、あげてもいいわ」

ブツていたりするのではありません。私だつて人並に恋愛したくない訳はありません。でも私には女性を愛しようとする衝動が極めて少いのです。服装にかまけないのもその一つ

山路さんはそう云いながら、一寸差かみ笑いを浮べ「私に似合うかしら」と素早く私の上衣を手に通しました。そして壁の鏡に近よつて、肩をそびやかす様にして自分の姿を見つめて居ました。少し時間が永い様に感じら

全く何の用意もなく取り交した冗談が、間もなく本当になりました。この気まぐれな会話が、私にとつては堪え難い慾求であつた様に、山路さんにとつても奥深い処から発せら

性情を有する私の胸に激しく感応し、私は名状し難く惑溺した視線を彼女の横顔に送つて居りました。

「山路さん、似合うよとてもよく似合う」

「そうお」

「その背広、貴女に上げようか」

「頂戴」

「その代り貴女のスーツを僕にくれれば……」

「じゃ、あとで交換しよう」

れた願望であつたのです。

上衣を返した山路さんに、私は訊ねました。

「山路さんは男装の趣味があるね」

「あら、私みたいに背が低くて、男装したつて似合わないわ」

我にもあらず狼狽した彼女の言葉を、私は何度も繰り返し分析し、綜合しました。そして私は結論しました。彼女は私と丁度正反対の位置に居る。それに間違ひありません。彼女には女性の内気と遠慮が見られません。意見をどしどし述べます。服装は色彩的でなく大ていはズボンです。化粧をせず、髪をつくりません。自転車に乗りたがり、大股に闊歩するのは有名です。口笛を吹く練習をしています。ある時、ベレー帽を横つちよに冠つたら、その顔が忽ち可愛い少年になりました。体は女性的な魅力に溢れて居りますが、それは大して関係のない事です。彼女が精神的に男性化している事は明瞭です。

土曜日の晩を選んで、私は彼女を訪問することに決めました。その夜は私にとつてとても重大な試験日でした。

私は永い間、女装の趣味だけに生きて来ました。女装趣味の精神形成がどの様にしてなされ、どの様にして育つて来たかを詳しく説

明する余裕が無いのが残念ですが、要するに私は十二三歳の頃から美しい女性の衣裳に憧れを持ちはじめました。私は一人前になり出すにつれて、次第に女性の衣裳や化粧品を買い集め出しました。私は深夜家人が寝しづまるのを待つて、鏡に向います。私は色々の道具をとり揃えて、これから、女になろうとするのです。けばけばしい色彩の長襦袢を肩から羽織つて、私は化粧を始めます。私の顔が次第に生き生きとした媚を湛えた女の表情になりますと、私はすっかり女の身支度を整えます。私は鏡に向い、いろいろ女らしい仕草を振舞つては、美しい幻想に陶醉します。私は自分が女になる事が何故こんなに楽しいのか分りません。生理学的に心理学的に面倒な説明がありません。けれども私はそれは一応抜きにして、美への憧憬を私流儀に考えます。——女性美しい。けれども私にとつて女性の美とは、雌性そのもののプリミティブなイメージが表わすものではなく、多くは女性のコスチューム、言語動作、髪形、香料、その他ありとあらゆる女性らしさの醸し出す雰囲気そのものによつて代表されるものなのです。けれども、それらの美しいものを持つ女性になりたいという先天的な私の願望は、

決して私自身の肉体を雌性に変性させたい慾求とはなりません。永い間そうでした。私は男性である己れの化身を願います。私は男性である己れの女装美に酔います。私がどんなに美しい女に変装し、手廻かな振舞をしたところで、中味は飽くまでも男性であります。うまうまと妖艶な女性になりおわした我が姿に、隠れ潜んだ男性を意識する時、その故にこそ私は無限に暗示する美の昇華を感じます。『女でない女』その無限暗示の中に屈折した私のよるこびがあるのです。——私は永い間他を意識する事なしに、つまり同性愛を求めるウールニングとなる事なしに過して来ました。けれども私は自分自身気がつかない間に精神的肉体的な変化を徐々に辿つていたのです。肉体的な変化は分りやすい。私の臀部は女性的な肉感を表わし、乳部に性感を覚える様になりました。

私は次第に変形してゆく自分の姿に、空恐ろしい戦慄を感じます。けれども、私は一度だつて男性に抱かれようとは考えていなかったのです。私にとつては男性は極めて荒々しい野獣です。私のゆきつくところは次第に明確になつて参りました——女性に愛されたい私の願ひはそれでした。女性となつた男性が

女性に愛される——それは何と屈曲の多い、デリケートな愛情でありましょうか。そして又何と困難の多い、限定された世界でありましょうか？

私がその夜山路さんを訪問する事は、それ等の困難な宿題を、永年の堪え難い欲求をすべて解決する事なのです。

その夜の私の身仕度は複雑な私の氣持をあらゆる方向から計算したものでした。私は表面は背広とYシャツの男裝で、下着はすべて女性のものを身につけました。化粧品や長襦袢や帶を一とまとめにして、風呂敷に包んで手にさげました。

山路さんの家のある木立の多い屋敷町は、人通りが絶えて、明るい街燈だけが私の不思議に乱れる足取りを見守つて居りました。

八時頃、私は山路さんの家の前に立ちました。山路さんの亡くなつたお父さんは陸軍大佐で、今はお母さんと二人だけの生活なのです。思いきつて押した呼鈴に現れたのは、幸



いにも山路さんでした。山路さんはえんじに細かい花模様のついたお召を着ていました。家庭では案外女性的なんだなと思いました。私はわざと奥に聞える様な声で、急用で役所まで一緒に行つて頂き度いと告げました。お

母さんが出て来て、私とお母さんとは山路さんにひき合わされました。かねがね私の噂をしているとみえて、お母さんは快く外出を許してくれました。

外の暗がりでは私は役所の用事は嘘である事

を山路さんに告げました。そして、自分の属している演劇グループに私は今度女形をふられて困っているんだが、山路さんに化粧や着付を教えて貰いたいのだと、これも出鱈目を告げました。すぐ分る嘘ですが、その嘘を山路さんが決して取りあげないだろうという事を、私は話しながら次第に確信し、本當の事を云つてもいいのだと思いました。彼女は自分にはそんな事は出来ないと言いながら、私の申出を決して輕蔑しませんでした。のみならず彼女は積極的な喜びさえ感じている様でした。

私がいろいろな仕度を整えていつたのは、話の模様で何処でも女の仕度を出来る様にしてしようと思つたのですが、結局、私達は、私の家へ行くことにきめました。私は商家の三男で、離室に住んで居ります。私達は誰にも見られずにこつそりと裏門から離室に入りこみました。

途々、私達は嘘の話を互にそれと承知しながら一層嘘らしく練り上げ、育て上げながら次第に昂奮して居りました。私は女裝の経験など一度もないし、化粧品も衣裳もすべて借りて来たことになつて居りました。そして、私はどうして貴女の衣裳を借りなかつたんだ

ろうと悔やんでみせたりしました。

私の部屋で二人向い合つて、私達は照れ臭く笑い合いました。

「変なことになりましたね」

「そうね、でも相磯さんにはもとから斯ういう趣味があるんじゃないの？」

「さあ、どうですかね」

私は風呂敷包を解きながら、さつきからたつた一つ云い度い事を云い急いで、わくわくしました。その返事を彼女からはつきり聞かないうちは、私の女装趣味は告げられないのです。

「ねえ、この間、貴女のスーツと僕の背広を取り換えようつて話したろう。どんな具合か一寸……」

私は云い淀んで彼女の眼を見ました。彼女の眼は急に生き生きと輝いて見えました。

「あら、そんな事話したわね、やつて見ましょうか、とりかえばや物語現代版」

「到頭本当になつちやつた。私嬉しいわ」

私はわざと女のしなを作つてそう云いました。

衣服の交換、これは何という喜びだつたでしょう。互に肌の温みを伝えた衣裳を取り交しているうちに、私達は警戒や羞恥からすつ

かり解放され、みるみるうちに新しい愛情を感じはじめたのです。正直のところ、私はそれまで、山路さんに対して別して深い愛を感じていた訳ではなく、ただ切端つまつた慾望の捌け口を彼女に求めた丈なのです。私がそれまで男性であり、山路さんは女性であり、互に生来身についた演技を以て自分の本質を隠して接していた事が、二人の理解と接近を妨げていたのです。いつかは触れ合う間柄であつたとしても、若し私達が不用意な交渉を始めたとしたならば、その交渉は単に男性と女性の接触に終るでありましょう。私のとつた方法は極めて迂遠で危険極まりない方法でしたが、相方が理解し合つたならば、もはや二度と離れ得ぬ直接的な方法でした。

山路さんは私の女の下着を発見しました。後で思えば、私の下着は軽卒であつたのです。が（ただ一時の女装をする男が何で女のズロースまで穿いているでしょう）その事自身が一種の催情法でもありました。

「君、何だ、ズロースまで穿いているのか」

山路さんはもはや男の声を作りはじめました。

「まあ、いやよ」

つられて私も女の声になりました。相手の

急所の奥底まで見すかした安全感の上に二人はゆつくりと享樂の腰を下ろしたのです。

「君は変態なんだなあ」

「いやよ、そんな言葉、貴方だつてそうでしょう」

「馬鹿をいえ、俺は君にすすめられてこんな真似をしているんだ」

「まあ、憎らしい」

話しながら、彼女は私の背広をつけ、私は彼女の長襦袢を着て、えんじのお召を羽織りました。彼女がその夜そういう派手な着物を着ていたのは、お花の稽古があつたからださうです。

「ねえ、帯結んでくれる？」

私は甘えてそう云いました。私はお太鼓帯の締め方位知つていたのですが、そうして甘える事にこよない喜びを感じたのです。

「世話の焼ける子だな、こつちへ来いよ」

ちらと私を見た山路さんの視線はもう男の様に鋭いのです。でも、背広を着た肩には少し短かめの髪が垂れて居りました。私はそれを見た瞬間、目もくらむ様な昂奮を覚えしました。男を装つた山路さん、然も女である山路さん、その曖昧な魅力の中にこそ、私の悦樂の源泉があるのです。けれども、私の場合、

女物の着物を羽織つて男の頭をしているのは、幻滅以外にないのを私はよく知つて居ります。私は手早く髪を頭に冠せ、ピンで止め



相手は女性でなくてはならなかったのです。着付をすませ、化粧をはじめてから、彼女の昂奮は私以上になった様でした。私が次第

ました。私の好みでふつきりと肩まで垂れる少女趣味のものです。髪をつけた丈で私の顔はすぐ女らしく見えます。眉さへ直せばよいのです。山路さんは私の全身をぎらぎらす様な眼で見まわしました。私は恍惚とその視線の中に身をゆだねて居りました。不意に山路さんの熱い息が私の耳許に襲いかかりました。そしてどつと重たい体が私に覆いかぶさりました。彼女は私の唇を求めました。私は無言で抵抗しました。いいえ、抵抗だなんて……ただ抵抗の真似をしたのです。抵抗をしながら、キス丈でしたがこの時程の昂奮は後にも先にも再び味わえませんでした。それは多くは男女の関係を互に倒錯した爲の意識上の障碍である様です。彼女の乳房の豊かさが、それ故に私の悦びを増させました。私の

に完全な女になるのを手伝いながら、彼女はしばしば私に接吻しました。その間、私は割合に冷静になつていました。私の精神上のアクは第一回の接吻で済んでいるので、私は彼女程は溺れませんでした。男性生理と女性生理との根本的な差異が所詮はついて廻るのでしょうか。私はただうつとりと鏡の中に見馴れた自分の女の顔を見つめている丈でした。

化粧を終つてから、私は彼女にしつかりと抱いて貰いました。彼女は、最後の交渉を欲しなかつたので、二人の間は、常識的には清潔でした。けれども、私の嬉しさはそれで充分でした。

再び衣服を交換し、もとの男女に立ち還つて対ひ合つた二人の気持は、みじめさと儚さとで一杯でした。

二人は口重たく別れました。私は夜道を再び送つてゆく気になれず、裏門のくぐり戸を開けてやつて、小さく「さよなら」と云つた丈でした。

月曜日、出勤して、私は山路さんにどういう挨拶を送つてよいのか分りませんでした。二人は顔を見合せて、僅かに微笑んだ丈でした。私の方が主任ですから、私はいろいろ

彼女に指図をしなくてはなりませんし、彼女も私に訊かなくては仕事が出来ません。一昨夜は女になつて彼女の胸にすがつた気持を私は容易に整理出来ませんでした。

その後、二人は土曜日毎に会つて、種々な演技を考へ出したり、倒錯趣味の写真を撮つたりしました。けれども、別れる時の佯びしさは最初の夜と変わりありませんでした。

私は彼女と結婚しようと考えました。彼女も結婚したいと云いました。奇妙な夫婦が出来るだろうと笑い合いましたが、今はもう、思い出丈となりました。一ヶ月前に、山路さんは狭心症の発作を起して、突然なくなつたのです。私はもう再び山路さんの胸に抱かれて、あの歡しい遊戲に耽る事は出来なくなりました。思えば短い交りでありました。私は同僚と一緒に山路さんの通夜の席に連なりながら、何度も新しい泪に誘われました。泪もろいと笑われました。泪もろいのは当り前です、夫を亡くした妻の氣持であつたのです、その夜は……

私達は深い肉体交渉は結びませんでした。思えば私達以上に愛すべく愛し合つた者は少いと思います。私は夜、女裝をしては、再び得られぬ愛人の幻を呼びおとし、還らぬ追想

に耽つて居ります。

この間、山路さんのお母さんが見えて、小さい包を私に下さいました。山路さんの日記と、私達の手紙や写真の類です。私の秘密はお母さんに知られてしまいましたが、お母さんは娘の秘密の爲にも誰にも洩らさないそうです。

山路さんの日記には非常に興味深い事が沢山記してあります。詳細を記す機会をいつか持ちたいと思いますが、日々夜々その日記を読み返し、私は深い共感と堪え難い寂寥を感じないでは居られません。

「隠花植物」そういう言葉を私は思い出します。隠花植物は明るい太陽にむかつて伸び伸びと呼吸をせず、日蔭にじつと踞つています。人目をばかかつて、孤独を胸に抱いて居ります。

いわば私達も隠花植物の様な存在でした。けれども私達は人の知らない喜びを持つて居ります。孤独は孤独の中に又楽しみもあります。靜かに私は己が性を勞りつつ生きてゆくつもりです。

☆

☆

☆

(おわり)

ある願望

佐川千枝

シーツの白い、初秋の床に横になつて、私は胸の上に手を組み合はす。寢靜まつた家の中で、私の部屋だけがまだ眼を覺しているのだ。

毎夜、未婚の私が、ひそかに鏡に向つてから床に入る秘密を誰が知ろう？ なんのための寢化粧……そして派手な寢巻——。

それは、あの時のため——。何時の夜か、この私の部屋の戸が明けられ、荒々しい男が兇器を片手に忍びこむ。そして、ドギ／＼と光る刃物を私の胸につきつける時——。

男はジリ／＼と近づきながら、
「靜かにしろい！」

と云うだろう。無気味な兇器の光りと、大きな男の肩が一杯に迫つて来て、私は恐怖にのけぞつてしまう。

ほの暗いスタンドの灯りの中で、粗野な男はそんな私にゴクリと唾を飲みこむのだ——

あゝ、その夜のために、今夜も私はひそかに窓の鍵を外し、そしてひそやかな寢化粧の紅をとりあげるのだ。

特集・病癖に憑かれた若き処女の手記

哀しき被虐

相手のない私は自分で自分を縛る。足やお腹を縛ったり、ベ
ットからぶら下つて、半吊りの恰好を試みる。そんな時は
傍に鞭を持った男を想像しながら、一人でヒイヒイ聲を立て
ゝみたりするのだ……

木暮陽子

画 八木 静 男



今から二年だか三年だか前のことで、まだ中学の頃、あたしは叔父の書斎でとても凄惨なものを見たことがある。

この叔父は医大を出てからも研究室に残つて、法医学を専攻していた。だから私がこの叔父の書棚から何気なく引っぱり出したのは、兇悪犯罪や事故死などの、死体の損傷に就ての解説書のようなものだったらしい。

全頁写真がギッシリつまつていて、それがみんな殺された被害者の写真ばかり、魚のようにうつろに瞳をひらいて、額にグサリと鉋で割つた大きな傷口が開いているものや、首の廻りに黒々と絞殺の跡がある女の写真。それからうつ伏せになつた背中、肩から臀部にかけて、メッタ切りにされた若い男の写真もあった。

下肢のとれた轢死死体や、口を開けた幼児の圧死死体もある。本当にその一つ／＼が、見るも無残な被害者の死体写真ばかりで、ゾツと寒気立つように、それは凄惨なものだった。

あたしは始め、何気なくこの本をひらいて見たのだけれど、蒼くなつて本を放り出すと、この書斎から逃げ出してしまった。

それまで、世の中の暗い面はチリほども知らずに育つたあたしだから、あんなにむごたらしい本もあるものかと思つて、空恐しい気持ちだつた。

その日、ママに話そうかと思つたのだけれど、なんとなく憚られて止めた。それなのに、その日は元よりその翌日も翌々日も、あの本の写真が眼から離れない。気がついてみると、何時かあたしはうつとりと、あの本のことを考えている、と云つた風だつた。

五日目になつて、私はコソソリと、再び叔父の書齋にいった。その頃叔父は、あたしの家に同居していたから、そして晝間は叔父は大学に通つていたから、私は自由にこゝに入り出来たのだ。

このお部屋は北東の角にあつて、しかも窓の先に大きな桐の木があつて、屋根にかぶさるように枝をひろげていたから、晝でもなんだか薄暗くて陰気な御部屋だつた。私はその書棚の前にうづくまつて、今度は一頁づゝ丹念に繰つた。

眼も鼻も利らないほどに顔面がつぶれた写真もあつて、とても女の子の見る本ではなかつたけれど、私は胸をドキ／＼させながら見つけた。

その写真の横には詳しい説明がついていて傷の長さ十二センチとか、深さ骨膜に達するとか、生前の傷、死体硬直後、致命傷、死後二十時間経過など、平常のあたしなら、その一つを読んでも身震ひしそな言葉が、無慈悲につらねである。

それから、兇器の写真も掲載されているものもあつたから、私は死体の写真と比較して熱心に説明を読んだ。夕方になつてママから呼ばれて、あたしは慌てゝこの書齋を飛び出したのだ。

これが病みつきになつて、私は閑さえあれば、叔父の留守を狙つてこの御部屋に通うようになった。なにしろ法医学専攻だから、この本の外にも、いろ／＼私の興味をひく分献があつた。

例へば恋態性欲による殺傷、又は自ら傷つけたものゝ写真や絵画などもあつた。生きながら、全身血と膿にまみれて腐爛していたという、小口末吉という大工の妻ヨネの記事は殊に私を夢中にさせたものだ。

左小指切断、上膊に小口末吉と烙印の火傷二ヶ所、背にもやはり夫の名を熱鉄で書いた火傷と創傷、臀部、大腿部に創が縦横に走り足の指三本切断と云う、それは驚くべき記録

だつた。これにはマゾの極地と説明されていたけれど、あたしは読んでいて、死にそうに息がつまつた。

それから間もなく、叔父は九州の病院に赴任したから、そうした分献には觸れられなくなつてしまつた。でも、叔父の書齋で見た写真や記事は、今もあたしの眼に焼きついて離れない。

被害者の無残な死体は、如何にもいたましいけれど、どうしてか、無気味ではなかつた。その無抵抗な力のない姿が、いたましいということ、ギョツとあたしの胸を締めつけてくる。いたましくて哀れでもの悲しいのだ。

高校一年生の夏都心の或るデパートに、友達と三人でいった。屋上から見下すと、遙か下の方に舗道があつて並木が青くつらなり。人々が小さく動いていた。

ジツと見下していると、その下の舗道に飛降り自殺をした。私の死体が見えるようだつた。その死体はペタリと舗道にはりついていることだろう。頭は勿論割れている。白いワンピースが朱に染つて、白いサンダルは遠くの方に飛んでいる。あのあたりの並木の青い葉にも、あたしの血液が飛ん

でいるかもしれない……いや、きつと飛ぶに
違ひない私は思った。

「陽子さんつたらどうしたの？ さつきから
呼んでるのに……」

「まるで、飛降りでもしそうな顔で、下を見
下しているんですもの」

お友達にそう云はれて、あたしは無理に笑
つて見せたつもりだけど、或は泣きそうな顔
だったのかもしれない。

「こうして下を見てると、なんだか飛降りて
みたいような気がしない？」

「いやあーだ、こんなところで自殺なんぞ真
平だわ。体はつぶれてしまふし、ゾツとする
ぢやないの」

「そうよ、人だかりがして見物されるし、思
つただけで氣持が悪いわ」

御友達は口を揃えてそう云うのだ。私は聞
えないような顔をして黙つてたけれど、お友
達がもう自殺問答を忘れてしまつた頃、独言
のように云つた。

「あたし、自殺するとしたら舗道で、夕陽が
沈む頃がいいな、女の子の死体を、赤々と夕陽
が照らすなんて、ちよつと素適ぢやない？」
今から思うと、それはやはり、あの死体写
真の一つの連想だったのだ。あのさま／＼の

写真のあまりに無惨ないたましさに刺戟され
て、あたしは何時か自分自身がそのような、
むごたらしい死体になつた時のことを、空想
せずには居られなかつたのかもしれない。

館で数ヶ所も割られたあたしの死体の写真
が、あの本の写真のように掲載され、人々の
眼に晒される時のことを想像すると、あたし
は不思議な戦慄を感じる。そして、十九才、
處女、木暮陽子の惨死体と云う、説明の活字
までが、まざ／＼と眼の前に浮ぶのだつた。

そんな風になにかぼんやりと妄想にふける
ようになつたあたしの變化をひどく心配し始
めた。あたしは独り子だつたから、風邪をひ
くだけでも、両親は案じるような具合だつた
のだから――。

それで、その夏はママに連れられて、静岡
の田舎の祖母の家に行くことになつた。この
家は大きなガランとした家だけれどママの弟
に当る叔父は、前に書いたように九州の病院
に勤めていたから、祖母一人であとは作男や
下女が二、三人いるばかりだつた。

何処を歩いてても、土の臭ひがムン／＼とむ
れかえるような田舎だつたけれど本当にのど
かで平和な村だつたから、確かに気が変つた。
もの珍しさもあつて、よく出歩いたしあたし

は見違えるようないゝ顔色になつた。何時
の間にか奇妙な盲想も薄れて、ママなどは
すつかり安心していらした。

その日は朝から風が吹いていたから、あ
たしはピンクのネツカチーフで髪を包んで
散歩に出かけた。もう地理も判つていたか
ら、蜜柑畑の上の方に向つて、ブラ／＼歩
いていた。

ところがその林の中で、子供たちがガヤ
ガヤ口喧しく騒いでいる。行つてみると一
人の男の子を押えつけて、八、九人の子
供たちがなにか口々に罵つてゐるのだ。

方言まる出したから、詳しい事情は判ら
なかつたけれど、なにかその十二、三の男
の子に落度がつて、子供仲間でのリンチと
いつたことらしかつた。その男の子は地面
にグイ／＼と顔をこすりつけられて、泥と
涙で顔はベタ／＼になつてゐる。

それをひき起して、横の立木に荒縄で縛
つてゐる餓鬼大將が、祖母の家の作男の子
で十三になる秀だつた。彼が泣き喚いてる
子を手荒に縛りつけると、同勢が口を揃え
てその子を嘲し立てるのだ。それはなんだ
か子供とは思えないような、底意地の悪い
態度で、卑猥な言葉もまじつていた。



それから子供たちは、口々に嘲笑を浴びせながら引揚げてゆく。秀はあたしを見ると、ひどく恐縮して、こそく逃げていった。縛られた男の子は一人とり残され、涙と涙を垂らして、なんとも云えぬ哀れな恰好で、ヒイ

ヒイと声をあげていた。

その夜あたしは、自分が縛られた夢を見たのだ。赤い縞のパジャマを着て、膝の上を荒縄で縛られ、それから両手は胸の上で組分せた上を、幾重にもギリ／＼と縛り上げられて、

道端に転がされて
いるのだ。

「可哀そうにねえ
……」

「こんな綺麗なお
嬢さんを、むごい
こつちや——」

などと云う声が
聞えてくる。沢山
の人々が、私を取
り囲んでヒソ／＼
と囁き合っている
のだった。私はそ
んな人々の眉をひ
そめた表情を見る
胸がギュツと締る
ようで、腑中が熱
くなってくるの
だ。

その時、あたし

には、嫌な気持は少しもなく、恥かしい
ような、誇らしいような気持だったのだ。
あとになつて、マゾヒストに就てのいろい
ろな本も読むようになったけれど、あたし
は他の人たちとは違つて、たゞ自分を虐め
ると云うことばかりではなくて、みじめな
或はいたましい自分の状態を、沢山の人々
の前に晒したい——、と云う気持がとても
強いらしいのだ。

翌日は夢のことばかり考えていた。夕方
になつて庭で秀に逢つたから、

「どうしてお友達を縛つたりするの？」

と、声をかけると、秀はバツの悪そうな
顔をしてソソポを向いた。それから、あた
しは自分でも思ひがけずにこう云つた。

「ねえ秀、あたしをあんな風に縛れる？」
秀は面喰つたようにあたしをみつめてい
る。

「縛つてくれたら、あんたに御小遣ひをあ
げるわ」

よほど薄気味が悪かつたらしく、秀は後
ずさりをして、逃げていつてしまったから
あたしは失望した。

それから二、三日、あたしはヒステリー
気味で、祖母やママに当り散らしてばかり

いた。そして、あれは丁度旧のお盆の入りの日で、家の人々はみんなお墓詣りに出掛けた跡だった。あたしは奥座敷で嫌々ながら、学校に出すテーブルクロスに刺繍をしていた。

その時、珍しくこざつぱりとした服装をした秀が縁先から覗きこんで、

「お嬢さん、縛つたら金くれるつて、本当じゃない？」

と、云つたのだ。

私は秀の後から、裏庭の小屋に行つた。其処は農具などが置いてある小屋で、藁や荒縄などがうづ高く積まれている。

秀はオソル／＼縛るから少しも締らなくつて、あたしは焦々して、口喧しく注文して縛らせた。始めからあたしは興奮していたのだ。盛夏だと云うのに小屋の戸を閉め切つていたから、秀は顔にビッシヨリ汗を掻いていたけれど、あたしはど云うものか、汗一つ出なかつた。

あたしは後手になつて柱にく／＼りつけられた。胸の、丁度お乳の一寸上を通つた縄が、肌に喰ひこむようでもよかつた。

「秀、胸の上を、もう一度ギュツと縛つてもつきつく！」

秀は汗まみれの顔で、途方に暮れたように

あたしを眺めていたけれど、怖気づいたらしく、そのまゝ小屋から逃げ出してしまつた。

それから小一時間ばかり、あたしは夢ともうつとも分らないような時間を通した。無人の小屋に縛られたあたし自身の姿から、例のようにいろいろの盲想が浮かんだ。消えたりするのだ。あたしはわざと軀をよじつて、かすれた声で、

「あつ、誰方か、御助け下さいまし」

と、呟いたりもしたのだ。

秀が又コソソリ入つて来て縄を鎌で切つてくれた時、あたしはどうしてか不気嫌になつて、黙つて秀に百圓札を一枚渡した。

それから三度秀に縛られた。最後の時には頭から足先までグル／＼と螺旋状に縛られて土間に転がつていたのだけど胸を縛られるのもい／＼けど、それよりお腹の上を締められる方がもつとい／＼ことが判つた。



その時に、秀の父親が小屋に入つて来て、あたしたちは簡単に発見されたのだ。秀の父親は縛られて転がつたあたしを見て、「ヒエーツ！」と、もの凄いの声をあげて飛び上つた。祖母もママも飛んで来て、縛られたあたしにすがりついた。あたしは縄をとかれながら、秀の父親が真蒼になつて、息子を撲りつけるのを見ていた。けれど、それがあたしの希望でされたことが判ると、ママは暗い顔であたしを見つ

めて涙をこぼした。あたし自身は発見されたことは案外平気だが、すぐ翌日東京に連れられて帰った。その時チラと秀を見たけど、秀はずい分折檻されたらしく、陽やけした顔が凄くふくれ上つてしまつていた。

東京に帰つてからは、両親の眼がきびしくなつて、本なども全部検査されるようになったし、友人までも制限されて、あたしは不満でたまらなかつた。

しかし、両親も夜あたしが寢室に引取つてからまでは眼が届かない。だからベッドに入ると、あたしは自分で出来る限りのことをして遊んだ。

あたしはそんな時にはシュミーズ一枚だけになる。パンティはのけて……、あたしの洋服ダンスの鏡は、丁度ベッドの上が写る位置にあるから、自分で遊ぶ姿がすつかり写るからとても刺戟される。

いろ／＼な縄を用意していたけど、赤い縮緬の腰紐が、肌に吸ひつくようで好きだった。それはシュミーズの上に赤い紐だから、鏡にはつきり写るせいもあるけど……。あたしはまづその紐で、お腹をギリ／＼と堅く縛る。その時は立つてしても、坐つてしてもよく紐が締らず、片膝について中腰になつて縛ると

具合がよかつた。

ウエストのところを堅く縛ると、下腹がプツクリふくらんで、なんだか自分のお腹が愛しくなる。それからお腹の下の方、ほとんど腿の付根に近いところを縛ると、なんとも云えず、気が遠くなるほどにもいゝ氣持だった。でも、この方法は膀胱を刺戟するためか、すぐ尿意を催すので困るのだ。

こんな風にして、足やお腹は自分で縛れるけれど、どんなに工夫しても、自分で手を縛ることは出来なかつたから、私は残念でたまらない。でも、壁から輪にした縄を垂らして、私はその中に首をつゝこんで、手は縛られたつもりで後に廻し、鏡に写すのはよかつた。

それから両足をベッドに縛りつけて、頭は床に、つまり逆さに半づりになつたポーズも割に簡単に楽しめる方法だった。そして、そんな時には、あたしはすぐ傍に、革鞭を持つて立つている、男の人を想像したりする。だから、まるで実際に打たれてでもいるようにあたしは一人でヒイヒイと声をたてゝみたりするのだ。

このこともやがて両親に知れて、パパは怒り、ママは泣いた。でも、何時間もパパの前に引すえられて叱られていると、そのみじめ

さが、又一つの不思議な喜びになつてくることが判つた。

それ以来両親の監視が嚴重になつて、寢室も母と同じ部屋にされてしまつたし、なんの楽しみも味わえなくなつた。だからと云つて、あたしのマソヒズムが枯れてしまつたわけではなくて、この頃では双物類を眺めることで、それによつて盲想を描くことで、あたしは自分を慰めているのだ。

街に出ても、何時かあたしは魅されたように、双物類の陳列してあるところに立止つてしまふ。その鋭利な道具で責めさいなまれた、あたしのむごたらしい死体——。冷静にそれを解説する活字、まぎ／＼とそれを頭の中に描いて、あたしは云ひようない亢奮に震えている。

でもあたしは、冷たく光る鋭利な双物で責めさいなまれ、紅紐で縛り、弄ばれるとしても、やはり処女のまゝの軀でいたい。

そしていつの日にか、叔父のあの陰気な部屋で見た本の一頁に、無惨な傷口を見せ、縛られた紐の跡を真白い肌に刻して、横たわる姿……。傍の写真説明には、傷の深さ……と、そのあとに木暮陽子、処女、何才……そんな夢に憧れている。(おわり)

〔災害悲惨史〕

關東大震災

日が正午に近づいた秒刻まえ、突如として、思いもよらぬこの空前の大異變がやつて來た。被害のスケールは東京を中心に一府六縣にわたり……

榎 襄 介

(一) 運命は皮肉だった――

“大正十二年九月一日、午前十一時五八

分四四秒”

“奥様”

……永二郎……

内儀の多代は、長持のかげにヒツソリ、網になつた窓の光から隠れるようにして、座つていたのが、年したの情夫をむかえて膝を立てる……。うるんだ二重瞼の眸が、憑かれて光つていた。

「お待たせしました」「ホンに、気が気でなくつて……」カタリ、と、永二郎は、うす暗い入口から、階段を照してきた、店のふるびた手提げの紙燭をおとをさせて、長持のフタの上においた。



崩れるようにヒザをついて、そのまま、なにかばかりかけた女の頸にかた手をまき、抱えとるように重い、しなやかな年増ざかりの軀を、腕に緊めた。

丸まげのビンのあいだで、玉蟲のように生きて、紅が滯れている。眸もとにポーッと情の炎が燃えて、ゆれて、多代は大膽に笑っている。

「奥さま……」

吐く息が、あつい。誘つて、うながしかける年上の女の眸……。

「人のこぬ間に……」

「間もなく晝、旦那様が、歸つて、知れては」

二人は、纏れあつた蝶のように、ならんだ長持のあいだに埋れ伏した。

京橋の刀剣商、江戸時代からの老舗浜屋の武器蔵の二階おく。ソヨとも埃りは動かない。まわりの段に仕切つた棚に立てかけ並べたおびたらしい刀剣。ヨロイ。床一めんギツシリの刀簞笥、長持。紙燭の黄色い、にぶい光りに眠つて、ヒミツをおし包んでいる。

一匹の蠅が、塗りごめの窓の虫よけアミに止まつて、羽音を立てているだけ。そし

て、揺立てられた熱っぽい空気が、しづんだ蔵のなかえ波紋のように拡がつてゆく。

「アレ、あの物音は……？」

多代、多代、と、確かに、殺したひくい人声。

「シート、もしや、旦那さまでは」

肱をついて身を起した、内儀のはだけた

胸に、脹らんだ隆起が乳首を色づかせて、

しろじろと女の香に噎せんでいた。

疑惑と嫉妬に噛まれた、そと歸りの主人

が息を喘いでクラの階段を見上げていると

は、知らぬ二人だつた。が、さすが女、こ

ころ騒いで、

「永二郎あぶないワ、モウはなして」

それを、奥さま！……と年わかい男の狂

い立つた血は、まだ冷えていない。

階下の主人は、夜の獣のようにもの音を

忍び、こつそりタナの日本刀の一振りサヤ

をはらつて、階段の取手につかまり、踏板

の歩を移しはじめた――。

その時――。

ゴオーツという、颶風の家を飛ばして吹

過るとき、凄まじいもの音、――地鳴り

だつた。天地のあいだに一瞬、真空が漂よ

つたかと疑がはれるシンの静寂が、地鳴り

の秒余の断続のあとを断つた……。

だれも、彼も、凍つたように動かず、生物はイキをひそませた。

そして世界がまだかつて味ははぬ震動、

いまは語り草となつた大正十二年九月の、

関東大震災の激動が地をはつて、競つてきた。

――震源地、三浦半島の三崎では、この

本震とともにあたりが廿五尺もにわかに隆

起して、その後何日も沖あいの城ヶ島との

あいだは一滴のミズもない、地続きの状と

なつたほど！

家の棟はきしみ、瓦はおち砕け、床は割

れ、寸刻ののち全都に、倒潰があいつづい

た。

揺れる、揺れる、地表が震え、波うつ異

様な旋音……、建造物の凄まじい崩壊の音。

さすがに堅固な浜屋の幾棟の土蔵も、傾

ぎ、躍り、軒が触れあわんばかりの大揺

れ――。

階段をソロソロ上りかけた浜屋の旦那は

手にした刀を取りおとし、後さまに転げお

ちて、床に尻もちを突いたまま、ワナワナ

震えた。

――地、地震だあ！

おれの生命が危ない！ 救からねば！

この土蔵のなかが往来より安全だ、という思慮の働らくヒマはない。恐怖に抱き合っている、二階の姦通ものの男女のことも死の驚愕におもてを硬ばらせた彼の念頭から、一瞬に吹きとんでしまった。

——救けてくれえ！ こ、これ田口、せ精太はおらんかあ！

匍いずり、戸前に摺まり、床を撫で、番頭や若い者の名を必死で連呼しながら、主人は土蔵の口から廊下をよろめいて、母屋のほうへ伝い歩きしていった。

その刹那、ぐわーつ、めりめり、とハリの潰ける大きな音がひびいて、二階建て、十いくつも部屋数のある浜屋本家のすばらしい家屋が、木舞いを飛ばし、土煙りを四散して、土蔵をのこしモギ削がれた形ちで一瞬に、押しつぶされ地面にペシャンコになつてしまった。

庭木が根こそぎになり、枝つきの大木のまま、ザザーツと風をきつて、その上に斜ぎ落ちた。隣り境いの土塀は、あと方もない。

「永二郎、わ、わたしを見すてずに連れて逃げておくれ」

「ここでお待ちなさい、奥さん、私が様子を見てきますから」

袂をつかんで心細がり、はなさぬ内儀の手をふり切つて、彼女を土蔵のなかに残し表え駆けでた男はしばらくヒマをかけて、妙にはづんだ、複雑な表情をヒタイにみせて帰つてきた。

「ど、どうなの、おまえ」

「さつきの物音で、このお家はこわれて旦那も番頭さんもみんな……」

「ええッ、では下敷きに！ 一人も生き残らないのかえ」

「来てごらんなさい、小僧の仁吉さんと、台所のおしげだけが助かつて、庭の木に摺まつて、泣いて、泣いていませ……」

永二郎は、蒼ざめた貌で、涸れてひつついた笑い声をたてた。

多代の手をとつて引起し、揺り返しのつづくなかを戸外に連れだした。暗さに慣れ

精力をはき出して疲れた網膜に、カラリと視界のかわつた辺りの、白晝が襲いかかつて眩しい。多代は、眼瞬きした。こんなこ

とつて、有るだろうか！ つい一とき男と抱きあつて情痴の夢を見ている間に、浜屋

の店も、夫もただの瓦礫の山にかわつてし

まつたなんて……。

彼女は発作的な目昏いを感じ、へた、へた、とその場にヒザをついた。

「じゃ、浜屋はわたしと、お前と二人きりになつてしまつたのかい。マア、私たち何て間がいいんだろ……」

「そうなんだ、そうなんだ、おれと奥さんと二人きり……ホラ、ご覧なさい、倒れた家に焰が廻つてきてる。死ぬやつは、みな死んじまうんだ」

は、は、は、は、………忽然とこの幸運をもたらした天災の訪づれに狂喜して

浜屋のわかい手代永二郎は悪魔のように手を拍ち、そこらを飛び、はねた。濃い、白

つばい煙りがモクモク、地に接した庇のし

たから噴出し、焰の黄色い舌がもうキナ臭い匂いを、そこらに匍わしかけていた。

——旦那が死んだ！ 旦那が死んだ！ 解放された情夫は、われを忘れ、ピヨイ

ピヨイ、その庭先をおどり廻っている。余震がまだ数分間おきにおそつてくる地震の

惨禍のたけなわな時であつた。

(二) 滅びゆく京濱

九月一日、東京は朝から風が吹いて、や

がて驟雨。厄日のような陰鬱な空も、ようだったが、やがてスツキリ霽れわたり、残暑のきびしさが街をおおつていた。

日が正午に近づいた秒刻まえ、突如として、思いもよらぬこの空前の大異変がやつて来た。被害のスケールは東京を中心に一府六県にわたり、全焼全潰以下の被害世帯数は六九万余戸、東都の被害がその半ばを超えている。

うち全焼、半焼のもの卅万八千戸ちゆう東京だけで卅万下町六区の九割、これにつづく山手の七割が晝夜三日のうちに強灰燼となりおわたた。地震にともなう火災が、どんなに熾盛であつたか分ろう。

この間、焰の炎々と都心を荒れ狂うさなかに余震は引きもきらず、気象台の地震計は五日の夜明けまでに九百回、

(有感覚)のもの、一日のひると夜だけで三百回ちかくを記録している。数分おきに地が揺れていたわけだ。

市内の架橋の焼け、落ちるもの、凡そ三百。このため堀や水にかこまれた下町方面は、至るところ連絡を缺く小島にかわり、



ガス、水道は破損、噴出して長期にわたつて供給を断たれ、電燈線はもちろん潰滅。

二百五十万の市民はその日から、暗黒恐

怖の夜をむかえて、渴に悩み、焼け屑による炊事に餓えをしのいで、ゾクゾク徒歩で地方へと退去する人群れがつづいた。

その悲惨、じつに明暦・安政の被害と同日の談ではなく、海のそとのアンチオキアメツシナの地震、ロンドン大火災、桑港の大震をはるかに上超す、破滅であるものの本に伝えている。

市内電車はそちこちに横たおし、立往生して黒煙を揚げ、焼失したもの八百輛。足を奪われたひとびとのため、近在の馬方、百姓などが荷馬車のうえに、丸木の手すりをつけて、東京のめぬき大通りを、上野から品川、あるいは千住へと客を運搬する奇な光景を現出した。

これらの意外な移ぎにありついた連中は震火災後ただちに儲けを当てこんで入京したものである。横浜の外国商館の英字文書が、風にのつて千葉のむこう辺りまで飛んでいった。京浜の上空は、数日にわたつて黒煙天に沖していた有様、百姓が駈けつけるわけであつた。

市内のおもな省線の駅はあら方焼滅して国鉄車輛は焼け、大破、約二千輛。東海本線をはじめ四方につうじる各国鉄線はすべ

て杜絶してしまい、月余にわたつて復旧を
みなかつたため、輸送の困難は言うばかり
なかつた。

ニホンの門戸、ヨコハマの災害も東京に
劣らなかつた。

——港にのぞんだグラント、オリエンタ
ル両ホテルでは、内外の紳士淑女がちよう
ど午餐どき。轟然たる響きとともに、天井
のシャンデリヤもろともホテルは倒潰し、
コック部屋の火がまたたく間に、下敷きに
された百余名の外人貴顕の死体をハイと化
してしまつた。

県の官街では、上下の激震とともに床は
あたかも嵐に舞う孤舟、四壁はお
のき、天井は鳴り、室内の書架
書類函は散り乱れ、役人どもは威
厳もなく匍つて逃げてゆく——。

地方裁判所では、執務ちゆうの
所長・判・検事はじめ百数十人の
法官、原被告、傍聴人などがアツ
という間に押し潰され、即死、卒
倒、血に塗れた負傷者の呻きがあ
たり満ちみちた。

県警察部の階上で、森岡警察部
長は足を踏みしめて窓にすがり、

街頭を見おろした。

濛々と砂煙が四方にあがり、咫尺を見わ
けず、つぶれた家屋が路をおおい、電柱は
アメ細工のように倒れ、樹木は転がり、地
上には無数のアリの子の散乱をおもはす死
屍の山！……。

鮮血は流れ、逃げまどう民衆の死にもの
狂いに、助けをもとめる叫び。

火の手の黄色な煙りが、すでに山下町の
空に騰り、強風に煽られ拡がつていた。

水道管の破レツで、平地は一めんの泥海
とかわつた。クモの巣のように絡んで、切
れた電線はゆく手を妨たげ、道路には大ヒ



ビが割れて、足をとられがち……。

警察部長は、県庁に炎をのがれてきた避
難者を指揮して、岸壁にむかつた。腰まで
没める泥の汜ラン、税関倉庫は燃え、海面
には重油が漂よい、すでに炎の海となつて
いる。

「何とかして、避難者を救い、救援をよそ
に乞ねねばならない」

職責を痛感する身は、危険をわすれて官
服のまま海に飛びこみ、泳いで、沖の外国
船コレア丸にたどり着いた。港内の各船の
無電はしばし沈黙し、コレア丸の無電室で
は鍵が火花を散らし、タタかれた。

——本日正午大地震起り、引つづき大火
災となり、全市ほとんど火の海、死傷数を
しらす……。

是こそ、全世界を驚ろかせた、東京大震
災の初電である。この日夕刻、コレア丸の
無電をキヤツチした盤城電信局では、ただ
ちにハワイ、桑港をつうじて「トオキヨー
全滅」を世界に告げた。

支那海にあつたアメリカ・アジア艦隊は
すぐさま急援を命じられ、舟山列島に集結
ちゆうのニホン聯合艦隊はすみやかに拔錨
ヨコハマに向けて回航をはじめた。

京浜全滅の悲報が各地にとどくと、交通も通信も途絶といえる時だけに、途方もない流説がまともに報道され、国内を惑わした。

面白いからその数種を挙げて、関東大震災がどれほど椿事であつたかを、裏面から偲んでみる。次のような甚だしいウソ八百ばかりである。

『九月一日午前六時フジ山爆發したるものの如し。伊予新報』

『芝浦に海嘯襲い、千名ゆくえ不明となる。伊勢新聞』

『小笠原伊豆諸島海中に没す、何処へ隠れたやら。福井新聞』

『秩父連山の噴火、冲天の噴煙壯をきわむ。震源地は諸方面か。岩手新聞』

『上野から長野まで一望の焼野原。樺太夕刊』

『関東地震視察のため急行、一日夜軽井沢より見れば関東平野は大火の海、秩父の連山また猛火に包まれ、悲惨まつたく言を絶す。土陽新聞』

見て来たようなウソとはこのこと、常識で考えてもこんなバカなことが有るはずな



いが、与太もこれだけ度をこすと、ご愛嬌といえる。

『戒嚴令突破のため銃創で刺される者多数火災の炎熱じつに百五十度。信濃新聞』

冗談じゃない。しかも、その戒嚴令が、一皇族避難の目的だと報じているから、お笑い草だ。

『皇居を一時、京都に移すことに決定す。樺太夕刊』

『上野山下に津浪襲来、南無阿彌陀佛の声天地に満つ。京城日報』

『不逞鮮人千余名大森方面より隊伍をなし東京にむかい、麻布聯隊出動、激戦中。伊予新報』

キリがないから、これ位で止めておく。次に「文化面報」の震災の特別号から、地震の体験者の記録を抜いてみよう。実感が滲んでいるから。「桔梗門内の混雑」という一文である。

——私が神田橋を渡つて二分と経たないうちに、もう火に包まれてしまいました。橋の袂の荷物に気を引かれていた親子五人は、無さん火焰のうちに苦悶しているのが手に取るように見える。ああ何という恐しさ。

それから私は、文部省まえ広場へ逃げました。大手通りは大蔵省・印刷局の猛火でも行けません。塀を破り垣を越えてそこへ来てみると、一橋方面から火に逐われてきた幾千、幾万の人でギッシリ詰つて身動きもできない。一方、火は用捨なく文部省にかかつて、火の粉はそれら群集の頭から雨アラレと注ぎかかる。もう退くも進むをかなわず、このまま焦死ぬかと覚悟を決め

ています。嬉しやギイと桔梗門は開いた。群集はバンザイを叫びつつ、門内に雪崩^{なだ}れこみました。その混雑、悲鳴とてもお話になりません。御門内は行止りになつて、その先は禁裡のご門らしく、そこは固く閉め切つてありました。そのうち火はさらにご門を目かけ吹きつけて来ます。鉄瓶バケツなど持ったものは、めいめいそれで水を汲んでご門にぶつ掛けるのです。この時気がつくと、群集の口からナムアミダブツを唱える声が、一種の悲壯をおび大きな喊声となつて聞こえるのです（以下略）

（三）變相生地獄のシルエツト

上野公園には五〇万、宮城まえ広場には三〇万の罹災民が着のみ着のまま、血を滴らし、髪を焼かれ、裸足で、ひしめいていた。

大火の、火もとは百五十ヶ所以上と見られた。出火のものは、お午に使つたガス火放火、工場、薬屋、科学教室の薬品の自然発火などで、終日、東、南から北へと、夜なには甘米をこえた烈風が四方えどんと、その火の手を拡げ、強めていった。目ぬきデパートの三越は午後三時、太陽

のような白色の光焰を噴出して、燃上した。本所の被服廠あとでは、浅草・江東方面からの四万のひとびとが、火にまかれて逃げ場をなくし、犠牲になつた。

浅草から日本橋、銀座にかけて、隅田川の兩岸に望めるものは、空も地もただ火と煙りばかりであつた。両国・ウマヤ橋、吾妻橋の上は、向島へと逃げるまつ黒い人の波で、埋めつくされ、戦場そのけの騒擾ぶり。制止する巡查も、拔剣したままスベなく群集に踏みにじられてゆく――。

子供を両わきえ抱え、老人や病人を背おつて、みな真つ青な顔で、口々になにか叫んでいる。逆上した目は血走り、足の地につかぬ早さ。奔馬がその人波を蹴ちらして走り狂い、川向うの火勢に驚ろいて、逆戻りする人、こちらから逃げる人が橋上で大衝突を起し、ワアツ、ワアツと揉み合うたび、力のよわい男女は川に墜ちてドンドン流されてゆく――。

川の中にも、舟を浮かべ、棒杭につかまりパイの人。地獄絵を見るような兩岸の火明りに照らされ、河心の熱気はまさに衣類も焦げる耐えがたさ。救けを呼ぶ叫び声が、火の熱風、爆発音にまじつて、耳をつ

んぞく。火勢はいよいよ烈しく、兩岸からの火の粉は、タドン大、一尺くらいの凄いのが、唸りを生じ、雨のごとく落下してくる。

火になつたトタン板、戸板、真赤なカラがヒユウヒユウ飛びかい、各所で頭、顔をやられて、どんどん流されてゆく――。高さ二百米もの旋風が、キリキリ水上の小舟まで捲上げて、舞いながら河上を掠め横網町河岸のほうへ、突如、上陸していった。

女子供がカミや着物をボウボウ火に燃えつかれ、泣き叫びながら、岸へ逃げてバタバタ倒れてゆく。明るい真赤な火勢を背に火焰につつまれ走りだして、倒れる黒い人影は、地獄の影絵を見せつけられる怖ろしさ。川水は、まるで湯のように熱い！ 餓えと、疲れのため氣力を失なつた老幼者は、しだいにウツツに陥り、いつか姿を消していった……。

焦死体の異臭に満ち、余燼の漂よう、暗い夜がきた――。

戒嚴令が布かれ、五万の鉄騎がヒツメを鳴らして入京して来た。鮮人の放火説、暴動がつたわり、日本刀、竹やりを提さげた

壯漢が、声もあらく巷を疾駆した。返事の疑がわしい者は、用捨なく殺気だつた人の手で車から引擦りおろされ、たたき斬られた。

青山聯隊に收容された鮮人の数は、三千人からに上り、この騒動はのちに恨みをひいた。

電燈のない、暗黒な帝都の空を、陸軍の探照燈、芝浦おきの軍艦のサーチ・ライトがときどき、稲妻のように交錯して、泳いだ。

暴漢、強盗の跳梁には、持つてこいの悪の花のひとり舞合なのだつた。電話線はズタ、ズタに切れ、おおくの人間がヤミからヤミに消えていった。

三日のうちに全市を灰にした大火が熄んで、しばらくすると冷雨が交替して、ビシヨビシヨ降りつづいた。芝公園うらの高台の、焼けあとを一人の裸足の少女がヤカンをつぶら下げて、歩いていった。ヤカンの中には、道ばたの井戸でくんだ生ま水が、音をたてていた。彼女は、この三日あまり、口クに何も喰べていない。炊き出の握り飯を救護のひとに貰つたが、餓えた後からの手にあら方奪われてしまつた。少女は、伯爵

松平家の学習院え通う一つぶ種の令嬢で、一日の地震に両親を喪ない、附添いの家人と避難する混雑のなかではぐれ、世間しらずの身の途方に暮れるばかりだつた。

訪ねてゆく知人、縁戚もみな焼け出され行方が見つかからない有様。いまでも雨に濡れそぼち、倒れそうな身をやつと支えて、白金のS家を頼つてゆこうと歩きつづける。

辺りは、まつ暗で、道も分らない。少女は泣きそうになる。夜も怖いし、人も恐ろしい。

「——お嬢さん、どこえ行くんだね」

と、坂道のこわれ塀のかげから、とつ然の男の声。少女は立ちすくむ。ヒョロついて、倒れそうだ！

「おつと危ねえ！ お前さん、くたびれて腹が減つてゐるんだな。旨い物をやろう、こつちえ来ねえ」

抱きとめられ、親切な人と気が緩んだ瞬間、男のヒゲ面だけがかすかに目に入つてポーツとあとは気をうしなつた。

煤とホコリにまつ黒な卑しい貌、焦げたボロ衣服、すえた垢の臭い。震災のため、根岸刑務所から解放されて、横浜からテグつて東京え遁れた囚人の一人とは、少女は

夢にも知らない。

高貴な娘のカラダをかるがる抱えて、男は焼けあとの木立のなかの、手製のカリ小屋へ入つた。焼け死んだ馬肉を喰つて、濃い血が、情慾にかわいた獄囚……。淫らな笑いをうかべて、ムシロに腰をおろすと、成熟した少女の軀にそつと顔を近づけて行つた。

「堪えられねえ——ぶんぶん、オツな匂いがしやがら——。手入らずだな、へ、へ、へ地震さま、様」

彼女の濡れて、軀の線に占りついた下着を剥がして、生ゴムのように清らかな肌を鑑賞する。白い齒なみの洩れる、可愛い唇を漬す……。

やがて、悲鳴が一声、雨音にかき消されていった。

地獄の一夜、不潔な野獣の子をはらんだうら若い姫君は、半年ののち箱根の別荘で芦の湖え入水してみづからの悪夢を断ちきつた。

(完)

☆

☆

☆



(時代變態すとおりの)

姫君念佛講

「ヒイツ、許してたも……」悲鳴をあげて白い肌も露はに悶える姫君！
木曾山中の山猿共が深窓の美姫をとらえて、いたぶりなぶる……

比企狂一郎



木曾の豪雨

木曾の秋は、色づいた霜葉が谷に満ちている。渦を巻いて流れてくる木曾川の水は青く対岸に迫った山は、満山これ檜だった。

中津川宿から木曾街道を二里ばかり、十曲峠を折からの豪雨に濡れながら駆け上つてくる一行がある。秋の雨のようにもない、急に降り出した時雨が、篠つく豪雨になつて、立木も折れんばかりの勢いだつた。

宿近い街道筋なら、附近の人家の軒にでも飛び込んだらうが、何分にもここは名題の

難所で、蔽いかぶさつてくる森林の外には、雨をしのぐ場所とてもない。ただ一つ、この峠の上にある小さな茶屋を目当にこの雨の中を遮二無二険しい坂路を登つてくるらしい。

一行は由緒あり気な女物の塗駕籠を前後に挟んで、供頭、近習、仲間まで揃えて七、八人。定紋入り長袖の御仕置せを着た駕籠かきまでが、泥しぶきをあげながら一気に駆け上つてくる。

この十曲峠の茶屋は、もう耳も眼もかすんで来た老人夫婦が、軒先に草鞋を下げ、狭い店先に二つ三つの庄几と、わずかばかりの駄菓子箱を並べているばかり。爐端では老人

たちが、往來のパツタリ途絶えた街道の、夕立のような降りをぼんやりみつめている時だった。

柄袋をかけた大小、合羽をひき廻した侍がしづくが滝のように垂れる笠もそのままに、ツカツカと踏み叫んで来て呼んだ。

「コリヤ茶屋の者、唯今これに、御大身の姫君が御成りになる。かまえて粗相なきよう心いたせ」

慌てふためいた老婆が、庄几の上に毛氈も敷きあえぬ裡に、店先に濡れそぼれた駕籠がピタリと止つた。年配の供頭らしい武士が恭々しく駕籠の戸を引いた。



「姫、山中のこととて、家らしきものもございませぬ。むさ苦しうはございまするが、暫

時これにて御休息遊ばされますよう」

肯きもせず彼女は駕籠を下りた。ひややかな視線を走らせると

駕籠わきにつき添つて来た老女の案内で庄几に腰を下す。

さのみ美人と云う

わけではない。しかし、さすが大身らしい、衣装身ごしらえの見事さと、生れながら備つた品位は、煤けたあたりを拂つて、高慢なまでにとり澄して見える。

供の者の手を経て供された茶にも手をつけずつめたい横顔を見せて、疳癖そうに雨足をみつめた。邸の奥にいれば、凡そこの世で叶わぬ望はなさそうな大身の姫君で、気随気儘の我儘育ち。だからこ

そ、このままならぬ俄かの豪雨が気に入らぬかして、焦立たしそうに細い眉をしかめて見ているる。

供の者たちも、その不興気な姫の様子と、降りしきる雨足を、ハラハラしながら盗み見た。

其処にバチャバチャと、泥しぶきをあげながら毬のように飛び込んで来た子があつた。汚れた短い布子に、女の子だか男の子だかも判らぬ程に、長く髪をふり乱してグツシヨリぬれそぼれた様子は、まるで捨犬のようにみじめだつた。

しかし、案外に丸々と肥つたその子は、この茶店の、時ならぬ雰囲気にも気がつかぬらしく、人々にクルリと尻を向けると、外の雨の中に、口一杯に怒鳴るのだ。

「おつかあ！ 早く来いよオ 早くよオ！」

どうやら五ツ六ツの、男の子らしいその子は、雨の中に、同じようなボロを纏つた若い母の姿を発見すると、満足したらしく、そのまま茶店の中に踏み込んで来た。尻までもない布子から、ボタボタとしづくをこぼしながら――

「コリヤ子わつぱ！ 此処には、御身分ある姫君がおいで遊ばされる。其方共の来る処で

はない、下つておれ！」

云うより早くドンと肩をつかれて、男の子は仰向けに濡れた土間に昏倒した。

「あッ、御許し下せえまし」

駆けよつて我子を抱き起した母子をともどもに、店から雨中に押し出して、

「其方共の如き賤民は御目の穢れじや、外へ出ておれと申すに……」

母親はギョツとしたように子供の手をとつたが、男の子は、折角避けに來た茶屋から、再び雨の中に戻されるのが如何にも口惜しいらしく、顔を赤くしながら茶屋の中を振りかへつた。

外はまだ雨勢劣えず、敏捷そうな若い母親も、幼い子供ずれで再びその雨の街道に出ることは憚られたのであろう。泣き出しそうに唇を噛んだ我子に何か云い含めながら、茶屋の横手に廻つた。そこに僅かばかり張り出した軒の下で、せめて雨を避けようと云うわけらしい。母子とも、身なりは如何にも貧しいが、さりとて、この辺りの水呑み百姓とも思えぬ、何処か種族が違うような、異様な風態に見受けられた。

やがて、さしもの豪雨も劣えて、谷の底の霧も薄らぐ頃、男の子はもう一刻もジツとし

ては居られぬままに、ビショ濡れの布子を脱いで、それを振りながら駆け出そうとしたのだ。

茶屋からは姫が、やつと晴れて來た、十曲峠の展望に旅の憂さを忘れようとしてか、茶屋の軒先に二、三步足を運んだ。丁度その時あの童が無意識に振つた布子の飛沫が、なんと、姫の面上に飛んだのだ。

「あッ！」と袖をあげたが、その時はもう、姫の額のあたりに汚水が飛ねた。

「無礼者！」

ことの恐しさに、童が思わずヘタヘタと坐り込んだ時には、その裸の背を近侍の一人がグイと踏みつけている。男の子は蛙のように泥の中に押しつぶされたのだ。

「御願いでござえます。もし、年端もゆかぬ幼児でござえます。何卒御許し下さいませ」
「ならぬ、如何に童じやとて、重ね重ねの無礼、しかも姫君の御面体を汚したとあつては容赦はならん」

威丈高に罵りながら、供侍はソツと姫の様子を盗み見た。しかし、その人は早や再び床

几にかえつて、冷めたく嘲笑うように、哀れな母子を見すえているばかり。

供侍はその態度に、女主人の暗示するものを完全に悟つたと思つた。彼は柄袋を投げ捨てると、ギラリと大刀を抜いた。茶屋の老人夫婦があッと衝立の裏にかくれる。

母親は侍の足元で、狂氣のように我が子を抱いた。

「ああ彌吉、彌吉！もし、御姫様、御願いでござえます。何卒御ゆるし下さいませ」

誇りを傷つけられた冷めたい瞳が、母親の必死の哀願を高慢に受けつけなかつた。そして——忠義立てに、幼児の肩口に振り下された刃の下で、それをかばつた母親の悲鳴が起つた。もう一太刀。母子の絶叫が峠の風に乘つて流れるのだ。

やがて、この驕慢な姫の駕籠を守つて、一行は立ち上る。何事もなかつたように、妻籠の宿を指して、秋草の乱れる峠を下つて行つたのだ。

「非人頭の、彌七の女房と一人息子だべ。いくら、御大身の姫君でも、なんちゆうことだべ」

「向う見ずの彌七が、なにを始めるか知れねえぞ、恐しいこつちやのう」

その頃、雨の上つた木曾の谷から谷へ、不思議な呼子が無気味にひびき渡つた。その一つがひびくと、それに呼応するように、谷を渡り峯をつたつて、同じ呼子が答えるように鳴りひびく。

一つから二つ、二つから四つと、その呼子の数がまして、やがて網の口がせばまるように、一つ処に集中してゆく。それは猿のように木をよじ登り、飛ぶように谷を渡る男たちの群だつた。

それぞれにボロをまとい、山刀を腰に下した屈強な男ばかり。口の中に指を二本つつこみ、天を仰いで息を吐くと、鋭い口笛が空気の澄んだ秋の木曾谷になりひびく。そしてそれは何かの合図らしい。そくそくと男たちが集つてくるのだ。

そして、この山男たちの統領が、非人頭の彌七だつた。木曾中を支配する非人の統領。と云つても、この木曾では非人とは云うものの唯の乞食の群れではない。勿論どこしも受けるが、木曾街道に大名などの通行がある時は、宿役人の割当てで、継立人夫として荷物も担ぐし、道路の改修もする。

平常は木曾の深い谷の底などに点在して、山の中で生計を立てる。いわば半ばは山窩の

ようなものだが、木曾特有の山の男たちだつた。彼等にとつては木曾の山と云う山は我が家の庭のようなもので、四方に散在しながら実は一人の頭の手で見事に統率されている。

狂暴で単純で、仲間の仁儀、掟は死を賭して守る。彼等にとつて、頭は絶対の存在であり、神聖なる偶像でもあつた。

その彌七が、谷の底の小さな掛小屋の前に腕を組んで坐つてゐる。沈痛に眼を閉じて、三十四、五の、男盛りの眉間に、深い立じわが一本刻みこまれていた。

配下の非人たちは、彌七をとり囲んで、亢奮を押え切れぬらしく、口々に荒々しく喚き合つた。

「姐御も坊ンも、メツタ切りだ。逃げ廻るのを罫り殺しにしやがつた」

「罪もトガもねえ者を……、畜生！ ひでエことをしやがつて——」

ピューツと又鋭い口笛が鳴つて、峯からこの谷にスルスルと人影がすべり降りてくる。

「頭！ わかりましたぞ。奴等は今夜妻籠泊りらしく、まだ明るい内に、妻籠宿の本陣に入りました」

「やつぱりそうか——」

ギョロリと眼を上げて、

「明日は妻籠を發つて、女駕籠づれで、さほど急ぎの旅でもないらしい。須原で晝、泊りは福島に違いない」

「そうなりやあ、福島島の御関所を通つて、敷原から鳥居峠にかかるのは、明後日の暮近くだ。頭、木曾を離れると面倒ですぜ？」
「うむ、それじゃあ明後日はどうでも、お前等に大身の姫君の、念佛講の味を教えてやるか？」

ワーツと、無邪気に聞えるほどの喚声がある。非人と罵られ、賤民と恥かしめられようと、谷又谷のこの木曾山中では、怖いもの知らずの山男たちなのだ。

その夜、門前に篝火を焚いた妻籠宿の本陣を囲んで、なんとも知れず、黒い影がよどめいた。猿のようにむさ苦しい山男の一人、二人が、時ならぬ茸や自然薯をさげて、本陣の勝手をのぞく。馬方仲間の博奕場に、珍しく陽気な非人の一人が顔を見せたりもした。

そして翌朝、あの姫君の一行が出立すると、眼に見えぬそれ等の影も移動する。それは後になり先になり、秋深い木曾街道を妖氣をはらみながら下つてゆくのだ。



何様の姫君か、さすがに大身らしく、福島
の御関所も、彼女は駕籠のままで通つた。

この辺りから高い枝が両側から覆いかぶさ
つて、晝でもうす暗い道がつづく。降るよう
に落葉が舞い下りて、旅の秋を一層哀れ深い
ものにするだ。

くねくねと曲りくねつた坂路にかかると、
これが音に聞えた鳥居峠で、細く険しい坂路
を人々は登りあぐむのだつた。そして、その
頃は姫の一行を囲んで、あの黒い影が、いよ
いよ明確にその姿を現わし始めていた。

一行の前を、返えり馬でもひくように、ノ
ドかに手綱をひいていた男が、クルリとふり
向いて、例の鋭い口笛をひびかせる。それが
合図だつたらしく、両側の林の中から、パラ
パラと非人たちが飛び出してくる。

アツと云う間に、巧妙に供侍たちと、駕籠
との間がへだてられた。

「狼籍者！」

だが、柄袋のかかつた大小を抜き合わせる
間もなく、駕籠から姫の三枚重ねの衣裳がこ
ぼれ落ちる。山男たちの中の、えり抜きの韋
駄天が三人、からみつく老女を蹴飛ばして、姫
の襟首に手をかけた。

「無礼者！ なにをしやる！」

だが、荒くれ男たちは軽々と抱え上げる。

それから宙を飛んで、彼等の家を指して、引揚げるのだ。赤い、華美な姫の衣裳が、木の間がくれに見えかくれする頃、四、五人の武士たちは、蒼白になつて刀を構えている。

非人たちは巧に彼等を押し包むようにしながら、四方からバラバラと小石を投げるのだ。そして、何時か一人、二人と深い山中にその姿を消して行つて仕舞う。横倒しになつた主のない駕籠に、秋の残り陽がかすかに赤い。

氣随氣儘の我儘者には見えても、恐怖から、さすがに姫はグッタリと氣を失つて仕舞つた。しかも、恥かしめ、いやしめた非人たちの肩の上で――。

夢にさえ見たこともない、深い深い山の奥だ。赤々と焚かれた篝火を囲んで、山の男たちは車座になつて酒をあおる。彼女が正氣をとり戻した時、其処はもう浮世の、家門の栄譽も金銭も、一切、手が届かぬ無縁の場所になつていた。

それはもう大身の姫君ではなく、酔つて殊更獸性に戻つた荒くれ男たちの中に、ただ一人投げ込まれた、ただの女に過ぎないのだから――。

そんな男たちの輪の中で、彼女は再び失神して仕舞いそうな、混乱に打ち震えている。

非人頭の彌七が、グイと彼女の髪をつかんだ。

「あッ！ なにをしやる！」

「ふん、そりやこつちで云うことだ。お前か俺の女房子を黽殺しにしやがつたのは――」

「ヒイツ！ 許してたも……」

「そうはゆかねえ、と云つても、なあに、大したこたあしやしねエ。なんにも、お前に出来ねえことはさせやしねエからの。罪もねえ女房子の成佛のために、お前に片捧かついで貰つて、此処で念佛講をやらかそうつてことよ」

「殺して、殺してたも！」

「いんにや、一度手前たちのものにした女は必ず殺さねえのが非人仲間の掟よ。首尾よく仲間一党の念佛講が済んだら、そうよなあ、権爺イ、お前の女房にくれてやろうぜ」

仲間に囃されて、篝に照らされた権の醜い顔がニタリと笑つた。

片眼で鼻は落ち、その上半面大火傷の跡が無残にひきつれた、化け物のような爺イだつた。

「さあ権、花嫁の肌を拜むがいいぜ！」

泣き伏した彼女の撫肩に、太い薪のような権の手がかかる。ヒイツと思わず飛びすさる

と、ヨダレを垂らさんばかりにいやらしく相好をくずしながら、再びニタニタと迫つてくる。

まるで鼠を黽る猫のように、酒の肴に囃されながら、非人共の眼前で、深窓育ちの白い肌があみ出しにされる。藤のツルで後手に縛られ、深山榎の大枝から釣り下げられるのだ。

やがて乱酔した彌七の手の中で、大弓の折れがすさまじく風を切る。

「ふん、姫君で候の、御大身で候のとはざきやがつて、よくも俺の女房や一人息子を黽り殺しにしてくれやがつたな！」

「あッ！」

「賤民共は目の穢れちやと、その口で云つただらうによ、その非人共にこうして念佛廻しされる――ヤイ！ なんとかもう一度ほざいてみやがれ！」

復讐の快感と、異常な情欲が鬼火のように青く燃える。手を打つて囃す非人たちの真中で、誇りを失つた女が、生れた時のまゝの姿にかえつて、泥土の上をのたうつのだ。

深い木曾谷に、思出したように落ちてくる時雨の中で、今夜は夜もすがら、この地獄谷に墮ちた女の悲鳴が聞かれよう。

(おわり)



變態間引風俗誌

殺児の方法としては窒息法。扼殺法。壓殺法。撲殺法等があり、その他藥物による殺児もあるが、反對に乳を與えずに干殺した風習もあつた……

中野 榮三

子まびき

「間引」はまた「子間引」とも云つて、墮胎及殺児に対する最も一般的な呼称だつたのである。『徳川禁令考』には、これは既に宝暦以前からあつたと見えているが、墮胎及殺児の事實は、もつとそれよりも古くから存在していたのであつて、また「間引」の名は後には専ら殺児の方に云う名となつた。

産れた子を自分達の都合から殺すということとは、既に古代から行われていたところだつた。その理由も様々だが、兎に角後にはこれが風習となつて殆んど公然と流行した時代もある。

江戸時代からの称で「間引」ということがある。「まびき」とは間を置くことであり、つまり産児に対する人爲的な制限なのだが、昔は避妊の智識も進んでいなかったし、種々な生活様式が避妊に適當でなかつた關係などから、寧ろそれには墮胎や殺児の方法が行われたのである。そこで俗に「おろす」「流す」など云うのは墮胎のこと、産れてから殺すのを「戻す」「返す」と云つて區別されていた

が、「間引」も後には専ら殺児の方の意とされるようになった。

その他「おろぬく」「一丁おき」なども殺児の意だが、兎に角産児に対する制限のことであつて、「洗子」「白ごろ」「しろくする」「もぐらにする」等は専ら殺児に対する方法上の名だつたのである。

殺児の方法としては要するに窒息法。扼殺法。壓殺法。撲殺法等があり、その他藥物による殺児もあるが、反對に乳を與えずに干殺した風習もあつた。

では風習としての之等の行爲がどのように行われたかについて、次に少しく述べて見たい。

『子孫繁昌手引草』は嘉永の頃に之等の風俗が非常な流行となり、なげかわしい世情となつたので、それを防止しようとして出された書物なのであるが、その中で

子供の多きは身代のかせなりとて、産みおとしたるとき、口を寒ぎ尻を押えてひぎにしき殺し、又は産ぬさきに飲ぐすり、さしぐすりにて流すを子返しと云い、又子まびきとも云う。

と云い、「子返し」「子まびき」の名が見え、子間引を墮胎にも云つていたのである。そして此の方法としては、口をふさぎ尻

押えて膝下に圧殺したという頗る慘虐なものだつたから、産婦自身とか夫婦共謀でやるよりも、これを取揚婆に頼んでやらせる風習が多かつた。そのとき取揚婆は産婦に対して予め今度生れる子は入用か不用かを尋ね、或は女兒なら残すとか男兒なら欲しくないとかを聞いて置くが、これにはまた「山えやる」置かない」などといった暗号めいた用語が用いられる。

この嬰兒殺の方法はぬれ紙の法に次いで、膝下に処置するのが最も多く、風俗調査によれば青森、神奈川、長崎、鹿児島と、これは殆んど全国的に行われた方法だつたのである。或は群馬、千葉、岡山地方では踏みつぶすとか尻に敷く風習もあつた。また首を捻りつぶす風習は群馬、福井などに行われた。

何れにせよ之等の殺兒は例え風俗的に存在したとは云え、完全に人殺行爲であり、頗る慘虐な野蠻行爲だつたし、実に無恥愚劣極まることなので、古来屢々禁じられたにも拘らず、此の悪習はかなり広範囲にそしてまた大分永い間続いた。

おろぬく・一丁おき

これも「間引」の同意語だつた。『磐城志』

には、

子間引は、うろぬくの義なり、即ち空抜の省言なり、その間を空くするの意也、木苗物の蕃殖せるを抜き捨るより出たる詞とみえたり。

という。その方法は同じだが、斯様な呼称が行われたのは、福島、長野地方に多い。更



に「一丁おき」とは、一つ置き、一つ飛びの意で、事実何等の思慮もなく一人おきに産兒を間引いた慣習だつた地方もある。

織機の盛んな地方には、昔から女が尊ばれ、男は仕事がないから長ずると他国へ出稼ぎに行くより仕方がない、そんなわけで女が

生れると祝うけれども、男だと間引かれるのもあつた。

子返し・戻す

これ等は何れも返戻する意で、もとえ戻す以前に返すとして産兒を殺したのである。前出の『子孫繁昌手引草』にも「子返し」として、その註書には、返すは産子を殺す事とある。また『磐城志』には、穩婆に托して戻さすものあり、とて此の称が見える。

岩手地方では「戻してやる」「返してやる」と云い、「お返し申した」など云つていた。福島地方では「子返し」「日返し」の称があり、日返しというのは、生れて即座に帰るとの意だという。土地の方言では「オツケイス」「オカヘシ」「ブツカヘリ」「チチカケル」(福島)など云うのである。オツケイスは追い返すこと、ブツカヘリは打返り、もとえ返すなどの意であろう。チチカケルは乳掛けるの意か、乳房を以て窒息死させることであるという。或は土かけるの意の方言ではなからうか。

福岡地方では「戻す」「くける」と云い、鹿児島地方の「ヘイゴ」(押兒)は圧殺の意となる。島根地方では「スタル」という

が、これは廃れるの意か、自然の流産を云うのだが、人爲的な間引には「ステル」(捨る)という。

押返し・押戻し

福岡地方では「押戻した」と云い、長崎及び宮城地方では「押返し」と云う。これもまた返し戻しの類称である。

江戸末期には墮胎、嬰兒殺の風習が殆んど全国的に蔓延し、各藩毎にそれぞれ取締の触書を出しているのだが、米沢藩の禁令中には——出生之子押返候儘云々——の字句が見えここでも押返しと云っていたらしい。

福岡地方に昔行われたものには、薬づとえ嬰兒を入れて窒息させたという変つたのがあり、岡山地方ではタゴえ入れて倒に吊つたのがあつた。

しろくする・こくみ

間引に「しろくする」ということがある由、

早川純三郎編『新燕石十種』に見へ

今も辺土の氏子がたんと生れてはとて、うみの子の面にぬれ紙をはりて、しろくするを、しろくしてしまつたとか、とむらう也とぞ云々。

という、顔が紙で白くなるからであろう。更に「こくみ」とて絞殺の名があり、子縊るの略言であろう。

ぬれ紙を用いたものは最も多く、その習俗は宮城、群馬、千葉、長野、福井、鳥取、島根、岡山、奈良、高知、愛媛、鹿児島等の殆んど全国各地に見られ、福井地方にはぬれ紙の外に胎盤を用いたという。

窒息にはこの外、前にも掲げた「チチカケル」があり、香川地方では掌で押えたと云うし、膝下にされたり尻に敷かれてはたまつたものではない。群馬、福井では水につけるとが行われたと云い、青森地方では出生直後に口一杯塩を押込んだとも記録されている。

白ごろ

神奈川地方には「うすごろ」の名がある。

新潟、鹿児島にも同じ称があるし、青森では木臼の下敷にしたと云い、宮崎ではたらいの下え入れ、香川地方では重石を用いたという。「うすごろ」はボロに包んで臼で圧殺したものだから、臼転ろがすの意か、それともうす五郎など臼で殺すの擬人名か。群馬地方には味噌樽の下え片付けると云い、「ツブス」の呼称が行われた。

洗子・その他

「洗子」(センチ)ということも古くから称えられていたようで、昭和二十四年刊、石川謙著の『我国に於ける児童観の発達』中にも『久世條教』に禁洗子の一條があると記されている。

鹿児島地方では所謂布団むしの習慣があつたし、奈良方面ではボロの上え俯伏にして圧したと云い、或は「干し殺し」とて乳を減じて死に至らしめたのもあつた。

青森の「ハンサヌ」岩手の「ハツサン」など云うのは、何れも半産の意であろう。つまり産れるまでに途中で出てしまう流産のことであり、また墮胎のことともなつた。

處置と方言

斯くて嬰兒の死後には、それを菰に包んで川え流した。川に便利の悪い所では庭え埋めたり、山え運んで埋める風習もなかなか多かつた。そうした習慣があつた地方の川には此の菰包が諸所に流れ着いていたことだが、如何に昔のこととて醜き悪習だつた。

そこで岩手、秋田地方では斯様に捨てることを「かじかすくにやる」とか「鰯取つて来い」と云つた。岩手地方で「塩買にやる」と云うが、それも流すことだつた。山え捨てるのは「ヨゴミ(よもぎ) つみにやる」(福井)、「松かさ拾いにやる」(長野)、「山稼ぎにやつた」(三重)、「コツパ(木葉)かきイやる」(長



崎)、「アカシ(灯火)かぎイやる」(対島)は燃料取りとも云うべき意である。

川え捨てるのは前にも云つた「かじかすくにやる」の外に、「かに取りにやる」「蜆拾いに行つた」(岡山)等があり、普通一般に「流す」「おろす」と云えば単なる墮胎の名

だけなのである。

何れにせよ斯うして自から生んだ愛児を手にかけて殺すということは想像も出来ない非人情、惨忍な行爲なのであるが、如何に當時の世態が悪かつたとは云え、それが追々風習とさえなつて、他でも黙過し自分でも平氣で行うということは、実に恐ろしい次第である。

子おろしと取揚婆

取揚婆は普通には産婆であり助産婦なのだつたが、此の當時では墮胎や殺兒も産婦の依頼によつて取扱つていた。その常習者は出産に招かれて行くと、先づ今度の子は置くかどうかを尋ねた。若し置かない(不用)と云えば産ましてから返したという。

『子孫繁昌手引草』にも、取揚うばという者をたのみて情なくも返す、と云い、『甲子夜話』では、取揚婆の産所に於て云々、とあり、磐城志は、隠婆に托して戻さす云々と云う。そして之等が墮胎や殺兒をしていた。

熊本地方では、子おろし婆を「小細婆」と云つた。岡山では墮胎専門の業者を「児墮し」と呼び、墮胎ばかりでなく殺兒も扱つたのが多い。滋賀県では墮胎業者を「さし婆」「さ

し爺」といい、男の施術者もあつたらしいが、このサシは挿入の意で、ほうづきの根、桑の根、牛蒡の根などが用いられ、これに糸をつけて足に結んで置き、二三日で墮胎したと云われる。その長さや方法、時間等についての記録もあるのだが略す。

江戸では中條流の女医者があつて、これが月水早流など呼ぶ通経剤を売つていたのだが、実は墮胎医だつたのであり、御殿者、女中、芸者などが顧客だつたらしい。然し地方には斯うした「子おろし婆」が居て、墮胎から嬰兒殺まで引受けたのであつた。そして田舎の斯る子おろし婆は、大抵は醜い片輪者が多く、自分もかつては子殺しの犠牲者だつたが、運よく助つた者だとか、途中から生き返つたなどと称して、首の曲つたのや足のびつこなの、その時の証拠だと語っているが、一般から常時は悪魔のように思われ、彼等が死ねば必ず地獄へ行くと信じられていたのも無理かぬところである。

墮胎や避妊についての習俗、その他の詳細は更に稿を改めて別に記したい。

(おわり)



讀者

交 歡 室

さぢすと

★小生悩めるサヂストの一人です。あります。サヂストと申しましたも、女性をあまり虐待するのには好みません。ただ操り責めだけに異常な関心を持つてをります。未だ思春期の折、御家騒動の芝居で美しい御殿女中が悪い同輩の女中達から縛られて操り責めにされるのを見ました同様の小説を読んでからは、操り責めに異常なる興味を抱くようになりました。サヂストの癖に気が弱い爲表面は聖人君子のような様子を装つて、そんな事はおく

びにも出さないの
で、まだこんな経験
はありませんが、心
の中では常にその思
いで悩んで居りま
す。

美しい淑やかな女
性を見る度に、あんな女を一度でもよいから思うま

まに操つてあげたら、私の灰色の人生はどんなに喜びに満される事かとしみじみ思います。

女性がくすぐつたそうに身をくねらせて、美しい悲鳴をあげている光景は何と艶な美しさであります。

操り責めの悦虐に興味を持たれるマゾヒストの御婦人の方が居られましたら御文通賜り度、お願い申し上げます。

(東京 TS生)

★僕は今年満二十一才になる都内某大学の夜間部学生ですが若い女性を縛つたり縛られたりい

ぢめたりいぢめられたい希望で、毎日空想に耽つています。同好の女性の方とわだかまりのない通信と交際を望みます。未だ未経験なのでお互いに指導研究出来れば幸甚。通信は男名で願います。

(東京品川 H生)

★小生独身三十一才の男子です。信じられぬかも知れませんが、今尙童貞です。軽度のサヂストで、是非一度若い女の方を縛つて責めて見たいと思つてます。絶対に紳士の行動をとります。多少自分自身マゾの傾向もあるかも知れません。若しマゾ的的女性の方が居られましたら是非お便り下さい。東京へは月一度行きます。

(浜松 MB生)

★小生十七才の頃、或る女性に悪戯をして、彼女に「女だと思つて！」と一喝されひどく怒られた経験があります。それから

十有六年、当時は変態の意味も知らず、自ら己の身に嗜虐の鞭を振つて来ましたが、何時かその苦痛にうち克つた途端、今度は、加虐の夢に（——マゾよりサドえの百八十度の転換はあり得るものなのでせうか）酔う身となつて、今尙妄想に耽けるを常習とする悲しき自分なのです。

どなたか共鳴なさる同志より実際の経験談でも御教示下さらばと、そのみ意願してをります。

(西宮市 佐渡夢二)

☆サヂスチックな嗜好は割に普遍的で同好者の通信が山積してをりますがこのホンの一部を掲載しました。たゞし京都のQH氏の投書は非常に貴重な体験記でもあり、長文でもあるのでこの欄の最後尾に掲載しました。また責めにおける具体的な技術や女性の生理感覚を毎号徹

底的に追究してゆきますから、御期待下さい。特別報告も追々集まつて来てをりますから、機会を見て一挙に発表致します。

まぞひすと

★私は徹底的な男のマゾヒストです。中年以上四十才から六十才迄のよく肥えた御婦人の方に思い切り弄んで頂きたく存じます。どんな美しい方でも、若い人、やせた人には魅力がありません。どうか適当な方に御紹介頂き度いと存じます。――

(横浜 芳沢生)

★サデイストの女王様の足下にひれ伏して……

愛読者の諸姉様、僕はあわれなマゾヒストです。女王様方の暴虐のお仕置が僕には何物にも変えがたき最大の喜びです。

容姿、年齢等……その様な贅沢な事はどれいのか身としては申しません。

ただ……一日半刻でもこの哀れなどれいを御飼下さる方があれば御連絡下さい。

(千葉 TK生二十才)

★小生三十三才の男、一女あり。少年時代より多分にマゾ的傾向強く、又サド傾向も二分の一位の強さで、こつそり本屋で少しでも同傾向のある雑誌等を買求め、自ら空想のみで慰めて来ました。

妻にも数回要求しましたが、手ひどくその度に拒絶され、危うくインポになりかけましたが今日ではあきらめて居ました。

はからずも買求めた「風俗草紙」によつて同好者の意外に多い事を発見して、安心しました。神戸近郊の方でサドは又マゾ的な方、御交際お願いします。

(神戸市 TT生)

☆マゾヒストの方はサデックな女性をなかなか求め難いようで

す。本誌は、こうしたマゾ党諸氏の御不満を少しでも満す爲、次号から男性マゾの手記や絵写真等を活潑に掲載致します。

またサデックな女性との連絡や、職業女性のメモなども、誌上に発表してゆきます。どうぞ御期待下さい。

そとみあ

★愛読者通信の所で、大阪TN生が交際を望んでおられました。が、私をお世話願えませんか。二十二才大学生、美男で適格と思います。大阪市内の適当な場所、日時を云つて下さればすぐお会いしに参ります。

(奈良県 某生)

★奈良の高山様に申し上げます小生貴兄の心境に共鳴致しました。廿六才の青年です。体重十五貫身長五尺五寸の少々よい体格の持主と思つて居ります。貴兄と同じ悩みに日夜苦しんで居

りますが、勤務先が三時頃に退けますので、心境の転換を計つて毎日淀川で全裸体運動で昇華しています。

場所は中津紫島赤川辺の河原で水泳、跳躍、疾走等致して居りますが、土曜日に限つて目印に赤紐の海水褌を着用致します。貴兄との一日の心ゆくまでの快遊を希望してやみません。

(大阪市 T生)

★私は二十四才です。若い学生さんでも中年の方でも御交際出来たら、どれだけ幸かと存じます。

(三重県 K生)

★私は二十四才の女性的ソドミアです。私の希望の人は五十才以上の初老の、いわゆる重役タイプの人です。どうぞ御交際お願いします。(大阪 S・Y生)

この欄にドシドシ御投書下さいこれこそ皆様の頁です。

(編集部・T・U擔當)

責めの記録

始めてお便りいたします。私は七月号からの愛読者です。さて私は責めのファンですが、私の経験したものの内から少しばかり御紹介いたします。私にはいはゆる「責め」の対称になるパートナーが一人います。

仮りに彼女をS子としておきましょう。S子は背は一米六〇センチで相当体格はよい方です。乳のふくらみ方等は相当なものです。最初は誰でもする様にS子を全裸にして後手に縛り上げて紐尻を持つてS子をぐるぐる歩かせるのです。歩かせると云うのは一向に面白く思えない様ですが、仲々興味あるものです。ヒップと乳を波打せて歩く様は何んとも例え様がありませ

崩れる所にたまらない魅力がひそんでいると思います。何かにつけて動的でなくてはならんと思つています。

いわゆる逆吊り吊し責め等も試みて見ましたがこれは本に書いてある様に吊して見ているわけには行きません。一分もたつかたたない内に口びるが青くなつて来ます、本物の死刑でしたらそれでよいのですが、殺人罪になつては大変です、まづ吊しと云うのは実現性が全然ありませんでした。しかし「はりつけ」は苦しくもないらしく体を大の字にして、足は疊の上に置いて手を拡げて縛り上げ「カモイ」の釘に紐尻を結びます。これでくすぐつたりムチで軽くたたいたりする時、S子が自由にならない手足をよぢらせて苦しむのが何かぞくぞくとするものを身におぼえさせます。

さて次は私の新案ですが未だどの本にも発表されておられませんので一寸私がS子に対して経験したことを述べて見ます。それは煙草責めです。裸にして自由を奪つておいてから、自発的ではなくて強制的に煙草を吸はせるのです。S子もこの時ばかりは本気で拒み続けましたが対

手が本気になればなるほどこちらが強制的になり、なだめすかしたりして、遂に吸う様になりました。この方法は絶対に巻煙草では駄目です、矢張り一番よいのはキセルで、つめていると手間がかかりますのもつぱらキセルの先に巻煙草をつけて吸はせております。始めのうちにはニコチンの少いクール等を吸はせてましたが、現在では「光」程度のものを吸う様になり、三本位吸つても平気になつてしまいました。キセルを水平にくわ

えさせて後手に縛り上げてぐるぐる六疊の部屋を歩かすのも面白いです。

又横ぐわえさせてヒップをムチ打つのも面白い。マドロスパイプの大きいのはあまりよくなく、又葉巻も始めのうちは興味ありましたが、ニコチンが多すぎて少しS子も弱つた様です。

全裸で後手に縛り上げられて長キセルを赤い口びるにくわえさせられて、白い煙をキセルを歯でくわえたすき間や鼻からもくもくと吹き出し苦しそうに身をよじらしてもだえる様子を御想像下さい。まずエロチックの極致とも云うべきものでしょう。本当に我を忘れます。

「責め」について御研究の諸兄諸姉の御意見を仰げれば非常に幸福に思います。

(京都市上京区 O・H生)

そ

と

み

あ

通

信

讀者
交歡室

藤井 晃



(1)

「そとみあ通信」の仲間入りをさせて頂きます。私はソドミアなるが故に、十五年来の職業から離れるようになった者です。

私のこのよう気持は、昨年の初めころから起りはじめました。そして日を経るごとに強くなつてゆくばかりなのです。本年三十二才年令の上からいっても、これ以上の深入りはしたくないと思い、思いきつて妻とも別れ、他の女と同棲しましたが——他の女によつて気持の転換をはかろうと思つたのです——同性恋慕の念はますます激しく募る一方でし

た。

今年に入つて、居たたまれなくなり、顔に脂粉をほどこし、濃く口紅をつけて、街に出ましたが、とても客の袖を引くことができませんでした。

ふだん街を歩いていても、肥えた中年の男性を見ると、胸がどきどきして来ます。あんな人の世話をうけたいと、本気に思いつめることがあります。

書物、雑誌などで見ますと、ソドミアは男娼というものは嫌いだそうですが、私は嫌いではありません。魅力すら覚えます。又、女性でも肥満した者には、或る程度の興味はあ

ります。

だがやはり最大の対象は男性です。中年以後の男性なれば無条件です。

藤井先生、男性本然の姿の男を愛してくれる同性はないでしょうか？ 女性姿になれる自信があれば、とつくに男娼になつています。読者の皆様の中で。私のような者でもおつきあい下さる方がありましたら、「そとみあ通信」を通じてお便り下さい。

(下関市 長崎 三郎)

答

あなたの文面から察しますと、あなたは瘦せぎすの体格ではありませんか？ それが、あなたに肥満した人え恋情を起させるのだらうと思います。

趣味とか性格とかは別として、体格の点では人間というものは、自分と反対の者と結付きたがるのが自然の原理なのです。あなたの別れた奥さんというのは、おそらくあなたと同じような体格の人だつたのではないでしようか？

あなたの同性恋慕は激しいと云われており、

ますが、根本的には、あなたの同性愛は軽度のもののように思われます。若しあなた自身治そうという意志さえあれば、わりあい早期に治癒しすなはち異性愛へ転換できるのではないでしようか。

しかし、おそらく、現在のあなたは、治そうという考えはおもちになつていないでしよう。左様。治そうなどという努力はなさらずに、自然の成行に任せることが、一番いいと私は思います。

(2)

前号「そとみあ通信」を読んで、世間には僕と同じように、人に云えない同性愛の悩み辛さを持つている人が少くないことを知り、感に堪えず筆を執りました。

僕の同性愛はウールニング傾向です。大正十三年——当時僕は十六才でした。——大阪の親類の家に遊んでいた時に、そのころ二十才の従兄から求められて、関係したのが発火点となつて、それに興味を覚えるところになり、帰京してから友達とそのことをつづけました。

大正七年近衛聯隊に入つて、或る少尉に愛せられてから、心身共に女性的となり、その

後いろいろの友人と関係結びました。

いまでも婦人には何の興味も関心もないのは、自分ながらなさけないと思つていますが同性、殊に三十才前後の男性が実に慕わしく銭湯などでそうした人の肉体を見ると、堪らない時があります。

僕の最初に

関係した従兄も、二度目のM大生も、少尉も、いずれも包茎でした。がそんな先入感があるせいか包茎の人を見るのが何よりのたのしみであり、同時に情欲にかられて、いまさら女に生れなかつたのを残念に思うことが度々あります。

ペデラスト傾向の方から、お便りいただきたいと存じます。

(東京 花房生)



答

ソドミアの大多数は、ファルス憧憬の精神を持つてゐるものです。

私自身も、自分の男色歴において、そうであることを語りました。そのファルス・ナイドも、大体において、ウールニングは成熟した形のそれのナイドであり、ペデラストはどちらかという少年的な未熟のものへの愛慕であるものですが、あなたの場合はウールニング傾向でありながら、包茎へのナイドであることが変わつてゐます。

それは。あなたも云われているように、いままであなたと交渉をもつた相手の男性がいずれも包茎であつたことに原因していること云うまでもありません。それはナイドというより郷愁に近い感情だろふと思ひいます。

(3)

私は今年二十五才、中学卒業後、豫科練えゆき、現在は或る會社の事務員を勤めております。

私は同性愛者といわれる人に似たところを持つております。(まだ同性愛者だとは断言できません)それが、御誌創刊号の、「そとみあ通信」他の男色についての記事を読んで急に相手が欲しくなりました。

いままでも、美しい男性を見ると、何となく惹きつけられて、その人と話してみたくなあと感じたことはありませんでした。

私が現在一番欲していることは顔の美しい同性に對して、口入してみたいことです。おはすかしい次第ですが……。

何でこのような同性愛的の氣持になつたのか、不思議でなりません。一方私は、一人の女性に對し、熱烈な恋をしているのです。

(相生市 晃二)

答

芥川龍之介が、何だかの作品(小説ではなく隨筆的のものだつたと思います)の中で、「同性愛は誰でも持つてゐるものだ」というような意味のことを云つておりますが、私もそうだと思います。

一体男同志の深い友情というものは、根柢には同性愛的のものが含まれていると思うのです。男女の恋愛とは異つた性質の、もつと

純粹な愛情です。

又、友情ではなくとも、美しい少年などを見れば、誰でも可愛いなあ、愛してみたいなあと思う。それがつまり同性愛なのです。

ただ、普通の人の同性愛は、そうした美しい青少年にも愛情を感じるとともに、異性にもまた恋愛感情を与えます。すなはち、男色女色両道で、昔の大名などが一方美しい小姓を寵愛をしながら、また一方愛妾も抱えていたといつたような類のもです。

あなたの場合も、文面のように別に不思議でも恥しいことでもなく、何人にもある同性愛の氣持がややハッキリと現れたにすぎないのだと私は思います。

(4)

同性愛の宿命に泣く一人です。いままでこの苦しみは私が胸一つにおしかくして、徒らに仮面の人生に喘いでまいりました。さいわいに妻帯後も。どうにかごまかし通し現在二児の父親とはなつておりますが、三十五才の今日でも、依然同性を恋う念いは熾烈で、毎日懊惱の明暮を過しております。

生涯の中に一度でも、この心を打明ける相手を得て共に哀歡を分かちたいとそののみ祈

り願つておりました。

ところが偶然貴誌「風俗草紙」創刊号にて「そとみあ通信」を見るに及んで、活然として光明の世界がひらけたごとく、雀躍しました。まことに、闇夜に灯火を見るとは、このことでしよう。過去十幾年という間の相手欲しさの煩悶も焦慮も一遍に霧散し、すでに意中の人は我が手中に握つたような得意さも思えばみじめだつた、あのうちひしがれた思ひ出故でしようか。

同志の皆さん、何卒お手紙を賜りたいと思います。

私は青年期においては、大体受身のような感情が多かつたようで、男性的特徴の強い好男子に魅力を感じましたが、現在では、相手次第でどちらでもよい様です。むしろ抑制された慣習のためか肉体関係にも増して精神の結び付きに。云い知れぬ期待とあこがれを覚えるものです。

(高知 正文生)

答

ソドミアであるための悩み、苦しみが文面にハッキリと窺われ、感激に堪えません。職業は省略しましたが、農業であるとかで、よけいに周囲の封建的桔梔に苦惱されたことと思います。心ならずも妻

帯を餘議なくされたのも、そのためでありましたでしょう。

同性愛者の結婚についての悩みは、この、「そとみあ通信」にも沢山寄せられておりますがまことに、ソドミアの結婚は、自分のみならず、相手の女性をも不幸にするものであつて、悲劇というよりほかありません。

社会は同性愛者に対して、理解も同情もありません。いや解つていないから同情がないと云つた方が正しいかも知れません。

世の人々に、ソドミのいかなるものかを知らしめるためにも、責任の重大なことを痛感するのみです。

(5)

「風俗草紙」創刊号の「そとみあ通信」を読み、男色に対して興味を感じるようになった者です。私は倒錯者なのでしょうか？ しか



し未だ一度も男色の相手になつた事もなく、男娼を買つた事ありません。女色については知らぬことは一つも無いつもりですが男色についてはまるで無知なのです。このような私でも、「そとみあ通信」の仲間入りをさせて頂けたら、倅せこれに過ぎるものはありません。

女色に対して知らぬこととはないと申上げましたが、昨今では、女性に対する性的興味や関心がまるで薄らいでしまつたのです。どんな美しい容貌や肉体美に対してもその美しい曲線美を衣服を脱して眺める程度の欲望はあつても、関係してみようというような普通の男としての性的感情を与えません。

したがつて現在妻帯しておりますが、妻との性生活において、それを始めるまでは男としての正常心理なのですが、行爲に移るとおおい自分の理性が強くて来て、そうなるかと、索然とした気持ちにおちいつてしまうのがオチなのです。でも妻えはゼスチャアによ

つて、自分も満足したように思わせています。が、われながら厭になつてしまします。ところが、それに反して、「そとみあ通信」を読んでからというものの、以来、肉体美の男性を見ると、その人と裸体で戯れる場合とかそのもののインチだとか型だとか、種々空想にふけるようになりました。

それとともに、心身共に許し合える同性の相手が欲しくなつて来たのです。その相手に自分も満足し、相手をも満足してもらいたいと願う一方、女色を漁つた時のように数多く当つてみたい、そうして交際している間に、ほんとにこの男と男との恋をしてみたいなどと思うようになり、その願いがだんだん強くなつて来たのです。なるべく多くの人とつきあい、男の良さというものにふれて見たいと思います。現在の私の気持は、十八娘の恋心というようなもので、まだ見ぬ未知の同性に対する濃厚な恋心に燃えております。

ソドミアの皆さんからのレターを鶴首して待つております。
(三重 矢田守)

答

俗に「道楽の極地は男遊び」だと言われております。女遊びをさんざん仕盡して、それに刺戟がなくなつた人は

男遊びに手を染めるものとされております。

失礼な想像かも知れませんが、あなたの男色に対する興味と関心には、それに似たものがあるように思われます。女色については知らぬことがないまでに、仕盡して来たあなたは、その女性というものに性的感情が起らなかったときに、男色の強烈さを本誌の記事によつて知つて、かつ然としてそれに捌け口を見出したというのでないでしょうか。

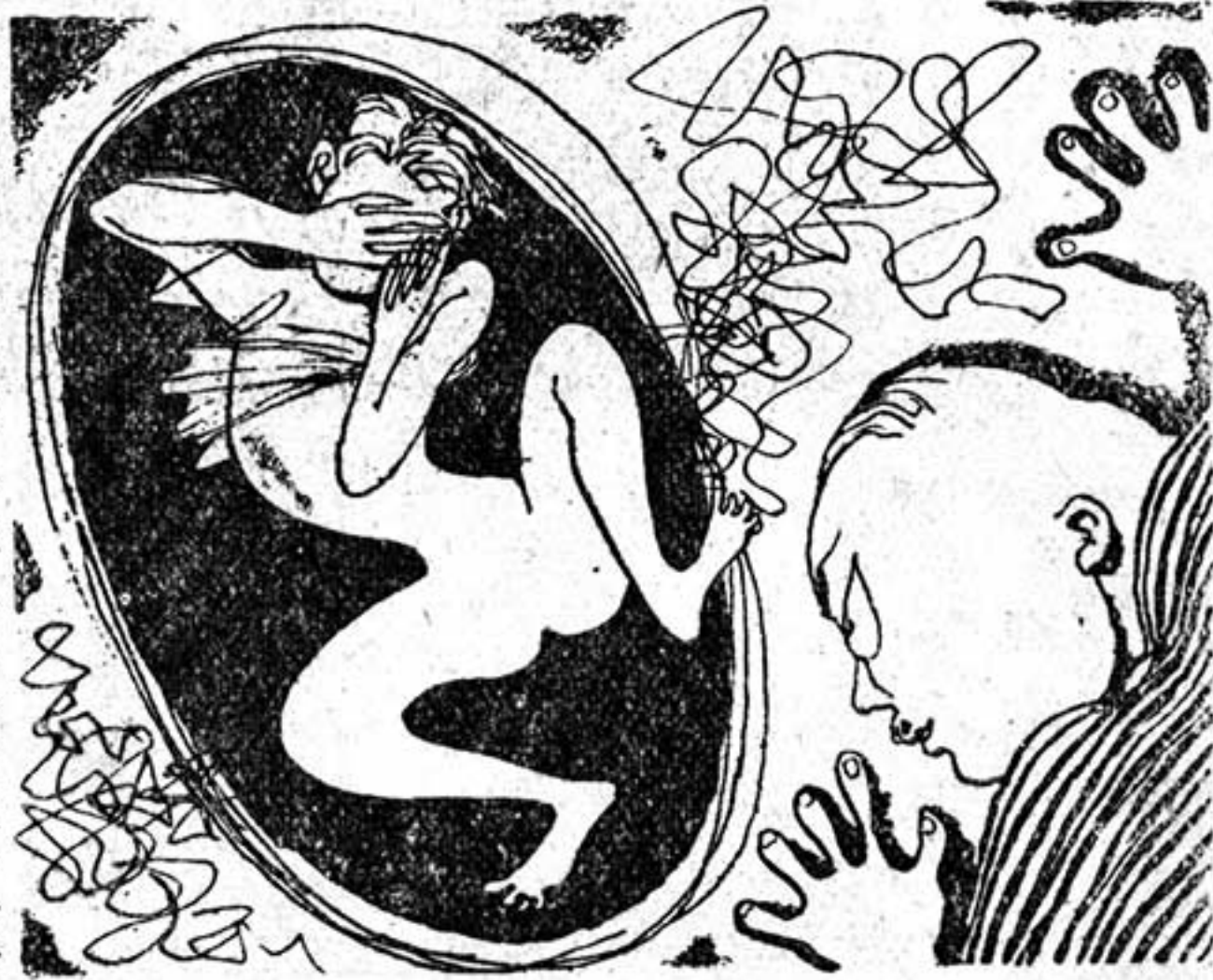
それと、も一つは、あなたは夫婦生活において、いわゆる倦怠期にあるのではないだろうかということ。その倦怠期の味気なさ詰らなさが、あなたを男色に興味をもたしたとも考えられぬことはありません。

どちらにしても、あなたの男色欲求は、一つの獵奇趣味の現れのように思われます。といつて、私は、それを一概に貶しつけるのではなく、ありません。獵奇趣味又結構です。人間、どんな堅そうな顔をしていても、多少の差はあれ、それを持つてゐるものです。

あなたは獵奇趣味の相手を選ばいいのです。それで万事解決です。そして又、動機は獵奇趣味でも、そこからほんとうの恋が生れないとは云いきれません。

(6)

立派な体格の人でも、弱々しい人でもいいのです。力のかぎり抱きしめていただきたい弱々しい人、可愛いらしい人を抱きしめた



い、そのような事のみ欲してやまない者です。

私は本年二十一才、中肉中脊、趣味は音楽映画・文学等です。ホモ党の皆さん、お便り下さい。

(名古屋 山内昇)

答

同性愛者には、ウールニングとペデラストの二つの型があるとともに、又一方、どちらにも属さない自由型もあります。あなたははつきりその第三の型の人だと思ひます。

「同性愛的関係においては、かならずしも、その一方が男性的、他の一方が女性的役割をなすのではない。お互いは自分自身を、享樂し、同時に相手方を自分の相似物として利用している」

精神分析学者フリッツ・ウィッテルスもこう云つております。

愛読者通信

私は貴誌八月号のソドミア通信欄で拜見した村田さんと同じ気持です。

私の理想の恋人は三十七才以上の、よく肥えた腹のぶつしり突出した、腰廻りの大きい人、頭の禿げた人、毛深い人、そしていずれもマゾかサドの人です。こんな人に全裸で縛られてみたい気もしますが、吊し責めや鉄砲責め等をしてみたいとも思ひます。

興味ある方編集部気付で御便り下さい。

名古屋近郊 (S K生)

さじすちつく

歴史小説

秘色大阪城繪卷

(終回・修羅の巻)

岩掘、光

古庄英生 畫

紅蓮の炎と女に飢えた男達の足が大阪城を蹂躪する！ 淀君も上臈も彼等の前には單なる一匹の雌でしかない！

1

元和元年五月六日の夜は、歩一步、曉天へあゆんでいる。

「あすだ！ あすだ！ あすだ！」

淀君の部屋のすみにおかれた南蠻渡りの自鳴鐘（時計）まで、悪魔の嘲笑に似て微かに音たてる。あすは関東軍の総攻撃があること

は確實だった。

「おのれ！ 憎い！」

淀君はふいに木枕をつかんで、時計に投げつける。「千姫め！ 憎い！」

あすがいのちの終りである。すでに頼みの武將も多くは戦死していた。後藤基次、薄田隼人正、木村重成——いずれも城を捨て遠く道成寺、八尾、若江に出て討死した。まだ城内に真田幸村、長會我

部盛親、毛利豊後などの部將がいたけれど、

いずれもあすは城を外に、戦死の覚悟……

「憎い、憎い、誰ぞ、早う千姫を捕えてき

や！ あの女の首討つて、茶臼山の、祖父が

許に送つてやるがよい！」

淀君の声に集つた老女たちは、動かずにひかえている。彼女の千姫への憎悪が、ほとん





ど狂気に近いのを老女たちは承知していた。彼女たちも千姫やその関東出身の女中たちに憎悪に似た感情をもっている。ただ、その質が少し違うだけだ。彼女たちのは、嫉妬と羨望である——城攻めの後の彼女たちの運命は定まっている。勝者による凌辱と虐殺——こんどのばあい、徳川家出身の千姫やそのまはりの女たちには、その怖れがない。それが彼女たちに相手を憎ました。

「お方さま、お心をお静め下さいませ」

老女のひとりが、それでも、ますます猛りそうな淀君の心を押えるやうにいう。「み合さまをお呼び申しあげてもせんないこと。お方さまにはいかがあそばします。まさかお首を討ちようもなりますまい。右府さまのお許しもないに……」

「ええい、いいやるな！ この城をあの人形のやうにとりすました顔でたばかりとらうとしくさる。……なにもしらぬとは通さぬぞえ……通さぬぞえ！」と淀君は千姫が女の前にもでもするやうにいう。疲労をみせてやや蒼白い顔、かみそりのやうなひとみのするどさが二十代の女のやうに、美貌をきはだたせた。「そうじゃ、千姫をひつ捕えてきや。よい罰をあたえてくれる……大阪の城には、も

う金もない、馬とてない。將兵へのなぐさみに、ひと鞭あてさせるのじゃ！ 乗つて、乗つて乗りつぶさせるのじゃ……ほ、ほ、ほ……馳けようぞ、馳けようぞ、ほのほの吐息をはいて、駿河狸の孫めが、悍馬になつて」

2

かがみを抜いた樽の底には、半弦の月が落ちていた。雑兵たちが、ごろりと地面に寝転がつている。篝火のほのほが、彼等の疲れた姿の上で影をつくる。酒に赧らんでふくれた顔。蒼くけわしくさんだ顔——。

「やつと終るな？」とひとりがいう。

「今度のいくさは楽だつた。はじめから勝にきまつていたからな。冬の陣の時はあぶなかつたぜ。まつたく」

「こんどのはいくさじやない」

嘲笑するやうにいつたのは、伊賀兵太。

「どうしてですか、お頭？」

「お前がいまいつたじやないか……勝にきまつていた……つて。こんどのは殺人だ。仇敵の首をしめる。——殺した。そうだ……殺すのだ。ひとつの世の終りなんだ」

兵太の顔にいつと残忍ないろが走る。彼はそれを夜空に浮く大阪城の天守にむけた。長蟲が妹しのの女体に繩のやうにからみつく。しなやかにのびた肢線をとどり登る。長い悲鳴……彼は妹しのが、淀君のために、城内の蛇壺に投げいれられ、殺害されたいらしい情報を受けていた。忍者の彼は城内に入つてみたが妹の姿はなかつた。

彼には、すべて原因はこの裏切りによると思われる。ことは主家の使命を裏切り、彼女の姉の期待を裏切り、彼の妹の友情を裏切つた。彼女の姉も彼の妹もその結果、女の屈辱の限りを与えられて死んだ。その上、彼女は、彼、ゆいなづけ兵太を裏切つた。——豊臣秀頼のいのちを狙う使命を忘れ、恋する心——ことは、かならず城内にいる……たとへ、彼女が、大阪を遠く離れて隠れ住んでいたとしても、あすは落ちるにきまつた錦城のうわさをきけば必ず、城内に忍び入ろう。……ことが、さういう激しい女なのを、伊賀兵太はしつてゐる。

「あすか？ やれやれ、早う女房の顔がみつうなつた」とひとりがいう。「勝ちいくさときまると、あすの攻めが、急におそろしゆなつたわい。あすばかんとやられればおしまいだからな。幸ひわれわれは御本陣幕下だから、第一線に討ちいることはあるまいが」

「馬鹿！」と兵太は部下のおじけづきさうな心をはじき飛ばすやうにいつた。「くにに残した女房より、あすはたと新らしいご馳走にありつけることを考えろ」

「ふふふ、というとお頭」

「大阪の城にも女がいるというのだ」

「まつたく……淀殿の味は別格としても、美人は多うござろうて……なんでも淀殿などは、おのれの肌の美をたもつため、若い女の精を吸いとつてゐるとか」

「へへえ、どうして？」と、別の男がきく。「いきぎもでもぬくのか？」

「いや。女をはだかにして、身動きならぬやうにしばりつけて、男をくう口でまむしをくわすのだとよ。女はもちろん。若いからだの

精という精をしぼりだされて死ぬだろうが、まむしの奴もあとですぐ料理されて、淀殿の肌に埋められる」

「よせ！ よさんか！」

兵太は妹の苦悶のすがたを思い浮かべた。からだにほとんどすがたを隠して、尻尾だけをだしたぶきみな、まむしの尻尾――。

「伊賀兵太殿、大御所さまのお召じや！」と呼ぶ声がきこえてきた。

「兵太。そち、あすは坂崎出羽殿を案内するのぢや。千姫を救いだす役、出羽殿に申しつけたによつて」と、家康がいう。

「はあ」と兵太は答えて、眼のすみで、赧顔に決意をみせた出羽をみた。

「出羽……こやつは、伊賀流の忍びを学びよつてな、働きものぢやて。あすはいずれ火中、危ない仕事、役にたとうぞ。大阪城内の様子はあらかたしつてをるでな」

「はッ、出羽、いのちにかえて、必ず姫君様を」

「おお、必ずの……必ず頼むぞ。手柄の節は望みのものをとらす。うむ、姫をやつてもよいぞ……美しいぞ千姫は……うい奴ぢやよ。

あれのことを思うと、家康、攻め手がにぶる思いだ」

「ご前さま」

兵太は幼年期から、家康に仕えた親しみをこめていう。「坂崎殿の案内は心得ましたがその前に、淀殿が姫を」

「おお、それぢやて、それぢやて、殺させてなろうか、殺させて」

「それに、姫お附きの御女中衆の処置もよほど考えませぬと……なにしろ、大勢の女子衆を、すでに狂暴になつてゐる城内から救いだ

しますのは……」

「女中たちのことは、このさいどうでもよい。火急の場合じや。姫の身の安全を考えよ姫の」と家康がいう。

「はあ……されば姫君はじめ東軍出身の女中の身を」

「だから申すのじや。姫のことを考えよと、姫のことを……しかと頼みをくぞ。あすはあの城が姿を消す。大阪のいつさいがなくなる。戦争なのだ。ひとりひとりのことなど考えられようか。わしのいうのは、姫のことだ。それが命令なのだ。千姫を救うが、そちたちの使命だ」

「戦争ぞえ！ のろうなら、いくさをしかけた狸爺、そちたちの大御所をのろうがよいわな、ほ、ほ、ほ……」と淀君は笑う。彼女のまわりには、手燭をささげた女中たちがいる。たすきがけの袖下に、なぎなたをかいこんだのもいる。多勢の武士や小者たちが、日頃みなれぬお女中衆の華麗な色彩に幻惑されたように、ふぬけた顔をあげてひざを地についでいる。「泣きやるな、わめきやるな。そなたたちは忠義者。いずれ駿府へ戻れば、狸にほめられるがよいぞえ。ついでに、大阪の男のくい味も話しやれ。ほほほ……淀が、そなたたちに、最後の夜、送りとらせる進物じや……」

大阪城内でもつとも人に恐れられるのは韓骨樓と囚獄。樓には蛇倉があるからだか獄にはなにもない。石室である。地上の大地とは違つて、吹く風もひやりと、むしろ夏の夜は涼気満点。そこは地獄だ。なにもないことが、人をおのかす。一度、獄に投じられると、陽のめをみない。別の世界だからだ。女には、ことに、闇にうごめくくものような獄卒と男囚が鬼共の役をつとめる。千姫附きの

女中たちの中から、姫の婚礼につき従つてきた三十六人の女が、ふいに集められ、手荒く、後ろ手にしばられて、その地下の囚獄に降された。お女中たちの年齢はさまざまだった。三十二才の老女がひとり、後はだいたい二十才を二三越えている。中には千姫の遊び相手として附けられた十七、八才といったのもいる。足輕たちは、拒む人々の手を拂つて帶紐のたぐいをいつさい、女たちのからだからとり去つた。自殺をふせぐためだ。視察にきた淀君は、「衣裳もはぎとりや。だれひとり、みずからしなしてはならぬ。狸の血すじに、自害など、人みな死にようをさせてなろうか」といつた。

「侍共、よりや」

淀君は顎のまるみを手燭に浮かださすようにそらせぎみにいう。

「そちたち、ご苦労じやが、手すきの足輕以下の者共にふれてくりやれ。囚獄に、淀君が、殿下の御遺徳をしとうて闘つてくりやる方々に、狸汁を用意してある。手すきのものから、きて、好きほかに、味わうようにと。さうふれるのじや。多いほどよいが、さぶら以上のものはならぬ。ただし、足輕頭の任にあればかまわぬが――」

秀頼はまだ頭も茶筌に結つたままだつた。白羽二重の薄ものに桐紋散らしの寢着小袖、武具の影も身につけていない。柳櫻図の絢爛たるふすまをへだてて、鎧胴や、腹当、腋当をつけた小姓たちのものものしいでたちとは、別世界のへだたりを感じさせる。この部屋の中には、戦争がいりこまないのだろうか？ 彼とむきあう、すべらかし髪に紅紫の花を散らしたうちかけ姿の千姫も、さういへば物靜かである。

秀頼が、話のつづきらしくいふ。

「……愛しあへなんだとは思えぬ。別れともなれば、やはり、お身に一番名残りがあつた。ただ、そちは秀忠殿の娘、予とは、望まぬに敵同志――そんな、ふたりの心とは無関係なまはりか、なにか邪魔をしていた。別れるときになつて、それがなくなりはしたがもうおそい。」

「別れなどと、なぜ……いやでござりまするわらわは」

「では、どうする」

「せんが、ご本陣にまいります。父や祖父様に、お願いします。わが君さまの」

「いのちを乞うてか」

「はい」

「礼をいうぞ……ほかのものに、さういはれたなら、秀頼、腹を立てよう。だが、お身は、さう信じているにちがいない。けれど、秀頼にはそれをして貰つてはならないものが、心にある。徳川家に対する意地ではない。予が太閤の子だからでも、そちが、徳川將軍の娘だからでもない。まいてや武士だからではない。死をいそぐからではない。なにかだ。名も意地も、つまらぬものとした今も、なにかが、そちを質に、いきようとする心をとめている。そうだ。たぶん、秀頼、はじめて、ひとりになれた心を大切にしたいからだろう」

「では、なぜ別れたなぞと」

「では……か？ では、そち、秀頼と、これから、共に自害してか」

「えつ？」

「明日は敵に首打たれるか、猛火に焼かれる。そちを殺しとうはな

いが、死んでか」

「おゆるし下さりませ」

千姫は、祖父に似たつぶらな瞳に、恐怖をうかべた。

「ゆるすとも」と、秀頼は苦笑する。「城を出るがよい。逃げるがよい」

「おゆるし下さりませ」

「ゆるすとも……さうだ、人に見られぬやうに城を出よ。あす。あすの朝。そちの祖父が、城攻めにかかった当初、混乱の際に、抜けでるが、かえつて安全だ。退るがよい」

「おゆるし下さりませ」と千姫は繰返す。

「おかした奴……何をいつてゐる。さうだ。おみに、秀頼、たむけの言葉がある。おゆるし下さりませ……などと、誰にもいはぬがよい。おみのように美しい身が、誰になにをゆるしを乞う。そのようでは、この城をでても、また駿府殿や家老たちにとこかの城へ、……お家のため……と申してやられるぞ。大事なのは、お家でも、国でもない。お身が人間だということだ」

千姫の去つた後のふすまを、秀頼は長い間眺めていた。お許



しあそばせ……と、千姫の口真似をした。急に声をたてて笑いたい。えらそうに喋つたが、じぶんもまだ、自分でありえたためしがない。おれは自由だ、と、ときどき思うが、つねに、その人間の自由が、多くの手で狙われているのをしる。その手こそ、家康などの比ではない手強いものだ。急に秀頼は寒けを感じる。誰かがいるようだ。振向く。誰もいない。なんだ、誰もいない、と思つた時、彼は、じぶんが誰かを待つてゐることにきがつく。千姫との別れをそれほど淋しく感じないのは、誰かを持つてゐるからなのだ。千姫との夫婦仲が冷めたいからではない。誰かがじぶんといふのをしつてゐるからだ。明日は城が落ちる。必ずそれなら、彼になければなら

ない、誰かがいるのだ。秀頼は、その彼の中の何者かを探すように、部屋の中を見廻す。

「おッ！」

「お久しぶりでございます。」とことがいう。鼠装束に身をかためて、部屋のひとすみに、かがんでいる。

「そちか、そちであつたか」

「えつ？ なにか？」

「いや……そちがくるのをしつていた」

「まあ」と、ことは覆面の頬を赭らめたが秀頼には見えない。ことも、熱氣にたえられぬように、頭巾だけを手早くとる。

「ことは十字型手裏剣の名手であつたな」

「まあ、名手だなどと」

「予を打て。予の首打つて、駿府に戻れ。家康のいかりもとけよう。予はそちの姉の仇だ。早う急所を狙うがよい」

「いいえ、いやでございます。それにことは、もはや、誰の家臣でもありはしませぬ。ことには、いま、ひとりのおん方だけが、ことを支配しているのです」

「予は、敵だ」

「いいえ。男だと、いまさきに」

「きいていたのか」

「いやしい行い、ごめん下さいませ」

「弱い秀頼の本音を笑うてか」

「ただ、千姫さまがねたましうて」

「なに！」

ふたりの視線が互いをたぐりよせるやうにからみあつた。秀頼が

はほえむ。それにつられて、ことも微笑を浮かべた。恋もまた戦いだというのはうそだ……そんなとてつもない感想が、突然、秀頼の心に浮かぶ。

「さうだ。そちに、千姫のことを頼もう。あれを徳川の陣まで送つてくりやれ」

「それから？」

「それから？」

「ことはどうするのでござります」

「平和に、ややを生め」

「いやでござりまする」と赦らんで、「それなら、千姫さまをお送りいたしませぬ」

「予は明日死ぬのだ」

「はい。でも、まだ生きておいででござります」

「戻つてこいとはいえぬ」

「おおせになつて……」

「こと！」

ふたりのからだは、ひたとよりそう。

燈台のほのほがゆれた。

3

寅の刻（午前四時）頃から関東陣はそろそろ動きを開始し、巳の刻には、越前勢、加賀勢などを先頭に、無二無三、攻撃をはじめた。大阪城内はたちまち、樓閣や館から発した火災に混乱しはじめる。

「真田左衛門尉、討死！」

「大谷大学殿、討死！」

「毛利豊後……」

「長會我部……」

次々と城内にはいる報告は、西軍の滅亡を伝える材料だった。そして、そのような報告がなくとも、はや埋まつた壕を越え、内壕の石垣や本丸近い樓の門にとりついてくる敵の旗差物でも、それがわかる。

ことはやつと、右往左往する大奥を抜け、將兵たちの眼をかすめて、千姫と、お附きの老女二人を唐門近くまで案内した。あたりは火煙に包まれている。被衣をかぶつた千姫の眼にもけむりがしみる。

「ああ、もう眼がみえませぬぞえ」

「早く、おあるき遊ばせ」

ことは千姫の手をひいた。「きつうしないで、こと」と姫がい

「あたくしは心急ぎます」

「わらわとて」

「同じではございませぬ。早う……でないと、こと、もはや、ご案内申しませぬぞ」

「待て、御女中、いづれえゆかれる」

ふんどし一つに、肩当てだけつけた、武士が駆けよつてきた。

「たッ！」

ことは十字剣を投げる。「さあ！ 早く」

「うッ！」と倒れてうめく男をみつけた、二、三の足輕が、女たち

を追う。けむりと火気が、いつしゆん、女たちと男たちの間をさいた。

「おお、お方さま！」

駆けよつてきた鎧武者二人と四、五人の家来がひざを地につく。

「千姫さまとおみたて仕る……坂崎出羽、お出迎に参上」

「旗本、伊賀兵太」

「あッ」

ことが、飛退さる。

「こと！」と千姫。

「逃げるかッ！」と、兵太が同時に叫ぶ。

「お別れでございます」

「いけない、こと。引返しては死ぬぞえ」

千姫がいう。「とめぬか、伊賀！」

「ことお言葉ぞ！」

「ことは、もはや、誰にも命令されませぬ」

「ぬかしたな！」

「さがりや伊賀、そちはことをおそれさすのかえ！」とさすがに千

姫は徳川宗家の姫君にはや立返つていつた。「こと、自殺ぞえ」

「いいえ、自殺はしませぬ。いきるのでござりまする。ことは、女

を賭けました」

「ううッ！」

千姫の言葉に追いもならず、兵太は思わずうなつて、煙の中に突入する、ことの忍び装束をみつめる。

「伊賀殿！」

声に振向くと、千姫を背負つた坂崎の姿が燃える唐門の中にくぐ

りいつていた。焼けた、瓦が紙の風に飛ぶようにめくれ散る。その一つが、千姫の被衣に落ちる。伊賀兵太は、たあッ！ と、短かい気合と共に地を蹴る。彼のからだは、坂崎の背後に落ちる。瞬間、千姫の被衣がはらはれる。

あッ坂崎がよめいて、からくも立直る。焼け瓦が出羽の横顔にひたとひつついた。吐気のでるような臭気が、失心寸前の千姫の鼻を突く。(ああくさい。くさい、この男！)

4

「おい、誰ぞ早う。お方をおとどめ申せ！」

大野修理が声限りに叫ぶ。

「おお、大將！ 囚獄の女がたりんのだ。貰つてゆきますぜ！」



四、五人、群れて駆けてきた足輕たちがいう。みんな、素裸だ。「なにが、たりん？ たりねばもつてゆくかよい。それより早う、おん方をとめよ」

足輕たちは、大野の指さす方向をみる。素晴しく逆巻く炎の中に、本丸樓上に通じる階段が、踏合からやはりほのほをあげて立つ。その数段めを、まぼろしのように、女が踏む。よろめくまいとしながら、頭上に渦まき火焰を忘れたのか、一段、また一段と登る。

「女だ！」

「すてきな、べつぴん」

「無礼者！ 早くお引取めせぬか、淀君さまぞ！」

「うッ！」と、足輕たちは呻めく。そして急に、大野を見返り叫ぶ。「いやだ！ おれたちは女がいる。夕べ淀君のくれた女じやまにあはねえ。みんな、女をしめ殺しちまやがるんだ。もうじぶんらも救からねえもんだからねだからよ、おれたち、女を貰いにきたんだ」

「な、なにを申す。早くお方をお救けよ」

「大將、ねえ大將、おれたちにえぼるのはよしでくれ。お前はもう大將じやねえ。おれたちア、いくさなんかしているもんか。終つたんだ。おれたちが、お前の首をみあげにこの城をでりや、いのちだけはたすかるかもしれねえんだ。そいつをやらねえつてのは、おれたちのおなさけだ。」

そこには、うすく煙がまいこむだけで火はま



だない。淀君はただひとり、三階の切窓から外を眺める。蒼白いが、美しく化粧された顔だ。まなじりに少しぼかした紅がずれて血のようにみえる。ひとみは澄んでなんの感情も浮かべていない。ふいに天守の上層が崩れ落ちる。ざざざとなだれのような音と共に、ぐらぐら足許が揺れる。しかし、淀君は表情をかへない。そういうえば、本丸の屋根にもはや火焰がたっているし、一・二階はもはや火の海だ。彼女が見さへすれば、その中心がみえる。だというのに、彼女はひとみを城外に向ける。そこには数千の旗差物がなびき、武者人形のような、小ささで数万の人が動くともなく、動く。「おお、おおッ」と、彼女は嘆声を発する。「軍勢ちや、軍勢じや? みるがよいわな家康! おお、おおッ! あれ、あれ、殿下が、まあ太閤殿下のお美事な、武者ぶり。殿下、茶々が、茶々がまいります。ただいまおん許に茶々が……おおッ。家康め、いまにひとひねりぞや!」淀君のからだに、窓にのりだす。「殿下!」白い衣裳のうちに切窓から飛び出た彼女のからだに、燃えるほのほ中に落下する。

「おお、こと、なぜ戻った。」

秀頼がいう。鎧小袖の胸を開いて、汗をふい

ている。本丸に附属した蔵の中、外部の混乱から切離されたように静かである。数間離れて、四、五人の小姓たちと女がひかえてゐる。

「戻りたかつたのでござりまする。ことがじぶんで、だから」

「死にに帰つたのか？」

「いいえ、生きるために」

「ふふふ、すつかり、予の真似をしよる」

「上様！」

ことは人眼もはばからず、六尺近い秀頼のひざに半身を倒した。

下から、両腕で、男の首をかかえる。

「笑われるぞ、こと」

「いいえ、だれもいませぬ」

「さうだつたな。どれ、重かろう」

秀頼はたつて、軽々とことを横抱きにする。そのまま、彼は奥のほうにあるく。

「上様、ご用意を」

真田大助がいう。「時遅れては」

「わかつてゐる大助。だが、死にいそぐな、いまは生きているのだ。夜までは、城ももとうかな」

「それは、もう」

「時がくれば、呼ぶがよい。予はことと、それまで、完全に生きてみる」

「はつ」と、大助はひたいの汗をふく。

5

天守閣も、樹々の枝も、何の丸と呼ばれる樓閣も、数奇をこらした館も、大奥の雪見塔籠をかこむ草花も、池の鯉も、熱氣と炎の中で消却された。あたりはすつかり夜気に包まれているのに、かあツと白晝のような明るさをみせる。まだまだ、燃え盡きぬ火の舌が、空を流れるからだ。

城内を東軍の武者の影が、時には黒い影のように、時には鬼の肌のように炎の色をうつして右往左往する。

「いやあッ！」

女の悲鳴が、時々、あちこちでする。

五人、六人、時には十五、六人といった風にきまぐれにかたり、どぶろくや、にぎりめしを味わつてゐる男たちが、ちらと声のほうをむく。しかし、別に、動きもしない。

「うまくみつけ出しやがつたぜ」

錦城内は、生きてゐる男が占領軍である。今夜だけ、城は彼らのものだ。足軽小者も徳川家康、秀忠を代表する。西軍の中で、生きているのは女、子供だ——彼等は、誰の権力をも代表しない。ドレイである。

「苦るしいか？ ああん苦るしいか？ 勝手にあがけ。こいつくそつ」

草履で焼け残つた草原を踏みじるように踏まれる。女はひえッ！と悲鳴をあげる。

「殺して下され！ 慈悲じゃ情けじゃ」

人なみなことをほざくな、と占領軍は思うのだ。

「生きてられるだけでも、お情だぜ」

その上、人間を主張するなんて、ばかげた思いあがりだ。

神妙に連れられてくる女もいる。小袖をぬげといはれると脱ぐ。

あうむきに寝ろといはれると夜空をみあげる。まるで訓練された兵隊だ。どちらも、はや人形化している。けれども、たいていは、反抗する。懇願する。男のほうも、そんな女ほど、美しくみえる。いくら人間を認めるからだ。脱ぐより脱がせるほうが、寝るよりも押倒すほうが、相手を認めていることになる。

「おおい、いたぞ！」

時々あかがね色に、ぱつと明るくなる中を、男がずるずる、女の長い頭髮を手首にまいてひきずつてくる。女の眉はつりあがつていゝる。眼の玉が飛びでるようにみひらかれている。ひいッ、ひいッ！と、喉声をあげる。

「元気のねえのだな」

「煙にまかれていたんだ」

なかには、両手首にひとりあて、女の髪をまきつけて、手柄顔に戻つてくるものもある。

ひかれまいと、男の手首をもつ度に、ぶるぶる髪をゆすぶる。「うあッ、あッ」と、悲鳴をあげる。ぶ恰好に、頭を前にだして尻を後ろに突出してくる女。地面に倒れたままの姿勢で、うちかけのすそをずるずる地面にはわせ、それだけ正味、じぶんの重みを頭髮の生えぎわの痛みにかえて、かにのよこばうように、無意味に足をばたつかせる女もいる。すそが乱れて、腰のなかばまで、小袖のすそに見えかくれする。すそ裏の紅染がほのほのために、いつそう真紅に

みえる。そしてそれは肢を美しい真珠の白い輝きにみせる。

たいていは砲弾に崩れた壁の山、半分焼け残った建物の影、広い庭の草の上に、占領品が運ばれる。一個の物に対して、使用者が四五人から、二十人程度――

女には、自害をしそこねたり、火焰にまかれて仮死のものもある。だがたいてい殺されるまではショックで死なない。むしろ逆に、麻薬をのんだように、たかぶる――

ひとりの女のはだかが、あかく頭から少し離れて、やはり全裸の女が死んでいる。ことがひきずられてきたのは、そういう壁土の山の側である。美しかつた彼女の頭髮が、伊賀兵太の手首に巻きつけられている。彼女の場合、彼がひとりだ。

兵太は必死でひろい城内を探しあぐねた。

秀頼が死んでいた。首がなく、端座した膝も崩さず、肩が前に倒れて、床にその中央がついて血をふいている。女たちも三、四人死んでいる。ことはない。もう一つ奥手の視界の切れたかどをみた。そこでことは、うごめいていた。彼女の下にうすべりと敷布団が敷かれている。彼女は薄衣をきていた。夏着で、ふだん、簡単に肩ぬぎして、腰骨の上で袖をあわしておくところから、腰巻の名がある。はばのせまい附帯をしている。

「おのれ、みつけたぞ、みつけた」

兵太はずるずると、敷布団からことをひきずりだした。「おッ！」と、いつとき思わず棒立ちになつた。

ことは、すそを乱していたが、そのまたから胸に、しつかりと、白羽二重の衣をかいいたくようにしている。あきらかに秀頼のもの、五三の金刺繡桐紋……

うすめをひらいたことは兵太をみていう。

「お願い、あたくしを、いましばらくすてておいて」

「いうな。このまましなせてなるか」

彼女はまいこむけむりに齒をくいしばっていた。そうして死ぬつもりでいたのに。

「おお、お頭！」

ことから二間はなれたところで、十人ほどの足輕が一人の女を捕えていた。そこから声がかかる。

「お頭……そいつのおさかりをお願いできますか」

「うむ」と兵太は、逃れようとするこの頭髪を足で踏み押え、

「そうだ。やるぞ！ こやつは、なみの品ではない。お前たちは、すぐに、右大臣秀頼と兄弟になるのだ」

「えつ？ それじゃ！」

「こい、きて、このからだをみるがよい」

附帯はすぐとれる。みごとな、うす衣の広えりに、兵太はうでをかけた。ころりとことのはだかが壁土の山に落ちる。あつと、胸を押え、両肢をかがめ、腹にももをつけてちぢむ。なめらかな御影石の艶がある。赫々と燃えるほのほが、背後の二つの岳陵の中央に濃い影を作る。

「いいな、お前たち、むこうの始末をつけてこい」

兵太がいう。「こと、きいたか、きいたであろう。もはや、逃れぬ。わしの次があいつらだ……死んでみろ！ 死ぬまで——さう思つて死ぬがよい。その後は、それ、その焼け残つた松の枝にこのままつり下げてはじさらしをさせてやろう。それが、そちのやうなめす犬に、ふさわしい最後だ——」

ことはもがいた。彼女のからだは汗が壁土を吸つて、みるまによごれた。「うッ！」と呻いて、腹を反らせた。足裏が逆さ富士のようになり夜空に上つた。

「うぬ、死ぬ。苦るしかろう」

ことは、最後の手段として、唇を閉ざし、鼻孔をつめる。だが、ひとりでこそそれも可能だ。ふッ！ と吐息する。つめていたいきが、突ん裂くような衝激に、あつと破られる。

「お頭ら！ まだで……」と足輕が覗く。

「うむ、こい、やるぞ、こやつ」

ふいに、ことは笑ふ。

「あなたはあたくしを侵しなすつたおつもり。それは、あたくしでも、ほかのだれでもおなじ、女にすぎないのだ！ あなたが男といふけだものであるように、それはけだもののあたくし。あなたが、いやしい男たちとあたくしに屈辱を加えるほどに、あなたはあたくしのけだものだけより侵せないのがはつきりいたします」

その時、どつと音たてて、秀頼との最後の倉の崩れるのがみえる。

「勝手にほざけ！ みたか、あれを！」

「あなたは勝つたつもり？ お得意そうに——でも、あなたの覗いたあたくしの入口からは人間がみえません。あたくしは、いま崩れたあの中にいるのです」

がつと、兵太は、ことの乳房をける。

「ひいッ！」と、叫ぶ。彼女の唇から血が流れる。舌を噛んだ。

「ばかめ！ まだ、死ぬまでには長い」

兵太は、足輕たちに顎をふつて合図した。だが、彼は負けたのをハッキリ意識していた。

(完結)